

toVO トヴォ  
PLUS

[www.tovo2011.com](http://www.tovo2011.com)



あおもりから いつもそばに  
ALWAYS  
WITH YOU

## 謝 辞

2020年7月6日にはじまりましたクラウドファンディング『フリーペーパー「tovo plus」100号をまとめた冊子を制作しています。』は、24時間も待たず目標額を達成し、最終日8月23日には、180名の方より836,020円(達成率238%)のご支援を頂戴し終了致しました。おかげさまで、今回このように立派な冊子をお届けすることができました。ご支援の皆さまには深く感謝申し上げます。

青森のごく普通のご家族に対し100ヶ月間にわたって東日本大震災についてのお話を聞き続けるフリーペーパー「tovo plus」。決してキャッチーな内容ではないし、きっとウキウキするような内容でもなく、ただただ淡々(いやダラダラと言ってもいい)と続く100号をまとめた冊子を作りたいと言っても、それはどちらかというと、僕がまとめておきたいという個人的な欲望だし、それに対してこれだけ多くのご支援を頂戴できるとは思っておりませんでした。まるで夢のような話で、なんだろうと今も信じられません。

このフリーペーパーをはじめようと思ったのは、2012年3月、震災からちょうど1年、tovoの活動がはじまってから約6ヶ月が経った頃でした。tovoの活動が始まってすぐに、tovoのチャリティ缶バッジは作れど作れど追いつかないくらい売上げを伸ばし、あしなが育英会への寄附金も月を追うごとに多くなっていきました。僕が全く存じ上げない多くの方々が支援してくださるようになり、イベント出店などで手渡しできるような毎月の寄附金をお伝える紙の媒体が必要だと思うようになりました。「怪しいものではありません。ちゃんと寄付しています。」を伝える何かが必要でした。当時、多くの方が「忘れない」と口々に叫びました。僕もそう思いました。しかし、僕は今日食べた朝食さえ忘れてしまいます。そんな僕が「忘れない」と叫ぶためには、その根拠が必要でした。しかも、tovoは東日本大震災津波遺児のチャリティプロジェクトです。つまり、誰にでも説明できる「忘れない」ための絶対的な根拠が必要でした。クリストファー・ノーラン監督「メメント」では、記憶が10分間しかもたない主人公が、忘れないために自身に都度刺青を入れていきます。忘れっぽい僕が忘れないために、断続的なちょっとした痛みが必要だと思いました。

「忘れないこと」と「寄附金の報告」、これが合わさってはじまったのがフリーペーパー「tovo plus」でした。

はじまってからのことは全て、この冊子にまとまっています。この100ヶ月間、本当に多くの方が日を追うごとに集まり助けてくれました。数えきれない人たちが「忘れない」ために動き続けました。だから、最後に、僕はここで絶対的な自信と、根拠をもって、圧倒的な大きな言葉で叫びます。

**僕らは東日本大震災のことを  
少なくとも100ヶ月間は忘れなかった!!**





www.tovo2011.com

## あおもりの100家族、わたしたちのこれから。

青森県に住む「家族」の写真とインタビューで、

東日本大震災以降の「家族」の様子、変化、そして、これからを

フリーペーパーを通して、100 ヶ月間にわたり伝える続けるプロジェクトです。

「tovo plus 〜あおもりの100 家族、わたしたちのこれから。」は、  
東日本大地震・津波遺児チャリティ「tovo（トヴォ）」が発行する  
ポストカードサイズの小さなフリーペーパーです。

東日本大震災以降の青森県に住むごくごく普通のご家族の写真とインタビューを  
1 ヶ月に1 家族ずつ紹介して100 ヶ月間、100 家族、100 号まで続けます。  
ご家族の様子、考え、価値観の変化などを、  
この小さなフリーペーパーを通じて伝えていけたらと考えています。

特にドラマチックなお話ありません。

あの時のお話、現在のお話、そして、ご家族の未来のお話。100 年に1 度、  
1,000 年に1 度などとも言われるこの大震災。

僕たちが、あの頃に強く思った「忘れない」って、一体何だろう？

このフリーペーパーはtovo なの「忘れない」のカタチです。

僕たちと一緒に、月に1 度だけ、あの日のことを振り返り、いつもそばにいる家族のことや、  
友だちのことや、あなたにとってかけがえのない誰かのことを、大切に思ってみませんか？

002 ごあいさつ  
005 目次  
006 [No.000] 齊藤 準悦さん・順子さん・麻綾ちゃん  
008 [No.001] 大澤 公生さん・優子さん・美聡ちゃん・和将くん  
010 [No.002] 對馬直哉さん・郁子さん・亜夢ちゃん・未夢ちゃん  
012 [No.003] 最上泰渥さん・裕加さん・嵩埜くん  
014 [No.004] 工藤慎さん・忍さん・和花ちゃん  
016 [No.005] 小野寺 淨さん・真妃子さん・心ちゃん・仁くん・元くん  
018 [No.006] 田代 和也さん・その子さん・月乃さん  
020 [No.007] 米谷 脩一さん・隆佑くん・賢人くん  
022 [No.008] 今 浩一さん・寛子さん・慎斗くん・愛佳ちゃん・万愛ちゃん  
024 [No.009] 木村 尚子さん・優那ちゃん  
026 [No.010] 加賀谷 尚さん・孝子さん・ちほちゃん・りなちゃん  
めいちゃん・伊勢田尚哉くん  
028 [No.011] 工藤 泰輝さん・沙織さん・悠ちゃん・岳琉くん・葵ちゃん  
030 [No.012] 黒澤 智さん・咲子さん・明莉ちゃん  
033 **STAFF VOICE** ― おふみん ―  
034 [No.013] 加藤 靖信さん・睦子さん・一聖くん・葉琉くん  
036 [No.014] 大賀 重樹さん・佳子さん・万緒さん・千聡さん・  
一心くん・百登くん  
038 [No.015] 堀内 英治さん・志津江子さん・真莉子さん  
040 [No.016] 白取 克之さん・潤子さん・千頌さん・千和ちゃん・トーヴェ  
042 [No.017] 工藤 幸太さん・みちるさん・剛たくん・岳空くん  
044 [No.018] 一井 定信さん・智子さん・陽太くん・優太くん  
愛香ちゃん・瑛太くん  
046 [No.019] 田中 真也さん・ゆかりさん・八八ちゃん  
048 [No.020] 月館 重徳さん・久美子さん・信之介くん・京之介くん・雅ちゃん  
050 [No.021] 成田 典秀さん・未来さん・永遠くん・星来ちゃん  
052 [No.022] 北山 貴浩さん・美希子さん・美芽莉ちゃん・莉希愛ちゃん  
054 [No.023] 竹森 幹さん・美媛さん・仙くん  
056 [No.024] 藤田 耕次さん・真由美さん・茉那ちゃん・実花ちゃん  
058 [No.025] 神サツエさん・祥仁さん・孝子さん・和花ちゃん・葵葉ちゃん  
060 [No.026] 太田 恒清さん・絵里子さん・紗愛ちゃん・琉清くん・真乃華ちゃん  
062 [No.027] 阿保 孝方さん・史子さん・健祥くん・こころちゃん  
064 [No.028] 東 正貴さん・麻比さん・真央ちゃん  
066 [No.029] 田中 秀次さん・敦子さん・青佳さん・利空くん  
068 [No.030] 猿田 壮也さん・千帆さん・天音ちゃん  
070 [No.031] 齊藤 仁宏さん・智美さん・栖佳くん・蓮ちゃん・泉甫くん  
072 [No.032] 葛西 厚大さん・麻紀子さん・蹴叶くん・莉愛ちゃん・唯愛ちゃん  
074 [No.033] 太田 保さん・公子さん・陽ちゃん・樹くん・結ちゃん・成ちゃん  
076 [No.034] 菊池 秀一さん・奈都季さん・美天ちゃん  
078 [No.035] 小野 智之さん・光穂子さん・奏美ちゃん・実苗ちゃん  
080 [No.036] 工藤 広太さん・あゆみさん・愛那ちゃん  
082 [No.037] 千鶴さん・りりこちゃん  
084 [No.038] 岡田 実穂さん・宇佐美 翔子さん  
087 **STAFF VOICE** ― 工藤文昭 ―  
088 [No.039] 森 智史さん・良江さん・空智さん・今井 宏子さん・  
ミツ子さん・ペットのタロウ  
090 [No.040] 熊谷 晁人さん・明香さん・悠歩ちゃん・陽太くん  
092 [No.041] 林 キクエさん・博美さん・健司さん  
094 [No.042] 福田 藍至さん・優子さん  
096 [No.043] 藤林 秀さん・真実さん・輝くん・慧くん  
098 [No.044] 木村 高規さん・麻子さん・笑寿ちゃん・幸太郎くん・福玖くん  
100 [No.045] 越田 由紀子さん・風羽さん  
102 [No.046] 田中 哲也さん・忠司さん・ていさん  
104 [No.047] 玉田 寛さん・裕美さん・ちこさん  
106 [No.048] 佐藤 義暢さん・沙武くん・響巴ちゃん  
108 [No.049] 對馬 洋平さん・絵里さん・そらくん  
110 [No.050] 鈴木 敏之さん・齊藤 幸さん・妃菜さん  
112 **今、もう一度お話を聞いてみた。**(tovo plus no.042)  
113 **tovo PRESS** 座談会  
118 [No.051] 加藤 勇一さん・静子さん・景子さん  
120 [No.052] 金原 崇志さん・絵利香さん  
122 [No.053] 木村 真也さん・明日香さん・笑ちゃん・ふじ  
124 [No.054] 西塚 弦紀さん・明香さん・海波さん・花音さん・蒼空くん  
126 [No.055] 安田 修平さん・美代さん

128 [No.056] 工藤 浩栄さん・金美淑さん  
130 [No.057] 福士 正芳さん・幸さん・昌伸くん・譲司くん  
132 [No.058] 中嶋 優太さん・江梨菜さん・日向嘉くん・心瑚ちゃん  
134 [No.059] 工藤 拓也さん・恵美子さん・帆乃香さん・大雅くん・巧雅くん  
136 [No.060] 今井 健さん・聡子さん・結くん  
138 [No.061] 赤平 立基さん・智子さん・潤くん・圭くん  
141 **STAFF VOICE** ― 坂本小雪 ―  
142 [No.062] 木村 圭吾さん・麻未さん・碧斗くん・萌愛ちゃん  
144 [No.063] 藤田 光治さん・美記子さん・レナ  
146 [No.064] 鈴木 俊司さん・友有子さん  
148 [No.065] 坂本 孝也さん・静香さん・柊馬くん・咲耶ちゃん  
150 [No.066] 須藤 雄大さん・亜以子さん・魁士くん・碧己ちゃん  
152 [No.067] 稲見 和彦さん・志乃さん  
154 [No.068] 浅井 聡さん・彩さん・詩さん・岳くん・コタロウ・大吉  
156 [No.069] 白濱 聡さん・奈津子さん・千紘さん・智礼さん  
158 [No.070] 坂本隆之さん・美世子さん・隆太くん・なごみちゃん・次美ちゃん  
160 [No.071] 佐々木 良藏さん・幸代さん・康貴さん  
162 [No.072] 三上 貴史さん・恵美さん  
164 [No.073] 坂本 一久さん・愛さん・真樹くん・穂花ちゃん・ショコラ  
166 [No.074] 柳引 優司さん・紗織さん・木綿花ちゃん  
168 [No.075] 山谷 一弘さん・亜紀子さん  
171 **青森に「あしなが育英会 ファシリテーター」をふやしていくプロジェクト**  
171 **今、もう一度お話を聞いてみた。**(tovo plus no.047)  
172 [No.076] 清水 亜希子さん・輝之さん・兼田 康博さん・えり子さん・  
貴子さん・禰悟くん  
174 [No.077] 川畑 富美子さん・須藤 美沙希さん・川畑 裕佳さん  
川畑 萌莉さん  
176 [No.078] 木立 彰さん・恭子さん  
178 [No.079] 田邊 慎一郎さん・文敬さん・麻美さん  
180 [No.080] 三浦 良介さん・暢子さん・なつめちゃん・太郎くん  
182 [No.081] 板橋 諒 さん・Tomi さん  
そばゆちゃん・まめみそちゃん  
184 [No.082] 岩淵 大樹 さん・ともみさん・瑚太郎くん  
186 [No.083] 小山内 悟 さん・祥子さん  
188 [No.084] 蛭沢 勝寿 さん・睦美さん・舞ちゃん・優くん・彩ちゃん  
190 [No.085] 高谷 優子 さん・幸子さん  
193 **STAFF VOICE** ― 笹森まさみ ―  
194 [No.086] 金澤 郁弥 さん・好さん・福桜くん  
196 [No.087] 武田 勇紀 さん・麻里さん・胤玖ちゃん・素来ちゃん  
198 [No.088] 成田 汐里 さん・雄三さん  
200 [No.089] 館田 徹 さん・智久子さん  
202 [No.090] 葛西 勝美 さん・加奈子さん・望加ちゃん  
204 [No.091] 中村 公一 さん・敦子さん・日南ちゃん  
206 [No.092] 森山 知也さん・朋子さん  
209 **今、もう一度お話を聞いてみた。**(tovo plus no.000)  
210 [No.093] 笹森 大誉 さん・まさみさん・すずちゃん  
213 **STAFF VOICE** ― 須川健太郎 ―  
214 [No.094] 赤石 嘉寿貴 さん・裕子さん  
216 [No.095] 三浦 [ 吉田] ゆき さん・そらさん・匠さん・あかりさん  
218 [No.096] 木村 秋則 さん・美千子さん・江利さん・文美さん  
221 **今、もう一度お話を聞いてみた。**(tovo plus no.003)  
222 [No.097] 鳴海 秀輔 さん・裕子さん  
224 [No.098] 坂本 美弦 さん・るみ子さん・小雪さん・吟遊さん・夕弦くん  
227 **STAFF VOICE** ― 赤石嘉寿貴 ―  
228 [No.099] 工藤 文昭 さん・さとみさん・理子ちゃん・亮清くん  
231 **STAFF VOICE** ― 前田ふひと ―  
232 [No.100] tovo 代表 小山田 和正 さん・有香さん  
235 **STAFF VOICE** ― なるみしう ―  
236 **今、もう一度お話を聞いてみた。**(tovo plus no.036)  
237 資料：陸奥新報記事 (tovo plus 関連)  
240 歴代フリーペーパー配布ご協力店様一覧  
241 クラウドファンディング寄付者ご芳名  
243 クラウドファンディングに寄せられたコメント



# 000

20120311

インタビュー

齊藤 準悦さん・順子さん・麻綾ちゃん

撮影場所：菊ヶ丘運動公園(五所川原市)



## Q2011年3月11日は何をしました？

- ▶準悦さん「近所のリサイクルショップにいて仕事で使う景品を探してましたね。」
- ▶順子さん「勤務先の病院にいて病院の床が波打っててビックリしました。」
- ▶麻綾ちゃん「保育園にいたんだけど車で家に帰って懐中電灯持って携帯でニュース観てた。」

## Q10年後は？

- ▶準悦さん「年に1回か2回は旅行いけたらいいなあ。子どもは勉強も部活もちゃんとやってる子になってたらいいですね。」
- ▶順子さん「すごいセレブになってたりして(笑)！」終

## Q震災以降、家族で何か話し合ったりしました？

- ▶準悦さん「家族で集合場所は決めたんですよ。公民館なんですけど(笑)」
- ▶順子さん「非常食とか懐中電灯とか備えたり、人ごとじゃなく自分のこととして現実的に考えるようになりましたね。」

## Q家族の中で変化はありました？

- ▶順子さん「あの日ってストーブも電気もないしで、普段一緒にいることはない祖父含めてみんなで1つの部屋で過ごすことになって、普段話さないことを話したり、なんか良い経験でしたね。」
- ▶準悦さん「そうだね。だからって以降家族の関係が表面的に変わったわけじゃないけど、でも、気持ちの中では確かに変化があったと思う。」
- ▶順子さん「あと、ご近所さんとの付き合いは大切だなと思いました。」

## Q子育ては変わりました？

- ▶準悦さん「うーん、変わらないかなあ。でも、あの震災でたくさんの方が亡くなったんだってことはちゃんと説明してますね。子どもを亡くした人もいるし、親を亡くした子もいるし。人は簡単に死んじゃうってのは話してますね、意味分かってないかもしれないけど(笑)」
- ▶麻綾ちゃん「百歳まで生きたーい(笑)」

## Q理想の家族像？

- ▶準悦さん「子どもが成人して、1人でちゃんと生きていけるように育つ家庭。」
- ▶順子さん「理想の家族は、”うっかりペネロペ”の家族」

寄付総額：¥411,673 (2011年6月～2012年2月29日まで)



**Q2011年3月11日は何をしました？**

- ▶**公生さん**「いつも通り診療をしてました。揺れたな、長いな、で、停電になって。結局ナメてたんですね。でも、だんだんいつもと違うなと。家はオール電化で、もう何にもすることがなくて、寒いし、もう寝ようって。」
- ▶**優子さん**「その日は美聡のクラスがインフルエンザで学級閉鎖で家にいたんです。で、地震が起こって、停電で動かなくなった信号の中、焦るな焦るなって、保育園に和将を迎えに行って、家に帰ってきたのはいいんだけど、カセットコンロのカセットはなく、ラジオを聞きたくても電池がなく、みんなで寒いねって。」
- ▶**優子さん**「そうそう、その夜、美聡が『ママ、夜って暗いんだね。静かなんだね。お星様がよく見えるよ。』って言ったんです。その言葉はよく憶えてますね。」

**Q 震災以降、家族で何か話し合ったりしました？**

- ▶**優子さん**「後輩が震災で亡くなって、お葬式に行く時、その時は家族みんなで行ったんです。途中、車の中で人生の優先順位ってことを話しましたね。」
- ▶**公生さん**「いろいろな立場があるけど欲張ってたらキリがなくて、その時に『家族』だろって決めたんです。家族には私しかないから。」

**Q 家族の中で変化はありました？**

- ▶**公生さん**「当たり前前に電気がついて、お酒を呑んで、ご飯を食べて、当たり前のことの有り難さを感じて、それに感謝して、それを言うってことですね。」
- ▶**優子さん**「実はチャリティーとかボランティアは私の人生にないって思ってた、でも、震災で後輩が亡くなって、何を考えて生きてたんだろう？って。人としてってことを考えるようになりました。」

**Q10年後は？**

- ▶**公生さん**「自分が生まれた青森が元気になればいいし、自分の立場でそれに向かって頑張っていきます。子どもたちには困った人に手を差し伸べられる人。仲間を大事にして自立して欲しいですね。」
- ▶**優子さん**「青森にはこだわりたくて、青森発信の何か、そう、やっぱり青森が元気になればいいですね。子どもたちには、人として正しく生きて欲しい。」
- ▶**美聡ちゃん**「人を助ける仕事をしたい。」
- ▶**和将くん**「青森のさかなくん!!」**終**



# 002

20120511

インタビュー

對馬直哉さん・郁子さん・  
亜夢ちゃん・未夢ちゃん

撮影場所：トランポリンアカデミー(五所川原市)



## Q2011年3月11日は何をしました？

- ▶**直哉さん**「夜勤明けで家にいました。学校に行っていた亜夢以外は、3人で家にいたんですね。ドア開けろ！とか、テレビ押さえろ！とかやりましたね。」
- ▶**郁子さん**「その後に余震や停電が何度もあったので、もう記憶がゴチャゴチャ(笑)」
- ▶**亜夢ちゃん**「ちょうど家庭科室の掃除をしてて、上から吊るしてたテレビがグラグラ揺れて、放送が使えないから教頭先生が走りまわって体育館に皆を集めて、登校班と同じ様にして皆で帰ってきて。怖かった…。」
- ▶**未夢ちゃん**「うーん、ろうそくの火は憶えてる。」
- ▶**直哉さん**「ストーブがなくて、停電で調理もできなかったので、実家に家族3人を置いて、職場である病院に向かいました。病院では停電で大変なことになってましたね。」

## Q震災以降、家族で何か話し合ったり、何か変化はありました？

- ▶**直哉さん**「家族で特に話し合ったりはなかったですね。ただ町内では災害時の避難場所などの確認はしました。」
- ▶**郁子さん**「そうですね、家族で話し合ったりはなかったですね(笑)」
- ▶**亜夢ちゃん**「担任の先生から、これから6年生になるから、災害などがあったら高学年として低学年の面倒をみるようにって言われて、それを心がけようと思ってます。」

## Q10年後は？

- ▶**直哉さん**「家族が各々好きなことを自分の責任のもとにやって自立してたらいいかな。」
- ▶**郁子さん**「子どもたち2人には自分で好きなことを選んで、自分の道を進んでいて欲しいですね。家族で何かっていったら何もありません(笑)」
- ▶**亜夢ちゃん**「うーん…」
- ▶**未夢ちゃん**「勉強…」
- ▶**直哉さん**「未夢は素直で一番思い通りに生きるタイプなので心配してないですね。亜夢は凝り性なので、それが良い面に出てくれたらいいと思います。」
- ▶**直哉さん**「あ、そういえば、今まで家族の写真を携帯の待ち受けにしたことなんかなかったんですけど、最近は家族の写真を待ち受けにしていますね。一番守らなければいけないのは家族なのかなあって、1

年経って思ったんだと思います。守られてる感あるでしょ？」

▶**郁子さん・亜夢ちゃん・未夢ちゃん**「えええー!？」終

寄付総額：¥600,766 (2011年6月～2012年5月8日まで)





**Q2011年3月11日は何をしました？**

- ▶ **裕加さん**「私はお母さんと家の3階にいて、すごく揺れて、すごく怖くて、お父さんがいつも下にいるので、みんなでそこで固まってました。」
- ▶ **泰滉さん**「ちょうど弘前で会議の最中だったんですけど、すぐに家に電話をして無事を確認して、信号がつかなくなって渋滞した道を運転して帰ってきました。」
- ▶ **泰滉さん**「家に帰ってきて、これは長期間続くかもって感じたので、様子を見つつ、近くのスーパーに食料を買いにいった、夕飯はありあわせのものを食べて…」
- ▶ **裕加さん**「あとは、夜は暗いし、寒いし、状況もよく分からないし、早く寝ようって。」

**Q 震災以降、家族で何か話し合ったり、何か変化はありました？**

- ▶ **泰滉さん**「この子がまだお腹の中にいたので、まあ、自分たちのことだけ考えてるみたいになっちゃうんですけど、夫婦では、この子が無事に生まれてきて欲しいねって話はしましたね。」
- ▶ **裕加さん**「家族では、節電しよう!とか(笑)」
- ▶ **泰滉さん**「水や懐中電灯や常備袋を用意したりしましたが、やっぱり、出産をひかえていたので、お腹の中の子どもを中心に考えてましたね。」
- ▶ **裕加さん**「なんとか無事に終わるまでは!って。」
- ▶ **泰滉さん**「たとえ停電になっても!って(笑)」

**Q お腹の中に4ヶ月の子どもがいたんですね？**

- ▶ **裕加さん**「ちょうどお腹が出てきた頃で、お腹の中に子どもがいるって思うと、食べ物や水は気をつけなきゃって思っていました。特に産地なんかは気をつけた方がいいのかなと。」
- ▶ **泰滉さん**「出産の時は誰でも心配するんでしょうけど、奇跡的にやっとできた子どもだったし、そこへきての震災で、いろいろ過度な心配はしましたね。」

**Q10年後は？**

- ▶ **泰滉さん**「10年後って想像がつかないですけど、家族で心は繋がっていて欲しいなと思います。」
- ▶ **裕加さん**「実家が神奈川県なんですけど、子どもも生まれました、ここに根を張りたいたいと思ってます。家族みんなで笑っていたいですね。あと、子どもが安心して

て笑顔でいられるように自分も強くななきゃって思います。恐妻家とは違うけど(笑)」**終**



# 004

インタビュー

工藤慎さん・忍さん・和花ちゃん

撮影場所：ねぶたの家 ワ・ラッセ (青森市)

20120711



## Q2011年3月11日は何をしました？

▶**慎さん**「仕事でした。ちょうど金曜日で、もう仕事終わろうかなあって時に地震がきて。しっかりした建物の中にいたんですが、それでもかなり揺れました。職場全体がバタバタと忙しくなりましたが、地震直後に非常電源に切り替わって、普通に電気もついていたので、TVでニュースを見てました。なので、地震直後から情報量は多かったんです。でも、いざ帰宅という時に外に出たら、一面が真っ暗で、信号もついてないし...あれ？なんだろう？って急に現実的になって...驚きましたね(笑) で、急いで家に帰ったんですが、妻が家にいなかった(笑)」

▶**忍さん**「私は車に乗っていた時に地震があつて...だから地震があつたことを、ずっと知らなかったんです(笑) 信号も機能しなくなりましたが、地震でのトラブルだとは思ってなくて。普通に買い物に向かって。お店も停電してたんですけど、地震のことを知らずに買い物して。その後、ガソリンスタンドの渋滞があつて帰りが遅くなって、家に帰ったら真っ暗で、そこで初めて地震を知りました。」

▶**慎さん**「真っ暗だったのでろうそくを探して、ちょうど結婚式の時に使った太いキャンドルを見つけて、それが初めて役に立ちましたね(笑)」

## Qお腹の中に6ヶ月の子どもがいたんですね？

▶**忍さん**「当日は寒かったので、湯たんぽをコタツの中に入れて、その中で身体を暖めてました。まだ産まれる前だから良かったんですけど、産まれた後でこの状況だったら大変だなあと。その後、テレビを見てても被災地の妊婦さんと自分を重ねてしまつて。」

▶**慎さん**「最初は食べ物に関しても敏感になりましたが、極端に食べ過ぎない限り大丈夫だと思って、それほど意識はしませんでした。」

## Q震災以降、家族で何か話し合ったり、何か変化はありました？

▶**忍さん**「とりあえず結婚式のキャンドルは非常用リュックに入れて(笑) あと、手動の懐中電灯、チャッカマンとか...なぜかトイレトーパーも(笑)」

## Q10年後は？

▶**忍さん**「2人目の子どもは欲しいですね。で、マイホームを建てて、家族4人、あと両親と一緒に暮らしたらイイと思います。」

▶**慎さん**「そうですね、みんな仲良く暮らしてたらとしか思い浮かばないけど...アパートではなく、子どもが自分の家だって言える家は欲しいですね。」**終**



# 005

20120811

インタビュー

小野寺 浄さん・真妃子さん・  
心ちゃん・仁くん・元くん

撮影場所：立佞武多祭り (五所川原市)



## Q2011年3月11日は何をしました？

▶**浄さん**「会社で工作中でした。急に揺れて、会社全部が停電になりました。誰かが携帯のワンセグでニュースを見て、それで、あれ？海岸沿いが大変なことになってるなと。会社も仕事を続けるかどうか迷って、結局、復旧のメドがたたず帰宅しました。」

▶**真妃子さん**「工作中でした。デパートで働いているのですが、まずお客さんを外に誘導しました。普段は地震が起きて停電しても、すぐに復旧するのですが、今回は復旧のメドもたたず、結局、帰宅となりました。仕事でテレビも見ることができませんでしたし、車にもナビが付いていないので、そこまで凄惨なことになってるの？と思いながら、事態が掴めないまま、信号の止まった道を車で家に戻りました。」

## Q10年後は？

▶**浄さん**「10年後も家族みんなが五体満足で生きてたらいいですね。」

▶**真妃子さん**「子どもたちは、勉強ができなくても、思いやりのある子どもに育っていて欲しいです。毎日と同じではなく、明日だってどうなるか分からないので、1日1日を大切に生きていたいと思います。」

▶**浄さん**「10年後も、家族全員で立佞武多祭りに参加していきたいですね！」**終**

## Qお子さんたちはどちらに？

▶**浄さん**「3人とも同じ保育園にいました。迎えに行ったのは4時頃で、もちろん、保育園も停電で。迎えに行った時は、みんな迎えに来た後で、子どもたちは多くは残っていませんでしたが、停電しているにも関わらず、保育園自体は普段通りの雰囲気でしたね。」

## Qその後は？

▶**浄さん**「食料を買いに行き、ろうそくで灯りを点して、反射式のストーブで暖をとって、ガスでご飯を炊いて...。」

▶**真妃子さん**「子どもたちは、テレビもつかないし、なんで電気がつかないんだろうとは思ってたと思いますが、真っ暗闇の中、ろうそくですから、いつもと違った雰囲気...誕生日会か何かと思ってたんじゃないかと思いますね(笑)」

## Q震災以降、家族で何か話し合ったり、何か変化はありました？

▶**浄さん**「特に家族で話し合ったりはなかったです。手動式の懐中電灯を買いましたね。もちろん今回の地震は大きいのですが、感覚的には、子どもの頃体験した日本海中部地震(1983年5月26日)が自分にとってはリアルに感じます。その時は、市内も家もとても大きな被害を受けました。」

寄付総額：¥810,981 (2011年6月～2012年7月31日まで)



**Q2011年3月11日は何をしました？**

▶**和也さん**「私は茨城県水戸市出身なのですが、地震が日常的にあるんです。小学校の時には新潟地震という大きな地震を経験しているし、地震はそんなに怖くないという認識があったんですね。その日も、ああ、地震がきたな、青森では珍しいな、くらいの気持ちだったんです。会社から、どうしましょう？と連絡があったんですが、とにかく大したことはないから落ち着けと。でも、数日間、停電にもなっていたので、まして、決して生活に必要なものを扱っているお店ではないので、今後こういう商売はどうなっていくだろうって、すごい危機感を感じましたね。」

▶**その子さん**「ちょうど長女が大学進学で上京をするので、東京で生活する為のモノを揃えていた時期なんです。その日はTVを買いに行こうと、主人を待っている間に地震が起きました。その後、この子(月乃さん)の学校から緊急連絡網が入って、迎えに行くために外へ出たものの、信号が動いてなくて、渋滞をくぐり抜けて、なんとか学校までたどり着いて…。学校もパニックになってましたね。」

▶**月乃さん**「学校で掃除の時間だったんですが、掃除をしている時に地震が起きて、みんなで外に避難しました。」

▶**その子さん**「私の実家がすぐ隣なので、その日は、みんなで食べ物を持ち寄って食べたのかな。母も私の兄弟もみんな家に集まって、数日間、リビングに8人で寝てました。」

**Q 震災以降、家族で何か話し合ったり、何か変化はありました？**

▶**その子さん**「うーん、特に家族で話し合ったりはなかったですね。」

▶**和也さん**「自然災害に関しては、避けようと思って避けられるわけでもないですからね。それを怖がっても生きていけないです。気持ちの上では言葉に出さなくても、家族それぞれがいろいろ感じていると思います。」

▶**月乃さん**「被害にあった人たちに、何かしたいと思うんだけど、何をしたいのか分からなくて、可哀想だな、大変だなと思うことしかできなくて…」

**Q10年後は？**

▶**その子さん**「娘たちは、もう各々の道を進んでるだろうなと思います。いろんな人に感謝しながら、被害にあった人たちにも、何かできることがあればしていきたいなと思います。」

▶**月乃さん**「うーん…、まだ決めてなくて、その時に何になっているか分からないけど、10年経ってもこの震災のことは忘れないでいたいなと思います。」

▶**和也さん**「生活できること、私自身は確実に仕事ができること、娘は勉強やスポーツができること、家内はご飯の支度や洗濯ができること、そういう日常のことができることがありがたいし、それを幸せだと感じることを大事にしていきたいですね。」 **終**



**Q2011年3月11日は何をしました？**

▶**賢人くん**「小学4年で、学校が早く終わった日で、家でTVを観てたら地震が起きて、TV画面が消えて…」

▶**隆佑くん**「小学6年で、3月19日の卒業式を間近に控え、学校は早く終わってたんです。丁度、近所に回覧板をまわしてる時に地震が起きました。最後の家で犬がもの凄く吠えてて、変だなと思ったら、電線がグラグラ揺れてて、地震だ！って、弟とおばあちゃんが残っている家に急いで帰りました。まず、震源地、日本海側か太平洋側かを知りたくてラジオをつけたんだけど、まだ震源地がよく分かってなくて、怖かったですね。実は近所に避難所があって、でも、家は海より遠いし、高いから逃げなくても大丈夫かなーと軽く考えてたんです。今思うと、この行動はよくなかったですね。」

▶**脩一さん**「仕事中でした。海の仕事なので、ずっと待機してて、結果的に夕方5時には家に帰ることができたんだけど、子どもたちが電話を持っていないので、それ迄は連絡もつかず、どうしているか心配でした。」

**Q 当日の夜は？**

▶**脩一さん**「石油ストーブを出して、残りものを食べて。近所の家で発電機を使って、皆でTVを見に行きましたね。情報が欲しくてワンセグの電波がよく届く場所まで車で移動したり。」

▶**隆佑くん**「あんな真っ暗な鰺ヶ沢は初めてでした。」

▶**賢人くん**「次の日は学校に行ったんだけど、午前中は停電。昼ぐらいかな、ストーブの表示ランプが点いて、先生が電気をつけてみよう！って言って、電気がついて、みんな喜びました。」

▶**隆佑くん**「とても嬉しかったですね。電気がない生活って大変だったから。」

**Q 隆佑くんは卒業式だったんですね？**

▶**脩一さん**「卒業式は通常通りだったんですが、その後の歓送迎会は縮小で。皆いろいろ準備してたし、6年間の集大成が縮小になって、ああ、可哀想な思いさせたなど。」

▶**隆佑くん**「校長先生が、卒業式ができるだけでも幸せだって。」

**Q 震災以降、何か変化はありました？**

▶**脩一さん**「田舎はイイと思うようになりました。家も学校も職場も近いし、皆が近くにいて、近所には

子どもたちを知らない大人はいないし。何かあっても助け合える環境に住んでいるというのは幸せですね。」

▶**隆佑くん**「青森から遠く離れた場所の地震でも、地震のニュースには敏感になりました。」

▶**賢人くん**「以前から地震はあったんだけど、地震がちょっと怖くなりました。ずっとTVの右下に地震や津波の情報が出てるし、学校にいる時に津波注意報が出て、皆で高台の避難所に逃げたりもしたから…」

**Q10年後は？**

▶**隆佑くん**「もう受験だから進路を決めなければいけないんだけど、将来についてあんまり考えてなくて(笑)。お父さんはこの場所で今の仕事を続けて欲しい。弟も夢が叶って欲しい。」

▶**賢人くん**「F1レーサーか自衛隊になりたいんだけど、その夢が叶って欲しい。あ、サッカー選手も(笑)」

▶**脩一さん**「ブレないでいたいですね。子どもたちの持っている夢を皆で応援していけたらイイと思う。」終



**Q2011年3月11日は何をしました？**

▶**慎斗くん**「小学5年の時で、地震が起きたのは丁度授業が始まる時。校内放送の指示で、机の下に隠れて、皆で並んで校庭に避難して、先生の話聞いた後、妹の愛佳と一緒に集団下校しました。」

▶**浩一さん**「ビルの3階で講習を受けていた時に地震が起きました。外を見ると向い側のビルが、びっくりするくらい左右に大きく揺れていました。停電で講習が中止になったので、車で帰りましたが、信号が全く動いてなくて。家に着いて、携帯のワンセグで初めて何が起こったのか知って驚きました。」

▶**寛子さん**「地震の時は、私は家にいて、とりあえず外に逃げました。近所の人たちも皆外に出てきてましたね。地震がおさまったので家に入って、子どもたちを迎えに行く準備をしていると、また余震がきて、近所でドーン!っていうもの凄いい音がして、また外に出て…。丁度主人が帰ってきたので、一緒に子どもたちを迎えにいきました。途中で、集団下校の行列の中に、慎斗と愛佳を見つけたので、車に乗せて、万愛の保育園に向いました。」

▶**愛佳ちゃん**「小学3年の時で、掃除が終わった後、先生がいない時に地震がきて、みんな、えっ?えっ?ってなって、校内放送が入って、皆で机の下に隠れて。1度先生が来たんだけど、また職員室に戻ってしまって、しばらくして教頭先生が回ってきて、また地震がくるかもしれないから、まだ机の下に隠れててと言われました。」

**Qさすがに万愛ちゃんは憶えてないよね？**

▶**万愛ちゃん**「避難訓練のこと?」

▶**寛子さん**「避難訓練じゃなくて(笑) その時は未満児保育の頃だから…。」

▶**愛佳ちゃん**「でも、万愛が1番楽しそうだったよね。」

▶**寛子さん**「ハッピーバースデーみたいって言ってましたね(笑)」

**Q当日の夜は？**

▶**浩一さん**「ストーブがなかったので、皆で居間に集まって毛布をかぶってました。懐中電灯が1つしかなかったんで、誰かがそれを持ってトイレに行くと、部屋が真っ暗になって(笑)」

▶**寛子さん**「真っ暗な中でロウソクを灯して、時間の感覚が全くなくなりましたね。ロウソクが揺れたとか、普段は何でもない出来事でも、何?何で?って、大げさに話してたような気がします(笑)」

**Q震災以降、何か変化はありました？**

▶**浩一さん**「意識して何か変えたっていうのはないですね。」

▶**寛子さん**「その頃は、家族で非常時用の食料とか準備しておいた方がイイって話はしましたね。でも、時が経つにつれて話も出なくなって…。また3月になって震災の話題が多くなると、そういう話もするんですけど、それが過ぎると同じ様な生活に戻ってような気がしますね。」

▶**慎斗くん**「募金をするようになった。」

**Q10年後は？**

▶**浩一さん**「もう子どもたちは皆この町にはいないですね。」

▶**寛子さん**「私たち夫婦も好きな仕事をしているので、子どもたちにも好きな仕事をして欲しい。」

▶**慎斗くん**「うーん、これからも変わるだろうけど、きっとこの町にいますと思う。」**終**



**Q2011年3月11日は何をしました？**

▶尚子さん「はい。全然忘れてないです。」

▶優那ちゃん「ほとんど憶えてないです(笑)」

▶尚子さん「私は職場にいて、地震でPCが一気に落ちて、データを保存してなかったので、ワーッ!!ってなって(笑) 電気が復旧する気配もなく、会社の判断で今日は終わりにしようってことになったので、優那の待っている曾祖母の家に向ったんですが、信号が全然動いてなくて大渋滞になってました。渋滞で車が停まっている間も余震が続いていて、ホントに怖くて。その日、優那は学校が早く終わる日で、丁度、曾祖母の家にいたんです。曾祖母は80歳をこえていて、優那はその曾祖母を守ろうと小学校の校庭へ連れて逃げようとしてたみたいなんです。」

▶優那ちゃん「そうしたら、おばあちゃんが来た!」

▶尚子さん「そうそう。私の母が来て、曾祖母と優那に『2人で家に待機してて』って話をし、また出かけて。その後に、私がやっと家に着いたんです。曾祖母と優那が2人でブルブルしてましたね(笑) そして、曾祖母と優那を連れて私のアパートに戻りました。」

**Qなんで優那ちゃんは、曾おばあちゃんを連れ出そうとしたの？**

▶優那ちゃん「家が倒れると思ったんだもん。だって、すごいボロだから(笑)」

**Q当日の夜は？**

▶尚子さん「近所のスーパーに電池を買いに行ったんですが、皆が争うように買ってる異様な光景を見て、更に怖くなりました。だんだん日が暮れてきて、電気ストーブは使えないし、スキーウェアを着て、毛布にくるまってました。ガスが使えたので圧力鍋でご飯を炊いて。私自身、こんな大きな地震を体験したのは初めてだったので、何度も余震がくるし、その度に優那は泣いちゃうし、とにかく怖いのと、優那と曾祖母を守らなきゃって思いだけでした。でも、そんな中、曾祖母は7時には完全に寝てましたね(笑)」

▶優那ちゃん「そう!一瞬で寝てたよね(笑) すごい揺れてるのに起きない(笑)」

**Q震災以降、何か変化はありました？**

▶尚子さん「優那と2人で、いつでも逃げることができるよう、登山用リュックにカップラーメン、ロウソク、軍手、トイレトーパー、電池等を詰めて準備します。あと、津波の映像を見てから怖くなって、青森

は大丈夫だって皆言うんですけど…、車の窓ガラスを割るハンマーを買って車に常備してます(笑) 優那は自分の下着や靴下をリュックに一生懸命詰めてましたね。」

▶優那ちゃん「でも、きっと、もうアレ小さくなってるよね(笑)」

**Q10年後は？**

▶尚子さん「ママと一緒にパン屋さんやるんだよね。ママがコーヒーを淹れて、優那がパンを焼いて。」

▶優那ちゃん「ベラベラとバラさなくていいの!」

▶尚子さん「優那は、人の痛みが分かる優しい子になって欲しいですね。」

▶優那ちゃん「ママは、これ以上太らないで欲しいですね(笑)」終



インタビュー

加賀谷 尚さん・孝子さん・ちほちゃん・  
りなちゃん・めいちゃん・伊勢田尚哉くん

撮影場所：太宰治記念館 斜陽館（五所川原市金木町）

**Q2011年3月11日のことを憶えていますか？**

▶**尚さん**「仕事中でした。停電後、自家発電で電気が点いてましたが、帰宅することになり、車で家に帰りました。信号が全部消えていて驚きましたが、皆が譲り合って運転していて、信号がなくても何とかなるもんだなあと感じましたね。」

▶**孝子さん**「仕事中でした。何もかも電気を使っているので、停電で仕事にならず、金庫と戸締まりだけして、そのままの状態帰宅しました。」

▶**ちほちゃん**「学校の帰りの会の途中で地震が起きました。前日にも地震があって、今回も大丈夫だと思ってたんですが、かなり大きな地震で、校内放送の途中で放送も電気も切れました。避難訓練と同じ様に皆が机の下に隠れましたが、校庭に集合する程ではなかったです。その日は最後の部活だったんですけど、それも中止になって、友達と家に帰りました。」

▶**りなちゃん**「机の下に隠れて…。友達と帰りました。」

▶**めいちゃん**「ちょうど、送迎バスの中で地震に気が付かなかった…。」

▶**尚哉くん**「授業と授業の間の休憩時間に地震が起きました。体育館が2つあるのですが、1つは耐震になっていて、その体育館に集合して、後は皆が各々電車やバスの時間に合わせて帰りました。」

**Q当日の夜は？**

▶**尚さん**「その日の夜は会社で宴会の予定があったんです。地震で宴会自体は中止になりましたが、皆で食べ物を持ち寄るという集まりで、その準備をしていたので、食べ物だけは沢山ありました。」

▶**孝子さん**「皆で台所で反射式のストーブを囲んで暖まっていたね。土鍋でご飯を炊いて。部屋が冷えきっていて、とにかく寒くて…。」

▶**ちほちゃん**「テレビもないし、何もすることがなくて、ずっと宿題をしていました(笑)」

▶**尚さん**「ずっとラジオを聞いてました。緊急地震速報が頻繁で、ほぼその記憶しかありません。」

▶**孝子さん**「そうそう、灯りはイイのあるよ！って、結婚式で使ったキャンドルサービスの大きいキャンドルを使って(笑) 今後も使えそうですね(笑)」

**Q震災以降、何か変化はありました？**

▶**尚さん**「非常食や防災グッズを準備しましたね。」

▶**孝子さん**「最近ではテレビでも携帯でも地震速報がありますよね。その時の真剣さが違いますね。職場にいても、家族が心配だから、もう帰ろうって思います。」

▶**ちほちゃん**「つい先日の地震の時は、すぐストーブを消して、戸を開けて逃げる準備をしました。」

▶**孝子さん**「それは、お父さん(尚さん)がいつもやっていることなんですよ。それを真似たんですね(笑)」

**Q10年後は？**

▶**尚さん**「皆が健康で元気でいて欲しい。それだけです。」

▶**孝子さん**「子どもたちは大きくなって、みんな違う場所で暮らしているんでしょうけど、いつでも連絡の取れる状態であって欲しいと思います。」

▶**ちほちゃん**「学力次第かなあ。」

▶**りなちゃん**「美容師になりたい。」

▶**めいちゃん**「クッキー屋さん。」

▶**尚哉くん**「将来、医学療法士になりたいので、大学でその勉強をします。」終



インタビュー

工藤 泰輝さん・沙織さん・悠ちゃん・  
岳琉くん・葵ちゃん

撮影場所：青森ベイブリッジ（青森市）

**Q2011年3月11日のことを憶えていますか？**

▶**泰輝さん**「ちょうど妻と子どもたちは茨城の実家に里帰りしていて、家には父母と私と妹がいたんです。地震はいつもより長いあ程度でしたが、停電して、暖房も動かなくなって、1つだけ残っていた古い石油ストーブを数十年ぶりに引っ張り出してきました。みんなで居間で1枚の毛布をかぶって、そのストーブを囲んでいましたね。会話も全くな(笑)」

▶**沙織さん**「実家は茨城の南部なので、被害は酷くなかったんです。でも、食器棚から食器が落ちて割れたりという被害はありました。電車が動かなくなったので、家に遊びに来ていた友人が帰れなくなってしまって。停電は一瞬だけで、テレビもネットも使えたので、青森の夫に何が起きているかってことを逐一メールで知らせていました。」

▶**悠ちゃん**「怖かった。ヘルメットかぶって、机の下に隠れた。おじいちゃんも、おばあちゃんも、みんなヘルメットかぶった。」

**Q家族が離ればなれで不安はなかったですか？**

▶**沙織さん**「茨城は余震が多くて、その度に、子どもたちが『お父さん！お父さん！』って泣いちゃって。ちょうどお腹に5ヶ月の子ども(葵ちゃん)もいましたし。茨城に残っていた方がイイような気もしたんですが、計画停電などで電車がなかなか動かない中、なんとか羽田空港まで出て、飛行機で青森まで帰りました。それが、4日後、15日ですね。」

▶**泰輝さん**「空港で会ったら、悠が全身水疱瘡で(笑)」

▶**沙織さん**「そうなんです。だから、震災の話より、そっちになってしまって(笑)」

▶**泰輝さん**「結果的にですけど、子どもたちにとっては、停電で寒い思いをしたり、食べ物なども不便だった青森にいるよりは良かったんじゃないかなと思います。」

**Q震災以降、何か変化はありましたか？**

▶**泰輝さん**「何かを準備したりというのは特にないですね。ただ、世の中は何が起こるか分からないなっていうのをあらためて感じました。」

▶**沙織さん**「実家の母が、防災頭巾を作って送ってくれました。あと、家具の転倒防止なんかには気をつけるようになりました。子どもたちは、幼稚園で月1回避難訓練があって、地震の時にはどうするかということを学んでいるみたいですね。」

**Q悠ちゃん、幼稚園で地震があったらどうするの？**

▶**悠ちゃん**「えーと、火事の際はプレイルームに逃げて、地震の際は、机の下に隠れてから、プレイルームに集まる。」

**Q10年後は？**

▶**泰輝さん**「もう1人子どもがいるかもしれないですね(笑) 今と変わらず笑いの絶えない家族であって欲しいと思います。」

▶**沙織さん**「今よりはバタバタが落ち着いているかなと思いますね。毎年、家族の健康管理を頑張ろう！って目標を立てるんですが、なかなか出来なくて…、だから、お互い痩せていて、子どもたちも健康であつたらイイなと思います。」

▶**悠ちゃん**「ケーキ屋さんかな。」

▶**岳琉くん**「車を運転する。うーん、日産のノート。」**終**





## Q 震災後、福島県白河市から青森に避難してきたのはいつ頃ですか？

▶**咲子さん**「一昨年(2011年)の11月ですから、1年4ヶ月になります。」

## Q 2011年3月11日のことをお話頂けますか？

▶**智さん**「その日は、妻は仕事で、私は仕事を休んでました。娘はまだ生後6ヶ月。地震が起こって、すぐに託児所に娘を迎えに行きました。子どもたちは近くの老健施設へ避難していて、子どもたちと老人たちが肩を寄せ合って集まっていた。とても寒い日で、娘を抱きかかえ、そのまま妻の勤め先の歯科医院へ向いました。すると、妻は往診に出かけて連絡が取れないって言われて、娘と2人で家に戻って。余震も大きく、家に戻ると中は酷い状態で、娘を寝かす場所もなかったです。地震の少し前に、凄い低周波で地鳴りがするんですよ。窓が微かに揺れて、だんだん大きくなってガタガタって。それが何度も何度も。その度に娘が怖がって泣き出して。」

▶**咲子さん**「私は老健施設で往診中でした。誰かの携帯の地震速報が鳴って、なんだろう？って思っているうちに大きな揺れがきました。施設は耐震だったんですけど、揺れが大き過ぎて立ってることでもできなかったです。大きかったねーなんて話をしている間にも、次から次へと地震がきて。電気も消え、TVも消え、その辺からあんまり記憶がなくて、どうやってその施設から出たのか憶えてないんです。マンホールが飛び出て、水道管は破裂して、知人の家は半壊して。娘や夫とも連絡がとれないし…。」

## Q 次の日は？

▶**智さん**「幸いアパートは被害も少なく、また、住んでいた地域はライフラインが生きていたんです。ですから、私も妻も次の日から仕事をしていました。次の日(12日)に起こった福島第1原発1号機の水素爆発も、水素だから大丈夫だよと、まだそんな感じでした。その後、次々に水素爆発を起こしましたが、TVを観ながら、ただよって感じでした。その頃から、放射能の危険性に関するチェーンメールが大量に届くようになったんですが、これ以上不安を煽るなよって(笑)」

▶**咲子さん**「次の日は託児所に連絡がつかず、私は娘をおぶって仕事をしていました。原発事故が起きたその日は雨が降っていて、職場では冗談で黒い雨だねーなんて言っていて。帰りも雨だったんですけど、全く危機感はなく、その時、娘に雨を当ててしまったんです…それを今でも悔やんでいますね。」

## Q どのような経緯で避難することになったんですか？

▶**智さん**「放射線量を意識するようになったのは4月くらい。ネット等で毎日の線量を調べて、累計的に計算していったら、ここで暮らしているのはヤバイぞ！って、6月頃に知人の医師に相談しました。放射線って身体に蓄積して溜まっていくから、大丈夫とは言えないし、娘さんの事を考えたら、奥さんの実家(東北町)に行った方がいいんじゃないかって。知らない土地に行っても半年もあれば何らかの仕事に就いて生活できるでしょう？でも、娘さんが将来的に癌を発病し普通の生活ができないことになったらどうする？って。そこから真剣に避難を考えはじめました。」

▶**咲子さん**「娘のミルクは？オムツは？からはじまり、マスクしなきゃ、食べ物に気をつけなきゃ、仕事に行かなきゃで必死でした。ある日、ガイガーカウンターを借りてきて、家の中を計ったら凄い線量だったんです。娘が子どもの頃に福島に住んでいたことで、将来、辛い経験をしてしまったらどうしようと。やはり、娘のことが一番で、娘がいなかったら避難していないですね。」

## Q 震災から約7ヶ月後、青森での新生活がはじまります。

▶**智さん**「福島ではどこに行っても産地と放射線量が表示されて、常にそれを意識しなきゃいけなかったんです。TVも放射線量のテロップが常に表示されて、とにかく安全か危険かの毎日。青森来てからも、そんな福島での生活が染み付いていました。青森に来て、ホッとした反面、どこか精神的に落ち着かなくて、常にイライラしていました。なんで皆こんな呑気に暮らしてるんだろうって思ってたね(笑)」

▶**咲子さん**「やっぱり福島が故郷なんでしょうね。当初は青森に馴染めなくて2人で泣いてました(笑) 青森に来て放射能から解放されたかって言われると、やはり今でも気になるし、解放感はありません。」

## Q 今の生活は？

▶**智さん**「うーん、まだ青森に慣れてないかなあ。福島からの避難者は全国に沢山いて、私たちは青森に来たけど、やはりどこかよそ者って感覚があるんです。その経験を踏まえ、同じ境遇の方の手助けをしたいと考えています。」

▶**咲子さん**「最近、やっと気持ちに余裕が出てきました。やはり、福島に帰れるなら帰りたいて思っていて、その為には、まず自分たちが前向きに福島の為に何



かできないかなと考えています。」

▶**智さん**「今は青森に来て、故郷福島の為に何にもできないことがホントもどかしいですね。」

## Q10年後って想像できますか？

▶**智さん**「娘が放射線の影響もなく、健康に成長してくれていたと思います。この娘が健康でいてくれて、はじめて青森に来て良かったと思えるんでしょうね。」

▶**咲子さん**「娘にはいつかこの事を話できるように記録をしています。何事もなく中学に入学したらいいですね。将来的なビジョンは決まらず、ずっと青森の職場で働いていたいと思う反面、福島の元の職場に戻りたいとも思います。帰れるか、帰れないかわからないけど、でも、私たちにとって、福島はいつでも帰れる場所で、それがあって、今の生活も安心できるっていう感覚があります。」

▶**智さん**「そうだね。まだ転勤とか、出張に来てるって感覚なのかもしれないよね(笑)」**終**

【編集後記】1年間発行してきた tovo plus。今号で2年目突入。シーズン[2]の最初は、震災後、福島から避難して青森で暮らしているご家族。「忘れないって何？」をコンセプトに発行してきましたが、今号は「忘れたくても、忘れられない」ご家族。彼らも僕たちと同じように、この青森に暮らし、生きていて、だから、僕はどうしても彼らを「あもりの100家族」に加えたくて登場して頂きました。【小山田和正】

寄付総額：¥1,350,741(2011年6月～2013年2月28日まで)

## STAFF VOICE

／  
お  
ふ  
み  
ん  
  
t  
o  
v  
o  
さ  
ん  
と  
私



「tovoさん」という人物がいるわけではないのだが、つい「tovoさん」というワードを使ってしまう。「tovo／トヴォとは、2011年3月11日に起きた東日本大震災で親を失った子どもたちを青森から支援するプロジェクトの名称」であるのだが、私が「tovoさん」と言うときは、主催者の小山田さんをさしていたり、プロジェクトを支援する別なメンバーをさしていたり、キモ可愛い目つき(褒めてます)が特徴的なキャラクターのリンゴ(だけでなく、いろんなものに変化するが)(大)と、リンゴ(小)を指していたり様々だけれど、個人ではどうにもならない困難にぶつかった時、見ず知らずの人が助けようとして寄り添ってくれるぬくもりと安心の象徴なのです。

3.11、大きな揺れを感じて職場のデスクから思わず立ち上がった同僚や上司は、とっさに1つしかない事務所ドアを開けて避難経路を確保し、私は窓から外の様子を窺いながら、すぐ当時高校生の長女に電話した。次女と一緒に2人で自宅にいることを確認し、ストーブなどの火の始末と自宅周囲の安全を確認しながら小学校へ三女を迎えに行くよう指示してから(携帯電話が繋がらなくなるかも)と思いながら通話を切ったのでした。

数日間は電話もメールも使えず、ラジオからは繰り返し同じ情報が流れるため、最新の情報源はツイッターでした。家族の安否情報を探し続ける声、助けを求める必死な声、避難所等

の有益情報を必要な人に届くようRT拡散する人で溢れかえり、私は携帯の充電残りを気にしながら、ただ画面を見ているだけでした。

そこから数か月、ぎりぎりまで節電したり食料や燃料確保など切羽詰まった空気も少しずつ落ちついて来た頃、出会った tovo のチャリティーグッズのデザイン。あのなんとも言えない印象的な目付きや色使いのセンスが好きで、何度か tovo が出店するイベントに足を運んで購入するうち、気づくと同様の志を持つ方々と一緒に tovo ブースの内側にいたり、フリーペーパーを配ったりしていました。

なぜだったのか…、今考えるとあの tovo キャラクターのまなざしに無言で問いかけられて、だまっておられなかったのかもしれない。そばにいるよ、という声を最初にあげる勇氣はなかったけれど、あの日の自分の無力さを悔やんでいたから、僅かな支えであってもなにもしないよりはいい、と一歩踏み出して行動することができたのは tovo キャラクターデザインのチカラのおかげだったように思います。

今、新型コロナウイルスという未曾有の困難と闘っている最中ですし、豪雨災害も頻繁に起こっており生きることは常に戦いなのだと思改めて思いますが、助け合いながら一緒に立ち向かうと繋がる動きも生まれているのを見ると、tovo の活動期間が終わっても (Always with you) の気持ちは続いていくと感じています。**終**

おふみんさんは、現在は関東在住ですが、数年前まで青森市にいらっしゃいました(ご家族は tovo plus No.077に掲載)。彼女からぜひお手伝いしたいとお声がけ頂いて以降、雨の日も雪の日も毎月毎月 tovo plus を青森市の配布ご協力店様に配本をし続けてくれました。彼女は、青森にあしなが育英会ファシリテーターを増やそうという tovo のプロジェクトにも協力頂き、あしなが育英会のファシリテーター講座を受講しています。さらに、彼女のおかげでBLUE TOKYO とのご縁も頂き、tovo とのコラボレーション商品も制作、BLUE TOKYO のファンの方にも tovo が広がりました。その他、僕が仕事でどうしても動けない時、出店や様々な面でバックアップしてくれたのが彼女です。ありがとうございました。 小山田 和正



# 013

20130411

インタビュー

加藤 靖信さん・睦子さん・  
一聖くん・葉琉くん

撮影場所：五所川原市立 五所川原南小学校(五所川原市)



## Q2011年3月11日のことを憶えていますか？

▶**靖信さん**「仕事が終わって帰ってきて家に1人でいたんです。トイレで用を足してる時に揺れて(笑)すぐおさまるかなと思ったんですが、揺れがとてつもなく長く、急いでTVを点けました。一瞬だけTVはついたんですよ。ニュース速報が流れたりしてて、でも、すぐ停電になりました。妻は仕事でし、次男は保育園でしたが、その日、学校から早く帰っていた長男の居場所が分からなくて…。まず実家に行って、長男は友人の家に行ってることを確認できたので、保育園へ次男を迎えにいきました。ちょうど母が入院をしていたのですが、母からも電話があり、家族全員の無事が確認できました。不思議に停電でも家の電話は繋がってたんですね。」

▶**睦子さん**「私は工作中でした。今までも地震はあったし、なんとなかなだろって思ってたんですけど、すぐに停電になったので作業をストップして、従業員が安全な場所に集まって、皆で家族の無事を確認しました。夫ともその時に連絡が取れて、家族全員が無事だった分かりました。でも、その時ってホント何が起きているのかって全く分かってなくて、夕方、帰り道で車の中のTVを観て初めて何が起きたのかを知りました。私が家に帰った時には、家族がみんな家にいました。」

▶**一聖くん**「友達の家で4人で遊んでいる時に地震がきて、その家の人に家に帰ったら？って言われて帰りました。お父さんが交差点で待っていてくれてました。」

▶**葉琉くん**「憶えてない…。」

## Qその日の夜は？

▶**睦子さん**「食べ物はいっぱいあったんです。家はプロパンガスです。食べ物は困らなかったです。」

▶**靖信さん**「灯油ストーブもあったから、お湯も沸かせたんです。ただ灯りには困りましたね。」

▶**靖信さん**「あ、その日の夜は夜勤だったんですよ。一応来てくれて家に電話がきて。普通に夜10時から4時まで仕事をしてました(笑)その時はまだTVもつかないし、一緒に働いている人たちが状況をよく掴めてなくて、みんな『まだ停電かな〜』なんて感じてたね。今思えば不思議な感じですけど(笑)」

▶**睦子さん**「夫の妹の家がオール電化で何もできないって、子どもと2人で家に来て、一緒にご飯を食べたんです。だから私と妹と子ども3人で、この家で過ごしてたんです。」

## Q震災後って何か変わりました？

▶**靖信さん**「電池とか買いましたね。ラジオも準備して。でも、やっぱりどこか遠いところの話という感じで、正直、危機感はないんだと思います。当時はとにかく何かしなきゃ、何かしなきゃと思ってましたが、結局、何もできずで…。その年の夏に被災地でプレハブを建てる仕事をずっとして、それで初めて凄いいことになってるっていう実感が湧きました。」

## Q10年後は？

▶**睦子さん**「うちの家族はいつも全員が居間にいるんですね。こういう雰囲気って10年後も続いていたらいいなと思います。」

▶**靖信さん**「子どもたちは1度は外に出て欲しいですね。家はいつでも帰れる場所であり続けたいと思います。子どもたちとは10年後も一緒に野球はやってたいですね。」

▶**一聖くん**「中学校に入ったら、もっと遊びたい(笑)野球も勉強も頑張りたいです。」

▶**葉琉くん**「小学校に入ったら、友達の家遊びに行きたい(笑)」終

【編集後記】当日はあいにくの雪と雨と暴風…。今号は息子さんたちが各々中学、小学校に入学するご家族にお願いをしました。震災から2年が経過し、青森に住む僕たちは、すっかり元通りの生活をして、でも、やっぱり、当時のことはちゃんと記憶してて、そして、今の被災地のことも知っていて、どこかで何かしたいなって思ってる。僕はこの小さなフリーペーパーで、そういうのを伝え続けたいなと思っています。～小山田 和正

寄付総額：¥1,350,741(2011年6月～2013年2月28日まで)



インタビュー

大賀 重樹さん・佳子さん・万緒さん・  
千聡さん・一心くん・百登くん

撮影場所：新青森駅（青森市）

**Q2011年3月11日のことを憶えていますか？**

- ▶**重樹さん**「勤務先にいました。家族とは全然連絡が取れなくて、電話ももちろんつながらなくて。」
- ▶**佳子さん**「仕事で外出していました。国道の信号機が全部止まっていて、すごい渋滞になっていて。」
- ▶**万緒さん**「中1で、ちょうど5時間目の授業中。『校内放送が入ってから避難する』って考えてたんですけど、停電で放送がかからない。先生方が校内をスピーカーを持ってまわって、体育館に集まってから集団下校しました。」
- ▶**千聡さん**「家にいた。インフルエンザの時期で学級閉鎖してたから。揺れたとき、うちは線路が近いから電車かなと思ったけど、ずっと続いて、近くのもの落ちてきたりとかしたから、地震だって分かった。」
- ▶**一心くん**「ちょうど学校から帰るところで、揺れる前からダッシュで走ってた（笑）」

**Q揺れてることに気付いた？**

- ▶**一心くん**「家に着く寸前に（笑）」
- ▶**百登くん**「幼稚園のときで、もう家に帰ってた。とにかくテーブルの下にもぐった。」

**Qその後は？**

- ▶**重樹さん**「家に帰ったら全員揃っていたので安心しました。うちはおじいちゃんとおばあちゃんもいるんですけど、みんなを一階の一部屋に集めて、丸ストーブを真ん中に置いて、明るいうちにご飯を食べて、明るいうちに布団を敷いて。キャンプによく行っていて電気が無いのは平気なので、『キャンプみたいだね』なんてランタンつけて。」
- ▶**佳子さん**「子どもたちはむしろ、『いつもと違う感じ』なんて、ちょっとわくわくしてたと思う（笑）」

**Q震災以降、何か変化は**

- ▶**重樹さん**「避難場所を、子どもたちが通っている小学校に決めました。それまで決めてなかったんですけど、いざという時には連絡が取れなくても小学校に行くんだよって、確認しましたね。私自身は、1日1日を大切に子どもたちと過ごして、きょうで子どもたちと会えなくなっても悔いが残らないように、けんかしたままその日終わらないとか、1日が終わるときには感謝の気持ちを持つようになった。」
- ▶**佳子さん**「『津波てんでんこ』の例もあるけど、家族がお互いに信頼し合わないと、バラバラに逃げられ

ないんだと私自身がすごく感じた。やっぱり母親って、何かあるとすぐ子どものところに駆け付けたいというか、自分が助けに行きたいって思っちゃうんだけど、そうじゃなくて、子どもたちが自分で逃げられるようにさせる、それが親の務めなんだと、考えるようになりました。」

- ▶**万緒さん**「何かあったら、長女だから下の子を守なきゃいけないって思う。責任感が出た感じ。」

**Q10年後のイメージは？**

- ▶**重樹さん**「自分は以前からやっているボランティアみたいなものを続けられたらいいと思う。10年後は子どもたちも大きくなってバラバラに暮らしていると思うので、何かあったときに自分で自分の命を守れるようになっていたらいいいと思いますね。」
- ▶**万緒さん**「獣医になりたいと思っているので、希望通りにいけばちょうど大学院を出るころ。大学から1人暮らししていると思う。」
- ▶**千聡さん**「保育士か幼稚園教諭になりたい。」
- ▶**一心くん**「いま悩んでる感じ…。」
- ▶**百登くん**「僕は1人暮らしはしないで、家族みんなと一緒にいたい。」
- ▶**佳子さん**「みんな健康で、元気で、できれば私と夫も元気で（笑）」終

【編集後記】6人を同時にインタビューしたのは初めての経験。6人バラバラの「あの時」があって、その経験が改めて「家族」を問う機会につながっていく様子が、よく伝わってきました。あの3月に中1だった子はこの春、高校生に、幼稚園だった子は小3に。時間が流れる中で、10年後の自分は何ができているのか、私自身に問う機会ともなりました。～前田ふひと

寄付総額：¥1,463,136(2011年6月～2013年4月25日まで)



インタビュー

堀内 英治さん・志津江子さん・真莉子さん

※英治さんは、残念ながら入院中の為、当日は一緒に撮影ができませんでした。

撮影場所：黒石市こみせ通り(黒石市)

**Q2011年3月11日のことを憶えていますか？**

▶**志津江子さん**「会社で仕事をしていました。みんな一斉に外へ出たんです。様子を見て、また作業に戻ったものの、余震は来るし、停電で機械も動かないし、その日はそれで解散しました。」

▶**真莉子さん**「私は自動車の教習所にいました。室内で、ゲームみたいに画面でやるシュミレーションをしてたんですが、揺れてる？と思ったら、その画面が3面の左、右、中って消えていったんですよ！(笑)揺れが長かったので不安だったんですけど、その後の教習も普通にやることになって…『こういうこともあるんだから体験しておけ！』って、真っ暗なコースを走らされました(笑)揺れがおさまった後も、なんかこう、ユラユラする感じがして、地震酔いがしばらくありました。家に帰ってきて、物が倒れてたりとかはそんなになくて安心しました。マリアって名前の犬を飼っているんですが、怪我もなくて無事だったし。」

▶**志津江子さん**「居間のテレビが首振ってたよね。」

▶**真莉子さん**「ああ！変な方を向いてたよね！」

**Qその日の夜はどう過ごしましたか？**

▶**真莉子さん**「ご飯はカップラーメンでした。あってよかったわ〜と(笑)」

▶**志津江子さん**「居間の電気ストーブが消えたので、灯油のストーブを引っ張り出してきて、灯りはキャンプ用のランプを使っていました。移動する時は携帯電話の灯りで。」

▶**真莉子さん**「寒かったし、20時くらいにはもう寝てたよね。トイレの便座も冷たくて、キャッ！て(笑)携帯電話のワンセグとかラジオで情報を得ようと思ったんですけど、あんまり電池がなくて、そんなに使えなかったんです。でも、この辺り全域が停電してるみたいだし、凄く大変なことになってるということは感じました。」

**Q震災後、何か変わりましたか？**

▶**真莉子さん**「一応、ベッドの近くに懐中電灯は置いてあります。あと、地震があって連絡を取り合う時、携帯電話が全然繋がらなかったんですよ。あんまりダメだから一度機種変更をしました。でも、いろいろあって、結局は元の会社に戻したんですけど…。ああいう時こそ電波とかしっかりして欲しいと思いますね。」

▶**志津江子さん**「食料とか電池をちゃんと買っておいて置かなきゃなと思いました。地震からしばらくの間は、近所のスーパーが凄く混んでいて、買い物が大変だったんです。やっぱり皆同じなんですね。」

**Q10年後は？**

▶**真莉子さん**「うーん、どうだろう…10年後…お母さん…あれ？今50？あれ？10年後って何歳？(笑)」

▶**志津江子さん**「皆、変わらず元気でいたいと思います(笑)今、お父さんが入院中なので、10年後はお父さんも元気で、家族で旅行に行きたい。」

▶**真莉子さん**「うんうん、いいね。どの辺に行きたい？」

▶**志津江子さん**「鹿児島！」

▶**真莉子さん**「鹿児島！？」(笑)宮城県や岩手県、福島県は行ってるよね。あ、福島県の五色沼にも行ったことあるんですよ。ボート漕いだんですけど、キレイだったな〜！お父さんと2人で乗って、うまく漕げなくてめっちゃ怒られたけど(笑)」

▶**志津江子さん**「東北とか、東側は行ったから、今度は西側に行きたいな。」

▶**真莉子さん**「そうだね。皆で行きたい〜！」(終)

【編集後記】はじめまして。坂本です。震災当時は私も教習所にいました。ロビーで揺れて、向こうの広いところで男子が揺れを利用してバランスゲームバトルを繰り返していたのが何よりも印象に残っています。今回の取材。真莉子さんは高校の同級生、耳が不自由な志津江子さんのお話しは、真莉子さんを通して手話でやりとりしました。落ち着いた雰囲気にも母の貴族を感じ、手で会話する二人、素敵だなと思いました。〜坂本小雪

寄付総額：¥1,463,136(2011年6月〜2013年4月25日まで)



インタビュー

白取 克之さん・潤子さん・千頌さん・  
千和ちゃん・トーヴェ

撮影場所：岩木山麓しらとり農場(弘前)

**Q2011年3月11日、どのように過ごして  
ましたか？**▶**克之さん**「昼寝してましたねえ(笑)」

▶**潤子さん**「昼寝の時間でしたね。当時、千和は生後2ヵ月、千頌は2歳だったんですけど、千頌が遊んで、なかなか寝なくて、そしたら揺れが…。まあ、それでも、ここはそれほど揺れた方ではなくて、何も倒れたりとかもなく『揺れたね』くらいなもので。停電には暗くなってからやっと気付いた。うちはストーブも風呂も薪だし、水は湧き水。ろうそくでの生活にも慣れていたし、不便は感じなかったですね。」

▶**克之さん**「バイオマストイレが攪拌(かくはん)されなくなったくらいだね。当初は災害や停電の規模すら分からなくて、家族からの電話やラジオで、その規模の大きさを知ったんですけど、それで知り合いの酪農家の事が心配になった。」

**Qその後はどのように？**

▶**克之さん**「停電で、搾乳できなくなっていたので、翌12日に手伝いに行ったんです。でも、とても手絞りで間に合うようなものではなくて…しかし発電機もない。このままだと牛たちに影響が出てしまうのですが、必要となる三相交流発電機が近場にはなかったんですよ、既に老人ホームなどに借りられていたもので…。そしたら、鯉ヶ沢の、とある鉄工所にあることが分かった。悩みましたね…。トラックの燃料がなくなるかもしれないんですよ。でも、行かなければ確実に結果は見えている。行きました。そして、なんとか鉄工所まで行けたのですが、今度は、その発電機を動かす為のクレーンも停電で使えなかったんですよ。鉄工所の社長さんが、コンボを駆使して、トラックに積んでくれたのですが、いやあ、ありがたかったですねえ。人の繋がりがってものを感じましたね。」

**Q震災以降、家族で何か話し合ったり、変化したことなどはありましたか？**

▶**潤子さん**「う～ん、特にこれといったはないけれど、車の燃料は常に入れておくようにしようね、とは言っていました。あと、電力会社の人たちのありがたさに気付きましたね。原発などあまり良いイメージはなかったんですけど、その末端で働く方々は一生懸命やってくれているんだな、と思うようになりました。」

**Q10年後は？**

▶**潤子さん**「家族は基本的に変化しかなあ。ここは農場ってだけではなく、もっといろんな人が来れる

ような憩いの場になっていればいいなと思います。」

▶**克之さん**「千頌にレストラン作ってって言われました。潤ちゃん(潤子さん)がコックで、俺は『こっちです』とか言うドアボーイ的な役目らしいです(笑)子供からは『克さん』で呼ばれてるんですけど、その頃には『かつ』って呼ばれてるかもね(笑)」終

【編集後記】弘前市郊外、岩木山の北東の麓に位置する『岩木山麓しらとり農場』は、自然農(無農薬・不耕起・草生)と有機農業の専業農家だ。「こっちの沢からあっちの沢まで」の広い農地には、かの震災の爪痕は見受けられなかった。しかし、そこに生きる人々の心の中に、その“記憶”は存在していた。3.11を経験した我々の心にも、あの日何らかの種が蒔かれ、そろそろ何かしら発芽しているはず。さて、それをどう実らせましょう？～なるみしう

寄付総額：¥1,652,865(2011年6月～2013年6月25日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**幸太さん**「高校の教員をしています。ちょうどテスト週間で生徒たちはいませんでした。地震があって、帰宅という指示があり、すぐに帰りました。」

▶**みちるさん**「私は子どもを迎えに行って、幼稚園に着いた時に地震がありました。すぐにアパートに戻ったのですが、まだ揺れていて、危ないと思い、車に乗ってラジオを聞きながら、主人の帰りを待っていました。すぐに主人が帰ってきたので、3人で広いパチンコ屋の駐車場でラジオを聞いていました。私の実家は宮城県東松島市なんです。私自身、宮城県北部地震(1990年)を体験していて、その時は本当に酷くて、今回はそれ以上の震度だと聞いて、きっと実家が酷いことになっているかと心配で心配で…」

▶**剛夕くん**「電気が点かなくなって…、うーん、憶えてない…。ママのお姉ちゃんから貰ったハワイ土産のココナツの口ウソクが役にたった。テレビが観れないのが嫌だった。」

**Qその日の夜はどう過ごしましたか？**

▶**みちるさん**「その口ウソクを点けて、コタツの中がまだ暖かったので、子どもを潜らせてました。ガスは使えたので、熱い食べようって、うどんを煮て食べましたね。ラジオがなかったので、1～2時間に1度、車でカーラジオを聞きながら、携帯電話の充電をしていました。こんな日に限って全く寝れなくて、話をするのもないし、3人でシーンと過ごしてました(笑)」

**Q東松島市のみちるさんのご実家とは連絡がとれたんですか？**

▶**みちるさん**「実家の母以外は、無事で家にいることは分かったのですが、海の近くに仕事に出かけていた母と連絡がとれませんでした。県外の親戚や仲間たちと協力しながら、TV等の災害伝言板や、mixi等を使いながら探しました。で、mixiに、泥まみれになって乗り捨てられた母の車の写真を見つけたんです。母は、車に乗っている時に津波に流されたらしく、そこから泳いで近くの避難所に避難していました。避難所で知り合った男性が、車で実家へ送ってきてくれたんです。母から電話をもらったのが、2日後、13日の夕方。その時は、『お母さん、生きてて良かったね!』って、大泣きしてしまいました。」

**Qその後、東松島市に行ったんですね？**

▶**みちるさん**「親戚がみんな海に近い場所に住んでいて、自分たちの家に住めない状態だったので、私の実家に20人程が身を寄せていました。車もなく、

食べ物もなくて困っていると聞いて、主人が行こうって言うてくれました。主人の父母が物資を準備してくれて、車2台で実家へ向いました。主人と2人で水を汲みに行ったり等手伝いをしました。」

▶**幸太さん**「1週間後くらい、東北自動車道が開通した直後のことです。戦争を体験したことはないですが、戦争の後ってこうなのかなと思いました。震災以前に何度も行ってますけど、全く違った町でした。」

**Q震災後、何か変わりました？**

▶**幸太さん**「特にないですね。」

▶**みちるさん**「2人で話し合っというのではないですね。保存用のクッキーや水は常備するようになりました。たまに食べちゃったりするんですけど(笑)。気持ちの上では、世の中、何が起るかわからないって思えば、家族の中で、今まで恥ずかしくて言えなかったことや、恥ずかしくて出来なかったことが、震災を機にできるようになったと思います。」

**Q10年後は？**

▶**幸太さん**「大きな病気をしないで家族全員が元気でいれたらイイですね。」

▶**みちるさん**「剛夕には自分の好きなものを見つけて欲しいなと思います。」

▶**剛夕くん**「普通の高校生(笑)。料理を作る人になりたいな。」終

【編集後記】みちるさんのご実家が宮城県東松島市とは知らずにインタビューをお願いしていました。僕も震災直後に東松島市にボランティアに行っていましたので、震災後の町の様子がリアルに感じられ、いろいろ思い出しながらお話を伺いました。tovo plusは、今号でパイロット版No.000を含め18号目。残り82号、82ヶ月。忘れないうって何だろう？を時間の経過と共に考えていきたいと思っています。～小山田和正

寄付総額：¥1,652,865(2011年6月～2013年6月25日まで)



**Q2011年3月11日のこと、覚えていますか？**

▶**智子さん**「子どもたちを学校に迎えに行くところで、車に乗って信号待ちをしていました。揺れは感じたけど、車のTVは点いてたし、停電には気づかなくて、信号まだかな〜と、しばらく〜待ってました(笑)」

▶**愛香ちゃん**「みんなで◎付けをしていたら揺れました。机の下にもぐった。」

▶**優太くん**「こっちももぐった！なんか盛り上がった。」

▶**陽太くん**「僕は委員会で体育館で寝てたから、机にはもぐってないです(笑)」

▶**定信さん**「私は、兄と深浦に行ってたんですが、揺れる1時間くらい前、移動中に普段あまり見かけないサルが5匹も6匹もワーツとたくさん山に登って、あ！サルや！サルや〜！言っていました(笑)」

**Qその日の夜はどう過ごしましたか？**

▶**智子さん**「家がオール電化で、普段から乾電池のものがなかったので真暗…。思いついて、クリスマスツリーを出したんです。イルミネーションの灯りで、子供たちも元気が出たようでした。あとは…主人のお兄さんが来てるのに、料理を作ることもできなくて、どーしようと思ったんですけど、知り合いの漁師さんをお願いして、お刺身を頼んだんです。なんだか普段より豪華になっちゃって(笑)」

▶**定信さん**「寒いのに暖房はつかないし、ガスの有り難みを感じましたね。灯油ストーブのあるお爺ちゃん家にみんなで固まって、ご飯食べたりしました。」

▶**優太くん**「そうだ！トイレも流れなくなった！」

▶**愛香ちゃん**「電気のトイレだからでしょ。」

▶**陽太くん**「いや、それ俺が原因かもしれない。」

▶**定信さん**「まじめに答えなさい(笑)」

**Q震災後、何か変わりましたか？**

▶**優太くん**「自分で防犯グッズを買っておこうと思った。けど…まだ買ってないです…(笑)」

▶**定信さん**「ガソリンがしばらく高かったじゃないですか。私は仕事で黒石・五所川原・深浦を行き来するので、本当に大変で。節約も兼ね、健康の為に自転車にするか〜と決意したんですよ。それでホームックに買いに行っ。でも、そのうちにガソリンも復活して、結局、使わなかったですけど(笑)」

▶**智子さん**「スーパーにみんなでロウソクと電池とカップラーメンとチャッカマンを買いに行きました。なくて本当に困ったので、これを機にちゃんと備えて、普段から電池のものも置いとくようになりました。」

震災から1年経った次の日に瑛太が生まれて、最中、TVで震災の番組をやっているのを見ながら、当時、あの状況の中で育児をしていた人はえらいなあ〜と思いました。」

**Q10年後は？**

▶**定信さん**「みんなどこ進むの？」

▶**陽太くん**「医学部。お父さんの背中をみて。…なんかデカいなと(笑)」

▶**愛香ちゃん**「医学部。自分で病院建てたい。」

▶**優太くん**「じゃあ、そこの助手やる(笑)」

▶**定信さん**「ある程度悠々自適にやっているのではと思う。子どもたちがちゃんと大学行って、ちゃんとした人になってくれればと。瑛太とは、野球を一緒にしようかな。もしかしたら、もう1人生まれてるかも(笑)」

▶**智子さん**「瑛太はお兄ちゃんたちよりも、すごい野球少年になるかな〜。家族はもう1人増えて、そして、美魔女目指します！(笑) 家族、増えると嬉しいな。」

終

【編集後記】 tovo の活動にご協力いただいている美容院が行きつけで、店主さんから話を聞いてぜひ協力したいと名乗りをあげてくださった智子さん。兄弟みんな仲がよくにぎやか。3人で1歳の瑛太くんの相手をする様子は手慣れたもので、とても微笑ましかったです。当時のことを尋ねた際に、はじめは言葉の少なかった子どもたちも会話が進むにつれて思い出したように話をしてくれて、この瞬間のためのこの活動だなとメモする手にも力がこもりました。字はミミズだけど。〜坂本小雪

寄付総額：¥1,862,131(2011年6月〜2013年8月25日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**真也さん**「その時は、職業訓練校のパソコン教室で授業を受けてましたね。当然、停電で授業は中止に…。」

▶**ゆかりさん**「私のやってる美容室が（真也さんのいた場所から）近かったので、（真也さんが）顔を出してくれて…。お店からアラジンストーブを借りて、一緒に私の家に帰りました。」

▶**真也さん**「その頃はまだ結婚前で別々に暮らしてたんですが、震災後は彼女の所にいる時間が多かったですね。震災当日の夜はストーブを使って調理したり、僕はカリンバ（アフリカの楽器。親指ピアノとも）弾いたり、太鼓叩いたりしてました。あと、ずっと携帯電話で津波や、原発関連のニュースを見てました。」

▶**ゆかりさん**「翌日は、卒園式に出席するお客さんの予約が早朝から入っていましたので、一応、お店に行ったものの、やはり現れないし、連絡も取れない…。幸い（お店のある）弘前駅周辺は朝7時には電力回復してましたので、友達や連絡取れる人に電話して“シャンプーしにこない〜？”って呼んでましたね。それでも午後からは普通にお客さんもいらっしゃるようになって…。」

▶**真也さん**「それほど“大変だった”ってことはありませんでした。1週間くらいはガソリンを確保するのに苦労しましたけど。」

**Q震災以降、二人で何か話し合ったり、変化したことなどはありましたか？**

▶**真也さん**「家族が欲しいなと思うようになりました。離れていることないなって。震災前から予定していたのですが、2011年の5月には引っ越して、一緒に暮らし始め、9月にはそこで『Chise 食堂』をオープン。11月に結婚しました。2011年は忘れられない年です。」

▶**ゆかりさん**「国に任せきりにはできないなと思うようにもなりましたね。自給自足志向も強まりました。子供もできて尚更。」

▶**真也さん**「岩木山が綺麗に見える地に引っ越すことになったんですが、そこで“農”を生活に取り入れていきたいですね。お店も他の場所に引っ越して、そこで『Chise 食堂』と『GLEE HAIR』（ゆかりさんのお店）を1軒の建物で“一緒に”やっていくことになりました。」

**Q10年後は？**

▶**真也さん**「もっと“農”を生活の中に取り入れている

と思います。自給自足への道をちよつとずつ進んで行く。そんな生活を子供に見せておきたいですね。水はどこから来るのか、電気はどこから来るのかを知ってもらいたい。」

▶**ゆかりさん**「子供には素直で元気に育ってもらいたいですね。そして、どんどん世界に出て欲しい。世界を見て欲しいと思います。新婚旅行で自給自足の生活が根付いているカンボジアを訪れる予定でしたが、子供（八八ちゃん）ができて行けなかったんですよ。そんなこともあり、子供にはカンボジアをはじめ、いろんな所で、いろんなことを感じてほしいと思います。」

終

【編集後記】真也さんの美味しい玄米菜食とジャマイカ料理をいただけるお店、『Chise(ちせ)食堂』と、奥様ゆかりさんの美容室『glee hair』が、この秋から弘前市文京町13-9で「一緒に」営業再開している（両店とも●10時～19時【L.O18時】●月曜、第一・第三日曜休●満月、新月の日は23時まで営業）。家族一緒の時間がますます増えていく。家族の物語がどんどん編まれていく。ここでもそこでも。～なるみしう

寄付総額：¥1,862,131(2011年6月～2013年8月25日まで)



## 漁民研修センター



## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**重徳さん**「私は出先で車の中だったんですけど、揺れてねえ。あれやばい、これやばいって。うちは新聞販売店で、店に戻ったら、ちょうど夕刊が搬入されたところ。その後も余震が1回、2回…ってきて、それものかなりの強さで。海岸には大津波警報も出て、でも、とにかく夕刊の配達作業はしたんです。」

▶**信之介くん**「学校で『あれ、地震かな？』と思ったらガタガタガタッと揺れだして。2階にいたんだけど、玄関のガラスが、割れるんじゃないかと思うぐらいガンガン揺れていた。」

▶**京之介くん**「学校のパソコン室で、パソコンがすごく揺れて、机から落ちてきそうな感じで、壁時計が落ちて割れて。校庭に避難した後も余震が2回ぐらいあって、国旗掲揚台がすごく揺れて、それが一番怖かった。」

▶**重徳さん**「夜は寒いし、停電で暗いし…だったけど、うちのおふくろが豆炭たいて、暑いぐらいになって。小さい発電機を持っていたので、ライトやTVは点けました。」

▶**久美子さん**「豆炭、大活躍だったよね。こたつに入れたり、鍋乗って料理したり。その日の夜はカレーにしました。数日持つし(笑)」

▶**重徳さん**「電話も繋がらないから、翌日の朝刊が来るのかも分からなかった。それでも次の日、従業員がいつもの時間に来てくれて、『今日、朝刊発行されてるの？』って。助かったよね。」

## Q三沢も大津波の被害を受けました。

▶**久美子さん**「この一帯は国道338号をはさんで、海寄りの土地が下がっていて。漁港に波が上がって…」

▶**重徳さん**「第1波はそうでもなかったけど、第2波がかなり時間差があって来て、それが大きかった。警報が出ていたけど、浜の様子を見に行ったら人が結構いて、胸まで波に飲まれたとか、車をダメにしたとか、何件も聞きました。三沢には2方向から波が来たんです。前海からと、八戸方向からの横の波と。みんな『横から波が来た、それが怖かった』って言います。実は、うちの従業員の1人が、第2波で亡くなったんです。仕事の後、漁港の様子を見に行きたいで、…真面目な人でね、残念だったですね。」

▶**重徳さん**「三沢は『川目』という小さい川が一川目から六川目まであるんです。津波はそれを遡って、川沿いのお宅が被害を受けた。うちの配達エリアでも、全壊・半壊のお宅が十何軒ありました。」

▶**久美子さん**「四川目地区では、大きな船が2艘ぐらい打ち上げられてた。」

## Q震災以降、心境に変化はありましたか？

▶**久美子さん**「前は地震でも『平気だよねー』みたいなところがあったけど、今は『この後強くなるかも』みたいな意識は出ましたね。特に2番目(京之介くん)の反応が素早い(笑)」

▶**京之介くん**「地震に対する危機感が強くなった。家族を大切にするようになった。友達とも仲良くなった。」

▶**重徳さん**「ここは六ヶ所が近い。核燃料サイクル施設に何かあれば、ここもダメですから。安全だ安全だと言われてきたじゃないですか。でも福島を見て、原子力関連施設が近いという事実を意識するようになりました。」

## Q10年後は？

▶**重徳さん**「家族みんな健康でいられれば一番いいと思う。」

▶**久美子さん**「平平凡凡に楽しんで、毎日を過ごせたらいいと思う。どうせやるなら、楽しい感じがいい。」

▶**信之介くん**「全然考えたことないなあ…」

▶**雅ちゃん**「サーティーワンのアイス屋さん？」

▶**京之介くん**「とりあえずは、今は医者になりたい。」

▶**家族全員**「ほおっ！」終

【編集後記】今回の撮影場所は三沢漁港地区の漁民研修センター。1階窓を覆うブルーシートが、今も大津波の爪痕を伝えます。月舘さんご一家は、取り壊しが決まっているこの建物を記憶にとどめたいと、撮影場所を選んだそうです。岩手・宮城・福島の被害の前にかすみがちだけど、青森県も東日本大震災の被災地。忘れないでいたいです。～前田ふひと

寄付総額：¥1,966,136(2011年6月～2013年10月31日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**典秀さん**「仕事中でした。清掃会社に勤めていますが、地震が起きた時は銀行の清掃をしていました。地震があまりにも大きくて、銀行のシャッターが全部閉まりまして、仕事にならなくなったので、会社に戻りました。その後、取引先の大型スーパーなどの地震の被害状況の調査確認作業に追われました。家に帰ったのは18時過ぎくらい。」

▶**未来さん**「私も仕事中でした。介護施設で仕事をしていますが、地震直後、家族のいる利用者のご自宅へ送り届け、また、1人暮らしの老人の家を1軒1軒まわり、彼らを介護施設に集めました。特に認知症の方々の精神状態が不安定になっていましたね。なかなか携帯も繋がらなかったのですが、夕方、家に帰る途中に、偶然に夫に電話が繋がり、家に帰る旨を伝えました。」

**Qその日の夜のことは憶えていますか？**

▶**典秀さん**「実家にロウソクと石油ストーブを取りに行きました。コンビニにも寄ってみました。食べ物も電池も何もなくて。」

▶**未来さん**「たしか、夜はカップラーメンを食べたんだと思います。」

▶**典秀さん**「携帯のワンセグで、だんだん被害の全体像が見えてきました。凄いことになっているなど。ガソリンも、食べ物もないし…。余震が怖かったですね。すぐ家から出られるように着替え等を枕元に準備していました。」

▶**未来さん**「ちょっとしたキャンプ生活でしたね。電気がない不便さ。これは一体いつまで続くんだろうって、とても不安でした。」

**Q次の日は？**

▶**典秀さん**「まだ停電が続いていましたが、通常通り仕事がありました。前日と同じように、取引先を1軒1軒回って、地震の被害状況を確認して行きました。」

▶**未来さん**「私も仕事がありました。地震の後片付けと、あと、1人暮らしの老人の家に昼食の弁当を届けたりしていました。」

**Q震災以降、変化はありましたか？**

▶**典秀さん**「家族がバラバラになった時の集合場所は決めましたね。まず自宅。もし自宅にいない場合は実家。もし実家にいない場合は家内の実家の順番です。」

▶**未来さん**「決めたけど、忘れてた(笑) 電池と食べ物は備蓄しました。」

▶**典秀さん**「ちょっとした余震でも、かなり気をつけるようになりましたね。」

▶**未来さん**「地震の時は子どもが生まれていなかったのですが、子どもが生まれてからは、いろいろなこと、地震でお子さんを亡くした人とか、親を亡くした子どもとか、そういうことを自分のこととして考えられるようになりました。自分で子どもを生んでからは、いろいろなことの捉え方が変わりました。」

▶**典秀さん**「子どもが生まれてからは、ホントいろいろ変わりましたねえ。」

**Q10年後は？**

▶**典秀さん**「子どもたちがちゃんと育ってくれてたらいいなと思います。」

▶**未来さん**「いろいろな面で、今より良い生活ができてたらいいなと思います。子どもたちは、健康で元気で、友達とたくさん遊んでいたらいいなと思います。」終

【編集後記】 tovo 発行のフリーペーパー tovo plus、パイロット版 No.000から数えて、今号で22号目、22家族目、22ヶ月目になりました。震災に何かのカタチで関わっている人、そういう立場にいる人、手段を持っている人たち以外の、普通のご家族の声を聞きたいと思い始めました。僕はそういう人たちの声世の中を変える力を持っていると信じています。残り79号。79ヶ月。～小山田 和正

寄付総額：¥1,966,136(2011年6月～2013年10月31日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**美希子さん**「お店に出てました。すごくビックリして怖くて…。その時は莉希愛がお腹にいて、もうすぐ臨月だったんですよ。それで、ビックリしたらお腹が張ってカチカチになっちゃって(笑) 揺れの後、すぐ停電になったし、保育園の美芽莉のことが、心配で心配で、お腹の具合が落ち着いてから、保育園まで送ってもらいました。保育園の玄関先で子どもたちみんなジャンパー着て、毛布にくるまって迎えを待ってたのを憶えます。」

▶**貴浩さん**「大工の仕事をしてるんですが、その時はなんだか目の前が揺れるし、足場も揺れるし『具合悪くなったか〜?』と思いました(笑) 周りを見たら信号が全部消えて、あ、地震だなと。作業が一旦中止になったので、妻に電話したんですけど、全然繋がらなくてどうしようと思いました。手元が見える間は仕事をして、暗くなる前に帰りました。」

**Q その日の夜のことは憶えていますか？**

▶**美希子さん**「普段、ジジとパパ2人である実家に、私たちと、弟夫婦が集まって過ごしました。だるまストーブを出して、灯りはキャンドルを使いました。美芽莉も、弟夫婦の子も不安そうだったんですが、私が集めてたブタさんとかの可愛いキャンドルを使ったらなんだか楽しそうでした(笑) 弟と一緒に外に出てみたら、知らないオジさんがいて『町中の電気消えたら、こんなに空がキレイなんだなあ』って言うんですけど、真っ暗だし、やっぱり怖かったです(笑)」

**Q 次の日は？**

▶**美希子さん**「停電で店の冷蔵庫が使えなくなって、ケーキがいっぱい残っちゃったので、それを箱に詰めて、向かいのスーパーに並んでる人たちに安く売ってなんとかしました。電気の復旧は、お店が駅前なので割と早くて助かりました。」

**Q 震災以降、変化はありましたか？**

▶**貴浩さん**「震災後の仕事が被災地での仮設住宅の建設だったんです。実際に足を運んで、余震もある中で、瓦礫の山とか、自衛隊員や警察が活動してるのとかを見ながら作業して、凄いことになってるんだと実感しましたね。通勤のガソリンが大変で、3時間待っても満タンにできない状況だったので、貴重なものなんだなあと改めて思ったり。」

▶**美希子さん**「缶詰を買うようになりましたね～。あとは、出かけるときに、おむつとおんぶ紐を持ったり。とにかく、万が一の時の子どもたちの事を一番に

考えて。美芽莉は早くにおむつ外れてたので、当時の買い物でおむつに困ることはなかったんですけど、たまに必要な時は、布おむつを使ったりしてました。あとは、ネットで『カーテンを使っておんぶ紐を作る』とか、そういうのをいっぱい見ました(笑) 当時、私は妊婦だったし、子どものことを思いながら、きっとTVで報道される亡くなった方の数に、妊婦さんのお腹の中の子は入ってないだろうなって、すごく悲しかったです。」

**Q10年後は？**

▶**美希子さん**「何でも話してくれればイイなあ。とにかく毎日楽しく過ごしていきたいと思います。美芽莉は、ウチの仕事が好きで、お菓子作りとか、お客さんとお話したいってよく言ってます(笑) いつ何があるかわからないので、大好きっていうのはいつも伝えてます。」

▶**貴浩さん**「やめてー! って言うよね(笑) チューしないでー! とか(笑)」

▶**美希子さん**「もう! 美芽莉と、莉希愛大好き〜(笑)」

終

【編集後記】イベントで似顔絵描きをやっていたときにお客さんとして来てくれた美希子さんと娘ちゃんたち。仲良しでおしゃれさんなファミリーはみんな笑顔が素敵でした。お話の端々でうかがえるパパママの真摯な愛情とオクラさんのおいしいお菓子。娘ちゃんたちは幸せですよ〜こどもは幸せでなければならないと思うのです。tovoの活動はこどもたちの幸せにつながっているんだとI believe. ~坂本小雪

寄付総額：¥2,087,325(2011年6月〜2013年12月25日まで)



# 023

20140211

インタビュー

竹森 幹さん・美媛さん・仙ちゃん

撮影場所：bambooforest (弘前市)



## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶美媛さん「その頃は東京で3人で暮らしていたんですが、仙ちゃんはまだ生後5ヵ月で、その日は居間で寝ていました。わたしはお風呂掃除中で、“ん？揺れてる！大きい！”と慌てて仙ちゃんを抱いて、すぐに逃げられるように玄関の戸を開けてましたね。キャーッ！とか、助けてー！って叫んでました。仙ちゃんは泣くこともなく、そんな私をポーッと見上げてましたね。」

▶幹さん「僕はその時、環七（東京23区内を環状に走る都道）沿いの雑居ビルの5階のオフィスにいました。電柱や信号機が揺れていて凄かったですよ。信号が機能停止したんで、車は動けず、渋滞を起こしていました。道を歩いていたお婆さんが、揺れの中で、その辺のモノにしがみついているのも見えました。職場では普段寡黙な社長がムクツと立って“逃げるぞ”って言ったのを憶えています。余震が続く中、家まで自転車で飛んで帰りました。この人（美媛さん）、地震苦手でしたから。多分最速でしたよ、そんな時の自分！」

## Qその後はどのようにされていましたか？

▶美媛さん「いつでもすぐに仙ちゃん連れて走れるように、おんぶ紐を付けてました。結構余震が続いていましたから…。緊急地震速報が何度も鳴っていたのを憶えています。」

▶幹さん「卓上コンロで調理したり、停電はなかったんですけど、節電の為にランタン使ったりしてました。東北に電気送らなきゃって。あとはPC使って情報収集。Twitterで連絡取り合ったり。兄が仙台にいたんですけど、1～2日連絡取れなくて心配しました。」

▶美媛さん「その後、福島第一原発の事故があってから、東京から避難する人が出てきて、友人もハワイに行きました。うちも小さい子供がいましたから、祖母の暮らす京都への避難を決め、1週間くらいいましたね。」

## Q震災以降、変化はありましたか？

▶幹さん「地震の4日前にDOMMUNE（ドミューン。ライブストーリーミングチャンネル）で、鎌仲ひとみさん（ドキュメンタリー映画監督。代表作に『六ヶ所村ラプソディー』や『ヒバクシャ 世界の終わりに』、『ミツバチの羽音と地球の回転』等）が出ていた対談番組を見てたんですよ。意識が“知る”という方向に向いた矢先の3.11でしたので、より強く“知る”ことの重要性を感じるようになりました。小さい頃に母に連れられて六ヶ所村の反対運動に行ったこともありましたが、もともとそういった意識が根付いていたのかもしれない。」

▶美媛さん「水や食料等、仙ちゃんの触れるもの、口に入るものを考えて青森へ移ってきました。放射線だけではなく、添加物や肉だったら、その動物はどんな餌を摂っていたのかとかまで“知る”努力を続けています。」

## Q10年後は？

▶幹さん「10年後も青森にいたらイイな。六ヶ所に何も起きずに…。せっかく青森帰ってきて親孝行できてるんで、このままでいければイイな。」

▶美媛さん「子供があと2人増えてたらイイな。」

▶幹さん「岩木山見て暮らさせてたらイイね。」終

【編集後記】撮影日、ルネスアベニューから新店舗（弘前市代官町20-1）へと引越し作業中だったbambooforest。子供も大人も楽しい外遊び＆科学幾何学おもちゃから、アパレル、DVD等が揃うお店。朝から大雪となった弘前でしたが、お構いなしに元気120%の仙ちゃん。そんな彼を見守るパパママを見ていて、こちらも幸せな気分。親子の当たり前な姿かもしれませんが、その有り難さに気付かされるインタビューとなりました。幸せを続けるために“知る”努力。そして“続ける”ことの重要性。日々勉強、日日は好日？～なるみしう

寄付総額：¥2,087,325(2011年6月～2013年12月25日まで)



インタビュー

藤田 耕次さん・真由美さん・  
茉那ちゃん・実花ちゃん

撮影場所：八戸市八太郎(八戸市)

**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**耕次さん**「勤務先の八戸市庁は、2棟のうち、1棟を1994年12月の三陸はるか沖地震後に免震構造で建て直し、私はそちらにいたんです。免震ってわざと揺れる構造になっていて、揺れ方が普通と違う。ユーラユーラ…という横揺れが、強くなったり弱くなったりしながら、いつまでも続いて、『どうなってしまうんだろう』と。その日は役所泊まり。」

**真由美さんは当時勤務地が青森市で、青森で茉那ちゃんと2人暮らしでした。**

▶**真由美さん**「私は用事を足しに出て、ちょうど目的地に着いたところ。車がグラグラッと揺れて、高台だったから『やたら風が強いな』と(笑)。でもなんか違う、と思って外に出たら地震。急いで用事を済ませて、『とにかく茉那を迎えに行かないと』と戻ったんだけど、信号機がごとごとく停電で、雪も結構降っていて、『早く保育園に着きたい、でも事故も怖い』と、運転に集中して。なんとか保育園に辿り着いたら、茉那は大泣きしていましたね。」

▶**茉那ちゃん**「そうだった？(笑)。揺れた時、先生が毛布をかぶせてくれて、その中に隠れてたの。おうちに帰ったら停電してて、懐中電灯つけて。」

▶**真由美さん**「キャンドルつけたりして、いつもと違う感じで茉那は楽しそうだったよね。停電だし、19時ごろには布団に入って。震災を受けて、翌日は朝7時の出社になり、保育園が茉那を預かってくれなかったら、職場に連れて行こうと思ったけど、引き受けてくれたので、安心して仕事に行けました。」

**Qお互いの安否はすぐに確認できたんですか？**

▶**耕次さん**「当時は青森に2人いて、私の母親が八戸市内で別に住んでいて、兄一家が仙台。基本はメールで、当日の夜ぐらいいまではみんな無事ということが分かって安心しました。でもそっち(青森など)がどういう状況か分からないので、心配でした。」

▶**真由美さん**「あの時は茉那のことを考えると『八戸にいないで良かった』とも思いました。だけど、別々に暮らしていると、すぐに連絡もとれないし、様子も見に行けないし、不安ですよね。」

**Q震災後、家族で話し合いなどしましたか？**

▶**耕次さん**「自宅は、震災で被害が大きかった八戸臨海工業地帯が近く、馬淵川の河口も近い。」

▶**真由美さん**「地震が来たら、家の近くの高台の「八太郎ヶ丘公園」に逃げようと思いました。」

▶**茉那ちゃん**「いすや座布団で頭を隠す。公園に逃げるの。1人で行ったことはないけど、(そばに)誰もいなかったら1人で行く。」

▶**耕次さん**「茉那がこの4月に入学する根岸小学校(徒歩1分ほど)は『津波避難ビル』だしね。」

▶**真由美さん**「防災セットも買って。今は実花の育児休業中で家にいるから、『地震が来たら、実花を連れて、持ち物は…』というシミュレーションを常にしてる(笑)。震災の時、妊婦さんとか、赤ちゃんがいた人は、避難所でも本当に大変だったろうと思います。」

**真由美さんのお仕事の都合で、今後も家族が別々に暮らす場合があるかもしれません。**

▶**真由美さん**「震災前から、離れて暮らしていても、毎日連絡を取り合っています。離れている時はしょうがないけど、みんな揃った時、濃密に過ごすようにしています。どこかに遊びに行くとかだけでなく、家にいる、普通の時間を大切にしよう。」

**Q10年後のイメージは？**

▶**耕次さん**「茉那は高校生、実花は小学校高学年。思春期の娘が2人いて『どうしよう…』という状況に陥っているかも(笑)」

▶**茉那ちゃん**「将来はケーキ屋さんになりたい。」

▶**真由美さん**「どんな家族の形、住まい方をしているか分かりませんが、子どもたちが悩んでいるような時には聞いてあげたい。2人とも女の子だしね。」

終

【編集後記】震災発生時はお互いの仕事の都合で別々に暮らしていた耕次さんと、真由美さん・茉那ちゃん。家族の歴史を紡ぐうちには、ぎっといろんなことがある。寄り添い合っていくすべを、常に、でも気負いなく考えているようで、頼もしかったです。取材をした2月16日は、八戸市で観測史上最多の積雪60センチを記録した日。八戸らしからぬ、雪深い風景を背にした家族写真となりました。  
～前田ふひと

寄付総額：¥2,209,033(2011年6月～2014年2月28日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**孝子さん**「お客さんも何人かいて、お店は営業中でした。葵葉（現在11ヶ月）は生まれてなかったんですが、和花は保育所にいました。」

▶**祥仁さん**「私は調理をしながら常に揺れているので気が付かなかったんです（笑）でも、妻が『大きい！』って叫んで（笑）」

▶**孝子さん**「その後、電気は消えましたが、ガスは使えたので、お客さんに料理を出してました。その時は状況もつかめなくて、お客さんも『大変だね〜』なんて言っていましたね。」

▶**祥仁さん**「換気扇が回らなくて、店内はムンムン（笑）」

▶**サツエさん**「厨房にいたんですが、いろんなところに掴まりながら歩いていました。」

▶**祥仁さん**「親父が去年（2013年）の2月に亡くなったんですが、その時は親父も一緒に厨房にいました。」

▶**孝子さん**「和花は保育所で、お昼寝の時間だったんですが、帰り支度をして、皆でホールに集まって、オヤツを食べていました。」

▶**サツエさん**「私は地震にとっても弱いんですよ。今回の地震以前に、大地震を2度（十勝沖地震[昭和43年]・日本海中部地震[昭和58年]）経験していて、いつもココに1人だったんですよ。ドンブリも冷蔵庫もTVも全部落ちてしまって、とても怖い思いをしたのを思い出しました。今回は家族が皆揃っていたので安心しました。」

**Qその日の夜や次の日はお店は営業したんですか？**

▶**祥仁さん**「普段通りに営業しました。電気もなく、真っ暗で不便ではありましたが、『なんでもイイから食べさせて』っていうお客さんも来店されて、仏壇の大きな口ウソクやランタンで明かりを灯して、あるものを使って料理を出しました。反射式のストーブを出して、全部のヤカンを使ってお湯を沸かしてましたね。」

▶**孝子さん**「携帯電話の番号を知っている方から『配達できる？』なんて連絡も頂いて、普通に配達もしましたね。」

▶**祥仁さん**「次の日も人が多くて、ホント忙しかったです。」

**Qその日の夜はどうされました？**

▶**サツエさん**「ウチは地震や災害に備えて、1人に1つずつ懐中電灯を用意してるんです。枕元にいつも置いてね。それがその時には役に立ちました。」

▶**祥仁さん**「ウチは全部ガスを使っていて、ガスが止まらない限りは食べ物は何とかなるんです。」

▶**孝子さん**「夜中じゅうずっと余震で家が揺れていて、家が古いので壊れたらどうしようと心配でした（笑）」

▶**祥仁さん**「地震当日に近所の方のお通夜があったんですよ。日程が決まっていたので、短い時間でもということになって、手伝いに行っただけです。発電機を使って足下だけ電気を点けて。その時にお寺の本堂から見渡した真っ暗な町並みは忘れられないですねー！」

**Q震災後、家族で話し合いなどしましたか？**

▶**祥仁さん**「ここは避難場所は駅になってるんですが、それは家族がみんな知ってます。」

▶**サツエさん**「カセットコンロのガスは切らさないようにしてます。まず、食べて、生きなきゃいけないですからね。」

**Q和花ちゃんは学校で避難訓練とかする？**

▶**和花ちゃん**「2〜3ヶ月に1度やってる。先生の指示に従って皆でグラウンドに動くの。」

**Q10年後のイメージは？**

▶**祥仁さん**「被災地、特に福島が収束していて欲しいです。子どもたちが将来どこに行っても安全に安心に暮らせるようになって欲しいです。」

▶**孝子さん**「皆が健康で一緒に暮らせていたらいいですね。」

▶**和花ちゃん**「警察官になりたい。」

▶**サツエさん**「親の歳まで、90歳まで生きたいので、これ以上悪くならないようにしたいですね。ボケないように（笑）」終

【編集後記】衣・食・住は人が生活する上での基礎です。震災直後、僕たちは当たり前に提供され続けてきた、それらの大切さにあらためて気付かされました。今回、神武食堂さんのお話を伺いながら、どんな非常時でも、家族総出で「食」を提供し続けていこうという備えと心構えに感動し、近隣に住む者として、心強く安心感を憶えました。〜小山田和正

寄付総額：¥2,209,033(2011年6月〜2014年2月28日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**絵里子さん**「友人の家でテレビを観てました(笑) 揺れだしたと思ったらテレビがいきなり消えて、その時は何が起きてるのか状況が分からなかったし、ちょっと長いな〜と思ったくらいでした。でも、家に帰ろうと外に出て、信号が止まっているのを見て、コンビニにも車が普段だとあり得ないくらいいっぱい止まっているし、外に出てからやっと、ちょっとヤバイかもって気持ちになりました。当時は琉清もまだ生まれてなくて、紗愛は保育園に行っていましたね。紗愛のお迎えは、普通の時間に行きました…(笑) 紗愛は地震の日のこと憶えてる？」

▶**紗愛ちゃん**「地震ってどういうものか、よく分かってなかったから、揺れてるのに気付かなかった！遊んでたら急に先生がホールに椅子を並べて『座って』って言って、お菓子持ったまま座って、ママが来るの待ってたよ。帰るまで地震って分かんなかった！」

▶**絵里子さん**「えー！(笑)」

▶**恒清さん**「地震あった時は、鰯ヶ沢の海ばたで仕事をして、町内放送が流れて、津波が来るかもしれないって、丘の上の小学校に避難しましたね。鰯ヶ沢は反対方向だったから津波は大丈夫だったんですけど。家族と連絡はすぐにはとれなかったけど、その後なんとか合流しました。小学校には他の住民の人もしばしばいて、何がどうなってるかは分からなかったですね。後で津波の映像観た時は、あーヤバイなって怖かったです。」

**Qその日の夜はどう過ごしましたか？**

▶**絵里子さん**「家が建てたばかりのオール電化だったので、全部止まりましたね〜。トイレも入れなくて！実家が車で5分の近所なので、トイレはそっちに借りに行っていました。病院が近くて実家は電気が戻るのも早かったので、シャワーも借りたり…。ホント助かりました。灯りはロウソクでしたね。」

▶**紗愛ちゃん**「カップラーメン食べたよ。あとご飯も食べたよね？」

▶**恒清さん**「母親に教えてもらって、ガスコンロでフライパンでご飯を炊いたりとか、だるまストーブで湯沸かししたりしました。」

**Q震災後、何か変わりましたか？**

▶**絵里子さん**「特別何をしたらってわけでもないんですけど。震災がある前は、例えば料理の手伝いで包丁持たせたりするの、紗愛はまだ小さいし危ないからってやらせてなかったんですよ。でも、あの体験があったからは、もし自分に何かあった時、子どもたちが

困らないように教えておけることは教えておくようにしました。今伝えられることをきちんと伝えて、ちっちゃくてまだ理解できないかもしれないけど、大きくなって何かの時に、あの時しゃべってたのは、この事かって分かってくれるかなって思います。そういうふうにしなから、今を楽しむ！っていうのを今まで以上に意識していこうって思いました。」

**Q10年後のイメージは？**

▶**絵里子さん**「あんまり想像できないけど…(笑) 大変な事とか辛い事とかがあっても、お互いに一番支えになれるように、そういう感じでいたいなあと思いますね〜。」

▶**恒清さん**「うん、とりあえず皆で笑っていたいと思う。笑顔を絶やさない家族がいいな。」

▶**絵里子さん**「紗愛は〜将来の夢は？」

▶**紗愛ちゃん**「うーん、刑事！」

▶**絵里子さん**「えー！(笑) それドラマ観たからでしょ！ホントに！？(笑)」

▶**紗愛ちゃん**「すーごいホント！(笑)」終

【編集後記】 鶴田町在住で鶴田の街づくりプロジェクトに所属する絵里子さん。このたび希望された撮影場所の陸奥鶴田駅について、駅舎がきれいだったことがよくて好き！との言葉に熱い地元愛を感じました(笑) tovoの活動もそうですが、自分が生まれた場所から、自分ができることをして、何かを伝えよう、そこから何かに繋げよう、続けようという意識、大切にしたいです。〜坂本小雪

寄付総額：¥2,365,140(2011年6月〜2014年4月30日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

- ▶**孝方さん**「その日はたまたま午後休みを取ってたんですよ。それで、史子と当時2才10ヵ月だったころを連れて、オープンしたばかりのスーパーに買い物に行ったんです。でも、凄い混み様でしたのでそのまま素通りして、ラーメン屋に行ってラーメン食べたり、目当てとは別のスーパーで晩酌用のつまみ買ったりして帰ってきたんです。そして、トイレに入っている時でした…グラグラッときたのは。」
- ▶**史子さん**「ころは帰りの車の中から既に寝てたんだけど、揺れてる最中も起きなかったよね。まずはころをテーブルの下にサッと入れて…あとはテレビとか押さえてた。すぐに停電もしたね。」
- ▶**健祥くん**「僕は学校で授業中だった。ん？帰りの会だったかな？揺れて、停電して…机の下に隠れてた。揺れが収まってから、玄関前にみんな集合して、集団下校するところだった。」
- ▶**孝方さん**「そこに私が迎えに行ったんです。他の父兄も迎えに来てましたね。空からは濡れ雪が降ってきて、通りの信号機はみんな消えてました。」

**Qその日の夜はどう過ごしましたか？**

- ▶**史子さん**「おかず買って良かったよね。電気は点かないけど、ガスは大丈夫だったんで、カップラーメンもいけたし…。」
- ▶**孝方さん**「ろうそく灯して、ラジオつけて…停電で暖房がなかったんで、みんなで暖め合って寝ました。」
- ▶**健祥くん**「揺れてる時はそんなに怖くなかったけど、夜はちょっと怖かった。」
- ▶**孝方さん**「翌日は車の中で暖をとったりしながら復旧を待っていました。」
- ▶**健祥くん**「学校の方まで様子見に行ったりしたよね。」
- ▶**孝方さん**「そうそう。ガソリンスタンドへ続く車の列が長くて凄かったなあ。ウチは徒歩通勤なんで、ガソリンに関しては平気でした。」

**Q震災後、何か変わりましたか？**

- ▶**孝方さん**「特に変化はないのですが、今後は、いつでもああいう大きな出来事(震災)は起こりうると、家族みんなが分かったんじゃないかな。偶然にも、震災の半年前に息子の空手の試合で気仙沼に行っていたんです。気仙沼の人たちが歓迎して下さったのを憶えてで…。バスで通った辺りが壊滅的被害を受けているのをテレビで見たり、会場だったK-WAVE(気仙沼市総合体育館)が避難所になっていたり…。我々も、道場へ支援物資を送ったり、青森市民体育館に

物資を届けたりもしました。今でもふとした時に当時のことを思い出しますね。」

**Q10年後のイメージは？**

- ▶**史子さん**「みんな元気で変わらずいたいね。」
- ▶**孝方さん**「そうだね。みんなこのまま元気なら、それでいいな。」
- ▶**健祥くん**「その頃も青森にいたい。青森が好きだから！」**終**

【編集後記】 いつも一緒にいつも仲良しな阿保さんファミリー。一家揃って音楽の趣味も似通っていて、親子でライブにも出掛けるほど。「家族」「絆」「愛」そんなキーワードが具現化されたようだ。実はどこにでもあるような家族の風景でもあるが、その儚さもまた我々は知っている。大切にしたいと思う。愛という絆が繋ぐ大きな家族を…なんて青臭い歌のようなことを思う、蒼い夕暮れでございました。～なるみしう

寄付総額：¥2,365,140(2011年6月～2014年4月30日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**正貴さん**「浪岡のリンゴ園地で剪定をしていました。揺れていることに全く気がつかなくて(笑)。畑の中に電柱があって、それを地面に固定しているワイヤーが『バチンバチンバチン』と鳴るので、何だろう?と見たら、ワイヤーがぶわんぶわん揺れて出ている音だった。電柱も揺れていたのが初めて地震に気付いて、すぐ家に電話したけどもうつながらない。自分は仙台に住んでいたときがあって、麻比も仙台市隣の富谷町の出身。仙台ではちよくちよく大きい地震を経験して、そのたびに電話がつながらなくなった。だから、電話がつながらなかったことで、『これは大きい地震だ』と直感して、即、家に戻りました。」

▶**麻比さん**「当時、真央が生まれて7カ月。お昼寝させてテレビを見ていたら揺れて、なかなか収まらなくて。居間に本棚があって、『これ倒れたら危ないな』と思って、片手で真央を抱っこして、もう一方の手で本棚を押さえていました(笑)。なんとなく仙台方面(の被害が大きかった)だろうなという予感があって、富谷の実家にすぐ電話したけどつながらなくて。30分ぐらいひたすらあちこち電話をかけ続けて、やっと姉とつながった。その日の夜は、反射式のストーブを出してきて、ろうそくを立てて過ごしていました。」

▶**正貴さん**「うちは農家で発電機などを持っていたので、テレビをつけて情報収集できたし、携帯電話の充電もできたし。ガソリンはバイクが何台かあって、農業用機械のものも全部かき集めて、60リットルぐらい確保して、しばらくこれでなんとかなるか。軽油で動く車もあるし、農家の強みが生かされましたね。小さいお子さんがいて不安だったのでは。」

▶**麻比さん**「実家のほうで連絡がとれない人もいたので、むしろそっちが気になって。石巻にも親戚がいるので、ひたすら電話をかけ続けて。姉の夫が仙台港で働いていて、津波で車を流されたりはしましたが、みな無事でした。」

## Q心境や生活での変化はありましたか？

▶**正貴さん**「家族が増えたとほぼ同時に大変な事態を経験したので、危機感を持った生活をするのが当たり前になって(笑)。何かあったらすぐ動く、という。」

▶**麻比さん**「とにかく真央のために動く。私が実家と親戚の連絡係をしばらくしていたこともあり、親戚との距離感が近くなった。それ以来、こまめに連絡をとるよう心がけるようになりました。」

▶**正貴さん**「うちの家族の半分は地震の関係者。自分も仙台時代の仲間に物資を持っていくなどしていたし、震災を経て、何か手伝えることがないかと考えるようになりました。自分は昨年から、リンゴ農家や業

者でリンゴ即売会などを開く『黒石輝くりんご市の会』の会長を務めていて、モノ売ってもらうだけじゃだめで、何か違うことをしようということになって。黒石市は被災した宮古市と姉妹都市の関係。宮古市特産の塩を使った『塩サイダー』を販売して復興支援にあてている団体が現地にあるんですが、両市が間に入って来て、そのサイダーと黒石のリンゴジュースをコラボレーションした商品を開発する活動を、年明けからやってきました。もうすぐ商品化されます。『宮黒サイダー』という商品名で、塩サイダーにリンゴジュースを加えたもの。普通においしいよ(笑)。」

## Q10年後のイメージは？

▶**正貴さん**「農園を法人化。自分のやりたい形があるので、理想に近づけたい。」

▶**麻比さん**「平和に暮らしていきたい(笑)。真央は14歳。このまま、真央にはママ大好きでいてほしい(笑)。一緒に買い物したりとか。」

▶**正貴さん**「おれは『パパ嫌い』って言われてそうで、そこんこは諦めてる(笑)。」

▶**真央ちゃん**「(プリキュアの)キュアラブリーになりたい。」

▶**正貴さん**「真央はそこ絶対に曲げないね。(笑)」終

【編集後記】 tovoplusは、青森で暮らすごく普通の家族がテーマなのだけど、「あの日」を境に、みな何かしらの変容を遂げながらきょうに至っているのだと、取材のたび感じます。その変化は劇的ではないにしろ、確かなものとして、家族の中に積み重なっていくようです。正貴さんはじめ「りんご市の会」が、自らの産業を復興支援に結びつけた「宮黒サイダー」、楽しみですね。この tovo plus が発行されるころには飲めるかな。～前田ふひと

寄付総額：¥2,458,595(2011年6月～2014年6月30日まで)



インタビュー

田中 秀次さん・敦子さん・青佳さん・利空くん

撮影場所：五所川原駅前ねぶた小屋(五所川原市)

**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

- ▶**秀次さん**「憶えています。ちょうど家でカップラーメンを食べていた時だったんですよ(笑)」
- ▶**敦子さん**「買い物にでかけていて、ちょうど車庫に車を入れていた時でした。なんか様子がおかしいなあと感じたんですが、旦那が外に出てきて、『地震だよー』って。でも、どのくらい揺れているのかは、私には分からなかったんです。」
- ▶**秀次さん**「そう。2人で電気なんかが揺れているのを確認して、『ほら、地震じゃない!』って。」
- ▶**敦子さん**「それで、子どもたちはどうしているんだろうと心配になりました。」
- ▶**利空くん**「その時は幼稚園にいて、お母さんとお父さんが心配だった。」
- ▶**敦子さん**「青佳は小学校にいて、やっぱり、同級生同士で、お母さんとお父さんを心配してたって言ってましたね。皆がそれぞれで家族のことを心配してたんですね。」
- ▶**利空くん**「みんなでロッカーの中に入って隠れたんだよ。それで、地震がおさまって、外に逃げたんだよ。猛ダッシュで!」

**Qその日の夜は？**

- ▶**秀次さん**「ダルマストーブを出してきて、オイルタンクから灯油を抜いて、なんとか暖をとりました。」
- ▶**敦子さん**「ウチは家族でキャンプをよくするので、キャンプ用品があるんです。ランタンを出してきて明かりにして。テレビがつかないので状況がよく分からなかったんですが、東京の友達から『大丈夫?』というメールがきたりして、だんだん状況がつかめてきたんです。」
- ▶**敦子さん**「市内の友達からもメールがくるんですが、みんな、オール電化の家に住んでいて、電気がないと何もできないんですね。ウチにはロウソクがたくさんあるので、それを集めて、皆に配りました。その後も、被災地にロウソクを送ったりしました。」
- ▶**敦子さん**「夕食はもともとアウトドア風のパエリアを作ろうと思って準備してたんです。地震で停電になって、なんだかオントにキャンプみたいになっちゃったねーって話をしながら食べてました。」
- ▶**利空くん**「寒かったもんない!」

**Q心境や生活での変化はありましたか？**

- ▶**敦子さん**「集合場所を家族で決めたのと、節電を常に心がけていますね。あとは、子どもたちにも、どん

な時にでも食べて生きていけるようにと、キャンプは続けようと。」

- ▶**秀次さん**「その年にウチの門が倒れたんですよ。それを修復するのに大変な苦勞をしたんです。その時、被災地の方々の大変さというのを痛感しました。ウチとは比べ物にならないくらい大きな打撃を受けて、何十倍もの苦勞をされているんだなと。1件だけではなく、周り全部、みんなが大変な思いをしていて、その中で復興っていうのは並大抵の苦勞ではないだろうと感じています。」

**Q10年後のイメージは？**

- ▶**秀次さん**「ヨボヨボながら生きているのかなあ。エネルギーは今とは随分変わっているのかなあと思いますね。」
- ▶**敦子さん**「とにかく家族が皆元気でいてくれたらいいなと思いますね。」
- ▶**利空くん**「うーん。あ、スキーのオリンピック選手になってるかな。たぶん。」
- ▶**敦子さん**「私はそのスキーに付き合っ、とても忙しい日々を過ごしていると思います(笑)」**終**

【編集後記】今回は五所川原立佞武多の前で撮影したいと思ったものの、ご家族のスケジュール、僕のスケジュール、そして、立佞武多始まって以来、初めての祭り期間中の大雨で、結局、ねぶた審査結果の翌日、祭り最終日(8/8)のインタビューと撮影になりました。偶然にも、ご家族の所属するねぶたが最高賞である「市長賞」を受賞、今年最高の立佞武多の前で撮影することができました。～小山田和正

寄付総額：¥2,458,595(2011年6月～2014年6月30日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**千帆さん**「当時、天音は3歳で、体調を崩して保育園を休んでいました。病院へと連れて行く途中で地震に遭ったんですが、その時は風が強いのかなあって程度ですぐには気付かなかったんです。病院のあるショッピングセンターに着くと停電していて、そこで地震があったことを知りました。病院もやはり停電していて、診てもらうことが出来なかったの、すぐに帰ってきましたね。」

▶**壮也さん**「僕はその頃、栃木に行ってたんですよ。その年の12月から10ヵ月間カンボジアで陶芸を教えることになっていたんですが、そこで使用する窯は薪を使う窯で、僕は灯油窯しか経験がなかったから、栃木の益子で薪窯を使って陶芸をやっている友人のところに経験させてもらいに行ってたんです。窯焼きは丸3日間掛けて行われるんですが、その最中2日目の、火の勢いを最高潮に上げていっている時に大きな揺れがきました。半地下だったことや、1300度という高温が窯全体を柔らかくしていたことなどのおかげで、その窯は震度6弱の揺れに耐えてくれました。もしも窯が崩れていたら、一山丸焼けだったかも…。その後も本震並みの大きな余震が3回ほどありましたね。至る所で地割れがあり、(栃木で採掘される)大谷石で出来た塀や蔵は倒壊し、瓦屋根も全滅でした。ラジオを聞いたら被害は青森にまで及んでいるとのことでしたが、携帯電話はつながらず、通話がフリーになっていた公衆電話で青森と連絡をとれたのは翌12日の夕方のことでした。」

▶**千帆さん**「地震の前から、うちにはむつからおばあちゃんが来てくれていたので心強かったですね。彼(壮也さん)が帰ってくるまでいてくれたんで、助かりました。」

▶**壮也さん**「帰りは日本海側を北上して帰ってきました。福島や山形辺りでは道に段差ができていたり、通行止めのせいか警察の姿もたくさん見ましたね。13日の朝には青森に着いたんですが、雪がなくて良かったなあ。」

## Q心境や生活での変化はありましたか？

▶**壮也さん**「もともと電気をあまり使わない生活でしたが、よりアナログな生活をするようになりましたね。既存のライフラインに頼り切らない生活が良いと見直しました。カンボジアに行けたのも良かったかも。向こうには、一昔前の日本のような風景がありました。ガスはなく、水は井戸水、電気はあっても料金が高い上によく停電してましたが、現地の人たちは平気なんですね。カンボジアでの生活には、天音が一番適応していましたよ。」

▶**千帆さん**「震災当時、天音が津波の映像を怖がることもあり、あまりテレビを見ないようになったんです。完全にデジ化から3ヵ月後にカンボジアへ行ったのですが、それ以降はテレビのない生活をしていますね。」

## Q10年後のイメージは？

▶**壮也さん**「10年後も変わらない生活をしていると思います。やりたいと思ったことをやる場所を探して、ここ金木町に来れたので。ここは物凄く住みやすいところです。」

▶**千帆さん**「私はもっと養蜂に力を入れていきたいいな。」**終**

【編集後記】今回お話を聞かせて下さったのは、共に陶芸家の猿田御夫妻。自宅兼工場の『陶工房ゆきふらし』(※10月4日(土)～5(日)に板柳町にて開催される『クラフト小径』にも出展が決まっております!)での取材となりました。インタビュー終盤の頃に帰ってきた天音ちゃんは、とにかく元気な女の子で「10年後、天音ちゃんはどしてるかなあ?」と聞いてみると、物干台兼ブランコ兼鉄棒にて、笑って逆上がりで応えてくれました。助走付きで…。～なるみしう

寄付総額：¥2,579,505(2011年6月～2014年8月30日まで)



インタビュー

齊藤 仁宏さん・智美さん・栖佳くん・  
蓮ちゃん・泉甫くん

撮影場所：鬼神社（弘前市鬼沢）

**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**智美さん**「泉甫と一緒にぼーっとTV観てましたね(笑)揺れてと思ったらすぐTVが消えて、あら！って。停電してから近所のおばあちゃんが、ウチだけじゃないよね～って、確認しにきました(笑)泉甫が生まれたのが3月1日で、病院から帰ってきたのが8日だったんですよ。病院で地震にあってたら大変だったな～と思いましたね。栖佳と蓮は保育園からバスで送られてきて、次の日からは暖房の関係で、お休みできたら休んでくださいって。」

▶**仁宏さん**「仕事場で、もう一瞬で電気消えましたね。帰れ帰れーって社長が騒いでました(笑)コンビニで水買って帰れーって。電話がやっとならなくて、何か食料とか買って帰ってきてーって言われて店に寄ったものの、地震あつてからまだ1時間半とか、そのくらいしか経ってなかったのに既に何もなかったのをすごく覚えてます。実は前日まで出張で仙台にいたんですが、仕事してた所が壊滅的な被害にあったそうで、そういえば余震みたいなのもあったし、うわ～危なかったな～と。」

▶**蓮ちゃん**「保育園で、帽子かぶって本みてた。帽子ない人はお昼寝のふとんかぶってた。揺れすぎて先生がさわいでてめっちゃうるさかった！みんなは静かだった(笑)」

**Qその日の夜はどう過ごしましたか？**

▶**智美さん**「この辺は井戸あるところが多いんですが、停電で村の簡易水道が止まっちゃったんですよ。ウチは簡易と浄水どっちも引いてたので水は大丈夫で、お水ちょうだいって近所の人が家に来たりしましたね。トイレはお風呂にためてあった水で流せました。暖房は薪ストーブだったから問題なかったし、ガス釜だからご飯もふつうにできました。ストーブの上に鉄瓶いっぱい置いてお湯沸かしたり。その年の夏に父が亡くなって、太いローソクとか結構あったので灯りはそれを使って。夜、電気以外はわりと不自由なかった！(笑)農家ばかりだから野菜はあるし、食べ物にも困らなかったですね。イモがあればなんとかなるだろうって(笑)あ、でも、泉甫のおしりふきとかおむつを買いだめしてなかったの、それは2～3日ちょっと困りました～」

**Q震災後、何か変わりましたか？**

▶**智美さん**「特別なことはしてない…ですね。車のガソリンこまめに入れとくくらい。」

▶**仁宏さん**「今単身赴任で三沢にいて地震よくあるけど、特に何もできてないな。」

▶**智美さん**「ロウソクくらい持っとけて言ってるんですけどね(笑)子どもたちも特に何ってこともないんですが、携帯電話の地震速報のメール？あのもの凄い音鳴るやつには流石に『これ地震の音でしょ』ってちょっと不安そうにしますね。そういえば、地震が起きる前に、イタコさんとか神様降ろす系の人たちが、あつて何かおききことあるから、向こうに行ってる人早く帰った方がいいよって騒いでるらしいって、この辺で話してたんですよ。それで地震起きて、うちの人は無事に前日に帰ってきて、は～やっぱり神様だもん～わかるんだ～ほんとなんだ～って改めて神様すごいって感動しました(笑)」

**Q10年後は？**

▶**智美さん**「子どもたち高校生…になっても、今みたいに親と遊んでくれるかな(笑)好きなこと見つけて、やりたいこと自由にやってくれれば！」

▶**仁宏さん**「孫できれば面白いな～(笑)」

▶**智美さん**「いやあんまり早いべ！まだ高校生だよ(笑)栖佳はトミカのDVDの影響で3歳くらいのときからずっと消防士になりたいって言って、蓮は昔から警察官になりたいって言うんですよね。蓮なんで？」

▶**蓮ちゃん**「あのね～なんかね、地球の平和をね…」

▶**智美さん**「守るのか！壮大な(笑)泉甫はアンパンマンになりたいらしく一番ふつう(笑)」終

【編集後記】鬼沢の伝統、獅子踊りのお囃子を担当している智美さん。撮影にあたりお囃子の衣装と獅子の頭も用意してくださいました。やんちゃな子どもたちを時に厳しく、笑顔いっぱいで見守り受け止めるお父さんお母さん。鬼神社が祀る「ツノ」のない心優しい鬼神様が、齊藤さん一家の後ろに見えたような気がしました。～坂本小雪

寄付総額：¥2,579,505(2011年6月～2014年8月30日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**厚大さん**「私は勤務先の青森市役所浪岡事務所にいました。すごい揺れで停電し、職場の震度計は震度4。建設土木関連の部署なのですが、震度4以上だと橋などの見回りをしなければならない。家族を心配しながらも現場に出かけました。」

▶**麻紀子さん**「翌日の土曜日勤務の振り替えて休みだったので、買い物に出かけていたところ地震が来て、陳列棚のものがバーっと落ちた。子どもたちが保育園にいたので、当時自宅のあった浪岡に車で向かいましたが、信号も全然点いていなかった。夫と連絡をとろうとしたけど電話はつながらないし。夫は職業柄、災害のときは職場待機になるので、帰って来られないことは分かっていました。借家だったんですけどオール電化で、唯愛はまだ8カ月で、ミルクのお湯をどうしようって…。カセットコンロがあったので、それでお湯をわかして。」

▶**厚大さん**「職場から家が近かったので、夜に様子を見に行って、顔を見たら安心した。電気もなくストーブもつけられずに寒くて。車にテレビがついていて、暖房もあるし、車にいろと言って、職場に戻りました。」

▶**麻紀子さん**「車で暖をとりながら、子どもたちが不安にならないよう、DVDなどを見せて。でも21時には限界だと感じて、家に入って毛布とか全部出して子どもたちを寝かせました。次の日私は仕事で、保育園に3人連れて行ったら、『きょうは預かれない』と。しょうがないから職場に連れていきました。当時の担当は病院事務だったので、上の2人は待合室でひたすら遊ばせて（笑）。唯愛は病院の食堂に勤務していた友人が見てくれました。」

▶**厚大さん**「浪岡は病院周辺などの電気の復旧は早かったけど、それ以外の地区は2～3日遅れたんです。自分が帰宅したのも電気が復旧してから。浪岡事務所は自家発電があり、避難所になりました。青森市役所まで避難所用の配給品をとりに行った帰り道、沿道に電気がぱぱぱと点いて、それを見て家に電話したら、間もなく復旧したと。」

▶**麻紀子さん**「いつになったら電気が点くのか、夫が帰ってくるのか…とこわかった。子どもたちもいつもと違うと感じていたみたいで、バカ騒ぎしたりはあんまりなくて、いつもより言うことを聞いてくれました（笑）」

## Qその後、心境や生活の変化は？

▶**麻紀子さん**「震災前でも、災害が起これば夫は待機で帰ってこないことが何度もあり、『家のことは放ったらかしで』『私はどうすればいいの?』と責めたこともあった。でも、震災で救助活動にあたる人たちをテレビで見て、その人たちの家族の気持ちを思いま

した。夫もそういう仕事。それ以来、大雪などで夫が仕事に出て、言わなくなりました。」

▶**厚大さん**「言わなくなったな、たしかに（笑）。強くなったんじゃない？ 奥さんにはいつも悪いと思って…。子どもたちはまだ小さいけれど、身の回りのことなどなるべく自分でできるようになってほしいと思って毎日接しています。家の中で一人ですべていけば、外でも大丈夫かと。いづつどうなるか分からない世の中だと思うので、生きる力をちょっとでも身につけてもらいたくて。（何かできたとき）一人ほめるとケンカになるんだけど（笑）」

## Q10年後どうしているでしょう？

▶**厚大さん**「正直みんなでいつまでも一緒にいたいと思っているけど、子どもは巣立っていく。私は変わらず、こいつ（麻紀子さん）とケンカしながら、かな（笑）。」

▶**麻紀子さん**「なにかあったときに、みんな集まって団結できるような絆を強くしていきたい。」

## Q夢は？

▶**厚大さん**「いずれは子どもたちの結婚式に出て泣きたい（笑）。」

▶**麻紀子さん**「娘と一緒に買い物したり遊びに行ったりしたい。」

▶**蹴叶くん**「サッカー選手」

▶**莉愛ちゃん**「パティシエになりたいの」

▶**唯愛ちゃん**「ケーキ屋さん」

▶**厚大さん**「娘2人でいつもままごととして、最近はスイーツにはまっているみたいだね。」終

【編集後記】取材した10月13日は、大型で強い台風19号が本県に接近していた日。厚大さんはテレビで天候状況をチェックしながら、ハラハラしている様子でした。災害の際、あえて現場に出て行かなければならない人がいて、その人の安全と帰りを待っている家族もいます。また、震災の時、働くお母さんたちがぶつかった困難にも、改めて気付かされました。それぞれが自分の役割を担う中で、私たちはどうやって助け合っていけるでしょうか。考える機会となりました。

～前田ふひと

寄付総額：¥2,801,303(2011年6月～2014年10月30日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**保さん**「十和田市で仕事をしていました。印刷会社に勤めているのですが、停電でパソコンや機械類も止まってしまったので仕事にならず、待機していました。携帯電話でニュースを見ている方もいたので、何が起きているかは分かりましたが、家族とは電話も繋がらず、とても心配をしていました。上司が帰ってくるのを待って、夕方6時くらいでしょうか、全員帰宅することになりました。家に帰って、玄関を開けたら、結が『怖い!』って、くっついてきたのを覚えています。」

▶**公子さん**「樹と、十和田市の病院にいました。樹が吸入器をしている時に揺れ始めて、すぐに鎮まるのかなと思いましたが、だんだん揺れが強くなり、先生方が患者さんたちを外に誘導し始めました。看護婦さんが吸入器をしている樹を守ってくれていました。停電でレジも止まったので、清算は後日ということで、家に帰ってきました。帰りの車のラジオで、だんだんと状況が把握できてきました。」

▶**樹くん**「今までで一番怖い地震でした。病院で吸入器をしていて、看護婦さんが守ってくれました。」

▶**陽ちゃん**「家にいました。でも、覚えてない。」

▶**結ちゃん**「2人でこたつの中で遊んでたんじゃなかったかな?」

**Q その晩は何をしていましたか？**

▶**保さん**「夜は真っ暗で。キャンプ用品を使ってしのいでいましたね。もちろん、風呂も入れないし。会社の帰りに、スーパーに寄ってレトルト食品を買って帰ったんです。反射式ストーブでお湯を沸かして、それが晩御飯でしたね。」

▶**公子さん**「1番下の子、成がちょっとアトピーを持っているので、風呂に入れないとって、反射式ストーブで沸かしたお湯で、成の体だけは拭きました。」

▶**陽ちゃん**「何度も地震があつて、覚えてないです。」

▶**樹くん**「カップラーメンとかで食事を済ませて、すごく大変な夜でした。」

**Q その後、心境や生活の変化はありましたか？**

▶**保さん**「集合場所を決めました。あの日はランタンがすごく役に立ったので、ランタンのガスは常備しています。懐中電灯とかも揃えましたね。」

▶**公子さん**「保存食を詰めたり。」

▶**保さん**「あと、反射式ストーブを置くようにしています。」

▶**公子さん**「みんなで、地震があったら、ここに集まろうねって決めていて、あと、みんなのスリッパを茶の間に置いておいて、常にスリッパを履いて外に出れるようにしています。」

▶**結ちゃん**「スリッパがない時は、お父さんが抱っこして連れてってくれるんだよ。」

▶**樹くん**「学校では、教室にいる人は机の下に隠れ、廊下にいる人は、近くの教室に入って、机の下に隠れ、揺れが鎮まったら外に出るという避難訓練をしています。」

▶**保さん**「地震の時は、離れた場所で仕事をしていて、家族と連絡も取れずに心配をしましたので、いつでも家族のところに飛んで行ける場所にいたいと思いました。なかなかうまくはいかないですけど、気持ちだけは、ずっとそばにいたいと思います。」

▶**公子さん**「家族、子どもを持つ身として、当時のニュースはとても辛かったですね。忘れてはいけないと思っています。」

**Q10年後どうしているでしょう？**

▶**保さん**「地震や津波、たとえ何があったとしても、家族いつも仲良く、健康でいたいです。」

▶**公子さん**「家族が健康なことですね。」

▶**陽ちゃん**「漫画家の仕事。」

▶**樹くん**「ねぶた師になりたいです。」

▶**結ちゃん**「んー。ねぶた師かなあ。」終

【編集後記】今号でパイロット版No.000を含めて34家族目、34ヶ月目となりました。できれば最終号100号までに青森県内の全市町村のご家族を紹介できたらと考えていますが、青森県もなかなか土地が広く、時間が作れません。今回は七戸町ドラキュラフェスに伺った折に、念願だった初登場の場所、七戸町のご家族にお願いを致しました。お忙しいところ、時間を作って頂いた太田さんご家族に感謝致します。ありがとうございました。～小山田和正



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**奈都季さん**「その時は家にいました。自動車学校に行かなきゃいけなかったんだけど、様子を見てました。揺れたその瞬間は、なんか頭の中で「非常食!!!」ってなって、弟と防水のでっかいバックに魚肉ソーセージとか腐らなさそうなもの詰めてました(笑) いちばん大きく揺れた時、電気の下にいて、電気がバンッってって弟の頭の上に落ちてきて、髪にちょっと破片が引っ掛かっただけだったんですけど、すごいびっくりして怖かった(笑) あと、その頃、最中モバゲーをやって、その中でフレンドの人たちが、お互い顔知らないのに『青森だけ大丈夫?』とか、いっぱい連絡くれて、ちょっと感動しましたね。」

▶**秀一さん**「新潟に出張をしていて、そっちは震災の揺れや停電はなかったんですよ。でも、風評被害と言うのもなんですが、職場では宿泊客のキャンセルが続々出て、直接的な影響はなかったもののそのシーズンは営業終了になりましたね。あー、影響なかったと言っても買い物はやっぱり大変だったかな。スーパーには、牛乳とかインスタント系はなんにもなかったし、店の棚の半分くらい空っぽで。」

**Qその日の夜はどう過ごしましたか？**

▶**奈都季さん**「ローソク生活でしたね! 電気つかなくて暗いのが怖かったけど…。ご飯は、蒸かしたさつまいも!(笑) あとはカップラーメンとか、土鍋でお米炊いたりもしました。水道は家で2つ引いて、水はバリバリ出たので、近所の人にお水あげてました!」

**Q震災後、何か変わったことは？**

▶**奈都季さん**「新卒で4月から就職する予定だったのが震災の影響で6月まで自宅待機になったんですよ。その間、社員さんも解雇になったり、一緒に入社する予定だった人も入れなくなっちゃったりで。最終的に新卒では私ひとり入社できることになって、その就職先で旦那と出会って、今に至るんですが、娘が生まれて、もし、また地震とかあって生き埋めになって、自分と娘で助けて一ってなってても、自分より娘を先に助けてほしいって、そういうことをやっぱり考えるようになりました。自分はどうかして出るぞって(笑)」

▶**秀一さん**「自分も、結婚してから意識は変わりましたね。それまでは好きな時に寝て、好きなものだけ食べて、みたいな自分中心の生活してたんですが、嫁と子どもという守らなきゃいけない大事なものができて、やっぱり優先順位が変わりました。嫁と子どもなら、嫁は2の次かなあ〜。」

▶**奈都季さん**「ひどい!(笑)」

▶**秀一さん**「自分でどうにかして出ると言ってたでしょ(笑)」

**Q10年後は？**

▶**秀一さん**「仲良く暮らしてたらそれでいいです。贅沢しなくてもいいから。」

▶**奈都季さん**「うん。当たり前のことを当たり前と思わず小さいことでも幸せって思える、そういう気持ちを大事にして、娘にもそれを教えていこうと思ってます。それから良いことも悪いことも、なんでも半分こ精神で! 子どもは…増えても、あと1人かな?(笑)」**終**

【編集後記】毎回取材前になんとなくテーマを考えます。今回、若いパパやママの思うところを聞いてみたくて、私と同年ながら妻で母な奈都季さんにお願いしました。クラスメイトの口から自然に出てくるお母さんとしてのしっかりした意識に感動しっぱなし。自分よりも他人を思う。勇気があることですね。〜20代前半のヒヨッコ坂本小雪

寄付総額：¥2,915,651(2011年6月〜2014年12月31日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**奏美ちゃん**「もちろんおぼえてるよ〜。おもしろかったよ、暗くなったりして。」

▶**智之さん**「その日私は休みで家にいて、揺れがあった時は洗濯物を干していました。慌てて外に出てみたんですが、そのうち収まったので家の中へ戻り、続きを干しました。実苗は小ちゃかったから憶えてないでしょ。」

▶**実苗ちゃん**「うん。おぼえてな〜い。」

▶**光穂子さん**「私は、会社の車で跨線橋（青森市古川）を弘前方面に走っていました。最初は地震だと気付かず、なんでこんなに滑るんだろうって思っていましたね。で、橋を渡り終えた辺りで車を脇に寄せて停めた時、電線がユラユラしているのが見えて、地震だって分かりました。周囲の車も停まっていたんですが、揺れが収まった頃にまたゆっくりと動き始めました。信号は消えたままだったので、皆譲り合いで進んでいましたね。なんとか取引先の会社に着いて、そこで皆でワンセグで津波の映像を見てました。そして、そこに、その日は休みで大鰐に春スキーを楽しみに行っていた方から連絡があって、『今、リフトが止まってしまい降りられない』と言ってました。」

▶**智之さん**「電話が使えなくなってたんで、Twitterで連絡を取ったんだよね。」

智之『停電した。とりあえずガスの元栓閉めました。』

光穂子『無事でなにより』

智之『とりあえず奏ちゃん実苗ちゃんは帰ってきました。保育園も停電。』

…という、簡単なやり取り。」

▶**光穂子さん**「もう1軒回った頃に会社から『直帰していいよ』って連絡あったんで、おばあちゃんちに全員集合ってことになりました。17時には帰ってましたね。」

▶**智之さん**「反射式のストーブがあって助かったよね。そこにはガス炊飯器があったんで、それでご飯作って食べてました。子供たちは『TV観たい〜』って言うてましたけど、それが叶わないと分かったら、今度は『DVD観たい〜』って。停電でものを理解できていないようでしたね。暗くなったら寝るかって感じで、その日は寝ました。」

▶**光穂子さん**「翌日は休みでしたが、会社の車で帰ってきていたので、ガソリンを満タンにしに行きました。待つこともなく、普通に入れられました。その直後からみたいです、混んで大変になったのは。」

▶**智之さん**「12日の午後には電気復活したんですが、TVでは津波の映像と同じCMばかりで、やはり子供たちは飽きていましたね。月曜（14日）からは通常通

り保育園に通っていましたよ。千葉に住む妹から『大丈夫？』って連絡来てましたけど、向こうの方が苦労したんじゃないかなあ。同じく千葉に住む兄は、会社の人を車で送っていた後に大渋滞に巻き込まれて大変だったみたいです。」

**Qその後、心境や生活の変化はありましたか？**

▶**智之さん**「避難グッズというか、緊急時に持ち出すもの（食料）をバッグにまとめました。中身は、なぜか海外のお菓子と水と米。」

▶**光穂子さん**「何かあった時の避難場所を近くの中学校って決めて…。あと、おばあちゃんは災害用伝言ダイヤルをメモしてたよね？」

▶**智之さん**「子供たちは保育園で避難訓練してたみたい。あと、地震ごっこやったりしてましたよ。『地震が来ました』って言うたら、すぐに防災頭巾を被るっていう…。」

**Q10年後はどうしているでしょう？**

▶**光穂子さん**「皆で一緒にフジロック行けたらいいねえ。」

▶**智之さん**「そだね。フジじゃなくても県外のフェスにみんなで行ってみたいね。」

▶**実苗ちゃん**「お医者さんになりた〜い。でも、変わるかもしれない〜。」

▶**光穂子さん**「まあ、まだその頃は高校生だしね。」

▶**奏美ちゃん**「10年後のことなんてわかんないよ。マンガ家になるっていうのは、もうやめたもん。なんでもいいよ！」**終**

【編集後記】今回登場いただいた小野家の4人は、みんな音楽が大好き。パパとママが結ばれるきっかけとなったのも“音楽”と言って過言ではないでしょう。そんな2人にとって、毎年夏に開催されている、国内最大規模の屋外音楽イベント「フジロック・フェスティバル」は、特別な思い出がある大切なフェス。撮影時は走り回って一瞬たりとも静止していなかった子供たちも、将来何の心配もなくフジロックを楽しめることを“なるみさん”は祈っておりますよ。～なるみしう

寄付総額：¥2,915,651(2011年6月～2014年12月31日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**広太さん**「当時は青森市内の葬儀場の館長をしていて、その日葬儀の予定がありました。お客さんを待っているときに震災が起こり、外に出たら、車もみんな止まっていて、供花のスタンドがすごく揺れて、押さえるのに大変でした。その後はお客さんとも会社とも連絡がつかなくて。だんだん暗くなってきて、近所の人がロウソクを分けてほしいと訪ねて来んです。自己判断でお分けしたら、『あんた神様じゃ』って。その後、お客さんも来て、お寺さんも来て、電気がつかないのでロウソクをたくさん点けて葬儀をしました。」

▶**あゆみさん**「私はアパートに1人でいました。地震が起きてすぐ、まだ揺れている最中に広太さんに電話をして、つながった状態で10分ぐらい話せたんですけど、その後、もう1度かけなおしたら全然つながなくて。発生から1時間後ぐらいにお義母さんから『うちに来ない?』と電話がきて、甘えさせてもらいました。お義母さんとお義兄さんが一緒に迎えに来てくれて、車のテレビで、八戸の津波の状況などを見ました。『こんなにひどいんだ』って。広太さんは21時過ぎに帰ってきました。義理の実家が近くて本当によかった。そうでなければ広太さんが帰ってくるまで1人で待つのはしんどかったと思う。自分の実家は十和田だし。もし当時子どもがいたら、パニックになっていたそう。」

**Q震災を経て、変化はありましたか？**

▶**あゆみさん**「避難場所は確認したよね。市民センターにいるからって。」

▶**広太さん**「そうだった? (笑)」

▶**あゆみさん**「それか近所のスーパーの駐車場にいるから、何かあって連絡がとれなくなったらそこに迎えに来てねって…憶えてないみたい (笑) 防災グッズもそろえて、リュックに入れておいたんだけど、年月がたつにつれて片付けちゃったな…。あと、隣近所の人と仲良くなろうと思いました (笑)。義理の実家とも携帯が繋がらなきゃ連絡がとれなかったわけだし、何かあったときに頼る人がいないと。テレビの子育て番組などで、災害に対する備えの内容の回など、前は全然興味なかったけど、震災後はそういうのも意識して見るようになりました。情報を得ておかないと思って。」

▶**広太さん**「節電もすごく意識するようになったよね。それは習慣になって続いています。」

▶**あゆみさん**「福島市に友達がいて、震災の年の7月に現地で結婚式を挙げたんです。私は親友だったし、友人代表だったので行きましたが、原発事故の放射

線が気になるからと、結婚式に出席しない人もいました。福島はすごく敬遠されていて、それがショックで。だから原発をなくしてほしいと、節電をして、少しでも使い過ぎをなくそうと。」

**Q心情的な面では？**

▶**あゆみさん**「いつ何が起きるか分からないので、朝の『いってらっしゃい』で最後になるって毎日覚悟して、お見送りをしようって。震災前は、バタバタしてお見送りをしない日もあったよね。」

▶**広太さん**「本当にそれきりにならないように、1日1日ちゃんと生きようっていうのはあります。子どもができてからより思うよね。」

**Q10年後はどうなっていると思いますか？**

▶**あゆみさん**「子どもがもう1人生まれて、1軒家に住んでたらいいな (笑)。平凡な幸せでいいので、家族みんな健康で生きたい。」

▶**広太さん**「個人的な夢は、コーヒーが好きで、昨夏から講座に通って勉強していて、将来カフェとかやれたらいいなと。青森から何か発信できるような、青森の人が集まれるような場所を作りたい。」

▶**あゆみさん**「自宅で開業が夢なんですよ。」

▶**広太さん**「震災に関しても忘れないのが1番だね。(愛那ちゃんを見て) 知らない世代がもういるわけだし。いつでも自分の身には起こるんだと、ちびちゃんにも伝えられたら。」終

【編集後記】広太さんとあゆみさんは、震災のあった2011年の10月に挙式されました。青い海公園はウエディングフォトの野外ロケをした思い出の場所。取材当日は1歳4カ月の愛那ちゃんと一緒に訪れました。あのころ、「夫婦」になったばかりの二人が、子どもが生まれて「家族」になる。その子が成長して一。時間の経過を感じさせられます。「あの日」は少しずつ遠くなるけれど、「あの日、どうしてたっけ」と思い出す＝忘れない。tovo plusはその力を持っています。～前田ふひと

寄付総額：¥3,004,713(2011年6月～2015年2月28日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶千鶴さん「覚えています。コンビニの駐車場から車を出そうとした時に地震に遭いました。お店を開ける予定だったけど、まわりの人の慌てた様子や消えた信号機を見て、これはちょっとヤバいかも、と思って保育園に娘を迎えに行きました。

当時、りりこはまだ1歳にもなってなかったけど、保育園はしっかり対応してくれて安心しました。それから店に来て火の元の安全確認をしました。」

## Qその日の夜は？

▶千鶴さん「娘と2人、同時に熱を出しました(笑)けっこう高熱で、病院で点滴をしてもらって。病院の中は普段どおりで落ち着いていました。家に食べものやガスコンロの備えはあったので、意外と危機感はなかったですね。いつか復旧するだろうな〜くらいで、どこか人ごとみたいだったかなあ…。それよりも早くお店を開けないと、動かないと、という気持ちが強かったです。」

## Qお店はすぐに営業したんですか？

▶千鶴さん「電気が復旧してすぐに再開しました。1人で暮らしている友達も多かったので、みんな不安だろうし、誰かと集まりたいだろうと思って店を開きました。

仕入れも出来なくて出せるものが全然なかったけど、それは自分もわかっていたし、来る人もわかっていました。カフェに来たいというよりは情報交換だったり、集う場所を求めて来てくださる方が多かったですね。何も飲み食いしなくても、どうだった？大丈夫？みたいな感じで。」

## Q心境や生活の変化はありましたか？

▶千鶴さん「食べ物に対する気持ちが変わりました。自分がやってることの意味を考えて、ただ漠然とお店をやるんじゃなくて、どうせやるなら何かもっと意味のあることをやりたいと思うようになりましたね。

それまでは、例えば材料についても特にこだわりがなくて、出来たもののおいしければ課程はあまり気にしてなかったんですが、地域にはどういう食材があるとか、アレルギーについて、子どもたちの食べるもの…今はそういうことに目を向けられるようになったと思います。

今やらせてもらっている「おかずとおかし」料理教室は、卵、乳製品、小麦、砂糖を使わずに「子どもも大人も、アレルギーがあってもなくてもみんながおいしく食

べられる」がテーマの教室なんです。もともと洋菓子の世界から入ったので、卵、バター、乳製品…必ず使わないといけないように思っていたんですが、それらを使わなくともおいしいものは作れるんだという考えに変わりました。

これからはもっと自分から動いて、柔軟にやっていきたい。震災後に考えたことは今に繋がっていますね。」

## Q10年後のイメージは？

▶千鶴さん「やっぱり子どもが中心なので、10年後、14歳になった娘が健やかにいてくれたらいいな。色んなところに一緒に行って、一緒に見て、可能性を広げてあげたいですね。私は、今の考えていることを確立した自分でいたいです。」

▶りりこちゃん「ママのお手伝いがしたい!」

▶千鶴さん「お手伝いが好きなんです。お店をやめることになってこれから色々な変化があると思うけど、にこにこしながら楽しいことを娘と一緒にやっていきたいと思います。」終

【編集後記】今号No.037の撮影とインタビュー担当者:工藤文昭

2015年2月末日、9年間に及ぶ営業を終えたカフェ Zilch。最終営業日の閉店後、店主の千鶴さん、りりこちゃん親子に取材をさせて頂きました。店内はお客さんから贈られた花で溢れ、この場所がたくさんの人に愛されていたことがわかります。今後はお菓子教室を中心に、今までと違った形で活動したいと話す千鶴さん。お店を閉めるのは次のステップへの準備だったんですね。Zilchの今後に注目です。

寄付総額:¥3,004,713(2011年6月〜2015年2月28日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**実穂さん**「大阪で大学のゼミでの講演の仕事があって、その帰りの車中でした。ゆ〜らゆ〜らと目眩みたいな感じでゆっくり揺れて、なんか疲れてるのかなあと思いました。ちょっと近所のNPO法人の事務所に寄ったんですね。その事務所のTVで初めて大変なことになってると知りました。私は性暴力被害者の支援をしているので、家に帰ってすぐに、避難先で性暴力被害が起きないように10項目にわたっての要望書をまとめて国や行政に即日提出しました。1995年の阪神・淡路大震災の時に避難所での性暴力被害があったんですね。そういうことが東北で再び起きないようにと願い、その日から東北の支援を続けました。」

▶**翔子さん**「私は東京で電話相談の仕事に行く途中の地下鉄丸ノ内線の中でした。電車がゆりかごみたいに揺れたんですよ。すぐに電車が止まったんですけど、電車の中で、このままここで埋まったらどうしようとかいろいろ考えましたね。同じ車両に乗っている人たちが、各々パニックにならないように自制している空気感は印象に残っています。しばらくして電車が最寄りの駅まで移動して停車しました。そこから地上に出て、職場に電話すると、家に戻ってもいいということになったので、3〜4駅を歩いて家に戻りました。途中、青森の母親のことが気になったんですが、携帯電話が繋がらなくて、並んで公衆電話から電話したんですけど、母親は停電で状況が全くつかめていない状態で、その時点で知り得た情報を説明しました。ビルのガラスが落ちてきたら危ないと思って、どこ歩いたらいいんだろう？なんて考えながら歩いてましたね。みんなが静かに移動してたのが印象的でしたね。」

## Qその夜はどうしていました？

▶**実穂さん**「ちょうど支援系の仕事をしていたので、これから起きるであろういろんなことが頭を駆け巡って、さあ準備だ！っていう感じで、スタートになった夜ですね。」

▶**翔子さん**「私たちは全国にネットワークがありますから、被災地の誰々さんに電話して状況を聞いてみようとかありました。と同時に、私たち支援をする側も個人として困難な状況というのを各々抱えていて、それが平行線で続いていくような感じでしたね。」

## Q心境や生活の変化はありましたか？

▶**実穂さん**「311以前は何の疑いもなく信じていたものが、本当はそうじゃないんだなと気がつきました。だいぶ変わったなあ。」

▶**翔子さん**「とにかく自分で考えなきゃいけないんだということを突きつけられた出来事でした。行政にセクシャルマイノリティについての要望書を出したんですけど、この災害時にセクシャルティの問題は2の次だとか、余計なことをするなっていうことも言われたりしましたね。」

▶**実穂さん**「そう、いろいろ言われたりもしたけど、結果的にはセクシャルマイノリティの報告書がたくさん出たし、東北で1番変わったのは、セクシャルマイノリティに関しての団体が倍増したこと。隠れていたら、自分たちは何にもなくなってしまうと気がついたんだと思う。避難場所が別になるとか、仮設住宅に住めないとか、ホルモン治療や、HIVのポジティブの人たちも薬がストップしてしまったり、今までやってきたことが全くできなくなってしまう。しかも、それを言えないという状況だったんですね。みんな各々が本名を知らなかったりして、安否の確認も難しかった。様々な不都合、しかも生死に関わることがあって、その中で繋がらないとダメだということになってきたんだと思います。」

▶**翔子さん**「日頃どういう繋がりを持つか。互助というかさ、少なくとも何人かの人には自分の本名であるとか、普段いる場所であるとか、そういうのを告げていないとマズイなことになってきたんだと思う。有事に私たちは何をすべきかというのを危機感を持って考え、行動をするきっかけになったと思います。」

▶**実穂さん**「去年(2014年)、私たちは、青森市役所に婚姻届を出して、もちろん、断られたんですけど、それも、自然な流れだったと思います。」

▶**翔子さん**「生死に関わる状況になると、例えば病院とかで、必ず『家族は?』というのが出てくるんですよ。大変な時に『家族とは?』がどのように認知されているかで、いろいろなことが変わってくると思いますね。」

## Q10年後のイメージは？

▶**実穂さん**「子どもができてるかもしれないね。小学校入学くらいとか?」

▶**翔子さん**「今でも十分家族だけけど、子どもを持つという選択をしているかもしれないですね。血縁はないけれども、家族と呼べる人たちと繋がりをもって、そこで老後を迎える準備を始められてたらいいな。」

▶**実穂さん**「あと、私たちでこの駅前銀座をサンフラ



ンシスコのカストロ地区みたいになりたいよね、日本のカストロ（笑）。tovoさんのショップとかあったり（笑）。」**終**

STAFF  
VOICEt  
o  
v  
o  
p  
l  
u  
s  
100号を終えて

／工藤文昭



【編集後記】今号No.038の撮影とインタビュー担当者：小山田和正

2012年秋、僕は陸奥新報さんの取材を受け、その時はまだ7号しか出ていなかったこのフリーペーパー「tovo plus」について話した。紙面には、「『どんな家族にも平等に震災はあった。』と、ひとり親や同性愛者などの家庭にも目を向けるつもりだ。…」と記載された。僕のその思いは38号になっても変わらない。あの日以降、僕たちに突きつけられたのは「家族とは？」だと思うし、それは、所謂「家族」には収まりきらないくらい多種多様であった。そして、その問いは、そのまま片親、或いは両親を失った子どもたちの「家族」にもつながっていくことだと考えている。

寄付総額：¥3,133,241(2011年6月～2015年4月30日まで)

tovo plusを通してたくさんの家族に出会い、話を聞くことができました。同じ質問をしても返ってくる答えはさまざまで、100家族には100通りの暮らしがあるのだと強く感じます。後半の号になると2011年とは家族の形が違ったり、当時は生まれていなかった子供がいたり、時間の経過というものも感じるようになりました。トヴォが活動のゴールと定めた「震災から10年」まで、いよいよ残り1年を切りました。活動を振り返ってみると、長かったようでもあり、あっという間だったような気がします。確かなことは、10年前の自分に今の自分はイメージできなかったということです。震災があり、毎年のように豪雨災害があり、なにより今、新型コロナウイルスが猛威を振るい、私たちの暮らしが脅かされています。10年の間にこんなことが起きるなんて、誰にも予想することはできなかつ

たと思います。そしてこの先の10年も同じように、世の中で起きる出来事は、きっと私たちの想像を超えてゆくことでしょう。インタビューをしていると「震災を経て物事の価値観が変わった」という方がおられます。今、新型コロナウイルスによってあの時と同じように価値観が変わり、暮らしが変わる、その変わり目に立っているような気がします。もしかしたら、この先の新しい暮らしの中で、新しい価値観を持ってtovo plusを読んだ時には、何か今と違う新しい発見があるかもしれない、そんなふうに思っています。たまに読んでみましょう。1年後、5年後、そして10年後が、どんな世の中になっているのかは誰にもわかりませんが、取材したご家族それぞれが語ってくれた「10年後のイメージ」が、それぞれの暮らしの中で実現していることを切に願っています。**終**



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**良江さん**「お互い職場でしたね。私は市役所勤めで、避難所になる体育館の手配なんかをばたばたやって。そして実は旦那が六ヶ所に勤めてるんです。再処理の担当なんだけど、やっぱり大変だったみたい。」

▶**智史さん**「停電で真っ暗になった中、異常がないかの点検をしましたね。電車通勤なので帰る手段もなかったし、重要な作業だったしでなかなか帰れませんでした。そのうち非常用発電に切り替わって、テレビで宮城とかの津波の様子がわかったんですが、本当に日本で起きてるのかって信じられませんでした。」

▶**良江さん**「実家が駅前の寿司屋で、私は近くのアパートに住んでいました。その日の夜は、もちろん実家で家族と過ごしました。ご飯はとにかくナマモノと酢飯の処理！結果的に海鮮丼になって、豪勢だなんて思われるかもですが…、ほんとそれしかなくて(笑)」

**Q心境や生活の変化はありましたか？**

▶**良江さん**「気持ち的に震災後の方が辛かったんです。日々メディアから入ってくる情報に負けてパニックになって。家族や家を失ったとか重い言葉が押し寄せてくるのに、そのうちのテレビに映る場面しか自分は把握できてないという、なんだろう、根拠の持てない感じが耐えられなかった。義援金を募る番組やイベントも、この人たちは本当に現地の状況をちゃんとわかってるのかなとか、お金だけ集めて、『はい、いくら送りました。おしまい』っていうのもどうなのかな？とか、人間不信みたいな感じにもなっていました(笑)市役所で順番に現地へボランティアしに行けることになって、その時の精神的な辛さとか、自分の目でちゃんと見てきたいっていうのを話したら、順番を優先してもらえたんです。それで一週間、看護師さんの手伝いなどをしてきました。現地は津波の被害にあった区域と、そうでない区域が信じられないくらいきれいに分かれてたし、あらゆるところで葬儀があって、ボーリング場に遺体がたくさん安置されて。現実と非現実が一緒なかんじ。そういった光景は悲しかったし、怖かったけど、自分の目で見たことだから現状として、しっかり受けとめられて、思ったよりも落ち着いた気持ちでいられました。早くこの人たちの家族が見つかるればいいなって。あとは旦那の仕事に関してですね。六ヶ所はマニュアルが厳しくしっかりしてるんですが、それでもあることないこと言われて。旦那さんのお仕事は？って聞かれて、ああ、答えづらいなあって。サラリーマンですって。私、バンドをやっていて、バンド仲間にも原発関係の仕事してる人っているんですけど、原発反対ライブとか声がかかって出られないって。自分の仕事を人に言えない。ただ会社に勤めてるだけなのに。原発が

良いか悪いかなんて言えないですけど、勤めてる人達は何も悪くないのになあって思います。」

**Q感受性が強いんですね。他に変わったことはありましたか？**

▶**良江さん**「震度の小さい揺れがあっただけでも思っ出してパニックになりかけたりします。職場で他の人はフツーに仕事してるんですよね。震度3〜4くらいの揺れで、あー地震だ、って。それが信じられなくて、でも周りはこのくらい大丈夫とか言うんですよ(笑)だって逃げなきゃ死ぬよ！？って思うんですけどね。どうしてそんなに余裕なんだろう、怖さがわからないだろうってちょっと思ったりもして。という悩みを旦那に相談したら、あんまり人に話さない方がいいよ、頭おかしいって思われるよ、って…(笑)何があってもおかしくないんだって思ってる人の方がうまくやれてる気がします。被災した側の人とは、前よりももっと仲良くなりました。以前からの付き合いであんまり交流する機会がなかった人とも頻繁に連絡取り合うようになって、1年に1回会おう！みたいな(笑)すごくうれしい。」

**Q10年後のイメージは？**

▶**良江さん**「家族で、1日1日大事に生きたい。息子には何かあったときに人に優しくできる人間になってほしいと思います。皆に可愛がられてるからきっと大丈夫だな、力もちだし(笑)災害とかあっても、自分のことはいいから行けー！みたいな自己犠牲じゃなく、自分も生きるんだって気持ちを持ってほしい。それから、関東の方に避難して行ったバンド仲間とも集まって、またライブするのが夢ですね！」**終**

【編集後記】今号 No.039の撮影とインタビュー担当者：坂本小雪

取材をお願いする際、3月11日の時のエピソード、気楽なかんじで構わないので覚えてること聞かせてくださいとお願いしました。私もなるべく気楽なかんじでお話するようにいつも意識していたんですが、被災地の人々の気持ちを人一倍感じられる良江さん、実は…と仕事についてお話してくれた智史さん。今、3月11日の日がとても濃密に思い出されている！そう感じて、もう気楽さも出されたコーヒを飲むのも忘れてメモ帳にことばを書きつけてました(笑)

寄付総額：¥3,133,241(2011年6月～2015年4月30日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**暁人さん**「当時は、『古川食堂(注：ふるかわしよくどう。通称ふるしよく。仲の良い数店の飲食店が一つの店舗内で営業していたフードコートのような楽しいお店が、その名の通り青森市古川にあった。2012年12月閉店。)』と、移転前の『もぐらや』をやっていたのですが、その日の晩は10名様様の予約が入っていた為、買い出しに出ていたんですよ。その出先で揺れを感じました。翌日からはソロでの東北ツアーが控えていたんで、携帯電話の充電用にeneloopも買ってたんです。これが役に立ちました。」

▶**明香さん**「私は、成田本店のPaxで仕事だったんですが、地下だったせいかあまり揺れは感じませんでした。2人いたお客さんを地上へと避難させたところで停電。各階のお客さんもみんな避難してもらい、16時にはスタッフも帰ることになり、私は古食へと向かいました。」

▶**暁人さん**「『古川食堂』には、お店のメンバーや数名のお客さんも集まってきました。さびしかったんでしょうね。店には反射式のストーブがありましたんで、皆で鍋をやりました。厨房のガス台も使えたんで、懐中電灯で照らしながら串焼きも。その夜は、あのeneloopのおかげで、誰も充電切れを起こしませんでした。ただ、電話を使えたとしても、僕はツアー先の人とは誰とも連絡取れなくて…。1週間後でしたね、連絡取れたのは。その時に『一緒にまたやろう』って言った相手と、先日、『もぐらや』でライブやっただんです。感慨深かったですね。」

▶**明香さん**「当時住んでいた家は古かったんで、すぐに『家、大丈夫？』って電話したの思い出しました。結局、そんな大きな被害はなかったんですけど、本棚から落ちた本がちょうど猫のトイレに…よりによって。翌日はいつもよりも30分早く職場に行って、懐中電灯を持って準備しました。八戸の店舗は大変だったようですが、うちはそんなに…。昼前には電気が戻ったこともあり、午後から開店。通常通り19時30分まで営業していました。そんなにお客さんは来ませんでしたけども。」

▶**暁人さん**「その翌日(3月13日)には、『古川食堂』も開けたんですけど、やっぱりお客さんはほとんど来ませんでしたね。その頃は流通が滞っていて、仕入れが大変でした。」

## Q心境や生活の変化はありましたか？

▶**暁人さん**「震災は、まだ子供が出来る前でしたが、もし、その時に子供がいたら『守らなきゃ』って大変だったろうな。今は自分のことよりも先に考えるもの、守るものが増えたので、いざという時にすぐ動けるよ

うに気を張っています。最近何度か小さな揺れがあった時、すぐに子供をギュッと抱いて安心させましたが、ゆくゆくは子供達に災害の怖さも教えていかなきゃなとも思っています。」

▶**明香さん**「震災の後、何日か、いつでもすぐに逃げられるように普段着のまま寝てたりしたよね。」

▶**暁人さん**「震災関連のドキュメント番組など見る機会が増えましたが、子供のことを考えると気になってしまう情報も多くて…。どこまで情報を信じて良いのか、取り入れれば良いのか…。自分で調べるのも限界があるし…。心配事が増えましたね。」

## Q10年後のイメージは？

▶**暁人さん**「このまま普通に平凡な幸せが続いていればイイなと。悠歩は、今はよくパン屋さんごっこしているけど、その頃は何になりたいって言うてるかな？」

▶**明香さん**「続いていればイイですね、成田本店もPaxも。その頃CD業界はどうなっていることか…。」

▶**暁人さん**「『もぐらや』のカウンターは黒光りして丸みを帯びて…。子供、3人目が増えているかも。4人目！？とにかく、子供たちのためにも10年後は心配事が減っていれば良いですね。何も気にせず出歩けたり食べれたりできていればいいな。」終

【編集後記】今号No.040の撮影とインタビュー担当者：なるみしう

ご存じの方も多いと思いますが、熊谷くんはバンド「うきぐも(<http://www.geocities.jp/ukigumopage/>)」の歌とギターを担当しております。聴くと、とってもほっこりします。また、ヤキトリマンと一緒に「もぐらや」(<http://www.moguraya.net/>)も経営されております。行くと、とってもほっこりします。どちらにも彼特有の空気が感じられます。そして、奥さんの明香ちゃん、娘の悠歩ちゃん、息子の陽太くん、家猫のネコさんからも似たようなものを感じました。もぐらやで瓶ビールをちびちびやりながら、私はそうほっこりしたのであります。

寄付総額：¥3,305,321(2011年6月～2015年6月30日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**健司さん**「仕事で外回りの最中、書店に立ち寄っていました。棚から本が落ちてきて、店内にいた人は店員の声掛けでみんな外に逃げて。車で自宅に帰るとき、信号が消えていることで停電に気付いた。自宅はどうなったかなと心配したけど、食器棚もそのまま、なんともなくて（笑）。当時高校生の娘2人は怖がってたね。電車が止まって、学校まで迎えに行ったような気がする。」

▶**キクエさん**「健司と2世帯住宅の自宅に1人でいました。主人が2月末に亡くなったばかりで、冬だったのでまだ納骨してなくて。地震で、お骨と遺影が落ちないよう祭壇から降ろして、自分は外に逃げたの。」

▶**博美さん**「私は職場。揺れてすぐ停電になり、非常用電源がついて。職場の分室が弘前と八戸にあるんですが、電話は通じずメールもできず、安否確認ができなくて、多少混乱がありました。実家とは、弟と一度メールのやり取りができて、無事と分かった。自分は飼っている猫が心配で、自宅マンションに帰りましたが、10階なので階段で…。猫もおびえて、私の顔を見たら安心したみたい。電源がないので暖房をつけられなくて、でも、実家は薪ストーブだから全然苦労がなかったんですよ。実家に行こうかなと思ったけど、猫のことがあったから我慢して、猫を抱いて寝ました（笑）。」

**Q 次の日はどうでした？**

▶**博美さん**「仕事で、県外からお客さんが来る予定だったんです。一応約束は約束だから職場に行きました。でも電話も通じず、結局誰も来られなかった。」

▶**健司さん**「次の日は父の法要で、まだ停電していたのに、仕出し屋さんがちゃんと注文していたお膳を持ってきてくれて、感心した記憶がある（笑）。」

▶**キクエさん**「親戚も地震の被害はあまりなかったの、ちゃんと集まってくれて。」

**Q 震災後、それまでの生活とは変わったことはありましたか？**

▶**キクエさん**「必要なものをまとめて、非常用のリュックをつくりました。水道が止まったりしたらダメだと思って、いままペットボトルに水を入れてとっておいています。時々入れ替えています。」

▶**健司さん**「水が古くなったら、畑にまいてね（笑）。家族と何か話したんだろうけど、もう忘れてしまってるね。」

▶**キクエさん**「もし、ああいう地震が来て、津波が来たらどこに逃げようかとは話したよ。」

▶**健司さん**「そうだ。山（農園）に来ようってことになったね（笑）」

▶**博美さん**「その前に渋滞に巻き込まれちゃうよねって（笑）」

▶**健司さん**「山が月見野だったら近かったのにとか（笑）」

▶**博美さん**「結論が出ないまでも、『どこに逃げようか』っていう話はしたね。そのときはやはりショックを受けて、人間なんて、大自然の前では、はかないものになって。だから自然に抵抗するのではなくて受け入れて、何があってもいいようにところに身を置くというか、たとえば川のそばに住まないとか（笑）、そういう都市づくりをしていかなければいけないんじゃないのって考えました。自宅は高い階だから大丈夫だろうけど、海の近くで、過去には高潮の被害があったこともあってね。どこも安全ということはないだろうけど。職場があるビルは、年に2回避難訓練をしているので、いざというときはそれが役に立つかも。」

▶**キクエさん**「いつ何があるか分からないということは、いつも頭に入れてる。」

▶**博美さん**「最近火山の話題などもあるし。地震がくるたびにちょっと思い出して、備えておかなければいけないと思う。」

**Q 10年後のイメージは？**

▶**キクエさん**「私はもう生きてない（笑）。生きていても、ヨボヨボしているかも（笑）」

▶**博美さん**「ヨボヨボしてても山に来て、こうやってるんじゃない？ 母は山に来ると、人一倍歩くの速いし。作業も早くて、だれも追いつけない。」

▶**健司さん**「10年後…さほど変わってないと思うけどね、状況は。（農園で栽培している）カシスで大儲けしてるとか？（全員笑）」

▶**博美さん**「私はたぶんもう職場はリタイヤして、この農園で悠々自適に過ごしていると思います。」

▶**健司さん**「毎日来れるよ（笑）」**終**

【編集後記】今号No.041の撮影とインタビュー担当者：前田ふひと  
青森市の小牧野遺跡近くにある「はやし農園」は、お父様から受け継いだ健司さんが本業を持ちながら管理しています。別に暮らす博美さんも、週末は農園でリフレッシュするのだとか。何かあったときの避難場所に「山」があがるなど、ここは家族を結び、集う場所なのですね。同市特産のカシスを栽培しており、取材にお伺いした日は収穫の最盛期でした。

寄付総額：¥3,305,321(2011年6月～2015年6月30日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**藍至さん**「取材先で車に乗っている時に地震が起きました。信号が消えているのを見て、とりあえず会社に戻ることに。それからすぐに会社の人と手分けして市内の様子を見に行きました。市内は停電してバタバタとした感じはあったけど、交差点では自発的に交通整理をする人がいたりして、非常時の混乱の中にも『弘前はなんとかかなりそう、大丈夫』という感覚が自分の中で生まれたように思います。会社に戻ると非常用電源で電気が復旧していて、その時、一番に飛び込んできたのが津波の映像。『なんとかなるだろう』って感覚が吹き飛びました。想像を越えることが今起きているんだと知りました。その日は社員総出で情報収集をしたのに、結局、輪転機が回せずに新聞が刷れなくて、非常事態だからこそ新聞を刷らなきゃだめだろうと思っていたのに、それが出来なくて悔しい思いでした。自分にとってはそういう意味でも忘れられない震災当日でしたね。」

▶**優子さん**「当時は結婚する前で、私は八戸に住んでいて、地震があった時は三沢の職場にいました。地震がきて、とにかく避難！ということで会社のみんなと外に出ました。直後はケータイが通じたので藍至さんと家族に、とりあえず無事だよって連絡して。職場は工場なので社員みんなで安全確認をして、それから八戸に帰ることに。通勤で使っている道路が通行止めになっていて、停電で暗い中ずいぶん時間をかけて自宅まで帰りました。停電の備えもなくて困っていたら先輩からの電話がたまたま繋がって、うちにおいでよと言ってくれました。結局電気が復旧するまでの2日間、先輩のおうちにお世話になりました。」

**Q地震のあとで心境や生活の変化はありますか？**

▶**優子さん**「地震の直後は工場を動かす燃料がないから仕事が出来なくて、はじめのうちは会社に行って出来ることをやっていたけど、途中からは自宅待機になってしまっ。そんな日が何日も続くと、これからどうなるんだろう…って、すごく不安でした。生活が元通りになるまでには1ヶ月くらいかかりました。習慣としては懐中電灯を玄関に置いて、食べるものを備蓄するようになりました。それは今でも続けています。」

あとは時間の使い方かな…。今までは自分のやりたいことでも、時間がないとか仕事があるからとか、言い訳をして後回しにしていたものもあったけど、やっぱりやりたいことはやった方がいいんだと思うようになりました。地震の時家族が近くにいないくて不安だったことも、もしかしたら結婚するきっかけの1つになったかな。」

▶**藍至さん**「生活自体にあまり変化はないけど、以前と比べてお金の使い方を意識するようになりました。何かを買う時、お金を払う時に、そのお金はどこに行くんだろう？と考えるようになりましたね。」

**Q自身でもイベントを主催し、売上の一部をトヴォに寄付して頂いていますか？**

▶**藍至さん**「震災直後は色んな団体が被災地への寄付を募ったり、復興支援と名のつくイベントも多かった。『寄付行為』って、それ自体はやっぱハードルが高いことだし、慈善団体に直接お金を寄付するというのは、誰にでも出来ることじゃないと思います。一方でトヴォのグッズがかわいいから買って、実は払ったそのお金は被災地に行くんだよ、というふうに考えるとずいぶん親しみやすい。トヴォは寄付行為を身近にしてくれる存在だと思います。震災の風化ということもずいぶん前から叫ばれているけど、少なくとも自分はトヴォのことを知っているから、おのずと震災について考える機会を持てている。『身近な寄付』のポップアイコンとしてトヴォがもっと広がって欲しいと思うし、自分みたいにトヴォを通じて、震災を頭に留めておく人が増えてくれればと思っています。」

**Q10年後のイメージは？**

▶**藍至さん**「子どもが出来ていればいいなと思います。子どもの歳とか、人数とかはわからないけど。10年後もまだ震災からの復興は途中段階だと思うので、報道に携わる立場としては『まだ何も終わっていない』という認識を持って報じていくことが大切だと感じています。」

▶**優子さん**「あまり想像はできないけど…。私も子どもがいればいいなって思う。地震のあと、少しずつ生活が元通りになっていく中で、スーパーに物があるありがたさとか、仕事ができる嬉しさとか、当たり前のことって大切なんだと気付きました。その気持ちをこれからも、10年後も、大切にしていきたいなと思います。」**終**

【編集後記】今号No.042の撮影とインタビュー担当者：工藤文昭  
新聞記者の藍至くん、3.11時は八戸に住んでいた優子さん。2人はずっと前から夫婦だったような気がして、『3.11の時はまだ結婚する前で…』と切り出された時はなんだかドキッとした。でも、よく考えたらもう4年半も前のことを聞いているんだ。4年半の間に家族の形が変わることも、当然あるよなあ…と、2人の思い出の場所でこけしを眺めながら、しみじみと時間の経過を感じました。

寄付総額：¥3,532,702(2011年6月～2015年8月30日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**秀さん**「鮮明に覚えています。当時は保育園の保育士をして、工作中でした。子どもたちが昼寝から起きるか起きないくらいの時間に地震が起きました。すぐにただの地震じゃないことが分かったので、職員が全員でドアや窓を開け、子どもたちの上に布団をガバッとかけて、地震の経過をみていました。テレビでは、八戸市のコンビニの津波の被害が流れていました。子どもたちは120人くらいいましたが、特に泣きわめくような子どももなく、ポカーンとしてた感じです。その後は、親御さんが、それぞれ迎えにきましたが、最後の子どもが帰宅したのは、午後7時くらいだったと思います。いつも妻に車で仕事場まで送ってもらってたんです。でも、その日は妻とは全く連絡がとれなくて、帰りは30分くらいかけて歩いて家に帰りました。」

▶**真実さん**「その頃、私は仕事をしていなくて、地震があった時には家にいました。普通の地震ではないと感じたので、心配になって、すぐに子どもたちを保育園へ迎えにいきました。子どもたちはみんな帰る準備をして、一箇所に集まっていて、みんな不安そうにしてましたね。夫には、いつもの迎えに行く時間に連絡してみたんですが、全く通じなかったんです。とりあえず車で迎えに行ってみたんですが、ちょうどすれ違いで、家に戻ったら帰ってきていました。ホッとしました(笑)ガスは使えたので、夕食は適当に作りましたが、灯りがなくて困りましたね。携帯のライトなんかを使ってみました。実家からロウソクをもらってきたと思います。暖房もなかったので、その日は、布団をかぶって早めに寝ました。」

## Q子どもたちは覚えていますか？

▶**秀さん**「さっき子どもたちに聞いてみたんです。下の子は記憶がないんですが、上の子は、地震の次の日に集会所に行ったことを覚えてました。近所の集会所には発電機があって、電気が使えたり、暖房も使えたので、そこに避難している方も多かったんです。集会所で他の家族の子どもたちとおもちゃで遊んだことをよく覚えていましたね。」

## Q地震のあとで心境や生活の変化はありますか？

▶**秀さん**「ロウソクと灯油ストーブは準備しています。」

▶**真実さん**「2人で、何かあった時に、家族がどこで合流するかという話をして決めましたね。」

▶**秀さん**「同じ日本、同じ東北、青森でも大きな被害があったにも関わらず、ライフラインが復旧するにつれて、正直、どこか遠くでの出来事のような感覚になっ

てきました。そんな中、母親が被災地支援に行くということになって、私も何度か陸前高田や大槌町へついていったんです。実際に被災地の被災状況を歩き、避難所で被災者の方々と話をしたりしました。そこで子ども向けのワークショップをしたんですよ。その時の子どもたちの会話がとても印象的で、この子たちはどんな大人になるんだろうと考えます。実際に被災地に行って、そこでの経験を通じて、東日本大震災が現実味を帯び、自分のこととして捉えるようになりました。学生時代は仙台で過ごしたので、仙台は第二の故郷なんですが、陸前高田市や大槌町は第三の故郷になりました。」

▶**真実さん**「私は震災を経験して、何が起こるか分からないんだなあと感じて、今を大事に生きなきゃいけないんだと感じました。家計的にとても厳しくて、それまでは、どこに出かけるにしても節約節約で、ケチケチしながら遊びに行ってたんです。でも、震災後は、どこかに出かけても、もしかしたら、この時間はもう二度と来ないかもしれない考えるようになって、子どもたちには、いろんな体験をさせたいとか、美味しいものを食べさせてあげようとか、その時にはお金はパッと使ってもイイやと考えるようになりました。楽しむ時には楽しもうと。あと、震災の時、ちょっとの時間ではあるんですが、夫と離れていたのが、私にはとても不安で、怖くて。夫が家に帰ってきた時には、本当に安心したんです。家族が揃っているのはイイなと思いました。いるだけで違うんだと。」

## Q10年後のイメージは？

▶**秀さん**「この震災を次の世代に伝えていく責務を感じています。今も地域の子育て支援活動をしてますが、この震災を通じて得た経験を生かした、次のステップの子育て支援活動というのを考え、実行していきたいと思います。」

▶**真実さん**「子どもたちはノビノビ育ってて、家族4人が元気でいたらイイですね。」

▶**輝くん**「うーん。仮面ライダーゴースト。」

▶**慧くん**「サッカーやっていたい。」終

【編集後記】今号No.043の撮影とインタビュー担当者：小山田和正

今号は、子育て支援を通じた地域づくりを続けている五所川原市の男性保育士グループ「PAPAHUG(パパはぐ)」の藤林さんご家族。岩木山をバックに、秋の夕焼けに染められて、どこまでも続く実る稲穂の中での撮影。ご家族のお話を聞きながら、時の流れは僕たちの記憶を遠く運んでいってしまうけれども、その時、うまく整理できなかった想いだけはずっと残っていて、それが一体何なのか？今だから言葉に表せることってあるんだと考えていました。

寄付総額：¥3,532,702(2011年6月～2015年8月30日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**麻子さん**「その日は笑寿の2歳の誕生日だったので…思い出深い日ですね〜。」

▶**高規さん**「これから誕生日ケーキを受け取りに行こうって時に、地震がきたんですね。それで取りに行けなくなっちゃったから、その日はケーキ無しに…（笑）」

▶**麻子さん**「電気はつかないけど、ガスと水道は問題がなかったので、その日の夜はホットケーキを焼いて何段も重ねて、チョコペンで“おたんじょうびおめでとう”を描いて。ろうそくを灯りにしてお祝いしましたね！停電の夜って暗いし、子どもにとって不安なイメージだと思うんですけど、笑寿にとっては、その日はろうそくつけてケーキを食べました！っていう、ただ誕生日のお祝いの雰囲気ウキウキな夜だったと思います（笑）本人は覚えてないかも…（笑）あとは寒いから、とにかく厚着を〜って笑寿モコモコでした（笑）」

でも冷静に…、動けるかは分からないですけど、当時より家族も増えましたし、とにかく、飢えはしのげるように備えようと思ってます。」

▶**麻子さん**「暖をとるために、厚着するって、やっぱり大事だなって感じました。暖房があっても、停電で使えなくなっちゃったりするし。子どもたちだけでなく、私たちも、服の素材というか、あったかく着られる、というのを意識しようと思いました。」

**Q10年後のイメージは？**

▶**麻子さん**「えーと…仲良く、いつも笑顔！かな？（笑）」

▶**高規さん**「だね。健康でつつましく…（笑）」

**Qご家族、増えますか？**

▶**高規さん**「いやー、もういいです（笑）」終

**Qその後のエピソードはありますか？**

▶**高規さん**「えーと。次の日になってまだ停電はなおってないし、仕事行かなくてもいいかな？と思ったんですが、昼には職場の電気が復旧したらしくて『来い』と言われ…（笑）やっぱり仕事が始まると気持ち的に、ああ、通常運転に戻ったって感じがしましたね。」

▶**麻子さん**「パパが仕事の間、私は家族と一緒に家にいて、いつ電気が戻るか分からないから、明るいうちに、とりあえず買い出しに行こうって、みんなでスーパーに買い出しに行きましたね。商品棚はガラガラだったけど…。とりあえずインスタントとか残ってるものを買いました。買い物の途中で電気が戻ったみたいで、帰ったら電気がついてるー！って。」

▶**高規さん**「ケーキをお願いしてた店も電気が復旧したようで、無事にケーキをゲットして帰ってきて、その日の夜に、またお祝いしましたね（笑）」

▶**麻子さん**「2日連続でお祝い！（笑）笑寿ウキウキでしたね〜。覚えてないだろうけど…（笑）」

**Q震災後、何か変わったことは？**

▶**高規さん**「月並みですけど、非常食のストックですね。」

▶**麻子さん**「パパが、もともとしてたんですね〜。」

▶**高規さん**「うん。食料のストックは今までもしていましたが、ストックのストックまで用意するようになりました。レトルトとかインスタントを多めにして…。水も怖いので買いだめしたり。まあ、この辺だと食べるものって、そうそう困らないと思うんですけどね。りんごは箱であるし（笑）気持ちとしては、何があっ

【編集後記】今号No.044の撮影とインタビュー担当者：坂本 小雪

寒空の下、親子おそろいのストールやママ手作りの帽子でおしゃれにあったかそうな木村さんご家族にご協力いただきました！高規さんはtovoの存在をご存知で、tovo plusに掲載される家族はどのようなルーツで選ばれているのか興味があったとのこと。まさか自分たちが載る日が来るとは〜と笑っておりました。そう、何を隠そう県内在住のいろんなご家族のお話がききたいtovo plusは、次はひょいっとあなたに取材のお願いを持ちかけるかもしれません。特別偉くもないしお店を営んだり栽培したりしてない我が家はフツーだし〜なんて言わずに、あなたのご家族と一緒に、あの日をちょっと思い出してみませんか。

寄付総額：¥3,795,179(2011年6月〜2015年10月31日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**由紀子さん**「私は、その時、おばあちゃん（由紀子さんの祖母。風羽ちゃんから見ると曾祖母）の家に行っていたんですよ。着いてすぐに地震が来て、おばあちゃんと2人で（揺れが）長いね、長いね、大丈夫かな、大きかったねって言ってました。すると、すぐに停電して…ラジオをつけてみたら、そのラジオの電池が消耗してて、おばあちゃん『わい、スミ（津軽弁で乾電池）ねえじゃ。』って言って、新しい電池探して交換して、聞いてみたら凄いことになってるよ、大きいみたいだよと…。それから、おばあちゃんの家には、電気を使わないストーブがなかったので、買いに行くことになったんですが、道路は停電で信号が消えて渋滞していました。交差点で一般の人が交通整理していたのを見て、こういう時に、みんな動けるんだな、凄いなあって思いましたね…。そしてお店に着いたんですが、既に閉まっていて、買えなかったんです。割と早く行ったんですけど、開いてなくて…。ストーブは私の家に使っていない小さいのがあったので、それを渡しました。風羽はその頃、保育園で待ってて…。」

▶**風羽ちゃん**「みんな帰ってるけど何人が遅くまで（お迎えを）待ってて、風羽も待ってた。」

▶**由紀子さん**「保育園の方が安全かなって思っ。迎えに行ったら他の子がほとんどいなくてね。迎えに来るんだべがって思ったでしょ？」

▶**風羽ちゃん**「うん。園長先生と一緒に体育館に行ったり、他の部屋でずっと本読んだりして待ってた。みんな怖がったりしてなかったよ。」

▶**由紀子さん**「風羽を連れて帰って、しばらく家にいたんですけど、入ってくる情報がどんどん大変なことになってきて…。」

## Qその後はどうされていましたか？

▶**由紀子さん**「その頃、妹が仙台に住んでいたんですが、地震から何時間も電話が通じなかったんですよ。しばらくしてから『じしんすごかったけどぶじでくるまのなかにいます』みたいな全部ひらがなのメールが来たんです。おそらく、一瞬携帯が繋がった時に、バババッと打ったんだと思います。後で聞いた話なんですけど、住んでいたアパートが半分崩れちゃったり、道には木や岩が転がっていたり、飼っていた猫3匹のうち1匹が地震のショックで死んじゃったりと大変だったみたいです。で、さらにその後、妹はお付き合いしている福島の方の所（相馬。福島第一原発からは40km強の位置）へ避難するんですよ。その直後です。原発が…。そんなこともあったり、食料とかもなくて、大変な時に相手の方のおうちにいつま

でもお世話になっているわけにもいきませんので、私と旦那で仙台の近くまで妹を迎えに行くことにしたんです。買えるだけの食料を買い込んで。うちの畑で採れたものとかも、車に積めるだけ積んで…。車は、ガソリン車ではなくて、軽油で走るものをおじさんから借りて行きました。予備の軽油も積んで。道中、緊急車両や自衛隊の車をたくさん見ましたね。仙台あたりの道はボコボコで…。途中のコンビニには商品がなんにもない状態で、店の前には買えなくて茫然と座り込んでいる人がいたので車の中にたくさん積んであった食料を分けたり、自衛隊の方にコーヒー差し入れしたり…。あの頃は、お互い知らない人同士でも団結力というか、一体感というか、そういったものが強く感じられましたね。残念ながら、その頃に比べて最近では、あまり感じられなくなってしまいが。」

## Q心境や生活の変化はありましたか？

▶**由紀子さん**「落ちやすいものを下に置いたりっていうのは自然にやりましたね。ガスコンロや反射式のストーブの利便性に気付いたり。非常時持ち出し袋は、最初の頃はすぐ持ち出せる所に置いてあったんですけど、袋が大きいのでどんどん奥の方に押されていってしまった感じになっちゃってますね。袋の中もそのまんまなんで、風羽の服は明らかにサイズが合わなくなってる…。あと、変わったと言えば、周囲に感じるがあります。募金などに興味のなかった人も募金するようになったり…心境の変化があったのかなと。」

## Q10年後のイメージは？

▶**由紀子さん**「10年後…え～！？風羽18歳！？」

▶**風羽ちゃん**「10年後もばあさん（曾おばあちゃん）元気でいてくれればいいなあ。」

▶**由紀子さん**「10年後もこのままだいなあ。みんな仲良かね。」終

【編集後記】今号No.045の撮影とインタビュー担当者：なるみしう  
今回お話を聞かせてくれた由紀ちゃん「Q」(<http://handmadeq.jugem.jp>)の屋号でアパレル製作をされており、撮影場所となった板柳町のアップルモールにて開催されるクラフトイベント『クラフト小径』をはじめ、各地のイベントに出展されております。実は、ここに収まりきらないくらい、たくさんのお話を聞かせてくださいました。前後編に分けてお伝えしたいほどに…。それをうまくまとめるのが私の役目なのですが、いやはや力不足、才能不足を痛感させられました。

寄付総額：¥3,795,179(2011年6月～2015年10月31日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**哲也さん**「下りの東北新幹線で仙台に向かっていて、福島駅に停車中に地震が起きたんだ。当時は札幌在住で、その日は打ち合わせイベントがあって、羽田経由で大宮に入り、次が仙台だったの。すごい揺れで、駅舎ごと倒れるかと思ったぐらい。車内は悲鳴だらけ。その後全員降車させられて、JRは『手に負えない、どうすることもできない』というばかり。電話はつながらないし、駅を出て目に入ったコンビニに向かったんだけど、自分は義足に半ズボンで、荷物を引いて歩いていて目立ったのか、手を貸してくれる人もいた。『近くの小学校が避難所になっている』と声をかけてくれた人がいて、一緒に行ったんだ。小学校にどんどん人が増えながらも状況がつかめないうちで、20時ぐらいかな、電気がついたの。自分がいた教室だけテレビがあって、それで事態が分かった。」

▶**ていさん**「私は家にいた。大きい地震だったよ。停電したので、その日はガスでご飯を炊いたと思う。うちは薪ストーブだったので、向かいの奥さんが暖をとりに来たりしたね。」

▶**忠司さん**「牛の競りで仲間と七戸の市場に行った帰りだった。みちのく有料道路を降りて、青森市沖館のフェリーふ頭の近くを走っていて、『地震だ』と思って、車を止めた。少しして大丈夫かなと思ってまた走り出して。」

▶**哲也さん**「自分がいた避難所に支援物資が届いたのは次の日かな。携帯もときどきつながるようになって、それで今別の実家にも電話した。余震がすごかったね。揺れるとみんなすぐ外に出ようとしてたけど、自分は疲れて義足を外して寝たりしていたから。避難所には新幹線に乗っていた人が多数いて、当初はJRがバス代行するという話があったけど、原発事故が起きてバスのやりくりがつかなくなり、それもなくなった。『車で迎えに行く』と言ってくれた友達もいたけど、ガソリンの問題があったりして。そうこうするうちに、航空会社にいる友達から、『福島空港が動く。札幌便が増便になる』と連絡が入り、避難所から乗り合いタクシーで空港に行き、飛行機で札幌に帰った。それが13日のこと。」

## Qその後、心境や生活に変化はありましたか？

▶**ていさん**「ここは海まで約2キロ、家の裏には川が流れてる。津波が来たり地震が来たりしたら、高台の道路に逃げようという話はしたね。」

▶**忠司さん**「町でも避難訓練や、水を配給する訓練をしたりしたよな。」

▶**哲也さん**「自分は避難所にいた2日間で、人生を振

り返れた。あの前月に40歳になったばかり。(哲也さんは元パラリンピック・アルペンスキー日本代表)自分は20代で長野、30代でソルトレイクに行って、40代でまた目標を持ってもいいかなと。津波で多くのものが流される映像を見て、もう一度何かにチャレンジしようと思った。もともとトレーニングで乗っていた自転車で、本格的にレースに出て、その年に日本パラサイクリング選手権で優勝、アジアオセアニア選手権で日本新記録を出し、2012年2月のUCIパラサイクリング世界選手権口サンゼルス大会に日本代表として出場した。『そろそろ今別に帰ろうかな』と思ったのもそのころ。祖父の代からの牛の繁殖農家を継ぎたくて、19歳で交通事故で右足を失ったときは、牛の世話なんてできるわけもないし、やらないうちで、いろいろな活動を経て自信がつき、『そろそろ帰って牛をやるかな』と思えたんだ。」

## Q10年後のイメージは？

▶**ていさん**「いまでもあの世に行くんじゃないかと思ってるのに、10年後なんて(笑)。北海道新幹線開業で、今別がどんなふうにならっていくのかも分からないし…。」

▶**忠司さん**「自分はずっと同じところにいるから、『今別は良いところ』と言われてもよく分からなくて(笑)。」

▶**哲也さん**「いまと変わらず牛飼いでいるだろうな。あと、自分がいままでやってきたスポーツで、役に立てるものがあればと思っている。来年7月、自分が実行委員長を務めて今別で自転車の大会を開催するので、それが10年後には第10回を迎えているといいな。」終

【編集後記】今号No.046の撮影とインタビュー担当者：前田ふひと  
1998年に哲也さんが長野パラリンピック・アルペンスキーに日本代表として出場したとき、哲也さんご両親を取材させていただいたことがありました。哲也さんとは同い年のよしみで連絡を取り合ってきましたが、ご両親とは今回が実に17年ぶりの再会。古い縁がいままた巡ってきたことに、感慨をおぼえます。震災を経て、変わったものも変わらないものも、日々受け止めて生きるいきます。

寄付総額：¥3,911,412(2011年6月～2015年12月31日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**覚さん**「いつもは2人でお店にいますけど、地震があった時、たまたま自分は郵便局の窓口に並んでいました。揺れて、すぐ外に出ようとしたけど停電になって自動ドアが開かなくて…。回りの人も怖がっていたのを覚えています。すぐにお店に戻りました。」

▶**裕美さん**「私はお店にいました。地震がきて、これは今まで感じたことがない揺れだと思って、お客さんと一緒に店の外に出ました。まわりのお店の方も外に出ていました。停電になって、その後はすぐにお店を閉めて帰りました。」

**Qその日の夜は？**

▶**覚さん**「その時はそれぞれ実家に住んでいました。私の家はオール電化だったのでけっこう大変でした。反射式のストーブがあったのでみんなで居間で暖をとって、ポータブルのカセットコンロで食べるものを作って…という感じでした。」

▶**裕美さん**「うちは野菜とか食べ物のストックはたくさんあったし、そこまで大変だったという印象はないですね。家族みんなで1つの部屋に集まって、布団を敷いて並んで寝たのを覚えています。」

**Qお店の営業はいつから再開したんですか？**

▶**覚さん**「震災の次の日からですね。洋服なんか買ってる場合じゃないって雰囲気があったと思うけど、震災の次の日もお店に来てくれる方がいました。夜でも外の照明はつけないようにしたりとか節電しながらの営業だったけど、まわりのお店も営業していて、街としての雰囲気は普段とあまり変わらなかったように思います。車にガソリン入れるのも大変な時期でしたから、しばらくはお店まで歩いて来て、1人でお店に立っていました。」

**Q震災後変わったことは？**

▶**覚さん**「あまりないですけど、車のガソリンは早めに入れるようになりましたね。」

▶**裕美さん**「う〜ん…。地震があったら建物の外に出るとか、火はすぐ消すとか、食べ物には備えなきゃいけないとか…。おばあちゃんに言われてたことが染み付いているので、改めて気をつけることはあんまりないですね。震災の時はケータイで連絡をとったり、ネットが繋がったおかげで色んな情報が入って、改めてケータイって便利だなと思いました。ケータイの充電は切らさないようにしないといけないと思って、震災後に予備の充電器は買いましたね。」

**Q10年後のイメージは？**

▶**覚さん**「ちこの10年後はあんまりイメージできないけど……。あと1人くらい子どもが増えて、みんな変わらず元気に生きていけばいいなと思います。」

▶**裕美さん**「10年後もお店をやって、今と変わらない毎日が続いていけばいいなと思います。お店の名前『チコリ』は、私が小さい頃にもらったぬいぐるみの名前で、今でも大事にしています。10年、20年経っても大切にもらえるものをお店でも紹介したいと思って『チコリ』という名前にしました。『この服、10年着てるけど捨てられないんだよね』っていうものになって欲しいなって。そういう感覚が私の生きることの基本で、今日があって、その延長の明日があって…変わらない毎日がずっと続いていて欲しいと思っています。もちろん、人生ですから何の変化もないってことはないですけど、10年後も今と変わらずここに居たいです。ちこの10年後は……。私みたいになっていくんだろうと思います。何をやりたいって言っても反対しないで、やりたいことをなんでもやらせてあげたいです。」**終**

【編集後記】今号No.047の撮影とインタビュー担当者：工藤文昭

chicoriの葛西さんご家族。tovo plusの配布ご協力店でもあるchicoriには、月に一度tovo plusを持ってお邪魔します。「ナチュラル&シンプル」がモットーの店内ではいつでもゆっくりとした時間が流れて、流行に左右されずに長く付き合えるアイテムが揃います。人と人、人と物が長く一緒に時間を過ごすこと。お二人の話を聞いていると、変わらないっていいことだなあと、なんだかほっこりしてしまいます。そんな安心感がchicoriにはあります。

寄付総額：¥3,911,412(2011年6月～2015年12月31日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**義暢さん**「ちょうど農機具屋でバイト中だったんですよ。その店は薪ストーブを使っていて、ちょうど1人で薪を薪小屋から運んでいる最中でした。急に扉や窓がバタバタと音を立てて、強い風だなと思って外に出ると、風はなく、近所の人たちが家から外に出てきていて、そこで、大地震だってことに気がつきました。一帯が停電になってしまったので、その後は、発電機を修理してくれという人たちが結構店に来ました。でも、どれも普段は全く使っていないような発電機ばかりで、サビも酷くて、停電しているし、だんだん外も暗くなってくるし、だんだん見えなくなってきた、ほとんど修理もできなかったですね。仕事を終えて、家に戻ったのは夜7時くらいだったと思います。」

▶**沙武くん**「小学校3年生でした。学校の教室にいた時に地震がきました。大きな揺れがきて、先生が電気を消して、すぐに皆が机の下にもぐりました。迎えにきてもらって、家に戻ったら、ロウソクが何本か立ってて、びっくりしました(笑)」

▶**響巴ちゃん**「保育園の頃でした。その日は保育園を休んで家にいました。おばあちゃんと一緒にいました。大きな揺れがきて、テレビが消えて、だんだんと揺れが大きくなり、電気がグラグラ揺れました。ずっと家の中にいました。」

**Qその日の夜は？**

▶**義暢さん**「夜は、家じゅうのライトを集めてきて部屋を照らしました。水道は出たけど、お湯は出なかったように思います。ただ、うちは薪ストーブを使ってるし、それで、暖もとれて、お湯も沸かせたので、その点では何も心配はなかったです。ガスも使えたので、料理もできました。灯油ストーブもいくつかあったので、ストーブのない家に貸したりしましたね。」

▶**沙武くん**「何日か後に電気が回復して、テレビがいたら、3チャンネルだったのは覚えてる(笑)」

**Q震災後変わったことは？**

▶**義暢さん**「特に家族で話し合ったとかはなかったです。いつどうなるかわからないので、発電機はいつでも使えるようにしていますね。震災が起きる前に、今回、被災された地域には仕事でよく行ってたんです。法面っていうんですけど、道路の両脇の崖の整備をする仕事でした。久慈、大船渡、大槌、宮古、陸前高田、釜石…など、あの辺は月単位で住み込みで仕事をしていたので、どこもよく慣れ親しんだ街でした。その街が津波に流されていく映像は本当にショックでしたね。去年、車で八戸市から海岸沿いを東に向かっ

て走りました。思い出の場所や、自分が工事した場所は全く変わり果てていて、探すのにとても苦労しました。」

▶**沙武くん**「うーん…自分の住んでいる場所が好きになりました。」

▶**響巴ちゃん**「うーん。ないかなあ。」

**Q10年後のイメージは？**

▶**義暢さん**「地元黒石市の為に、スノーモビルの大会をやって、人を集めて、楽しめたいと思っています。去年は1回目の大会を開催しましたが、いろいろなイベントを組み合わせながら、大きくしていけたらと思っています。大会で全国各地に行きますが、どこもいろいろと趣向を凝らしていて面白いです。イベントを長く続けていって、だんだん理想に近づいていきたいです。参加した人が楽しんで、元気になるような催しができたらイイと思いますね。」

▶**沙武くん**「今やっているスノーモビルもモトクロスも続けながら、自立して、ちゃんと仕事をして、稼げるようになっていきたいです。」

▶**響巴ちゃん**「親戚に薬剤師の人がいて、薬剤師に憧れてます。」終

【編集後記】今号No.048の撮影とインタビュー担当者：小山田和正  
tovo plusもついにシーズン5に突入致しました！ご支援、ご協力してくださる皆さまのおかげで、なんとか毎月発行し続け、やっと半分くらいまで辿り着きました。本当にありがとうございます！シーズン5の1家族目は、家族でモトクロスやスノーモビルのレースに挑戦し続けている佐藤さんご家族。2016年3月13日(日)、黒石市津軽伝承工芸館前特設会場にて佐藤さんの主催する第2回「スノーモビル こけしの里 チャレンジカップ」が開催！全国から60台以上が集結します！

寄付総額：¥4,016,100(2011年6月～2016年2月29日まで)



**Q 2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**洋平さん**「よく覚えてますね。弘前公園で仕事をして、現場移動しようとダンプに乗ってガチャッてドアを閉めた瞬間に、ぐおんぐおん揺れて、後ろのダンプがおっつけてきてんのかと思ったけど後ろには誰もいないし…(笑)降りてみたら、木もぐおんぐおん揺れてたんだけど、外だから揺れてるだけで、その時はあんまり大ごとの感じがしなかった。事務所から戻って電話がきて、行ったら停電してたから、発電機をつけて、テレビを見たら津波の映像が出るから本当びっくりした。」

▶**絵里さん**「私も職場で絶賛営業中で、次の日の仕込みしてたんですよ。揺れ出して、みんなでしゃがんで、お年寄りのお客さんが多いんだけど、揺れに気づいてない人も結構いたんだよね…(笑)だから声かけてしゃがませたり。外に出て〜って言うてるのに、まだ買い物続けてる人もいたな(笑)それで全員一旦建物の外に出たんだけど、停電起きてるって知った人が食料買いに次々に来たんだよね。売るものなくなっても人が押し寄せて、すごく大変だったんだけど、今思えばその人たちは賢いなって。」

**Q その日の夜はどう過ごしましたか？**

▶**洋平さん**「うちは、水道が井戸水だったんで、停電で水が全く止まっちゃって、トイレ流せないから、水をもらいに車でまわってましたね。反射ストーブもちょうど壊れて捨てちゃって、暖がとれないんで、寝るときに敷ふとんに毛布敷いて、仕事用の防寒具を着て、それで、毛布と掛け布団かけて寝たら、朝、背中にびしょっと汗かいてた(笑)あとは…やっぱり知合いと連絡がとれなくてすごく不安だったんですけど、とりあえず登録だけしてたmixiは、なんとか繋がるってわかって、それでみんなと連絡取り合うことができて。もう初めてmixiに感謝しましたね(笑)今も普段は全然使わないけど、また何かのときのために登録は消さないでおいてます。」

**Q 震災後、大変だったことは？**

▶**絵里さん**「うちの職場は生ものの扱いが多いから、冷蔵庫もショーケースも全滅で大変でした。保冷パックで包んで応急処置したり、まだ生きてる冷蔵庫あっても冷気が逃げるから開けるなって。震災後2日くらいは店が休みになって、営業再開したら、ものすごい忙しさに毎日疲れてました。他の店はどこもまだ営業してなかったらしくて。保育園のお弁当とか予約の電話もいっぱいきたんだけど、お返事の電話が全然つながらなくて、結局、次の週にやっとつながってから、みんなで電話して謝ってましたね。」

**Q 意識が変わったことはありますか？**

▶**絵里さん**「うーん、友達とこまめに連絡はとるようになったかな。あとはやっぱり、もし、またああいうことがあったら、仕事とかすぐほっぽり出して、まず息子のところに行く。」

▶**洋平さん**「うーん、うまく言えないけど、3/11が近くなったときだけ思い出すんじゃないって、あのとき色んなところでみんなが結束してたあの感じとか、人のこと思う気持ちを普段から持ち続けていたなって思ってます。そらがでっかくなってこういう話をする時も、きっと自分たちが戦争の話の聞くのと同じような感覚で、辛いのはなんとなく感じて、よくわかんないと思うから、震災の状況をとってよりは、震災があったことによってこういう団結があったとか、みんなの為にすごいことをやった人がいたとか、そういうところを息子に伝えたい。大変な時こそ人の気持ちをわかって寄り添えるような人になってほしいと思う。」

**Q ご家族の10年後は？**

▶**洋平さん**「子どもはもう1人いるかなあ(笑)屋上つきマイホームに住んで…(笑)」

▶**絵里さん**「子どもには色々な経験をさせたいと思っています。せっかくお父さんが多趣味だし(笑)私は地元の黒石、というか青森を出たい派だったんですけど、お父さんのおかげで地元いいなあって思えたので、まずは黒石のことは全部経験させたいと思っています。家族でいろんなイベントとか参加して、楽しむお父さんと子どもを支えていきたいですね。」

終

【編集後記】今号No.049の撮影とインタビュー担当者：坂本小雪

お店がない、娯楽がない、活気がない、地元はつまらない。こんな田舎から出ていきたい。特に若い世代はそういう考えを持つ人が多いことでしょう。でもそれはその人たちが気づいていないだけで、洋平さんのような強い地元愛を持つ人がいるということは、tovoのようなプロジェクトが生まれたということは、私たちの地元には、青森には、それだけ魅力あるものや人があるんです。それに気づききっかけにもtovo plusは成り得ると思っています。

寄付総額：¥4,016,100(2011年6月～2016年2月29日まで)



# 050

インタビュー  
鈴木 敏之さん・齊藤 幸さん・妃菜さん

撮影場所：tossy's diner Hot Lips (青森市)

※2016年4月28日、惜しまれつつ閉店



## Q 2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**妃菜さん**「当時は6年生だったんですが、揺れが来たのはテスト中でした。もちろん、今まで経験した中で最大の地震でした。」

▶**敏之さん**「ランチの時間が終わって、買い出しに行こうと店の外に出て歩いてたんですよ。業者の方と電話しながら。したらその方が『あれ？地震だか？』って。初め気が付かなかった。…で、割と大きいねと。店に戻ることにしたんですが、停電で信号が止まりましたね。(お店からすぐそばの)サークルKも停電していますから、レジの方は電卓で対応していましたよ。近隣のオフィスから次々と急に必要となったものを買いに来ていましたんで、そんど(編集者注：津軽弁。「そんどこ」とも。＝大変な様。騒動?)でした。」

▶**幸さん**「お店まではクルマで戻ったんですが、信号止まっていますからトッシーさん(敏之さん)が交差点でクルマ降りて他のクルマが来ないか見てくれたんですけど、そのトッシーさんが揺れてましたね。電柱もグラグラ。トッシーさんをお店に降ろした後、私は妃菜を迎えに小学校まで行きました。普段数分で着くところを1時間掛けで…。でも、その迎えに行くタイミングが早かったみたいで、妃菜には『早い!』『1回帰ってよ』って怒られました。小学生の頭の中では、このまま(修学旅行のように)お泊まり会になるかもって思っていたみたいで…。でも連れ帰ってきて、おばあちゃんを家に預けて。夜はトッシーさんと2人で布団に包まりながら鍋焼きうどん作って食べて、早く寝ました。」

▶**敏之さん**「お店は停電で営業できないし、被害と言ってもフライヤーの油が少し溢れたくらいで他はなんともなかったし…。店にいてもやることないんで早く帰りました。幸が妃菜を迎えに行く時、ちょうどガソリンが残り少なかったんで給油に行くように言ったのが幸いしましたね。まだガソリンスタンドに行列ができる前だったんで。あんなことになるとは思っていませんでした。翌日、当時市役所のそばで営業していたアクバルさん(パキスタン出身のベテランシェフ。青森市内で引越しを繰り返しながら、インド・パキスタン料理のお店『アクバル』を経営されていた。現在は閉店し、青森からも離れてしまったとか…)から電話きて『もう電気来てるよ。お店やろうよ!』って言われたんですが、ちょっとそういう気になれなくて…。で、何をしていたかっていうと、店(ホットリップス)には電気もガスも水道も来ていたので、お客さんの中に困っている人がいればと思って『水を汲みにおいで』『充電しにおいで』って電話掛けてましたね。自粛ムードがありましたが、店は週明けの月曜日(3月14日)から営業再開しました。買い貯めた食料を食べていたのか、外食する人は誰もいなくて、アクバルさんと世間話して励まし合っていましたね。」

## Q 心境や生活の変化はありましたか？

▶**幸さん**「当初は危機感がなかったんですよ。復旧も早かったし。テレビを見ても『こんなことがあるんだなあ』程度で。しかし、時間が経つにつれSNS等で情報がどんどん流れてくると、ことの重大さに気が付いて…。そして、もし津波が来たらと考えるようになって、飼っている3匹の猫の担当を決めました。妃菜はりぼん、トッシーさんはまりん、私はみかんって。大きな津波だったら、アパートの3階に逃げようとか、隣の家の屋根に移れるんじゃないかとかも話しましたね。」

▶**敏之さん**「やれることは何だろうと思いました。何ができるべと。自営業なので、店を休んでボランティアに行く自分たちが生活できなくなってしまうし…募金しかできることがなかった。あと気になったのが、動物たちのこと。飼い主と別れてしまったペットたちの命も気になりました。同じ命ですから。命の尊さ、大切さってものを考えるようになりましたね。そして、出会いのありがたさも強く思うようになりました。入りづらいとよく言われるホットリップスに勇気を持って入ってきてくださったお客様にも感謝です。みなさん、本当にありがとうございました!」

## Q ご家族の10年後は？

▶**幸さん**「夢なんですけど…動物の殺処分ゼロに携わっていたいなあと。災害に遭った動物たちも救ってあげたい。何か他の仕事をしながらになるのか、専門でやれるのかは分からないんですけど…」

▶**敏之さん**「その頃、54歳…生きてるべが…。元気で笑っていたいよね。何をしているか分からないけど。『命』のために何かできていれればいいなと思うよ。殺処分を避けるために活動したい。自分たちだけでは生きていけない動物のことを守っていきたい。」

▶**妃菜さん**「10年後は、たくさん猫を飼っていると思います。そして私は第1子を産んでいると思います。」

▶**敏之さん・幸さん**「妃菜は日本にいねえんだろうなあ〜。」

▶**幸さん**「妃菜は海外でウェディングプランナーやりたいてって言っていたこともあるんで、きっと得意な英語の通じる国にいるんだろうなって思います。」

【編集後記】今号No.050インタビュー：なるみしう 撮影：須川健太郎  
2016年4月28日、多くのファンに愛された tossy's diner Hot Lips が閉店しました。トッシーさんは浦和レッズの熱烈なファンということもあり、店内は赤・赤・赤…。看板メニューは、すべての材料に拘りが詰まったハンバーガー。お肉のサイズやポテトの量を選ぶのですが、お肉トリプルにすると肉汁がドバドバで、嬉しい悲鳴が鳴り止まぬ状態に…。また、1リットル入る通称もつげジョッキで味わう生ビールも最高でした。右手にズッシリくる幸せの重さ、忘れません。多くの青森人がトッシーロスを発症中。アンコールの声が鳴り止まない。【なるみしう】

寄付総額：¥4,179,563(2011年6月～2016年4月30日まで)



今、もう一度お話を聞いてみた。

# toVO PRESS

Mar.11.2020 | Mutsu-Shinpo 2020年3月某日、陸奥新報取材時の対談を書き起こしました。

toVO トヴォ  
座 the 談会



tovo plus no.042 (September.11.2015)



(July.2020)

福田 藍至さん  
優子さん  
佳沙音 (かきね) ちゃん  
撮影場所 津軽こけし館 (黒石市)

tovo plus の取材から約 5 年が経ちましたが、その間に家族の変化はありましたか？

藍至さん「娘が生まれたことが大きいですね。子育ては大変なことも多いけど、夫婦で衝突した時に間を取り持ってくれるし、子は謎 (かすがい) ですね。今では娘がいなかった時の感覚は思い出せません。」

優子さん「娘が生まれてからは毎日忙しくしています。今お腹に二人目がいて、自分は恵まれていると感じています。震災から時間が経つにつれて防災の意識が薄れてきた部分もあるけど、何か災害が起きて、自分が赤ちゃんを抱え

て避難所に逃げなきゃいけないような事態になったら、どうやって行動しようか考えることもあるし、やっぱり親になってから意識が変わったと思います。」

藍至さん「2015 年時点では記者職に就いていましたが、その 1 年後に異動で内勤となり、一度現場から離れました。昨年再び記者に戻り、久しぶりに震災の被災地へ取材に行きました。5 年前に『10 年後のイメージは？』と聞かれた時も話したのですが、震災からの復興はまだ終わっていないし、たとえ建物や町並みが戻ったとしても、目に見えない部分は元通りにはならないと思うし、本当の意味で『復興が終わる』ことはないと思っています。そういう意識を持って、これからも自分の仕事として被災した人たちの話を聞き続けていきたいと思っています。」

今から 10 年後をイメージできますか？

優子さん「今のコロナ禍や 2 人目の妊娠を経て、震災後感じたように当たり前のことを当たり前で過ごすことが改めて大事だと感じています。10 年後もそんな気持ちを忘れずに、当たり前の日々を大事に過ごしていきたいです。」

藍至さん「10 年後は娘が中学生で、生まれてくる子が小学 4 年生…。反抗期とかあるだろうけど、子供たちに好かれ続けていたい…。優子が『年に 1 回は家族で旅行しよう』と言ってきていて、三陸に行った年もあります。大きくなった子供たちとまた三陸の沿岸を回れたら、その時は震災のことを伝えたいですね。」

【インタビュー／撮影】工藤 文昭



「俺に言っているな」と勘違いした  
—トヴォプラスのスタッフになったきっかけを教えてください。加えて参加当時の状況や、震災当初の話もあれば。

工藤文昭 (工藤)「自分は震災当初に日蓮宗のボランティアで被災地へ行っただんですが、想像以上の惨状に打ちのめされてしまって。被災した人々に対して本当の意味で『何かできる』ということはないと思ってました。無力感がずっとあった中で、先輩僧侶の小山田さんから『今度こういうことやろうと思ってるんだけど』と持ちかけられたのがトヴォプラスの話。青森から自分ができることをやっていくことが、結局は自己満足の域は出ないけども腑に落ちるように思えて。それで創刊からスタッフとして携わりました」

前田ふひと (前田)「仕事先でトヴォのかわいい缶バッジを手にとって見ると小山田くんの名前があって『あら、知り合いだわ』

と (笑)。高校の同級生との思いがけない出会いでした。当時はほとんど話さなかったんだけど、再会すると自分もあしなが育英会の支援活動に参加していたり、小山田くんの考え方もいろいろ重なり合う部分があって。トヴォプラスのことを聞いて協力したいと思いました。活動がどうなっていくか興味もありましたね」

坂本小雪 (坂本)「ツイッターでスタッフ募集を見かけて。震災に関しては何かしたいけどという気持ちがふんわりあって、でも支援の気持ちが被災した人たちに本当に届くのか分からず、どうすれば届くのかと。現地でボランティアするなどの行動に移せず、いろいろ考えていたころでした」

鳴海しう (鳴海)「小山田さんとも共通の知人がツイッターでトヴォプラスのスタッフ募集を『誰かいないのか？』とシェアしていて。それを『俺に言っているな』と勘違いしたというか、いずれにせよ、ドンと背中を押された気がした。それまでは被災地に行って復興屋台村などにお金を落としたり、



そこの人たちと話したり、チャリティグッズを買ったり、微力ながら『自分でできることは何か?』ってやってみました。以前はバイク雑誌の編集で取材活動には携わっていたので『目の前にできそうなことがポンとある』と思い、それでスタッフをやらせてもらったという感じ」

須川健太郎(須川)「震災当時は東京で広告フォトグラファーをやっていたが、2014年に末期癌の父の看病のため帰省。ちょうどその時高校の同窓会で幹事を務めた時に、同級生の鳴海さんにトヴォプラスのスタッフに誘われ参加。震災当時関東で被災した自分には、被災地に対し何もできないままに年数が過ぎてしまったが、『やっと何かを形にできるかな』という思いがあり、スタッフに交えていただきました」



笹森まさみ(笹森)「自分としては『震災関連のボランティア活動』より前に『書く活動したい』という思いがありました。長年、フリーペーパーの編集に携わってましたが業務転換などで離れ、当時は仕事に行き詰まりを感じて毎日『これでいいのか?』と考えてしまったり。仕事以外でなにか新しいことをしようと思ったところ、トヴォプラスのスタッフ募集に目がとまったんです」

—これまで取材してきた中で印象深いエピソードや、取材に際して心掛けていたことを教えて下さい。

工藤「震災当時を振り返ってもらいながら一緒に自分もあの日のことを思い出しますが、家族ごとにいろんな感じ方があって『そう思うこともあるのか』という発見がありますね。あとは当時を

思い出すだけで涙が出て話せないような人もいて。震災というものがいろんな形で、いかに残っているかを見つけることが多かった」

坂本「取材した家族からの『家族写真ってなかなか撮る機会がなかったから良かった』という言葉が印象に残ってます。子どもが大きくなってからはあまり撮らなくなったし、家族みんなが揃ってというのなかなか無いから、と。自分としては子どもをいかに生き生き撮るかを楽しみながらやっていました。震災当時はこの子が生まれてなかった、という家族もあって感慨深い気持ちになったり。そういったことも含めてインタビューの時の『ああ、今、思い出してくれているなー』という雰囲気が好きでしたね」

前田「青森はいわゆる被災3県とは違う形ですけど、生活に影響があって苦しい思いをした経験がある。それぞれの家族にそれぞれの3・11があることを痛感しました。取材をきっかけに家族の間で本当の心の内が出てくるようなこともあって。例えば2人とも役所勤めのご夫婦で、土木関係の部署にいた旦那さんは自然災害があると泊まり勤務になったりすることがあって、奥さんは子どもを抱えながら、それに対して不安や不満を感じてた。だけど震災のときには旦那さんの仕事に思いが至って、奥さんは前までのように不満を言うのをやめたのね。それを聞いて旦那さんが『そういえば言わなくなったね、そう思ってたんだね』と話になって。お互いが震災をきっかけに思いやりの仕方を変えた家族はいて、取材をきっかけにそのあたりが通い合うという場面がありました」

須川「主に鳴海さんがインタビューする家族の撮影を担当したんですが、小山田さんからは『プロが撮ったと分かるようなものでなく、素人っぽさを出してほしい』と頼まれて、そこが一番難しかった。自分の撮ったものを『大したことないね』という人もいたが、そこは『そう見えているならよしよし(笑)』。ある程度オーダーは通せているかなと(笑)。家族写真を撮る機会って実はあまりないから、そこはトヴォプラスの取材を機会に、ちょっとでも良いものを撮ることをしたい、とやっていましたね。いろんな経験があったからこそ、笑っている写真をといる、それだけでした」

た。自分の撮ったものを『大したことないね』という人もいたが、そこは『そう見えているならよしよし(笑)』。ある程度オーダーは通せているかなと(笑)。家族写真を撮る機会って実はあまりないから、そこはトヴォプラスの取材を機会に、ちょっとでも良いものを撮ることをしたい、とやっていましたね。いろんな経験があったからこそ、笑っている写真をといる、それだけでした」

鳴海「聞き取りしていると、みんな一人ひとりではなく、家族という単位で行動していたのが興味深い。自然と人と人が集まり、考えて行動していて。それが有事の時も当たり前のように機能している。自分もそんな家族の『サークル』を崩さないよう、意識してか無意識かで、分からないうちにそうなってるんだろうと気付いた」

前田「あと共通していたのは『あの日の星空が綺麗だった』ということ。真っ暗で信号もなにもついていない。車で家に帰った人もいるし、歩いて戻ったり、あるいはずっと家にいたり、それぞれなんだけど、みんなが同じことを言う。それは自分もあの日に思ったんです。いろんなエピソードあって、みんな違う夜を過ごしてるんだけど、星が綺麗だったのは一緒なの」

鳴海「インタビューでは『これは震災遺児のチャリティーで、そういう子どもたちがいますけども、』という風な聞き方をしていないが、どこかにそんな思いはある。家族が互いに思い合う姿を見て、一方である日突然にそれを失ってしまった子どもたちも存在する。変えられない事実を再認識します」

工藤「はじめのころはドラマを期待している部分

がありましたが、全員が震災にまつわるすごい話題を持っているわけではなく、それがリアルだと気付きました。仮に『思い出がない』とすれば、それをそのまま伝えるのがこの企画の大事なところ。『青森の家族』とカテゴライズされたものを一つの人格として捉え、それがどう変化していくのかを追う作業でもあって。ただ、実際にやってきたものを振り返ると、一人格の変化の推移ではなく、100の家族がそれぞれ震災に対してどう思っていたかの集合なのかなと。100家族100通りの向き合い方があったように思いますね」

—やりがいを感じた部分や取り組んで良かったことなどはありますか？あとは裏話なんかもあればこの機会にでも。

笹森「インタビューについては、全く知らない人を相手にどんな話が聞けるかもわからないドキドキ感がある。中には家族みんながシャイな方だった場合もありますね。お話してくれないと記事が書けないから、どうやって言葉を引き出すかを考えながらインタビューして。そうしていると編集者時代の感覚が蘇ってきました。どう書いたら喜んでくれるのか、想像しながら作業していくことが楽しくて。出来上がったものを読んでもらうことより、その手前のあれこれ考える作業が自分的には一番楽しかったです」

坂本「震災や津波で親御さんを亡くした子どもたちの心のケアをする『あしなが育英会ファシリテーター』を、トヴォからも出していこうという企画の第1号になったんですけど、それまではどこかまだ、震災遺児といわれる子どもたちの現状についてピンときてなかった自分がいたんです。ファシリテーター





ター養成講座で色々と学んで、現実味が一気にやってきて。トヴォはこの子たちのための活動なんだと芯を持って話せるようになりました」

須川「青森に戻ってすぐの時点でいろんな人と出会ったり貴重な話を聞ける、いい体験をさせてもらったと思います」

笹森「いろんな人とつながることができたのは財産になりました。友人夫婦に取材したのをきっかけに向こうの自宅へ飲みに行ったり、新たなつながりやおつきあいができて。実はプライベートは社交的でないんです(笑)」

須川「最初は取材する家族にもちょっと困って、LINEの友人グループに向けて知り合いを紹介してもらおうにも『トヴォって何?』から始まるような具合で。ただ3年もするころにはトヴォの認知度が上がって、逆に『自分が載りたい!』って連絡がくるようになりました(笑)」



坂本「チャリティーグッズを買ってお金を寄付するのが目的というか、ほんときめかないじゃないですか。でもトヴォは可愛くて『これ欲しいな』って買う、それが支援になるのが衝撃的でした。とにかくかわいくて、コラボやパロディー、トレンドの取り入れ方もすごくて。子どもも『これかわいい、欲しい』って自分から親御さんにおねだりしたり。こんなチャリティーグッズがかつてあったか!?!とイベントで売り子するたび感動していました」

工藤「『Primavista』というイベントを主催していて、遊びながらちょっとした社会貢献ができるということを土台にしています。これは楽しいことをした結果、誰かのためになるというトヴォの活動そ

のもので、そこに共感したからこそ生まれた活動だと思っています。募金箱があってそこに支援を募る、という形ではなく、日常の『楽しい』『うれしい』という気持ちの後ろに支援や課題解決のためのプラスαがある、というような取り組みが世の中にもっとふえていけばいいと感じたりもします」

—最後に、現時点では100号まであと一歩のところですが、活動を振り返って一言ください。

須川「いろんな家族がいる中で、たった100家族ではあるけど、紹介できたことは多分大きいことだし、何号かだけでも担当させてもらったことは貴重な体験だと思ってます。撮影した家族、関わらせてもらったスタッフには感謝。たくさん家族の幸せが続くようにと願ってます」

笹森「東日本大震災はとても大きい出来事だったから、以前から頭の中にはあるものだったのかもしれない。でもトヴォプラスのスタッフに参加することで、より考えるようになり、意識することも強くなったのかなと思います。トヴォに参加したことで、利益以外に活動することや、誰かにお願いされてやるものでなく楽しくてやっていることが結果的に自分に返ってくるということを実感しました。自分ができることであれば、また喜んでお手伝いしたいですね」

鳴海「区切りが付くだけで、何かが終わったということではない。家族の話を聞くことがトヴォプラスの目当てでなく『そばにいるんだ』という活動のメッセージを伝えるもの。家族へのインタビューが終わっただけで各々の中での活動はずっと続いていくんじゃないですかね。東日本大震災については特別な感情があったが、なにもそれに限らず、さまざまな地域や国の災害や事件に思うことはたくさんある。個人的に何かに思い馳せ、自分のできることをやり続けたい。みんなもいろいろあるけど、いろんな形の『ALWAYS WITH YOU』を続け

ていくんじゃないでしょうか」

坂本「メンバーの皆さんのお話を聞いているときはそれぞれのエピソードや普段から考えていること、思っていることが深いなあと感じながら『私何も考えてないな!』と痛感させられることもありましたが(笑)。自分としてはいろんなリスクがあってできた活動だと思います。いちばんのリスクはやっぱりトヴォグッズ。ステッカーや缶バッジをつけてる人を見かけると、なんだか誇らしい気持ち!」

前田「2011年から毎月被災地のボランティアに通ったり、あしなが育英会のファシリテーターをやっている、小山田さんにトヴォプラスの話を聞いたとき『じゃあ私も(10年)やる!』と思って。当時ははるかな目標のように思えてその先を想像できなかったけど、実際はあっという間に経ってしまった。でも10年経っても何も解決した気はしないよね。きっとこれからも解決はしない。でも、そういうことを解ってても、やれることはやっていきたいなと思っています。あとは新型コロナ。今までのやり方が通用せず、ボランティア活動もできなくなっている。仮に感染リスクが解消されてもすべてが元通りにはならず、違う形へ臨んでいかなければならないと思っています。ただ、物理的にも心理的にも、距離を取ってはいできない事って変わらない。人に寄り添う、添いたい、添われたいという部分は時代や状況が変わっても普遍的なものなんだと思います」

工藤「ただ一つのとんでもない事象によって価値観や人の意識が変わっていくという過程は東日本大震災も新型コロナも同じ。ウイルスと付き合っていく中の数年後の世界でトヴォプラスを続けて読んでいくと、移り変わりに共通点があるのかもしれない。そうした新しい意味を見つけられたとき、はじめて達成感が得られるのかなと想像しています。少なくとも今ではないです。完走間近の、このタイミングにコロナ禍が重なったことは、きれいに終わらせるだけだと嘘っぽい感じがあるので自分としては割り切れています」

赤石 嘉寿貴さん(7月21日聞き取りを構成)

SNSで「トヴォのスタッフ募集」との投稿を見たことをきっかけに2017年から参加しました。それまではトヴォを知らなかったんですが、震災関連のボランティア活動をやろうという気持ちはずっと持っていて、間接的であっても被災した方々をサポートできるならやりたいと思いました。

物事は時間とともに忘れていくものじゃないですか。自分が取材したのは震災発生からだいぶ時間が経ってのこと。家族の話を聞きながら、その都度自分でも何をしていたか思い出し、考えたりする。その中で当時と変わったこと、変わらないものが自分の気付きとして感じられました。自分に見えていない部分の話を聞く体験は、表現として正しいか分かりませんが楽しかったですね。

自分も結婚後のタイミングでインタビューを受けましたが、それまでは妻と2人で震災について話さなかったで、互いに当時は何をしていたかなどを話す機会になりました。特に何もなければ思い出しても「ああ、そういえばそうだったね」で終わってしまっていたと思います。

自分はサルサダンサーであり、インストラクターもやっていますが、新型コロナウイルスの影響で従来ことができず、今、何も見えていない状況にいます。生き方を模索中というか…。自分のまわりのことをやるだけで精一杯で、震災当時の感覚と今が重なっています。でも自分が何かをしようとする時には、きっとトヴォに関わったことを思い出すんだと思います。後から見返したとき、この仕事に携われたことが貴重な体験だったと思えるんじゃないでしょうか。



インタビュー  
福田 藍至

1985年、弘前市生まれ。新聞社に勤務し、東日本大震災発生後から断続的に被災地、被災者の取材に携わる。弘前発の多目的クラブイベント「Primavista」、ポップカルチャーイベント「ういっちたいむ!!」などを主催。好きな食べ物は魚卵、大豆製品。万事において熱しやすく冷めやすい。



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**勇一さん**「おれはちょうど青森空港のそばを車で青森市方面へ走ってたんだよ。車がガクガクと寄せられていくような感覚があった。」

▶**静子さん**「12日に、東京に住む長女と1歳の孫が新幹線で来る予定だったの。だから11日は午前中にバナナと、けの汁の材料を買いに行つて。地震の瞬間は1人でリビングにいて、怖いので庭に出て、やじろべえのように両手を広げてバランスをとってみたけど、それ以上に揺れがひどくて。夕方、長女から『あした行くからね』って電話が来て、私もそんなに大きい地震だとは思ってなかったので、『無理なくていいよ』なんて、のんきな話をしていました。」

▶**勇一さん**「その夜は停電で、ろうそくと、キャンプ用のランタン。まだ寒かったので、対流式のストーブを使って。」

▶**静子さん**「朝炊いたご飯の残りを食べたんじゃないかな。」

▶**勇一さん**「後は早く寝るしかない。ラジオで津波が来たという情報は聞いたけど、あんなに大きい津波だなんて思ってなかった。」

▶**景子さん**「私は当時むつ市に勤務していて、地震発生時は市役所にいました。揺れ始めた瞬間、とっさに仕事用に持っていたカメラで写真を撮りまくって…。その後、仕事の都合で東通村に行き、現地で避難所に寄りました。その頃、東通原発で定期検査が行われていて、全国から要員が来ていた。避難所に福島浪江町から来た作業員がいて、『家に電話してもつながらない』と話していたのが印象に残っています。会社に戻ったら、隣家のおじいさんが、土鍋で炊いたご飯でおにぎりを作って分けてくれて。その後、自家発電が動いている市役所に行ってテレビを見るなどしてから、帰宅したと思います。すぐく星空がきれいだったのを憶えている。アパートは水道と電気がだめで、ガスだけ点いたので、湯たんぽに入っていた水を沸かして、それで歯磨きしました。」

▶**静子さん**「うちに電気が点いたのは12日の夕方。」

▶**景子さん**「私は携帯が全然通じなくて、実家と連絡がとれたのは12日だったと思います。妹も東京に住んでいて、当日は会社に泊まった。姉は12日に東京駅までは行ったんだって。」

▶**静子さん**「新幹線が止まっていることを知らなかったのかな。13日にはスーパーに生鮮食料品が全然なくなりました。景子が何を食べているか心配で、長女たちに振る舞うはずだったけの汁を作ったので景子に送ろうと、宅急便の営業所に行ったんですが受け付けてもらえず、それならむつまで車で届けようということになって。」

▶**勇一さん**「自分がガソリンスタンドの行列に並んで給油して。」

▶**静子さん**「横浜町の道の駅で景子と落ち合って、けの汁を渡しました。」

**Q心境や生活の変化はありましたか？**

▶**勇一さん**「災害時に何が必要かと考えて、対流式と反射式のストーブ、カセットコンロ、ブルーシート、銀マットなどを用意しました。ガムテープや電池など、気がついたときに、ちょこちょこ買ってます。」

▶**静子さん**「避難所でのトイレの問題などを知って、紙おむつも買って試みたの。」

▶**景子さん**「災害など、他人事ではなくて自分のこととして意識的にとらえるようになりました。震災後に友人たちと鍋をしたことがあったんですけど、私が(汚れ防止に)テーブルに敷く新聞紙を、敢えて震災前のもので選んでいたのが心に残ったと、のちに友人に言われました。そのころ新聞は被災地の記事であふれていた。被災地の記事が載ったものを、使える心境ではありませんでした。」

**Q10年後のイメージは？**

▶**景子さん**「どうなりたいかと言われると、結婚したい(笑)。仕事オンリーじゃなくて、仕事以外のつながりも充実させたい。あとは両親が元気でいてくれたらなど。」

▶**静子さん**「自分の足で歩いて、自分のことは自分でしたい。友だちと食べて笑って、趣味のフラを踊って。(勇一さんを見て)あなたも80歳でも野球を続けてちょうだい!」

▶**勇一さん**「80歳野球は大変だね(笑)。でも仲間がいるというのがいい。仲間には負けないように、技術も健康もいつまでも持ち続けたい。時々飲み会をしたいな。」終

【編集後記】今号No.051インタビューと撮影：前田ふひと

取材中、勇一さんと静子さんは自らが体験したものとして、十勝沖地震(1968年)や日本海中部地震(1983年)の記憶を、まるで1週間前のことを思い出すような雰囲気でも話してくれました。東日本大震災から5年が過ぎたけれど、tovoで会うどのご家族も、あの日の記憶は色褪せていないと感じます。新聞紙のことを語る景子さんは、いまでもあの胸の痛みを、リアルに宿しているようでした。

寄付総額：¥4,179,563(2011年6月～2016年4月30日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**絵利香さん**「覚えています。当時は総合病院に勤務していて、地震があった時は病院の5階にいました。廊下の天井からぶらさがっている消火器の看板が壁にガンガンぶつかって『これは大きい地震だな』と感じました。すぐに患者さんの部屋を回って、怖がっている人に寄り添いながらテレビで状況確認をしました。

仕事のパソコンは使えなかったで、とにかく看護師の出来ることを探そうって感じで、その日はバタバタしていましたね。必要な備品が入ってこなくて、何週間かは手術も出来ない日々が続きました。

地震から数日経って、病院は支援のために被災地へ人員を派遣しました。自分も第3陣くらいで支援に行く予定だったけど、結局自分の番がくる前に派遣が終了してしまっで…。被災地へ行く心積もりをしていたので残念でした。」

▶**崇志さん**「当時はイトーヨーカドーの上の飲食店で働いていました。地震があった時は昼間の混雑は過ぎていたけど、まだお客さんが何人かいて…。揺れが納まってから、安全のために1階までお客さんと一緒に降りました。子連れの方は特に心配そうにしていたので、他の従業員と声をかけながら降りました。

それから店に戻ってガスの元栓とか安全確認をして、その日はもう営業できないからってことで夕方くらいには家に帰りましたね。結局それから何日かは休みだったかな。」

## Qその日の夜は？

▶**崇志さん**「停電がいつまで続くかわからなかったし、とりあえずなんか食べるものを買っとくか～と思って、職場から帰る途中にコンビニに入りました。当時問題になった「買い占め」みたいなことをしている人がいて、棚にはあんまり物が無いし、今買っとかないとヤバイ！みたいな感じで、流れに乗るようにして自分も食べるものを買いましたね。当時は結婚前で実家住まいだったので、うちにあるカップラーメンとかをみんなで食べて、夜は久しぶりにラジオをつけました。」

▶**絵利香さん**「私もその時は実家に住んでいました。家は停電していたけどガスは使えたので、お湯を沸かして作れるものを作って食べて…みんなでラジオを聴いたなあ…。」

## Q震災後変わったことは？

▶**崇志さん**「防災グッズは用意しないといけないと思っているんだけど、なかなか行動に移せずに…。熊本

地震のニュースを見て、最近また考えさせられます。」

▶**絵利香さん**「震災直後は車のガソリンを入れるのに並んで大変だったので、ガソリンはこまめに入れるようにしています。病院では、例えばガーゼとか、備品を節約して使おうと心がけるようになりました。他にも色々…例えば、食べ物も最後まで残さないで食べようって思うようになったし、洋服とか自分の持ちものは、そんなにたくさんいらなくなって思うようになったし…意識としてはけっこう変化がありましたね。」

## Q10年後のイメージは？

▶**崇志さん**「まずは何より健康でいたいです。ご飯食べて『おいしい!』っていうと、『それは今健康だからだよ』って絵利香によく言われて…(笑)。仕事に関しては10年後の具体的なイメージはないですけど…、目の前にある事を1つずつこなしていけば、10年後には何かしら残っているのかな～って感じ。」

▶**絵利香さん**「今のまま変わらない関係で、あわよくば子どもがいたらいいなあと思います。あとは、たぶん10年後もケンカしてると思うから、その仲裁に入ってくれる犬を1匹飼いたいですね(笑)。今は総合病院を離れて在宅ケアの仕事をしていて、生活に密着しながら患者さんを看ています。距離が近くなればやれることも増えるし、頼まれることも多くなります。そういう期待には応えたいし、やりがいも感じているので、今の仕事をこれからも続けていきたいです。」

終

【編集後記】今号No.052インタビューと撮影：工藤文昭

新婚の金原くんご夫婦に、2人が結婚式を挙げた岩木山神社でお話を聞きました。以前から年に数回はお参りに来ていたというお2人。きっとこれからは、この場所に来る度に挙式のことを思い出すことでしょう。「忘れない」ってなんだろう？がテーマのtovo plus。嬉しいこと、悲しいこと、大事なこと。月に1度、一緒に考えてみませんか。

寄付総額：¥4,320,095(2011年6月～2016年6月30日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**明日香さん**「まだ結婚する前で、神奈川県の下溝で半同棲かな、一緒に暮らしていました。その頃は、私は農園のレストランで働いていたんですけど、ちょうどランチタイムが終わるくらいに地震が起きたんです。すぐにお客さんを外に出して、地震がおさまるのを待っていました。その時は、畑の中だったので、地震の程度がわからなかったです。その後、同じ会社の人に私の実家（相模原市橋本）まで送ってもらいました。」

▶**真也さん**「その頃は、営業の仕事をしてたんです。ちょうど町田市の玉川学園あたりのコンビニに駐車をして、車の中で休んでいた時に地震が起きたんです。電柱が大きく揺れて、信号も消えて、瓦も落ちて、これは相当大きいぞと思いました。同僚とも連絡が取れなくなって、会社に一旦戻りました。妻と連絡がとれて、安否を確認して、その後、夜11時くらいですかね、電車が動いてから、橋本にある（明日香さんの）実家に向かいました。その日は、そこに泊まって、次の日かなあ、2人で自転車で家に戻って、家の状態を確認したり、冷蔵庫の中を整理したりしましたね。」

▶**明日香さん**「その後、原発のこととか、津波のこととか、たくさんの情報がいっぺんに入ってきて、それを知るにしたがって、ちょっと心配になってきて、仕事が休みだったこともあって、しばらく都心から離れた場所で過ごしていました。」

▶**真也さん**「私も、確か次の日は仕事に行きましたけど、現状を把握したくて、しばらく仕事の休みをもらいましたね。」

## Q震災後変わったことは？

▶**明日香さん**「その後、家に帰ってきた頃に、義兄（真也さんの兄）が結婚して仙台に行くっていうことになって、それを聞いて、2人でどうする？っていう話をしました。それまでは、そんな話をしたことなかったんです。」

▶**真也さん**「はじめは、無農薬や低農薬とか、そういう難しい話ではなく、兄貴がいなくなっちゃうから、実家の農家を継いじゃおうか？みたいな軽いノリでした。それまで農家なんて興味もなかったし、実家を継ぐなんてことも考えてなかったです。やはり、震災後ですよ、こんな気持ちになったのは。それまでは、親のことなんか考えもしなかったんですけど、人と人との繋がりがっていのを考えるようになりましたね。」

▶**真也さん**「震災後、しばらく仕事を続けながら、2人で農家になってやりたいこと、やれること、農薬のこととか、いろいろ話し合っ、考えが固まってきた頃に、

父親に『俺ら戻るわ、後を継ぐわ！』みたいな軽い感じで電話しました。」

▶**明日香さん**「え！？継ぐってことは『結婚』ってこと！？みたいな感じでしたよね（笑）2人で自給自足の暮らしを目指してたところはあって、いつかイイ感じのご飯屋さんをやりたいと思って農園のレストランで働いてたし。ただ自分が農家になるなんて考えたこともなかったですね。」

▶**真也さん**「五所川原市の実家に戻ってきたのは、稲刈りに間に合うようにって、確か2011年9月初でした。その後、9月23日に入籍ですね。で、笑ちゃんを宿したのが12月。2011年は、大きな変化の年でしたね。」

## Q10年後のイメージは？

▶**真也さん**「今は学ぶべきことが多すぎるんですが、現在、親のしている仕事が、だんだん自分の仕事になってきたらイイと思います。もし80歳まで生きるとして、1歳から米を作っても、たった79回しか作れないんですよ。って逆算するようになりましたね。」

▶**明日香さん**「夢って大きく持った方が良いと思うんです。そうなると世界平和ってことになるんですが、その世界平和に近づく為に自分ができることっていうと、ちょっとでも農薬や除草剤を減らすことから始めて、それをシェアして、広げていってというポジティブな方法で、一步一步少しずつ夢に近づいていきたいと思います。」

▶**明日香さん**「笑は、今のところ『わらふあーむ』やっています。」

▶**真也さん**「えー！そうなの（笑）！？」終

【編集後記】今号No.053インタビューと撮影：小山田 和正

1年ほど前から、僕がず〜っと会って話がしたかった五所川原市で無農薬・無化学肥料、低農薬栽培の米を通じて生産者と消費者を繋げる農家を目指す『わらふあーむ (<http://warafarm.thebase.in>)』の木村さんご家族。写真のとおり素敵な家族。掲載できたのは、ご家族の話のほんの一部。もっと掲載したかったのですが、掲載できなかった部分は、これからの『わらふあーむ』さんのご活躍に自然に表れてくるでしょう。そして、これからのトヴオの活動にも反映されます。僕らをつなげてくれた弘前市バンブーフォレスト竹森さんに感謝！

寄付総額：¥4,320,095（2011年6月～2016年6月30日まで）



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**弦紀さん**「仕事でした。お客さんのところに着いて、車を停めたのになんか車が動いて。パーキングに入ってるのに、え〜会社の車壊れた!と思って。お客さんのところに降りて行ったら、電気が全部消えるし、電気の吊るされてるやつがグワングワン回ってた。携帯電話は全然通じないし。会社に戻っても電気がつかなくて、でも、『帰れ』とはならなくて、午後はずっとラジオを聞いて復旧を待ちました…」

▶**明香さん**「私も車かな。乗るところだったんですけど、車がユッサユッサ揺れて、え〜なんじゃこりゃ〜!と思って。信号もついてないしなんじゃこりゃ〜!って。」

▶**弦紀さん**「信号が消えると車の人は、みんな優しくなるよね。交差点でも譲り合いするし、信号が無いほうが世の中が平和になるんじゃないかなと。」

▶**明香さん**「でも、それに慣れちゃったらダメになるんじゃない〜?」

▶**海波さん**「小学校の4年生でした。帰りの時間で、『さようなら』ってして、頭を上げた瞬間に揺れた。」

▶**明香さん**「小学校が、普通に下校させてきて、ホントびっくりしたんですよ。」

▶**海波さん**「保育園で絵を描いてました。何を描いたかは覚えてないけど…(笑)」

**Qその日の夜はどう過ごしましたか？**

▶**弦紀さん**「オール電化の弱さが露呈した時でしたね(笑)卓上コンロと、LEDの電池のライトと、ろうそくと、だるまストーブで過ごしました。ひとつの部屋でろうそくつけてゴロ寝してた。」

▶**明香さん**「トイレは手動のレバーで流せたので良かったですね。ウォシュレットはダメだったけど…。ご飯は冷蔵庫にあるもので雑炊とかつくりました。食材があったから助かった〜って。あと、寒い時期だったから、良かったっていうのもおかしいけど、これで暑い時だと、子どもたち冷やさなきゃだめだし…。いっぱい着てればなんとかなったので。」

**Q震災後、どういうことがありましたか？**

▶**弦紀さん**「家が浪岡なんですけど、ガソリンスタンドがどこも行行列だから、黒石まで行ってみました。せっかく並んで超待ったのに、前の車で終わったという(笑)」

▶**海波さん**「コンビニがめっちゃ暗かったの覚えてる。レジの人が電卓でがんばってた。」

▶**明香さん**「買い占めする人はイヤだなあって。最低限でイイじゃないのって思うんですよ。みんな考えは違うからあれなんですけど。家族がいるのって自分のとこだけじゃないのになあって。」

▶**弦紀さん**「あ、震災の翌日がばあちゃんの誕生日だったんですよ。まだ停電してたから、仏様のろうそくが誕生日のろうそくだーって(笑)それまで、ばあちゃんの誕生日って、ちょっと曖昧だったんだけど、あれからは『震災の次の日』ってしっかりインプットされたなあ。」

**Qご家族の10年後は？**

▶**弦紀さん**「蒼空が20歳?やっと終わったー!って感じ!(笑)」

▶**明香さん**「え〜!何で〜?大学に行ったら、まだ学生だよ。」

▶**弦紀さん**「家族全員で呑みたい。あつ、1人運転手だ。じゃあ、海波だ(笑)」

▶**海波さん**「えー!飲めないじゃん!10年後…、父さんに色んな呑み屋に連れてってもらってそう。」

▶**花音さん**「うーん…、普通の人がいいな(笑)」

▶**蒼空くん**「発明家になる!!」(終)

【編集後記】今号No.054インタビューと撮影：坂本 小雪

日に焼けた健康的な肌色の活発な子どもたち。とっても賑やかな西塚ファミリーです。この日はめちゃめちゃいい天気の日曜日で、撮影は最中日差しが強くあつつい時間になってしまいました…ごめんなさいでした…。申し訳無さっぱいでしたが、夏の晴天の青と草の緑がとっても似合うご家族でした!

寄付総額：¥4,466,774(2011年6月〜2016年8月29日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**美代さん**「その頃は、タイのバンコクにいました。JICA（日本の政府開発援助（ODA）を一元的に行う実施機関。開発途上国への国際協力を行っている）のシニア海外ボランティアとして、セサティアン聾学校にて陶芸指導をしていたんです。その日はその聾学校の文化祭で、ほし（息子。星乃介くん）も日本から遊びに来ていました。地震のことは、カウンター・パート（ボランティアの協力活動を共同で遂行する現地側のスタッフ）から『日本に帰れないよ』と聞いて知りました。他のJICAボランティアの人たちと一緒に、CNN（アメリカ合衆国のケーブルテレビ向けニュース専門放送局）やBBC（英国放送協会。イギリスの公共放送局）の放送を『大変なことになってる…』と驚いて見ていましたね。」

▶**修平さん**「ほし（息子。星乃介くん）はその頃、秋田の大学に通っていたのですが、その秋田の友達とは連絡を取れていたようでした。でも、かまや（七色たい焼きで有名な板柳町の駄菓子屋さん。修平さんのご実家）とは連絡が取れなくて…。地震から3日後、やっと知人を介してメールで連絡が取れました。発電機を借りておけば良かったって言っていましたね。工房にあった作品は、タイに行く前に上の方に置いていたものを中心にほとんどダンボール箱の中に仕舞っていたので、割れたものはありませんでした。」

▶**美代さん**「地震翌日、市場に行くと知らない人からも『大丈夫だった？』って声を掛けられました。タイの人々にも津波の映像はインパクトが大きかったみたいです。『募金したよ〜』とも声を掛けられましたね。タイはとても親日的な国ということもあり、デパートやコンサート、マラソン大会、サッカーの試合でも日本への募金活動が行われていました。いたるところで『PRAY FOR JAPAN』の文字を見ました。」

## Qその後、心境や生活の変化はありましたか？

▶**美代さん**「震災のあった年の10月には、タイは洪水（タイ洪水。2011年7月から始まり、3ヶ月以上続き、北部のチエンマイ県から中部のバンコクまで、58の県に浸水が及んだ）で大変なことになっていました。私たちの住んでいた場所は、国王のお家や軍の主要部に近い所だったこともあり被害はありませんでしたが、その周囲は大変でした。その頃は健康診断のため日本に一時帰国していたのですが、帰郷されたカウンター・パートの先生たちのお家も大変だったこともあり、タイには戻ることができませんでした。それならと、弘前大学のタイ人留学生と一緒に、今度はタイの皆さんのために街頭募金をすることにしました。素晴らしいことに、蓬萊広場であったダンスイベントの会場でやらせてもらいました（2011年11

月3日。弘前城築城400年を記念した特別イベント『Red Bull BC One ALL STAR JAPAN TOUR 2011 in HIROSAKI』。世界のTOPダンサーが集った。また、2012年に板柳町の中央アップルモールを歩いて『ここでクラフトフェアができたらいいいね』とそのまま町役場に相談に行き、2013年から『クラフト小径』を始めたのですけども、その名簿冊子の中に『クラフトで、できること。』というページを設けています。そこでは、東日本大震災以降、モノ作りに関わる人間として、被災された方々の為に何ができるか？というテーマのもと、実際に行動された作家さんたちのことを紹介しています。最近では、3.11だけではなく、広く思いを巡らせています。」

## Qご家族の10年後は？

▶**美代さん**「タイの2年間で教えることの楽しみを知ってしまったこともあり、2015年の春から子供向けの英語教室も始めました。10年後も勿論、モノ作りをモノを紹介していくことをライフワークとしていきたいと思っていますが、ギャラリーをやるにも元手がなければですから、英語教室も続けながらギャラリー&カフェができたらいいいなと思ってます。英語教室の子供たちに私たちはミーヨンとシューポッターと呼ばれているんですが、そのミーヨンとシューポッターが子供たちの時間の一部にいるんだなと感じるようになってきたら、英語教室がすごく面白くなってきましたね。」

▶**修平さん**「焼き物が売れなくなってきたなあ震災後から感じていたのですが、それは壊れるもの割れるものが選ばれなくなってきたのかなと思っているのですが、これからも陶芸を続けていきたいですね。」

終

【編集後記】今号No.055インタビュー：なるみしう 撮影：須川健太郎  
今年も10月1日と2日に板柳町の中央アップルモールにて開催された『クラフト小径』。そして、鰺ヶ沢町の日本海拠点館に隣接する新設海浜公園にて2001年から2010年までの10年間開催されたクラフトフェア『C-POINT』。この2つを立ち上げ、引っ張ってこられたのが今回の安田夫妻です。僕は青森に帰ってきた2004年から、ちょろちょろと安田夫妻のところ（＝工房polepole）に遊びに行かせていただき、C-POINTとクラフト小径もお手伝いさせていただいております。何故なら、すごく「あずましい」から。2人のそばにいと、違う時間の流れを感じ、それが心地良いのです。でも、そんな2人の中にも勿論2011.3.11があり、そこから皆と同じ分だけの時間が流れ、想いを繋いでいることを今回のインタビューを通じ、改めて感じました。

寄付総額：¥4,466,774（2011年6月～2016年8月29日まで）





## Q 浩栄さんと美淑さんは国際結婚なんですね。

▶**浩栄さん**「私たちは2000年4月に五所川原市のキリスト教会で出逢いました。彼女がかつて京都大学に留学していたときに学内の聖書サークルで非常に親しくしていた牧師が五所川原の教会に赴任していて、彼女が韓国から訪ねてきて1週間ほど滞在していたんです。再会は9年後の青森市。以後、私が訪韓したり、彼女が来日したりしながら、同じ信仰を通じて心が通い合い、2010年11月に婚約しました。」

## Q 2011年3月11日のこと憶えていますか？

▶**浩栄さん**「私は仕事で、青森駅近くのホテルにいました。長い揺れがあって電気が消えて。ホテルの人に促され、建物の外に出たら、信号が消えているし、人がワーワー騒いでいる。勤務先に歩いて戻りながら、携帯で韓国の彼女に『いま大きな地震があったけど、なんともないよ』とメールしました。中里の実家にも電話して。勤務先には非常用電源があって、リアルタイムでテレビを見ることができたんですが、津波が押し寄せる様子に『これは大変だ』と。」

▶**美淑さん**「私は当時、韓国の大田市というところで日本語学校の教師をしていました。日本で震災が起きた時刻、私は休憩時間で外出していて、彼のメールを見ていなかったんです。16時ごろ学校に戻ってテレビで震災を知り、彼に電話をしようと携帯を見て、メールに気づきました。」

▶**浩栄さん**「19時ごろ会社を出たんですが、星がとても青く、ゆらゆらして見えましたね。家に帰っても、停電で暗いことより、寒いことが堪えた。彼女と国際電話をしたけど、携帯の電池が無くなってはいけなくて、すぐに切りました。離れて暮らしてたでしょ。『うちに誰かがいるというのは、羨ましいな』と思った。あの日ほど、家族がいなかったというのが、心細いというか。」

## Q その後はどう過ごしていたんですか。

▶**美淑さん**「韓国でも震災発生から1週間、1日中ニュースで映像が流れていました。日本語を勉強していた人たちに、とても影響がありましたね。『もう日本に行かない』と言い出したり。同じ日本語学校のソウル教室には約2,000人の受講生がいたのに、半減してしまったほど。私はそれまで20年間日本語を教えてきましたが、こんなに学生たちにやる気がなくなってしまったのを見たのは初めてでした。どうにか『勉強したい』『(日本に)行ってみたい』という気持ちにさせたくて、彼に『青森県の美しい自然の写真をたくさん撮ってメールで送ってほしい』と頼み、それをプリントして学生たちに配ったりしました。」

▶**浩栄さん**「睡蓮沼とか、八甲田の写真が多かったですね。つがる市のベンセ湿原、十和田の鯉艸郷の花菖蒲や、弘前公園の桜とか。」

▶**美淑さん**「出勤前と仕事帰りには教会に寄って、泣きながらお祈りしていました。」

▶**浩栄さん**「彼女と国際電話で話すと『みんなのために祈りに日本に行きたい』というので、ケンカしましたね。『いまいるところでやってくれ』と(笑)。日本に住んでいる外国人が脱出しているときに、こっちに来るって言うんですから、ありがたいなと思いましたけどね。」

▶**美淑さん**「日本の人たちのために、何もできないということが申し訳なかった。」

▶**浩栄さん**「電話で話すと『日本に行く』『来るな』とくだらないことでケンカになるので、私は手紙を書くようになりました。ふだんなら1週間ほどで届くものが、あのころは2週間ぐらいかかって届いていた。速報性はからないから、自分の想いを書いておこうと。それで、返事を期待しないで書くようになった。」

▶**美淑さん**「郵便屋さんに『日本に親戚がいるの?』と聞かれるほど、毎日届いて。(結婚し2013年来日するまでに)手紙を430通ぐらい、メールも合わせると1,000通ぐらいもらったんですよ。」

## Q 10年後に期待することは？

▶**浩栄さん**「(浩栄さんは牧師を目指して勉強中)私たちは、いつか一緒に教会をやりたくて、結婚したんです。どういう形でやるかは、これからの話ですけどね。」

▶**美淑さん**「私は、青森で松丘保養園(国立ハンセン病療養所)から韓国人の通訳・後見人的な依頼を受け通ううちに、園の人たちと仲良くなりました。園では毎年春に植樹をしていて、今年の4月、私も桜の植樹をしたんです。その桜が10年後どうなっているか、大きな樹になっていたらいいな。」終

【編集後記】今号No.056インタビューと撮影：前田ふひと

震災による津波、原発事故…。「311」が韓国で日本語を学んでいた人たちに与えたショックは想像以上に大きく、美淑さんが勤務していた日本語学校の学生数は減少の一途をたどり、ついに昨年閉鎖されてしまったそうです。あの震災は海の向こうにも、“激震”をもたらしていたのです。その中であって、美淑さんと浩栄さんの2人が懸け橋となり、日本のことを、東北のことを思い、伝えようとしてくれたことに、深く感じ入りました。感謝します。

寄付総額：¥4,635,628(2011年6月～2016年10月31日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**幸さん**「ちょうど長男が生まれて100日目の日で、弘前の写真館へ100日の記念写真を撮りに行った日だったんですよ。」

▶**正芳さん**「そうですね、よく覚えてますね。写真館から帰ってきて、さあ、りんごの剪定に行こうっていう時に地震がありました。台所でグラグラと揺れて、小学校の時に教えてもらった通りに食卓テーブルの下に隠れました。揺れがおさまったので、りんごの剪定にでかけようとしたんですけど、怒られて引き止められました。停電でテレビはダメでしたけど、いつも聴いているラジオでたいへんな事態になっていることを知りました。この周辺は2日～3日間停電が続いたんです。でも、ウチは薪ストーブを使っているので暖はとれましたし、ガスも使えました。米や食料の備蓄はあるので、食事には困りませんでした。」

▶**幸さん**「その頃は弘前の助産院で仕事をしていたんですね。その日はちょうど休みの日だったんです。地震が起きて、まだ長男が小さかったので、抱きかかえて外に出ようとしたら、引き止められて、急いで食卓テーブルの下に隠れました。その頃は、大家族で、祖母、父母、そして、私たちの家族と、あと夫の妹も一緒に住んでいましたので、停電の中、食事やその他、夜を迎えるための準備をずっとしていました。お風呂は停電中は入れなかったですね。」

▶**正芳さん**「小さい頃はもっと不便な生活をしていて、不便な生活には慣れていたので、停電になってもそんな苦にはならなかったんです。今はいろいろな面で便利な世の中になったので、不便な生活に対する苦しみが増えちゃっているのかもしれないね。」

▶**幸さん**「次の日、私は仕事が休みになりましたけど、夫は畑に出ました。」

▶**正芳さん**「そうですね。師匠の畑に行きました。でも、このガソリンも買えない非常時に来るな！って怒られて帰ってきました(笑)師匠の様子が心配だったんですよ。ですので、特に被害もないことが分かって、ホっとして帰ってきました。」

▶**正芳さん**「2～3日後、電気が通って、テレビがついた時に放映されていた津波の映像がホントに衝撃的でした。」

▶**幸さん**「電気が通って、携帯の充電ができるようになって、まず被災地にいる親戚や友人や仕事でお付き合いのある人たちに連絡して無事を確認しました。おしめが困りましたね。ストックは少しあったんですけど、ずっと入荷してこなかったの。」

## Q震災後変わったことは？

▶**正芳さん**「地域のことで言うと、消防団をトップにして、自主防災組織を組み始めました。あと、保育園では毎月防災訓練を行うようになりましたね。」

▶**幸さん**「子どもたちが保育園に行っている時に何かあったら、どっちが迎えにいくか？という話はしました。地震で停電になって、携帯の充電ができないくらいしか困ったことって特になかったんです。食に関して、も普段から蓄えはありますし、薪もありますので。」

▶**正芳さん**「あらためて農家って強いなと実感できました。ある程度時間もありますし、モノも揃っていますし、生きる知恵もあります。何か困った時にでも、こういう場合は、こうすればイイ、ああすればイイ、あの家にはあれがあるから借りてきて、...と、そういうネットワークも強いんです。いまだにうちに醤油を借りにきたりします(笑)米とかも(笑)ホントに農家という職業を選んで良かったと思います。」

## Q10年後のイメージは？

▶**幸さん**「私は農家の仕事だけをして、子どもたちにはそれを手伝ってもらって、みんなで畑仕事をしているっていうのがイイですね。あと、男は男同士でみんな仲良くってイイですよ。」

▶**正芳さん**「子どもたちには便利さに慣れて欲しくないと思います。暑かったら暑いなりに、寒かったら寒いなりに、テレビがなかったらテレビがないなりに、それを受け入れて生きて欲しいと思うんです。不便を感じた分、そこに心のゆとりが生まれてくるんじゃないかなと思っています。」

▶**昌伸くん**「恐竜博士。」

▶**譲司くん**「忍者。」終

【編集後記】今号No.057インタビューと撮影：小山田和正

田舎館村のりんご農園「ふくいち農園」の7代目となる福士さんご家族。代々とても大切に育てられている樹齢100年以上の大きなりんごの木の下にて撮影しました。他にも50年も大切に整備されてきたダットサンの軽トラックや道具の数々。福士さんとお話していて、土の中の見えない根っこをとても大切にされている方だなと感じました。脈々と続く根っこを大切にすることから、ちょっとしたことでビクともしない強さと謙虚さを感じます。樹齢100年のりんごの木の下で、まあ、人生はいろいろあるけど、それでも、僕がなんとか生きていけるのは、土の中に隠れた強く太い根っこに支えられているからなんだろうと感じました。

寄付総額：¥4,635,628(2011年6月～2016年10月31日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**優太さん**「当時は、まだ結婚する前でしたが一緒に暮らしていました。私は薬剤師の仕事をしていて、地震があった時は五所川原の薬局で仕事でした。停電でパソコンも使えず不便でしたが、店は開けていて、出せる範囲で患者さんに薬をお出ししました。会社には24時間営業の薬局があって、ちょうど私が夜勤の日だったので、結局うちに帰ったのは次の日だったと思います。」

▶**江梨菜さん**「私は病院に勤務していて、夜勤が終わって家にいる時に地震がきました。当時住んでいたアパートがオール電化で、停電してしまって何もできなかったの、とりあえず実家に戻りました。車にガソリンを入れようと思ったけど、スタンドには行列が出来ていて、何軒も回ってガソリンを入れました。食べるものとか電池を買うためにコンビニにも並んだなあ。」

地震があった日も夜勤だったんですが、停電して真っ暗な夜に通勤することを家族が心配して、みんなで車に乗って家族全員で職場に送ってもらったことを覚えています(笑)灯りが無いぶん、車のライトが目立って、走っている車の数がいつもより多いように感じました。

病院は非常用電源で電気が点いていたので、一人暮らしのスタッフの中には、停電している家に帰るよりも病院にいた方がイイってことで、仕事が終わっても休憩室に残る人もいて、いつもの夜勤より人が多かったですね。」

▶**優太さん**「地震の3日後に会社の方針で被災地へ支援に行くことが決まって、9日後には岩手県の大船渡へ向かいました。向こうはやっと瓦礫の中に車が通れる道が一本通ったような状態でした。」

避難所の中に診察室が開設された時期で、普段飲んでいる薬が欲しいとか、避難所生活で体調を崩した人が薬を求めたり、薬剤師のニーズは高まっていました。地元の薬剤師さんは自分も被災して家を流されたのに避難所で活動していて、そういう人たちが自分の身の回りのことを出来るようにバックアップしました。余震も多くて『いつまた地震が来るのか』という不安や怖さは常にありましたね。被災地では内陸の旅館を拠点に1週間くらい活動していたので、帰ってきた時にはこっちはかなり落ち着いていました。」

▶**江梨菜さん**「お互いそんな感じでそれぞれ動いていたので、地震の後、ゆっくり会ったのは彼が被災地から帰ってきた後なんです。それまでの間、私一人でアパートにいてもしょうがないと思って、実家で生活していました。」

## Q震災後変わったことは？

▶**江梨菜さん**「懐中電灯を買ったくらいですね。また地震がきた時のために荷物をまとめておいた方がいいと思ったけど、なかなか行動には移せずに…」

▶**優太さん**「正直、あまり防災意識は上がってないですね。当時はまだ結婚していなかったし、なにより子どもがいなかったの、大人だけだとなんとかなるというか。子どもがいたら必要なものも全然変わってくるし、当時自分に子どもがいたらと思うとゾッとします。」

## Q10年後のイメージは？

▶**優太さん**「結婚して家を建てて子どもも2人授かって…と、どんどん責任が大きくなっているの、10年後も今の生活が維持出来るように、しっかりと家族を支えていきたいですね。そのためには健康が一番かな。」

▶**江梨菜さん**「10年後、息子は中学生って思うとドキドキしますね…難しい年頃だなあ(笑)きっと子どものために2人でカツカツ働いているだろうと思います。」

▶**日向嘉くん**「早く学校に行きたい!!」終

【編集後記】今号No.058インタビューと撮影：工藤文昭

とってもオシャレな中嶋さんのご自宅にお邪魔しました。2011.3.11を出発点に、現在、そして未来のことを何うトヴォプラスのインタビュー。中嶋さんご夫婦のお話には、その節々に子どもたちを思う親心を感じます。そんなお2人のまわりで無邪気に遊ぶ日向嘉くん。パパの腕の中でずやすや眠る心瑚ちゃん。寒い日でしたが、中嶋さんのおうちの中は暖かい雰囲気であふれていました。

寄付総額：¥4,759,579(2011年6月～2016年12月15日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**拓也さん**「仕事中で、ホームセンターの駐車場で休憩してる時でした。車内で遅めの昼食をとろうとしたら、あ、揺れた〜と。最初はすごい自分疲れてんな〜と思ったんですよね(笑)。揺れて感じるほどか〜って。そうしたら、店内からお客さんがいっぱい出てきて。そのまま仕事に戻ったら『なんで来たんだ？今から皆帰すぞ』と言われて、それでただ事じゃないなと。大変だったのが、メーカーさんが2人東京から来てたんですよ。彼らが帰れなくなっちゃったから宿を手配しないっていろんなホテルに連絡したんですけど、やっぱりどこも停電していたりで、これから受入れしても責任が取れないからって断られてしまって。ちょっと山の方ならどうかな？と岩木のアソベの森の施設までメーカーさん2人を連れて行って、お願いしたらなんとか受入れしてもらえてホッとしました。」

▶**恵美子さん**「スーパーで買い物しているところでした。店内の電気がビビッと映画のワンシーンみたいに消えたのを覚えてます。商品を入れたままのカゴを置き去りにして帰っていく人もいたんですが、子どもたちがいるし、晩ごはんの買い物はしていかなきゃ!と…。外に出たら信号が止まっているし、でも、進まなきゃいけないし変な感じでした。気を使って帰りましたね〜。」

▶**帆乃香さん**「小4の時でした。揺れてない?って誰かが言って、だんだん揺れてきたので机の下に隠れて、みんな体育館に集まりました。先生同伴で集団下校したけど、信号が止まっているのに車がビュンビュンしてて怖かった。家に帰ったらお母さんがいて、安心しました。暗かったので大雅とゲーム機のライトつけてたら、お父さんがケータイのライトつけて帰ってきて、そこでまた安心しました。」

▶**恵美子さん**「家族みんなバラバラの状態地震にあったので、集まるまではやっぱり心細かったですね〜。」

**Q震災後、どういうことがありましたか？**

▶**拓也さん**「大雅は震災当時3歳だったんですが、停電になってトイレが暗いのを怖がっちゃって、トイレを覚えるのにちょっと時間がかかりましたね。」

▶**恵美子さん**「我が家はテレビっ子家族なんですけど、そのテレビの地震速報の音に大雅が敏感になって、しばらく怖がっていました。子どもはデリケートだなんて改めて感じましたね。」

▶**拓也さん**「あとは…カップ麺が手に入らないという話を他県の友人と話したら、その友人がカップ麺を送ってくれたんですよ。うちだけでなく福島の方のことも、みんなで助け合いをして。何かあったらお

互い応援していこうと。あの時は本当に他県の友達には感謝しました。」

**Qご家族の10年後は？**

▶**拓也さん**「まず、お姉ちゃんは嫁に行ってるべ。」

▶**帆乃香さん**「それ前提?(笑)」

▶**恵美子さん**「私はまだ子育て中なので、元気でいたい(笑)みんな巣立っていくけど、何かあればみんなで助け合っていきたいですね。みんな集まれるように。ワイワイとしていたい。」

▶**帆乃香さん**「おもちゃで子どもに笑顔を与える仕事をしたいです。バンダイとかそういうところ!」

▶**大雅くん**「野球選手になりたい。今も野球してるから。」

▶**巧雅くん**「仮面ライダーになりたい!」終

【編集後記】今号No.059インタビューと撮影：坂本 小雪

みんなでテレビを見ながら団欒するという仲良しなご家族。お父さんの、他県の友人が支えてくれたというエピソードはとても感動しました。何かあったらお互い応援しよう。私も自分の友達とそんな信頼関係をつくっていきたいと思います。

寄付総額：¥4,759,579(2011年6月～2016年12月15日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**健さん**「その日もここ（カフェ・デ・ジターヌ 古川店）にいて営業中でした。正直なことを言うと何をしたかは覚えていますが、どんな気分だったかはよく覚えていないんです。揺れが来て…、落ちないように（コーヒー）豆の瓶を移動して…、火を止めて…、その頃も店内の照明は今と同じように吊り下げ型だったので、それらの揺れを押さえで…、割と長く続いた揺れが収まった頃に外に出てみたくです。向かいのサンフレンドビルには、まだ何軒かのテナントさんが入っていたんですが、そちらの方々がたくさん歩道に出て来ていましたね。私はその様子を眺めながら、煙草を一本吸っていました。動揺を隠すように…。駅前には、電車が動かなくなってしまったことにより行き場を失った方の姿が見受けられたのですが、うちの店にも何人か『どうなるんでしょうね』という声がありました。しかし、停電によりコーヒーを淹れることができず、お湯しかお出しすることができませんでした。県病前店にある焙煎機のことや家族のこと、特に祖母のことが気掛かりで、暗くなる前に店を閉めて家へと戻ったのですが、家も祖母も、そして、県病前店から戻ってきた父と母の身にも特に何もなく、皆の無事が確認できて安心しました。うちは炊飯器がガス式だったので、家にあった米をガンガン炊いたのを覚えています。もう、ガンガンと…。人間、米と水があれば何とかなるだろうと思ひまして。その夜は小さな反射式のストーブを一家四人で囲み、ラジオに耳を傾けて過ごしていたのですが、流れてくるニュースはどんどん暗い内容のものが増えていきました。何処その沿岸にたくさんのご遺体が流れ着いているとか…。青森市内にも津波がくるかもしれないといった情報もありました。篠田や沖館といった地区や、西側、蟹田あたりまで避難指示が出ていたんじゃないかな。本当はいけないのですが、近所を流れる沖館川の様子を見に行ったりしてました。後になって、帰宅困難者が割といたということや、その方たちを近くのホテルが受け入れていたこと、ラーメン屋さんが炊き出しを行っていたことなどを知り、自分にはそのような余裕がなかったなあと思いました。」

▶**聡子さん**「私はその頃、東京でファッション関連の仕事をしていました。地震が起きた時は、古いマンションの4階にあるオフィスにいたので、凄く揺れましたね。私を含め5～6人いたのですが、皆で机の下に隠れました。その時に、シルバーアクセサリや材料などが収納されている、決して軽くはない棚が歩いている様を見て『こりゃやばいぞ』と感じました。揺れが落ち着いてから実家に携帯から電話してみたのですが、繋がらず…。近くにあった公衆電話に並び、そこから掛けてみてもやはり繋がらず、不安でした。自転車で通勤していたので、家まで帰るのにさほど苦労はしなかったのですが、線路沿いの道や環七（東京都道318号環状

七号線。大田区平和島を基点に、世田谷区、杉並区、などを経由して江戸川区臨海町に至る都道）沿いの歩道では、たくさんの方が歩いているのを見ました。その晩、友達と一緒に過ごさないかと誘われたのですが、私は外に出る気になれず、家にいました。一晩中友達とツイッター上でやりとりしていましたね。」

## Qその後、心境や生活の変化はありましたか？

▶**健さん**「震災後は食料を備蓄したり、ガソリンをこまめに入れたりしていたのですが、最近あまりやらなくなってきました。2014年に結婚し、子供が生まれ、自分のことよりも他人のことを考えるようになったと思います。」

▶**聡子さん**「以前は自分のことで精一杯だったけど、家族含め周りの人のことを思うようになりました。」

▶**健さん**「古川店の他にも県病前の店やヨーカドーでも売ったりと、家族が分散した感じでやっていましたが、やはり家族はなるべく一緒にいた方が良くないと思うようになり、県病前店を閉めて実家の隣に篠田店をオープンしました。」

## Qご家族の10年後は？

▶**健さん**「10年後、結也は高学年に。自分は49歳に。その頃も身心共に健康でいたいですね。ジターヌは変わらず家庭のためのコーヒーを作り続けていたい。辛い時期も焙煎することで救われていた面もありましたので、これからも焙煎していきたいです。3.11にできなかったことをできるように、心に余裕を持てるようにもしていきたいですね。」

▶**聡子さん**「家族仲良くしていきたいですね。このお店があるニコニコ通りを含め、地域の方ともたくさん関わっていき、より良い街に出来たらいいと思います。」**終**

【編集後記】今号No.060インタビュー：なるみしう 撮影：須川健太郎  
自家焙煎珈琲豆屋カフェ・デ・ジターヌ（古川店：青森市古川1-5 / 篠田店：青森市篠田3-3-9）。僕は幾度となくこちらのコーヒーに救われている。癒されている。慰められている。助けてもらった上に元氣まで頂いている。出会って10年以上経っているのだけど、今日も頂いたコーヒーには新しい発見（悦び）があった。ジターヌに入る前と出た後で、僕の心の姿が変わっている。ささくれ立った部分は弾かれ、温められて幸せな香りを漂わせ、帰ってくる。僕も焙煎されたのかも…とか何とか、午前3時に荻野目ちゃん版の『コーヒールンパ』を聴きながら思っていました。

寄付総額：¥4,867,700（2011年6月～2017年2月22日まで）





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**智子さん**（智さんは看護師）「勤務先の医院にいて、まずは患者さんを帰さなきゃと対応しました。患者さんも動揺して、すぐにも出たい、という感じで。いつもは18時半までの診療なのですが、停電してたし、その日はすぐ閉院。一通り片づけて、子供たちが心配だったので、とにかく車で出ました。信号が止まっていたので、そろりそろりと…。車内のワンセグテレビで、他県に津波が来ているのを知りました。でも実は、職場のある城下（しろした）から道路をはさんだ沼館まで津波が来ていたのを知らなかったんです。情報が無いので。もし城下まで来ていても分からなかったと思う。」

▶**圭くん**（当時白山台小6年）「揺れがものすごく、金魚の水槽が廊下にあったんですけど、水がばっしゃばっしゃとあふれて。積んでた辞書が崩れて、教室はちょっとしたパニック状態だった。」

▶**潤くん**（当時白山台中2年）「教室の蛍光灯が割れて、本棚から本が思いっきり崩れて。自分は図書館から借りた本を読んでたんです。返却期限が迫っていたので、早く読まないかと思って、机の下に隠れながらも本を読んで。」

▶**智子さん**「小学校で圭と、近所のおばあちゃんがお孫さんを迎えに来ていたので一緒に乗せて送って、圭を乗せたまま、お兄ちゃんの中学校に行ったんです。ただ、いつもは何かあれば中学校から保護者に連絡メールがくるんですが、あの日は（停電や携帯電話メールが滞るなどの影響で）それがなかった。中学生の子がいる近所の人に知らせにいったら、『えっ、だってメールきてないよ』と。学校から連絡がくるもんだと思ってた保護者も多かったんですよ。」

▶**立基さん**「石油会社勤務で、当時は長苗代のガソリンスタンドの店長でした。いったんは電源回復までの待機を命じられたんですが、情報は入ってこないし、お客様は『ガソリン入れたい』と来るけどできなくて…。15時半とか16時ごろだったかなあ、近くの馬淵川が逆流しているという情報が入り、本社から帰宅・避難の指示が出ました。」

▶**智子さん**「帰宅後は近所の仲の良い家に3家族が集まったんです。ちょうど潤が技術の実習で作った、電池とUSB充電で点くランプと、手回し充電器があったんだよね。それが大活躍（笑）。ガスと水道は大丈夫だったので、土鍋でご飯を炊いて、カップラーメンやレトルトを食べて。子どもたちはそこに泊まって、私たち夫婦は寝るときだけ家に帰っていました。近所で集まったから助かったよね。子どもたちも怖い思いしなくてすんだし。」

▶**潤くん**「電気は3日後に点いたんだよね。学校は1

週間ぐらい休みになって。」

▶**立基さん**「母親が小中野という海沿いの地域に住んでいて、次の日探しに行ったんですが、家はもぬけの殻。避難所にいるんだろうと、小学校など何軒も探し歩いて…。結局公民館に避難していたのを見つけたんですけど、情報が無い中で本当に大変だった。職場もガソリンを求めてひっきりなしにお客様が来るので、連日出勤して情報を待って…。当時外資系の卸会社と取引していて、そこは『危険地帯には安全が確認されるまでタンクローリーも運転手も絶対に出さない』という方針で、結局、販売再開は3日後から。」

▶**智子さん**「友人や親せきから『なんとかガソリンを買いたい』ってひっきりなしに電話はくるしね。」

▶**立基さん**「自分で買ったガソリンや灯油を分けてあげたりもした。あんなに感謝されたことないな（笑）。」

## Q 震災後、どんなことを感じましたか？

▶**智子さん**「やっぱり家族が大事な、って思いました。実家のことも改めて考えましたし。」

▶**圭くん**「当時小学生で、それまで避難訓練とかめんどくさいなと思って、訓練のときわざとゆっくり避難したりしてた。だけど、実際の地震のとき辞書が倒れてきたりして、机の下に避難するのって大事だなんて実感した。」

▶**智子さん**「いちおう、なんかあったら、自宅の地域の避難所は白山台中学校だったから、そこに行くうって決めたよね。」

▶**立基さん**「そのころはいろいろ思ったんだろうけど、忘れちゃうもんだね。こうやって風化していくんだろうね。」

▶**智子さん**「いろいろ準備したりはしたんだよね。災害持ち出し袋買ったね。電池とか、ガスコンロとか、電気使わない灯油ストーブも必要だよなって買って。」

▶**立基さん**「いまでもね、大きめの地震があると、まずお客様がガソリンを買いに来るんですよ。」

## Q10年後はどうなっているでしょう？

▶**立基さん**「おれ、生きてるよね？（笑）。孫がいればうれしいな。」

▶**圭くん**「仕事を辞めないで、やりたいことをやって、のびのびとしていたい。」

▶**潤くん**「分かんないな、未来のことは…」



▶**智子さん**「自分の趣味を楽しみたい。趣味はいまからつくるの、子どもが巣立ったら（笑）。」**終**

## STAFF VOICE

ファンです  
／坂本小雪



【編集後記】今号No.061インタビュー：前田ふひと

「自分たちは八戸だけど、被害らしい被害はなかった」という赤平さんご家族。でも、お話を伺ううち、本来必要な情報を得られないまま苦労したり、間一髪で被害を免れたりした様子が浮かび上がってきました。何かのとき、私たちはどのように情報を得たらよいのか(得られるのか)、考えさせられたインタビューです。

この3月に専門学校を卒業した潤くんと、高校を卒業した圭くんが2人とも就職で自立。このタイミングで“家族写真”を撮らせていただいたことに、私から感謝です。

寄付総額：¥4,867,700 (2011年6月～2017年2月22日まで)

ティーンズ特有の「ウッス自分できるッスやらせてくださいッス! あざーす!」的な軽率なノリで tovo plus シーズン2からお手伝いを始めました。さかもとです。

10年間で取り組む活動なんて、そもそも身近なちょっとしたことを続けるのも三日坊主の私は考えたこともなくて、参加した当初は10年というものすごい年月は本当に経つんだろかなんて思ったりしてましたが、今年5月には遂に自分と家族が取材を受ける番になり、そして先日小山田さんの姿が写った100号を見た時は、あの話は本当だったんだ…! みたいな、まだ実感が沸かない衝撃を覚えました。

この光陰矢の如し感は俗に言う、楽しい時間はあっという間に過ぎてしまいましたが〜というやつだと思うのです。かわいいグッズをゲットしたり、取材したり、イベント出店の売り子したり、ファシリテーターの活動に参加したり、メン

バーのみならず tovo を通じて色んな人と交流できたこと、加えて小山田さんは、 tovo の活動以外のプライベートでもおもしろそうな活動や人との繋がりをつくってくれて、諸々の充実感が tovo スタッフであることを「震災遺児支援チャリティープロジェクトのお手伝い」以上のめっちゃめっちゃ有意義なものにしてくれていたのです。

センスあるデザインのグッズ、お硬くないコンテンツ。チャリティープロジェクトとして良い意味で tovo は非常識だと思っています。何かが起きるぜ…! というわくわく感がある。なんというか純粋にファン! です!

そしてその愛が実を結びまして(?), このたびスタッフ一同の似顔絵を手がけさせていただきました 笑

残り1年の tovo の活動を見守るついでに、似顔絵気になった方はどうぞ Instagram の方からご一報ください 笑**終**





**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**圭吾さん**「当時はまだ結婚する前でした。私は木材を配達する仕事をしていて、地震があった時は弘前市内を車で走っていました。車の中にいたので地震には気が付かなかったです。信号が消えているのを見てはじめて、あれ？どうしたんだろう？という感じで。停電はしましたが、その日は配達を続けました。地震の後は運ぶ荷物が入ってこなくて一時的に仕事は減りましたね。しばらくは混乱した雰囲気が続きました。」

▶**麻未さん**「私はヘルパーの仕事をしていて、ちょうど利用者さんを病院に連れていったところでした。地震が来て病院も停電したので、パソコンとか、色々な電子機器が使えなくなったようで、結果的に診察が出来なくなってしまいました。自動ドアも開かないので帰るにも帰れないという状態が続きました。施設に連絡をしたかったんですがケータイも繋がらなくて、利用者さんと困ってしまっで…。その後しばらくして施設に帰ったんですが、やっぱり施設も停電していたので、利用者さんのごはんを作れなくて食べるものを買いに行ったり、エレベーターも使えないので2階から利用者さんを抱えたりと、とにかくバタバタしながら過ごしました。その日は普段より遅くまで仕事をしましたね。それから普通の生活に戻るまでには、けっこう時間がかかったという印象です。」

**Qその日の夜は？**

▶**麻未さん**「震災があった時はお互い実家暮らしでした。たまたまですが、お互いの家では薪ストーブを使っていたので暖房はいつも通りだし、食べるものも困った記憶はないですね。」

▶**圭吾さん**「コンビニやスーパーに行ったら商品がなくて驚いたんですが、家に残っているものを食べたりして、物がないうちにやりくりして過ごしましたね。」

**Q震災後変わったことは？**

▶**麻未さん**「うーん…正直、ないかもしれない笑あんまり意識してないというか、特に変わらずって感じですよ。」

▶**圭吾さん**「自分も特に変わったところはないです。」

**Q10年後のイメージは？**

▶**麻未さん**「そうですね…碧斗と萌愛は地震の後に生まれているので『東日本大震災』っていう大きい地震があったんだよ、ということはしっかり伝えたい

です。もちろん10年後も何もなく平和に暮らしているのが一番だけど、自然災害というのはいつどこで何が起きるかわからない怖さがあると思うので、子供たちにはそのことを意識して生活して貰いたい。

碧斗にはいつも話していることなんですが、まわりに困っている人がいたら助けてあげられるような、思いやりのある人になって欲しいと思っています。もちろん、碧斗だけじゃなく萌愛もそういう人になって貰いたいです。」

▶**圭吾さん**「10年後…とにかくみんな病気がなく元気で、子供たちには友達がたくさんいて、笑いが絶えないというか…みんなで楽しく過ごせていたらいいなと思います。」

▶**碧斗くん**「りんごを作るお手伝いがしたい!!」終

【編集後記】今号No.062インタビュー：工藤 文昭

木村さんのお宅からほど近い津軽富士見湖畔でインタビューさせていただきました。春の陽射しがまぶしい休日で、湖には多くの家族連れの姿が見られます。碧斗くんは元気いっぱい走り回っています。一方、人見知りもせず、ずっと圭吾さんに抱かれています萌愛ちゃん。麻未さん曰く、元気すぎる兄を見ているのでその分萌愛ちゃんはおとなしい、とのことですが、10年後は果たしてどんな2人に成長することでしょうか。

寄付総額：¥5,184,238(2011年6月～2017年4月25日まで)



## COOKIES



## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**光治さん**「秋田県の大館市に『錦』という美味しいラーメン屋があるんですが、遊びがてらその店にラーメンを食べに行った帰りに地震がありました。ちょうど、碓ヶ関の道の駅に入って、おみやげコーナーを見てたら揺れ始めました。駐車場の車もユサユサと揺れていて、すぐにおさまるかなと思ったんですが、とても長く揺れていました。誰かが外に出始めたのをきっかけに、みんなが外に避難しました。立っているのもキツイ感じの揺れでしたね。」

▶**美記子さん**「駐車場で待機して、揺れがおさまってから、母が1人で弘前市の家にいたので、すぐに携帯で連絡して状況を確認しました。特に大きな被害はないと聞いて安心して、帰路につきました。」

▶**光治さん**「その時は、道の駅でもみんなが落ち着いていたので、ちょっと大きな地震だったなという印象しかなかったんです。ただ、信号が全部止まっていたので、ちょっと困ったことになるなと思いましたが、皆が気をつけながら、譲りながら走っていたので、案外スムーズに、まだ明るいうちに弘前市の家に着いた記憶があります。」

## Qその日の夜は？

▶**光治さん**「家に着いたのが、たぶん夕方5時くらい。もちろん、停電だったので、反射式のストーブを出してきて、ロウソクを灯して過ごしました。夕飯をどうしようって話になって、コンビニへ行って、おかゆとか買ってきただすよね。」

▶**美記子さん**「うちは全部IHなんです。そうなっちゃうと本当に不便ですよ。次の日は、炭をおこして、土鍋でご飯を炊いて、冷凍のお魚を焼いて食べましたね。」

▶**光治さん**「あまり不便を感じた記憶がないんですよ。」

▶**美記子さん**「その夜はずっと話をして過ごしてたかも。」

▶**光治さん**「津波の被害を知ったのはいつなんだろう？ たぶん、電気が復旧してからかもしれないです。次の日は普段通りに仕事に行ったんですが、仕事にならないってことで、早めに帰ってきました。その後に電気が復旧して、テレビでみたことのない光景が放映されていて、本当にびっくりした記憶があります。」

## Q震災後変わったことは？

▶**光治さん**「当初は、何かあった時にすぐに家から出かけられるように準備していました。でも、正直、今は危機感が薄れてしまったように思います。」

▶**美記子さん**「当時はいろいろ準備していましたね。現在も被災地の人たちが不便な生活を強いられていることを考えると、今でも賛沢はできないと思っています。」

▶**光治さん**「原発のこともそうですが、以前と比べて社会的ないろいろな問題に関して興味を持つようになりました。」

## Q10年後のイメージは？

▶**美記子さん**「新しい工房でモノ作りをして、犬と一緒に3人でゆっくり暮らしたいですね（笑）」

▶**光治さん**「家族としては、新しい工房で山の中でゆっくり創作活動をしていきたいです。個人的には、5年後くらいに、アーティストとして大々的に評価されて、10年後には海外で個展開催ですね（笑）」終

【編集後記】今号No.063インタビュー：小山田 和正

今号は、tovoの藍のボランティアに参加してくれたり、また個人的にも交流の深い、オリジナルけしき雑貨で全国のクラフトイベントを飛び回る「クッキーズ」の藤田ご夫妻です。このイベントに出る為に頑張り続けたという弘前市のクラフトイベント「津軽森2017」会場にて撮影。この号が出る頃には、お世話になっております弘前市「バンブーフォレスト」様にて、「クッキーズ」の個展も開催予定されています。たくさんの方に知って欲しいご家族です。

寄付総額：¥5,184,238（2011年6月～2017年4月25日まで）





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**俊司さん**「仕事でした。先輩と車に乗って移動中の時だったので揺れには気づかなかったけど、信号が傾いているのを見て、これはヤバイと話してましたね。自衛官なので、次の日からは休みなしでしたね。初日は停電でしたが、電気の切り替えは早かったです。そのぶん周りの人を救わなきゃという気持ちが高まりました。風呂とかはけっこう入れませんでした。」

▶**友有子さん**「病院に勤めていて、揺れた時は目眩がしたかと思いました。患者さんが第一なので、自力で動ける人にはとりあえず座ってもらって。職場は2階だったんですけど、停電でエレベーターが使えないので、患者さん数人と一緒に階段を登って部屋に戻ったり、男性職員は車椅子ごと担いだりして階段で移動させて。それが一番たいへんでしたね。次の日からの業務はいつもどおりにできないことも色々あったけど、リハビリとか、とにかく部屋でできることをやりました。」

## Qその日の夜は？

▶**俊司さん**「缶詰を食ったかなあ、確か（笑）。」

▶**友有子さん**「実家はオール電化だったので、カセットコンロでお湯を沸かしてカップ麺とか、親がガスでご飯炊いてカレーとか食べました。ご飯炊くのって、炊飯器のイメージしかなかったから、なるほどなあって。親ってすごいなって思いましたね（笑）。ガスコンロは大事だなんて。蓄暖だったのでその辺は大丈夫だったんですけど、朝が寒かったのでコートとかいっぱい着ました。」

## Q震災後変わったことはありましたか？

▶**友有子さん**「とりあえず、懐中電灯とカップ麺は備えてますね。」

▶**俊司さん**「一番大事なのはライト（明かり）だと思いますね。人間は昼間はいいけど、明かりがないと夜は本当にだめですよ。危ないし、精神的にも明かりって大事じゃないかなって思います。」

▶**友有子さん**「震災のあとって、スーパーとかで買いだめがすごかったじゃないですか。地震があった次の日、まだ電気が戻ってない時、おばあちゃんが散歩に出て帰ってきたら、両手に袋いっぱいカップ麺持ってたのはびっくりしたなあ（笑）。買ったんじゃなく、もらったりしたらいいんですけど、ありがたいなあって。あと、ガソリンも大変だったし久々に自転車に乗ったら、思いの外こげなかった（笑）。」

## Q10年後のイメージは？

▶**俊司さん**「子供ふたりくらいはいるかな（笑）。」

▶**友有子さん**「みんな元気で平和に暮らしてればいいな。子供が生まれても友達と交流したいなあって。家族でイベントに遊びに行ったりしたいなと思います。」

終

【編集後記】今号No.064インタビューと撮影：坂本 小雪

ご夫婦の思い出の場所が弘前公園ということで、石垣修理のため移動中の弘前城本丸前で撮影させていただきました。この日はダンスイベント「SHIROFES 2017」で賑わっており、友有子さんも仰ったように、子供連れで家族みんなでイベントを楽しんでいる人たちや、そういう人たちのための配慮がしっかりなされたイベント運営というのは本当に素敵だと思います。tovoも出店しておりました。足を運んでいただいた皆様、ありがとうございました。

寄付総額：¥5,320,262 (2011年6月～2017年6月25日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**孝也さん**「地震があったのは、南佃のスタジオでアシスタントと2人で仕事をしている時でした。…もう、すごい揺れたんですね。古い建物でしたので『崩れるんじゃないか! ?』と、2人で外に出ました。そしてクルマの中でニュースを見たんです。ワンセグで。そうしたら、僕が18〜19歳の頃に住んでいた名取市の、閑上（ゆりあげ）港が津波の中に消えていく映像が流れていて…。新聞配達をしていた見慣れたエリアが写っていたんで、そこに住む知っている人達はどうかと心配して見ていましたね。少ししてから仕事しに戻ったんですけど、社長に『何してんだ、早く帰れ』って言われまして帰ることに。帰路は信号止まっていて大変でしたけど、みんな譲り合っていて割とスムーズに帰ることができました。」

▶**静香さん**「私はその日、柊馬（当時1歳）と家にいました。柊馬を寝かせて、テレビを見ていたら揺れが来て、停電して…。柊馬を抱っこして、万が一に備えて玄関のドアを開けに行きました。この辺は地盤が固いらしく、そんなに揺れは大きくなかったんですけど、停電は珍しいなと思いましたね。どうしたんだろ? って。16時頃になって夫が帰ってきて『スタジオ（揺れが）凄かったよ!』って言うんですけど、ここがあんまり揺れなかったもんで『え、そんなに?』って感じでした。」

▶**孝也さん**「2人の無事を確認して、少ししたら父も帰ってきました。まだ停電したままでしたけど、父は『大丈夫、うちだっきゃ（津軽弁。「うちは」の強調）なんでもあるんだ』と落ち着いてましたね。確かに（農家のため）お米はいくらでもあるし、ガスで調理できだし、反射式のストーブもありましたし…。翌日、はっち（八戸ポータルミュージアム。青森県八戸市三日町）で仕事の予定だったんですけど、避難所になっているとのことで中止になったり、そのまた次の日も釜石で仕事の予定でしたが、やはり中止になったりと仕事は厳しい状況でしたけども、家の中は落ち着いていました。」

▶**静香さん**「柊馬が初めて立ったのって、この日の夜なんです。なので、色々な意味で忘れられない日となりましたね。」

▶**孝也さん**「もともとこの辺は賑やかな方ではないですけど、この日の夜は更にシ〜ンとしていて星も綺麗でした。その景色にも少し心が救われた気がします。」

## Q心境や生活の変化はありましたか？

▶**静香さん**「食べるものや飲み物を多めに買うようになりました。備蓄するようになったんです。うちは登山によく行くんですが、その度に新しい水や食料に

取り替えています。」

▶**孝也さん**「アウトドアに興味が出るようになりました。何か買う場合も、家族のことや災害時の事まで考えて買うようになりましたね。アパレルにしても、見た目にプラスαを求めるようになりました。あとは、今まで関心なかった畑仕事についても考えるようになりました。自給自足の生活を意識するようになったんですね。それから田んぼや畑も手伝うようになって、自分のとこで採れたものを自分たちで食べるってことを大事に思うようになりました。“作って食べる”っていうことを通して、子供達にもそのありがたさを知ってもらいたいです。正直言って自分はその“ありがたさ”を忘れていて、あの地震で再認識しましたが、子供達には忘れないでいて欲しい。どうやって育て、どうなったものを食べているのか。どの季節に何が美味しいのかとか…食べ物のありがたみですね。あと、植物を育てられたり、家が崩れてもそれを直す知識がある親のことを改めて尊敬するようになりました。」

## Q10年後のイメージは？

▶**静香さん**「このままでいて欲しいですが、今後また何か災害があったとしても、その時は以前よりももっと災害に強い坂本家になっていたらいいですね。そうなることによって、他の人のことももっと考えられるようになると思うんですよ。近くても遠くても、困っている人の力になれるようになっていたい。知っている人が困っていたら辛いですし。」

▶**孝也さん**「家族の仲も良いですし、このまま自然に囲まれて現状を維持できていたら良いですね。さっきも言いましたが、子供達には食べ物のありがたみというものをずっと忘れないで大人になっていって欲しいです。」終

【編集後記】今号No.065インタビュー：なるみしう 撮影：須川健太郎  
食べるものに拘りがあって、食べ物の写真を撮ることが好きだという、プロカメラマン孝也さん。「津波が田んぼを飲み込んでいく映像が忘れられない。」とつぶやく。2011年、インタビュー中にも出てきたスタジオから震災後に独立し、コマーシャルフォトスタジオ『スリーイン』を設立。静香さんもカメラマンとして共に働く。2人とも実に穏やかな空気に包まれており、その2人に笑顔いっぱいの子供たちが包まれている。普通って普通じゃない…って変な表現だけれども、普通な状態は奇跡の積み重ねなんだよなあ…なんて改めて気付かされる。そもそもこの星がこの位置にあること自体が奇跡であって…と、スケールの大きいことを青森市郊外の田んぼの一角で考えていた。

寄付総額：¥5,320,262（2011年6月～2017年6月25日まで）





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**雄大さん**「その頃は結婚前で、会社員だったんですが、自分のこれからの人生について、このままでいいのか悩んでいた時期だったんです。勤めていた会社も良い会社ではあったんですが、会社でのキャリアより、自分のキャリアを積んでいきたいと決断して、会社を辞めたのが、2011年3月11日でした。会社を辞めることを支社長に伝え、一通りの話が終わって、10分後くらいに大きな地震がきたんです。自分の道を決断した日に、大震災が起こり、電気は止まったまま、ライフラインはストップしたまま、そんな中で、次の日から仕事がないって『えー、どうしよう。辞職を撤回した方がいいのかも？』って正直とても不安な気持ちになりました。怖かったですけど、このタイミングで大震災が起こってしまったことは、自分にとって人生について熟考する機会を与えられたのではないかなと思うようになりました。」

▶**亜以子さん**「私は薬局で働いているのですが、その日も職場にいました。地震があって、停電になったのですが、お客さんには薬を作って渡さなければいけないので、即席で薬の袋を作ったりして、工夫しながら薬を渡していました。お客さんが帰った後、みんな家に帰りましょうということになりました。すぐに夫から電話があったので、お互いの安否を確認できました。信号も止まったままの状態で、普段だったら15分程で家に帰れるんですが、30分以上かかって家に着きました。まだ寒かったですよね。」

▶**雄大さん**「その頃は1人暮らしだったのですが、妻の実家とは近かったので、妻が様子を見にきてくれました。車で携帯の充電なんかしながら会ったと思います。水や食料は結構備蓄してたのがあったので、食べ物に関しては困りませんでした。その日の夜は、とても寒くて、布団の中でiPodでラジオを聴いていました。」

▶**亜以子さん**「その日の夜は、寒くて寒くて、余震も多くて怖いし、本当に久しぶりに母親と一緒に寝ました。次の日は、救急の患者さんがいたら受け入れるようにと病院も開いていましたので、停電が続く中で薬局も通常通りの仕事がありました。大きな地震で怖い思いをして具合が悪くなった方などが病院に運ばれてきたりしていました。」

▶**雄大さん**「次の日は自分も混乱していました。『これからやるぞー！』という気持ちで辞職したはずが、様々な情報が入る度に『これから、どうしよう』という不安に変わりました。」

▶**亜以子さん**「テレビも見れずに、断片的な情報だけが入ってきて、不安だけが増幅していきました。本当に恐怖でしたね。」

## Q心境や生活の変化はありましたか？

▶**雄大さん**「明日は何が起きるか分からないと思いました。自分じゃなければできないことをしようと強く思いました。小さい時から空手をやってきて、それを通して身体も気持ちも強くなってきたと思います。そういうのがあったから、絶望的な状況を立ち上げられました。自分ができることは何か？それが、今、子供たちに空手を教えていることに繋がっています。」

▶**亜以子さん**「震災まで、夫と付き合っていて、このままずっと一緒にいたらイイなとは思っていましたが、結婚を意識することはなかったんです。でも、震災があって、混乱している状況の中であって、夫の一番になりたいと思いました。私にとっての一番が夫で、また、夫にとっての一番が私で、お互いがそういう存在でありたいと思いました。2011年秋に入籍して、冬に長男が生まれました。震災がなかったら結婚してなかったかもしれないですね。」

▶**亜以子さん**「私には全く不安はありませんでしたが、夫は仕事を辞めて、空手一本でやっていこうという時に、更に家族が増えるというのは、すごくプレッシャーだったと思うんです。」

## Q10年後のイメージは？

▶**雄大さん**「私は、空手を父から教わるということで親子関係が成り立っていたという部分があって、それを続けてきたことで、自分にとってかけがえのないもの、誇れるものとなりました。子供にもそれを経験してもらえたらと思っています。」

▶**亜以子さん**「空手を教える立場と教わる立場というケジメは保ちつつも、家では親子であって、家族であって欲しいと思います。」

▶**魁士くん**「まだ考えてない…。黒帯までがんばる。」

▶**碧己ちゃん**「…ちっちゃくなる？」終

【編集後記】今号No.066のインタビューと撮影：小山田 和正

今回は、青森市「海和館こども空手道教室」代表の須藤雄大さんご家族。今年の3月に「今の家族のかたちを残しておきたい」と奥様である亜以子さんよりご連絡頂きました（いつもご家族を探すのに苦労しているので本当にありがたいことです。ご家族随時募集中！）。2011年3月11日に辞職、同日に震災発生、それから、結婚、出産、空手道教室の大展開・と続くストーリーは聞いて飽きません。須藤雄大さんは、震災後、教えるだけでなく、選手として復帰し、青森県代表として全国大会に出場、更に外務省の派遣でサウジアラビアで空手指導も行なっています。これについても、東日本大震災がなければ選手として復帰もしなかっただろうとおっしゃっていました。インタビュー時間も長くなり、残念ながら大幅にカットしましたが、須藤さんご家族のストーリーは、これからも東日本大震災と共に歩んでいくことでしょう。

寄付総額：¥5,435,849（2011年6月～2017年8月25日まで）





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**和彦さん**「職場の工場に隣接している事務所の中で地震に遭いました。工場の機械は24時間動き続けているものなので、停電でそれが止まるというのは異常な光景でした。会社では普段から避難訓練をしていたので、地震の後、すぐに機械から離れて点呼を取って、という動きはスムーズでした。その時はまだ、ちょっと大きい地震かな、くらいに思っていて、停電もそのうち直るだろうという感じでした。その日は定時前に解散になったんですが、金曜日だったので、週明けには直っているだろうと思いながら家に帰りました。」

▶**志乃さん**「当時はまだ結婚する前で、自営業なので家で仕事をしていました。手伝いに来ている方と2人で作業中に地震が来ました。家は停電しましたが、電気を使う仕事ではなかったので『大きい地震だったねー』とか話しながら作業を続けました。それから少し経って、『あ、停電してるから信号が消えてる!』と気づいて、暗くなる前に手伝いの方に帰ってもらいました。」

## Qその日の夜は？

▶**志乃さん**「台風19号(通称『りんご台風』平成3年9月)の時に実家が一週間停電したことが頭をよぎって、すぐ食べ物を買に行ったけどお店が開いてなかったのを覚えています。たまたま貰った口ウソクがあったので、それを灯して、食べ物は家にあるものをなんとかやりくりして、暖房がつかないので湯たんぽを出してきたり…。実は震災の前年に、夫からのプレゼントで防災リュックを貰っていて、中に入っていた手回し式のラジオが役に立ちました。」

私の仕事の取引先は東京で、ツイッターを見たら向こうは停電していないことがわかって、こっちの事情を汲んでくれるかわからないから仕事は通常通りにやらないとダメだ!と思って、夜も懐中電灯の明かりで仕事をしていました。

その時は一人暮らしだったこともあって、あんまり不便を感じないというか、次の日に電気が復旧してからはいつも通りでした。」

▶**和彦さん**「食事は家にあるものでなんとかりましたが、停電して暖房が使えないのが辛くて、週末は布団にくるまって過ごしましたね。」

## Q震災後変わったことは？

▶**和彦さん**「会社の工場では電気が復旧しても、すぐに機械を全部動かすところまでは回復できなくて、色々なやりくりが必要でした。数ヶ月間は影響があったような気がします。」

実は震災から一週間後の3月19日に結納を控えてい

ました。式場では地震の影響で結納に必要な物が揃わなくて、準備が大変だったようですが、なんとか無事に執り行うことができました。その後一緒に暮らし始めることになるのですが、地震があった後だけに『防災』ということを考えながら新生活の準備を進めました。それからは年に一度、毎年9月の防災の日に合わせて備えを見直すようにしています。アウトドア好きなので、テントとかガスバーナーとか、防災にも併用できる物が多くて、趣味も半分重なっているんです。ちょっとやりすぎかなというくらいの装備なんですけど…(笑)」

▶**志乃さん**「最近、仕事道具のデジタル化が進んでいるんですが、停電しても仕事ができるように、アナログのものも取っておいてます。防災グッズについては夫にお任せしています(笑)」

## Q10年後のご家族のイメージは？

▶**和彦さん**「10年後もそんなに変わってないような気がしますね。今は仕事もプライベートもやりたいことが多くて、なんでもがむしゃらに頑張ってしまうがちなので、10年後にはもうちょっと肩の力を抜いて、楽に生きていけたらいいと思います。」

▶**志乃さん**「10年前を考えてみると今の自分の状況はイメージできていなかったの、そういう意味では10年後も想像ができないですね。でも、できることなら健康を維持して、10年後も今と変わらずに過ごしたいと思います。」終

【編集後記】今号No.067のインタビューと撮影：工藤 文昭

大の「水曜どうでしょう」ファンである稲見さんご夫婦。結婚前から「企画」と称して二人で番組ロケ地巡りをしていたそうです。ある時、ファンの間では聖地と呼ばれる、札幌の平岸高台公園へ行くことになり、和彦さんはそこで志乃さんへプロポーズしようと考えていました。しかし、いざ公園に着くと、目の前の景色に興奮を抑えきれずにはしゃいでしまい、帰宅するまでプロポーズのことを忘れてしまった、というエピソードも持ちずす(笑)。今回は許可を頂き「DODESYO CARAVAN 2017」の会場で撮影をしました。tovo plusの取材がご家族にとって思い出に残るものになってくれればと、いつも考えています。

寄付総額：¥5,435,849(2011年6月～2017年8月25日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**彩さん**「ちょうど私は息子(岳くん)を妊娠中で自宅にいたのですが、結構長い時間揺れたので怖かったです。揺れている途中で停電になって、外を見たら信号も全部消えていました。」

▶**聡さん**「(自ら経営する自動車整備・修理工場で)仕事をしていました。すぐに停電になったので作業が出来なくなりましたが、翌日には停電が復旧になったのでもう仕事を始めていました。コンビニへ行って食べ物調達しようと思ったけれど、自分たちが行ったときはもうすでにいろんなものが買われてしまった後で、ほとんど何も残っていなかった。ガソリンスタンドはどこもすごい行列で大変なことになっていました。しばらくは仕事で使う車の部品なんかも届くまでに時間がかかってなかなか納品にならなかった…。」

▶**彩さん**「お風呂で使っている充電式のテレビがあったので、それで八戸や各地津波の映像をみたときはとてもショックでした。ゴールデンレトリバーを2匹(コタロウ君7歳と大吉君2歳)飼ってまして、当時はコタロウしかいませんでしたが、揺れている間は部屋のいろんなところに隠れようとして震えていました。」

▶**詩さん**「私は5歳でしたが、その時のことは…あまり覚えていないです。」

▶**彩さん**「娘は保育園に行っていましたので、揺れがおさまって、すぐ迎えに行きました。市内の信号はどれも停電状態で道路はちょっとしたパニック状態でした。」

## Q心境や生活の変化はありましたか？

▶**聡さん**「震災後、しばらくは水や食品の買い溜めをしたり、車のガソリンもまめに入れたりしていたけれど、最近はその当時の意識は薄れてきたかな。震災はもちろんだけれど、今はやっぱり北朝鮮の弾道ミサイル発射が怖いですね。」アラートが鳴るとドキッとします。」

▶**彩さん**「直後と比べたら、時間の流れとともに震災に対する意識は薄れてきているのかもしれませんが、でも、6年経った今でもまだ仮設住宅で生活されている方も多くいらっしゃるでしょうし、爪痕はまだ残っていますよね。数年前から家族で年に一度福島県へ行っているんです。犬と一緒に泊まれる宿泊施設へ泊まりに行くのですが、犬用の温泉もあってとても気に入っているところなのでここ数年は毎年行っています。福島県は原発事故の影響で風評被害などありましたが、こうやって年に一度でも訪れることで復興支援に繋がっているといいなと思います。」

## Q10年後のご家族のイメージは？

▶**詩さん**「病気の犬や動物を助けてあげたいので、10年後は獣医さんを目指して頑張っていられるといいなと思います。」

▶**岳くん**「大きくなったら何になりたいかまだ決まっていなくて、これからお父さんにサッカーを教えてもらおうので、サッカーが上手になりたいです。」

▶**聡さん**「いろいろ変化はしているのだと思いますが、今と変わらずそれなりに過ごせていたらそれが一番かな、と思います。」

▶**彩さん**「10年後…、コタロウはもういないだろうな。大吉も今2歳くらいなので、どうだろう、まだ生きているかな…。犬、二匹いる生活が当たり前になっていて、いなくなるなんて考えられないです。お姉ちゃん(詩さん)はもしかしたら県外に出ていないかもしれないね。そう！いつかパピーウォーカー(盲導犬候補である生後2ヶ月の子犬を約10ヶ月間家族の一員として育てるボランティア)になりたいという夢があるんです。子どもたちが大きくなって落ち着いたら、ぜひパピーウォーカーに挑戦していられたい嬉しいです。」終

【編集後記】今号No.068のインタビューと撮影：笹森まさみ

今号より tovo PLUSのお手伝いをするになりました笹森まさみです。初インタビューをさせていただいた浅井さんご家族はみんなとても仲良しの素敵なファミリーでした！お話を聞きながら2匹のゴールデンレトリバーに対する愛情がとても伝わってきました。長女、詩さんの将来の夢が「獣医」というのも2匹との日々があっただけこそ生まれた「夢」なのだそうです。撮影場所はワンちゃんたちの散歩コースでもある自宅からすぐの海！インタビューを通し、今後も素敵なご家族との出会いが楽しみです。

寄付総額：¥5,708,704(2011年6月～2017年10月25日まで)





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**聡さん**「高校教員をやっているの、あの時は学校の職員室にいました。生徒たちには教室へ行って待機するよう指示してから、職員で集まって、遠くから通っている生徒の親御さんへ連絡して迎えに来られるかを確認しました。迎えを待つ子は理科室にストーブを入れて待機させて、迎えが来られなかった生徒は職員が送っていった。生徒たちを帰宅させて、職員も18時半頃には学校を出ました。私は学校から自宅まで徒歩で通える距離なので、外に出てうちに着くまで歩いた真っ暗な道中、すれ違う車のヘッドライトだけが明るかったのが印象に残ってますね。私が小6のとき、十勝沖地震を体験したんです。あの時のようにゆっくりと大きく揺れていたから、どこかで大きな地震が起きてるんだろかなとはわかった。停電もしてるし、ただ事でないなと。うちに帰ったらロウソクがついてたのも印象的でした。」

▶**智礼さん**「小6のときで、帰りの会の時でした。机の下に隠れてと言われて、町会ごとにみんなで固まって帰ったのを覚えてます。」

▶**千紘さん**「私は中3で、塾に向かう途中の道路を歩いてたら揺れがきたんですけど、最初は自分が揺れてるんだろなって思いました。でも電線が変に揺れてるし、そのへんの家の人々が外に出てきて『震度4だって』とか、全然知らない人だったけど話をして、それですごく心配になったので家に戻りました。」

## Qその日の夜は？

▶**奈津子さん**「結婚式の時の大きいキャンドルを点けました。カセットコンロでお湯を沸かしたり、ガスも使えたので鍋でご飯を炊いたり。テーブルに布団をいっぱいかけて、こたつみたいにしてみんなで寝ました。」

▶**智礼さん**「ケータイのワンセグが使えたので、それで津波の様子を見ました。」

▶**聡さん**「前の年の夏、家族で宮古へ行った時に通った景色が波に飲まれていて、言葉が出ませんでしたね。その他の情報も車のラジオで知ることができました。」

▶**奈津子さん**「それまで、大きな災害は自分たちの身近にはこないだろうという思いがどこかにありました。でも実際に、東北で今まさに起きているという映像の中の光景は衝撃的でした。」

## Q震災後変わったことは？

▶**奈津子さん**「家具の配置や設置に気をつけるようになりました。倒れないよう突っ張り棒で固定したり。」

電池や缶詰も備えておくようになりましたね。それから、あまり連絡をとっていなかった親戚から震災の時は大丈夫かと連絡がきて。それで返事をしてやりとりしたのをきっかけに、近頃のひどい雨や台風なんかの時も連絡しあうようになりました。遠くの親戚や友人とのつながりが再確認できたなと感じます。」

▶**千紘さん**「実は当時前期の受験に失敗していて…(笑) そのショックがあるうちに地震があって、でも逆に『負けてたまるか』っていう気持ちになれたんです。電気点かなくても勉強できる!!とか(笑)元々負けず嫌いではあったんですけど、もっと強くなったかんじがしました。あとは…これからは一人で別のところに暮らして地震が来たとして、咄嗟の時に一人でなんとか出来る自信がないので、普段から油断せずいようって危機感をしっかり持てるようになったかなあと思います。」

## Q10年後のご家族のイメージは？

▶**聡さん**「あまり変わらなさそうな気がする(笑)」

▶**智礼さん**「10年前と今もあまりかわってないよね(笑)」

▶**千紘さん**「私自身のイメージとしては、自分の力で生活をしていけるようになっていたいと思います。家族には元気でいてほしいし…とにかくみんな健康で(笑)」

▶**奈津子さん**「子供たちが結婚して家族が増えても、みんなで温泉行ったりして、のんびりしていきたいと思いますね。」終

【編集後記】今号No.069のインタビューと撮影：坂本小雪

ご家族でよく温泉を利用されるという仲良しファミリー。撮影場所も、許可をいただき行きつけの温泉前で。奈津子さんや千紘さんのエピソードにあるような震災をきっかけに生まれたプラス要素が、自分自身の成長や変化を振り返った時にあの時のことを思い出せる鍵になるんだと思います。変化を振り返り、風化させることなく、これらにつなげる、ご家族にとってtovo plusの取材がプラス要素のひとつになったらいいと思います。

寄付総額：¥5,708,704(2011年6月～2017年10月25日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**隆之さん**「写真館で撮影してましたね。撮影中にグラッときで…ひな祭りか何かで小さい子の撮影だったんですが、その子は平気そうにしました。」

▶**美世子さん**「その頃、上の子（隆太くん）がお腹の中にいたんですが、私もその撮影に立ち会っていました。揺れて物が落ちてきたとかはなかったのですが、停電してしまったので一度休憩にしました。」

▶**隆之さん**「外を見てみたら、信号機が消えていて。電気が回復する兆しもなかったので、そのまま撮影は中止することとなりました。お客様が無事に帰れるか心配でしたね、その時は。」

▶**美世子さん**「その後で、スタッフの子もお家へ帰らせたのですが、安全に帰れるか心配でした。」

▶**隆之さん**「写真館を閉めて、我々もアパートへ戻りました。途中、コンビニも電気が消えているし、ああこれは…と。最初は大事だと思っていなかったんですが、徐々に感じてきましたね、事の重大さを。（美世子さんが）妊婦だったので、時間が経つにつれだんだん寒くなるし怖さも募っていくし、大丈夫かなって気になっていました。写真館に反射式のストーブがあったので、それをアパートに持って行って使いました。二人で毛布に包まってじっとしていましたね。」

▶**美世子さん**「スタッフの子がアパートにおにぎりやお弁当、あったかいお茶を持ってきてくれたんですよ、私の身を案じてくれて…。凄くありがたかったですね。私の実家（青森市内）の方と連絡が取れなくて心配だったんですけど、身重でしたのでそのまま家にいることにしました。翌3月12日は天気良く明るかったので、実家へ行ってみました。父は前日から仕事だったみたいで、母は一人でロウソク一本で夜を過ごしたと言っていました。電話も通じないし、ラジオから流れてくる情報は怖いものだったし、心細かったみたいです。」

**Q 心境や生活の変化はありましたか？**

▶**美世子さん**「非常時に持ち出す袋を用意しました。最初の頃は期限を見て水を入れ替えたりしていましたが、今の中身は懐中電灯とロウソク、湯たんぽくらいになっています…あ、置き場所は私しか知らないんで、みんなに教えておかなきゃですね。」

▶**隆之さん**「全国の若手写真館経営者が集まる勉強会があるのですが、その仲間でもある大槌町（岩手県上閉伊郡）の写真館の方が震災で亡くなってしまっていて…仲間と一緒に大槌に行き、追悼してきました。大槌では、ボランティアとして津波被害にあったネガや紙焼き写真をきれいに洗浄して、持ち主に

返す活動も行ってきました。被災地でもっと他にできることがあるんじゃないかと思っていたのですが、持ち主さんに本当に喜んでいただけて、改めて写真＝思い出をプリントして形に残すことの大切さを知りました。デジタルデータとして残すのではなく、紙に焼く大切さ。一枚の写真が、家族にとってどれだけ大事なものとなるか。いい仕事をやらせてもらっているなと思うようになりましたね。写真館にいらっしゃるお客様にも、何用というわけではなくても家族写真を撮りましょうとお勧めするようになりました。写真というものは時とともに価値が出ていきます。データで保存するだけでなく紙に残しましょうと、しっかりお勧めできるようになりました。うちの家族も毎年撮るようにしています。」

**Q10年後のご家族のイメージは？**

▶**美世子さん**「みんな一緒にいたい。みんなで笑っていたい。笑っていなくてもいいかな、健康でいてくれたら。健康第一で。みんな朝起きてきて、学校行って、パパと二人の時間があって…そんな普通が一番ですね。」

▶**隆之さん**「とにかく子供たちが元気にのびのび仲良く育ってくれればいいですね。自分はそのために頑張っていられればいい。たとえ写真を仕事にしていなくても、家族が仲良くやっていけるように頑張っていられれば。あと、東北の仲間たちもみんな元気でいてくれればいいですね。もう自分の町に戻ることができなくなってしまった仲間もいますが、元気で写真館を続けてくれていたら嬉しいです。」終

【編集後記】今号No.070インタビュー：なるみしう 撮影：須川健太郎  
写真、撮っていますか？ 食べたものや景色の写真ばかりの自分の携帯。気軽に撮って、どんどん蓄積されていくデータが、近頃の「写真」のような気がします。我が家では昔、撮り終えたフィルムを写真屋さんに出しに行くのは僕の役目でした。歩いてすぐの場所にあった写真屋さん。その店内の匂いを今も思い出せます。「〇日にできるからね」と写真屋のおじさんに言われ、その日に受け取りに行く。そのワクワク感も覚えてます。どんな風に写っているのかは、そこで受け取り開けてみるまでわかりませんでした。そして大きくて厚くて重いアルバムに収め、誕生日会など皆が集まるタイミングで賑やかに開いてみる。そんな、家族にとってもとても大事な存在でした「写真」は。最近、母の写真を撮ったのはいつでしょう？ 家族の写真、家族の姿、家族のカたち、家族の思い出。一つ残らず残したいものですが、切り取るからこそ生まれてくる思いもあると思います。普段から切り取って、形に残していこう。そう思った平成29年師走でございました。





## Q2011年3月11日のこと憶えていますか？

▶**良藏さん**「自宅にいました。めちゃくちゃ揺れてね、店の様子を車で見に来て。三陸はるか沖地震（1994年）のときに、ウイスキーの瓶から何から全部落ちたんですよ。それで落下防止の対策をしていたので、あの日はグラスが何個か落ちたのと壁掛けテレビがぶらさがっていたぐらいで済みました。」

▶**康貴さん**「自分は開店準備のために、歩いて店に向かっているところでした。店に着いたら父がいて。」

▶**良藏さん**「店は大丈夫だから帰ろうとなったんだけど、渋滞して余震もあって大変だったんです。携帯のワンセグテレビを見ていたら、津波が来る、八戸は10メートルという情報もあって。さっちゃんを1人で残してきたから、息子が心配して『なんで置いてきた』ってね。家に着いたら近所の人たちが表に出てワーワー言っていた。津波が来るから逃げないと、と声をかけたけど、『来ない、来ない』って笑われてね。僕は田舎が大槌町で、小学生のときチリ地震津波を経験したし、高3のときは十勝沖地震で津波が来たと、あの日の揺れは絶対に津波が来ると思った。うちはワンちゃんを連れて、（長者地区の）南宗寺が少し高くなっているから、そこへ行ったの。暗くなるまでしばらくいました。」

▶**康貴さん**「夜は家を片付けながら、水は出ていたので、カセットコンロでお湯沸かしてカップラーメン食べて。」

▶**良藏さん**「カートリッジ式の灯油ストーブがあったから、暖はとれたよね。ロウソクで灯りをとって。」

▶**幸代さん**「良藏さんのおうちに電話しようたって、大槌はつながらないわけね。親戚も誰もつながらない。」

▶**良藏さん**「ネットは使えたので、パソコンでずっと検索していた。どうなっているのか、だれにも分からない。1カ月ぐらいは店から帰るとネットで同級生や親戚の情報を探し続けました。」

## Qその後はどうされていましたか。

▶**良藏さん**「1カ月経たないころ、物資を持って大槌に行きました。実家自体は海から離れているので津波の被害はなかったけど、親戚など行方不明の人がたくさんいて…。街は自衛隊が搜索を続けていて入れず、道路にはグチャグチャになった車がいっぱい並んでいるし。とにかくあの、夢かな、という雰囲気ですよ。ただごとではないと。地震の時からそうです。地球が壊れたんじゃないかというぐらいの揺れでしたからね。」

▶**幸代さん**「2013年春ごろ、大槌の人が震災直後に撮った写真展を二戸でやっているという新聞記事を読んで、息子を誘って行っただけです。撮影者の伊藤陽子さんが会場にいたので、『主人も大槌なんですよ』と話をするうちに、良ちゃんと高校の同級生、部活も一緒だったと分かったの。」

▶**良藏さん**「さっちゃんが伊藤さんの連絡先を聞いてきて、俺が電話したんです。もともとカメラが好きで、あのときも車に積んでいた。震災直後、報道陣が入る前の写真です。店の常連だった新聞記者に話したら、『マスター、その写真展、八戸でやったら』って。そのときは八戸で大槌のことやっても仕方ないよと答えた。でも一晩考えたら、なんで自分はそんなこと言ったんだらうって思って、次の日『やってみよう』って。その年の8月にはっち（八戸ポータルミュージアム）で開催したんです。」

▶**幸代さん**「伊藤さんも被災しているし、『なんにも心配しなくていいから』と身一つで来てもらって、会場など全てうちで準備した。1,000人ぐらい見に来てくれたよね。伊藤さんがね、『写真を見ると、匂いが分かる、思い出す』と。写真を見ながら、このときの匂いがこうだった…と説明していたね。」

▶**良藏さん**「大槌はかさ上げが終わって家を建てられるようになったけど、6割ぐらいは空いているみたいです。あまりに期間が経って、待てなかった人はすでに内陸へ、僕の姪っ子ももう盛岡に家を建ててしまいました。」

▶**康貴さん**「私たちの意識もだいぶ薄れてきたというか…。前ならカップラーメンを山盛り置いてたけど、最近は体に悪いと買わなくなったり、水も結局は腐らせるからとあまり置かなくなったり。備えはおろそかになってきている気がします。」

## Q10年後のご家族のイメージは？

▶**良藏さん**「僕ぐらいの歳になると、10年後というのはなかなか想定しないの。2〜3年後だったらイメージできるんだけど。大槌のことはずっと頭にある。大槌は街をつくりなおしてるんで、コンパクトでもいい、震災とかのイメージなく、快適な街になっている、そういうのを早く見たいなと。10年なんて待てない、あと5年ぐらいで見たい。」

▶**幸代さん**「私はあと5年ぐらいは店に出ていたいね。10年は無理でもね。」

▶**康貴さん**「お店は10年後も同じ雰囲気、同じような感じでいられればいいなと。このまま変わらないでいられればいいなというのが、一番の望みです。」**終**

【編集後記】今号No.071のインタビューと撮影：前田ふひと  
横丁に紫の文字の看板が目立つ「洋酒喫茶プリンス」。八戸市民はもちろん、県内外のファンが繰り返し訪れる“ディープ八戸”の象徴的な存在です。いつもカウンターの中でニコニコしているマスターが、取材のとき、ご自分と対話するかのよう一言一言をかみしめながら、大槌のことを話してくださいました。心に故郷を秘めつつ、多くのお客様を笑顔にしておられたのだと思います。テーブル起こしをしていると、3人の優しい語り口が耳から染みこんでくるようで、大勢の人がプリンスに足を運ぶ理由が分かった気がしました。

寄付総額：¥6,015,019（2011年6月～2017年12月14日まで）



撮影場所：カルチャースクール LOCO STUDIO(ロコスタジオ)  
(弘前市駅前町)



### Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

- ▶**貴史さん**「ダンスレッスンの仕事へ行く準備してたんだけど、え？！何？って、母親と2人で驚いていて、ダンススクールのスタジオの鏡とか絶対割れてるかもなとも思ったんだよね。」
- ▶**恵美さん**「私は、今はタヒチアンダンスのインストラクターをしてるんだけど、当時はOLで事務職してたから、職場で仕事してたね。」
- ▶**恵美さん**「すぐ停電になったんだっけ？」
- ▶**貴史さん**「いや、途中でなくて。」
- ▶**恵美さん**「あ、で、TVつけてビックリしたんだ。津波に飲まれてたから。」
- ▶**貴史さん**「自分は携帯のワンセグで見て、え！そんなに！？みたいな。」
- ▶**恵美さん**「で、帰る頃に、たしか停電になったんじゃないかな？」
- ▶**貴史さん**「その日はけっこう寒くて、でも、停電で石油ストーブが点かなくて、反射ストーブをめっちゃ探したんだけど、みつからなくて、自分の父親が借りてきて、それで暖をとってたな。それと、ずっと前に郡山に住んでたことがあって、みんな大丈夫かなってのが頭をよぎった。」
- ▶**恵美さん**「私はすぐには帰れなくて、営業の人たちが帰ってきて、みんな揃ってから帰ることになって、その帰り、街中の電気が消えてて真っ暗すぎてゾンビタウンみたいでビックリした。そんな光景一生に一度見るか見ないかで、映画のワンシーンみたいだった。信号も消えてたけど、意外とみんな交通ルールを守って運転するんだなって不思議に思ったんだよね。」
- ▶**貴史さん**「あとは携帯の充電ができなくて、車だったら充電できるからと思ってガソリン入れにいったら車がすごい並んでたな。恵美に『大丈夫？』って電話かけたんだけど、『電池なくなるから切るよ！』って言われたのも覚えている（笑）」
- ▶**恵美さん**「覚えてる？繋がったかどうか、覚えてないや（笑）」
- ▶**貴史さん**「あと、その時に葛藤があって、こんな時にダンスレッスン、楽しいことなんかしててもいいのかな？って。」
- ▶**恵美さん**「私も。みんな思ってたよね、私の周りの先生をやってた人たちもそれは思ってた。」
- ▶**貴史さん**「さすがに震災直後はできなかったけど、でも、しばらくして、自分たちはそういうダンスとかでみんなを楽しませられるんだ！って思えるようになったんだよね。」
- ▶**恵美さん**「みんなの喜ぶことをするのが、私たちの仕事なんだってなっていったよね。」

### Q震災後、何か変わったことはありますか？

- ▶**恵美さん**「震災後に結婚して、花嫁道具の中に反射式ストーブがあったよね。2人で絶対買わない！って言って買ったよね（笑）。2013年に結婚して、震災から時間は経ってたんだけど、絶対家がないとダメだって思って、あの時、家に反射式ストーブがあることに凄い感謝したんだよね。親さすがだなんて。あと、懐中電灯とかローソクとかも花嫁道具の中に用意したよね。」
- ▶**貴史さん**「震災が起きてから、そういう物を用意することの大切さに気付かされたよね。」
- ▶**恵美さん**「あとは、何かあったら何処に集合とか、そういう意識はついたよね。2人で学校に集合しようって決めてね。」
- ▶**貴史さん**「岩木にいたら、いわき小学校で。」
- ▶**恵美さん**「私は、地元だったら地元の小学校にいるからとか、そういう話したよね。結婚してからは決めてないけど、そういうことは一応考えるようになったよね。」

### Q10年後の2人がイメージすることは？

- ▶**貴史さん**「10年後はまだイメージできないけど、最近怖いと思ったのは、北朝鮮のミサイルが飛んできた時に、アラートが鳴って、震災の時に感じたザワッとした思いが蘇ってきたね。」
- ▶**恵美さん**「あれは、大げさじゃなくて本当に死ぬ！って思って、アラート鳴った時に、2人で飛び起きて避難しようとしてたよね。」
- ▶**恵美さん**「今は携帯でアラートとか、地震を知らせてくれるからありがたいよね。知らせてくれることで待ち構えられる。この前、会議中に地震がきた時も鳴って、みんなでドアとか開けて、逃げる態勢が取れたから、そういうものがあることに感謝だね。」
- ▶**貴史さん**「それが、10年後にもっと発達してくれたらありがたいよね。自分の10年後のイメージってわけじゃなくて、周りに対する望みだけ。」
- ▶**恵美さん**「私は、震災の時も今も、何かが起きた時に人のために何ができるか考えて行動できる人になりたいと思うし、これから、人の役に立てる、知識や経験を蓄えられたらいいなって思うかな。」終

【編集後記】今号No.072のインタビューと撮影：赤石 嘉寿貴

初めまして、今月のtovoの取材を担当させていただきました赤石嘉寿貴です。震災から7年目の3月、思い出すのは、「自分は被災者の方々のために何ができるんだろう？」と考えていたこと、でも、その当時していた仕事を放り出して復興支援に行くもの何か違うなとも感じていました。仕事を続けて、今、目の前にいる人たちの生活を守ることが、間接的にでも復興に繋がるんだとも思っていたし、それで良いのだと思っていました。2017年の9月偶然にも見かけた、tovoへの協力者募集の案内を見て今出来ることがあるなら力になりたい！と思ってすぐ連絡をしました。今回、偶然にもこのフリーペーパーの編集に携わる機会を頂けたこともまた間接的な支援なのかもしれないけど、前よりも復興支援というものに関われている気がしています。7年という月日の流れの中で自分自身も成長して、その当時は、力不足でできなかったことも少しはできているのかもしれませんが、取材してお話を聞く中で、自分もまたこれからたくさん知識と経験を積み重ねて、自分のしていることで人の役に立てるようにますます成長していきたいと思いました。

寄付総額：¥6,165,483 (2011年6月～2018年2月21日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶一久さん「むつ市に向かって運転中に地震が起こりました。運転中でしたが、すごい揺れを感じて、歩いている人が電柱につかまっていた。すぐに引き返したんですが、信号が動いてなくて、大渋滞をくり抜けて帰宅しました。ここ（風間浦村）は少し土地が低いので、津波の心配があるということで、山側を通るここに向かう道路はすぐに封鎖されたんです。封鎖される前に帰ってこれたので良かったですね。夕方遅く帰ってくる人たちは、通行止めになっていたの帰ってこれなかったり、子どもの迎えに行けなかったりしていました。漁師たちはすぐに沖に船を出して、その日はすごい漁火でした。」

▶愛さん「私は1人で家にいたんですが、すごい揺れで、建物の揺れの音が怖くて、すぐに外に出ました。そとに出ると近所の人たちも外に出てきていました。電池が欲しいともらいにくる方もいて、電池を貸したりしました。着替えとかバックに詰めようかと思ったんですが、薄暗くて、どうしよう、どうしようと思っていたら、パパ（一久さん）が帰ってきて、車のテレビでニュースを見たんですが、とてもビックリしました。電話はつながらなかったんですが、子どもたちの小学校や保育園は高台にあるので安心していました。津波警報は出ていて、漁師の人たちは、引き潮でいつもは見えないような岩が見えたって言ってましたね。」

▶真樹くん「小学校2年生でした。児童総会というのがあって、みんなで会議みたいのをしている時に地震がありました。校長先生が外に出るぞ！と言って、みんなで校庭に出ました。揺れがおさまったので中に入ったんですけど、すぐに2回目の長い揺れがきて、また外に出ました。揺れがおさまったので、皆で体育館で待機をしていました。小学校は避難場所にも指定されているので、少し経つと近所の人たちが集まってきました。親が迎えにきてくれる人もいましたが、親が（通行止めなどで）迎えにこれなかったり、家に戻れない人は家族が学校にきて、学校に泊まる人も多かったです。」

▶穂花ちゃん「覚えてない…。」

▶愛さん「穂花は保育園でお昼寝の最中だったらしいです。私の父が、警察へ協力をするような仕事をしていて、パトロールカーを持っていたんです。迎えに行行って頼んだわけではないんですが、その車で穂花を迎えに行っていました。」

▶愛さん「その日の夜は何を食べたか覚えてないんですが、何度も余震で家が揺れていて、その度に茶碗の揺れる音がとても怖くて、みんなで車の中でテレビを見ながら寝ました。なかなか眠れなくてビール飲んだのを覚えています。充電の少なくなった携帯で、

土鍋での米の炊き方を調べて、次の日は土鍋でご飯を炊きました。」

▶穂花ちゃん「チョコパイを食べた。」

**Q震災後、何か変わったことはありますか？**

▶愛さん「集合場所を決めようとしたけど、なかなかまとまらなかったです。私が買い物に出かけて、穂花が1人になる時、『もし何かあったらどうするの？』ってしつこく聞かれるようになりました。当初は手動式のラジオなどを準備していましたが、だんだん意識はなくなってきましたね。仕事の方では、震災後に三陸でわかめ用の木箱を作っている会社が木箱を作れなくなったということで、代わりにその仕事を請け負ったりしました。」

▶真樹くん「学校では避難訓練の数が多くなりました。あと、賞味期限が切れる前の非常食もよく配られるようになりました。この震災を経験するまでは、地震がある、津波があるということを知らなかったの、こういうことでも人は死ぬんだということや、海の近くに住んでいるという自覚を持つようになりました。」

**Q10年後の家族のイメージは？**

▶愛さん「全く休みがないんです。だから、子どもが大きくなったら、夫婦で函館の朝市に行きたいです。」

▶真樹くん「今は特にないです。毎日働くのかなあと。」

▶穂花ちゃん「遊んでる？」終

【編集後記】今号No.073のインタビューと撮影：小山田 和正  
フリーペーパー「tovo plus」は、「あおもりの100家族、わたしたちのこれから」というコンセプトで創刊し、目標の100号まで残り27号となりました。当初は、青森の全市町村の家族の声を紹介したいと考えていましたが、青森はとてとても広く、仕事の傍らで、僕の住む場所から遠い場所での取材を調整し、その為に時間を割くのはなかなか難しいのが現実です。と言っても、できうる限り自分の目標に近く努力はしたいと考え、今回は車で片道3時間半をかけて、下北半島、本州最北端に位置する風間浦村の「畠山商店」さんへお邪魔して取材をさせて頂きました。「畠山商店」さんは、木箱、魚箱、りんご箱などを製造し販売している会社です。坂本さんとは、昨年、ご縁を頂戴しメールや電話で何度かやりとりさせて頂きましたが、今回、初めて直接お会いすることができました。漁業と林業が盛んな、海と山に囲まれた地域ならではの貴重なお話を伺えたと思います。ありがとうございました。

寄付総額：¥6,165,483 (2011年6月～2018年2月21日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**優司さん**「私は訪問介護の仕事をしていて、地震が来た時は利用者さんをお風呂にいられているところでした。電話が繋がらないからとりあえず会社に戻って、人工呼吸器が必要な利用者さんを受け入れ可能な病院に連れていくために動き回りました。家に帰ったのは夜8時くらいだったかな？当時は結婚する直前で、仕事から帰る前に紗織の実家に寄ったら家族みんなが無事だったので安心しました。」

▶**紗織さん**「当時は東京から地元に戻ってきた次の年で、臨時で津軽塗の仕事をしていました。地震で停電したのでその日はもう作業ができず、いつもより早めに帰りました。コンビニには行列ができていて、自分も何か買わないといけなような気になって、家族の食べるものを買って帰りました。停電で暗い中聞いたラジオでの被災地の様子や、次の日電気が復旧してから見たテレビの映像にショックを受けて、今でも津波の映像はあまり見たくないです。」

▶**優司さん**「地震の直後ケータイで『津波が何メートル』とかそういうニュースを見たので、大変な地震だという認識はあったけど、電気が復旧してテレビをつけて、実際に映像として見た時には想像をはるかに越える被害でした。個人的にはそういう映像が流れる時にはしっかり見て、忘れないようにしなきゃいけないと思っています。」

**Qその日の夜は？**

▶**優司さん**「普段は使っていないダルマストーブを出してきて暖をとりました。カップラーメンとビール1本飲んで寝ましたね。」

▶**紗織さん**「うちはオール電化ではないんですが、ほとんど全てを電気で賄っていて、停電で暖房も使えなかったのが寒くて暗くて、とても不安な気持ちでした。」

**Q震災後、何か変わったことはありますか？**

▶**優司さん**「仕事で車を使うのでガソリンの確保が一番大変でした。地元のFMラジオで『どこのガソリンスタンドが何時から開く』といった情報を流してくれていたの、ラジオはずっと聞いていました。非常食を備えたり、節電する意識を持ったりもしましたね。」

▶**紗織さん**「地震が起きる前から思っていたことですが、『必要なものを必要な分だけ消費して暮らしていけたらいいな』と、より強く思うようになりました。」

**Q10年後の家族のイメージは？**

▶**紗織さん**「この10年の間に家族が増えていたらいいな。木綿花には10年後はまだ子どもらしい子どもでいて欲しいです（笑）。子ども服『inorino』はこれからもずっと続けていきたいです。今はネット社会だから、全国どこにでも商品が売ることができるけど、自分の手が届く範囲でやっていけたらいいと思っています。『街を歩いていたら自分の作った洋服を着た子に会えるかもしれない』って距離感を大事にしていきたいです。今は育児手当を貰ったりして『支援をされる側』だけど『支援をする側』でもありたいと思います。洋服を作るとどうしても端切れが出るので、それを利用して作ったものを売って、その売り上げを寄付しています。そういう活動ができるのも自営業ならではのと思うので、自分でお店をやろうになった良いことのひとつですね。10年以上先の話だけど、木綿花に子どもができた時にはたくさん手助けをしてあげたいと思っています。」

▶**優司さん**「家族それぞれのやりたいことを10年後もやれていればいいと思います。木綿花には紗織のように笑顔が素敵な人になって欲しいと思うし、10年後も笑っていられるように、その環境を作ってあげたいですね。」

▶**木綿花ちゃん**「きいろいプリキュアになる！」**終**

【編集後記】今号No.074のインタビューと撮影：工藤文昭

子どものための双子服『inorino』をはじめた紗織さん。ワンオペ育児で双子を育てる友人の励みになればと、双子それぞれのサイズにぴったりに合わせた洋服をプレゼントしたことが、お店を起したきっかけだそうです。気が滅入ることも多い育児の中で、それでも頑張る母親の手助けになればと祈りを込めて服を作る紗織さん。それを暖かく見守る優司さん。どこまでも明るくひょうきんな木綿花ちゃん。取材場所は、木綿花ちゃんを授かる前に子宝成就を願ってお参りしたという最勝院五重塔。境内は桜が満開で、気持ちの良い春の風が吹いていました。

寄付総額：¥6,299,286(2011年6月～2018年4月25日まで)



**Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？**

▶**亜紀子さん**「勤務中でした。当時は百貨店に勤務していたのですが平日でしたし、店内もわりと静かでした。揺れだした瞬間は『何が起こったんだろう』とびっくりしました。お客様の混乱や商品の陳列棚が倒れたり物が壊れるということもありませんでしたが、すぐに外へ避難しました。」

▶**一弘さん**「私は、当時勤めていた会社の東北エリア会議に出席するために福島県の郡山にいました。前日、郡山に宿泊していて、地震が起きた時間は、ちょうど青森へ帰るため車で高速に乗ったばかりでした。空を飛んでいる鳥の動きがなんかおかしかったんですよ。そうしたら隣の車線を走っているトラックが幅寄せをしてきたので危ない!と思ってブレーキを踏んでいるのに効いているのか効いていないのか分からない感覚でした。次の瞬間道路が大きく波打ちはじめて、『ああ、これはもう死ぬのかな』と思いました。揺れがおさまり、高速道路は分断されたところもあったようで通行止めになったので、一旦、郡山の事務所へ戻り、そこでテレビをみて大きな津波がきていることを知りました。とにかく『早く青森へ帰りたい』と思いましたね。その日のうちに山側を通して、途中猛吹雪に遭いながらも何とか青森まで帰りました。着いたのは翌日の昼過ぎだったと思います。」

▶**亜紀子さん**「その日のラジオでは、震源地が福島あたりだと放送されていたので、福島に行っている主人のことが心配でパニック状態でした。携帯電話で互いの安否が確認できたときは本当にホッとしました。」

私の父が岩手県陸前高田市の出身で、父の姉が陸前高田の海に近い場所に住んでいたのですが3.11の津波に流されて亡くなりました。小さい頃はよく叔母のところに預けられていたので、昔からとても可愛がってもらいました。後になってから陸前高田市を襲う津波の映像を見たのですが、あれじゃ逃げられないよなと思いました。私の第二のふるさとが一瞬で飲み込まれてしまい、跡形もなくなってしまいました。叔母の家はあの『奇跡の一本松』があるすぐそばでした。叔母は瓦礫の上に乗った状態で1ヶ月も経たないくらいで遺体が見つかりました。陸前高田では人口の約一割の方が亡くなられましたが、流された遺体はなかなか見つからず叔母の様に1ヶ月ほどで見つかったのはとても早いほうでした。

叔母の遺体が見つかった翌月に主人と私、そして娘も連れて陸前高田へ行きました。内陸は花があらこちらに咲いて、野山の緑がきれいな風景が広がっているのに、海側に近づくと突然辺り一面

泥と瓦礫で茶色一色。呆然とするばかりでした。津波に流された車がまるで万里の長城のようにずらりと積み重なり、瓦礫は大きな山のようにでした。

鮎釣りをする人もいたキレイな川は泥で埋まり、鉄橋はまるで溶けた飴のように捻じ曲がっていました。ご遺体を運んでいる車も何台も見ました。

叔母の遺品を捜しているときも毛のようなフサフサしたものが見えて何だろうと思ったら、亡くなったワンちゃんでした。鎖につながれたままだったので逃げたくても逃げるが出来なかったんですね。

3.11から2ヶ月近く経っていても、そんなつらい場面がまだたくさん見られました。遺体捜索をされていた自衛隊やボランティアの方々には頭が下がります。あの泥と瓦礫の状態の中で捜索するのは想像をはるかに超えて体力も、そして、精神的にも大変なことだったと思います。」

▶**一弘さん**「震災後、毎年お盆には陸前高田を訪れています。毎年思うのは復興がまだまだ進んでいないということ。あんなに全てが無くなってしまえば、正直どこからどう手をつけていけばいいのか誰もわからないと思います。道路の整備や瓦礫の撤去だけでも3〜4年はかかっていると思います。本当のまちの復興はこれからなのかもしれません。」

**Q震災後、何か変わったことはありますか？**

▶**一弘さん**「自分たちの店(アウトドアウェア、グッズなどを扱うセレクトショップ「ギャレット」)で、災害時に使えるキャンプグッズなどを意識して取り扱うようになりました。東日本大震災をきっかけに、たとえばランタンとか、災害時用の商品に力を入れる海外ブランドも多くなったと感じます。自分たちも何かしたいと思うけれど、なかなか日々の生活に追われて、結局出来ることは募金だったり、被災地の商品を買ったりすることくらいしかない。でも、ずっともっと何か出来ることがあればいいとは思っていたんです。」

▶**亜紀子さん**「今回、tovoさんのお話があってぜひ自分たちの見てきたことをお話して伝えられたらと思いました。つらく、悲しい現実ではありますがこれを伝えていかなきゃいけないなと。」

**Q10年後の家族のイメージは？**

▶**一弘さん**「変わらないでいることですかね。日常を維持していられたらそれが一番だと思います。」

▶**亜紀子さん**「毎日の当たり前のことが一瞬で無く



なってしまう。こういうことがいつどこで起こるか分からない。だからこそ何てことはない普通の毎日が変わらないでいてくれたらいいと思います。」**終**

【編集後記】今号 No.075 のインタビューと撮影：笹森まさみ

「自分たちの見てきたことをお伝えして tovo のお役に立つのなら喜んで協力したい！」と快くインタビューを受けてくださった山谷さんご夫婦。叔母様を津波で亡くされたお話を聞きながら涙が溢れてくるような瞬間が何度もありました。震災から7年経ち、どうしても薄れていくあの日のこと。こうやって被災地で見てきたこと、体験したことを共有して、それをまた誰かに伝えていくことは大切なことだと改めて感じさせられる貴重なインタビューでした。

寄付総額：¥6,299,286 (2011年6月～2018年4月25日まで)

## 青森に「あしなが育英会 ファシリテーター」をふやしてプロジェクト

現在まで、青森からあしなが育英会「ファシリテーター養成講座」を受講し、ファシリテーターとなった4人です。これからのご活躍を大いに期待しております。



坂本小雪  
(2016年受講)



工藤千穂  
(2017年受講)



おふみん  
(2018年受講)



嶋田英子  
(2019年受講)

今、もう一度お話を聞いてみた。



tovo plus no.047 (February.11.2016)



(Aug.2020)

玉田 覚さん  
裕美さん  
ちこちゃん  
知多 (ちた) くん  
撮影場所 chicori (弘前市)

tovo plus の取材から約 4 年半が経ちましたが、その間に家族やお店の変化はありましたか？

裕美さん「一番大きい変化は、息子の知多が生まれたことです。店は変わらずにあるけど、最近のコロナ禍で、平和は当たり前にあるものではないと、改めて感じています。変わらない毎日を過ごせるって幸せなことですね。」

覚さん「コロナウイルスの騒動は漫画や映画の話みたいで、こんなことって本当に起きるんだなと思いました。緊急事態宣言中は一時的に店を閉めましたし、その後もやっぱりお客さんの数はガクッと減りました。『どこにも出掛け

ないから新しい服は買う必要がない』って話も聞こえてきて、今も厳しい状況は続いています。」

今から 10 年後をイメージできますか？

覚さん「お店は 10 年後も継続していたいです。お店の営業形態は時代に合わせて今とは違う形かもしれません。今は子供たちと一緒にいる時間を大事にしている、そこは変わらずにいたいんですね。でも、特に上の子は女の子なので『いつまで口聞いてくれるか』のカウントダウンがはじまっているような感じがして、10 年後はどうなっているか…。子供たちの成長を見るためにも、家族みんなが健康で生きているということが一番ですね。」

裕美さん「子供たちと向き合っていると毎日があっという間に過ぎてゆくので、10 年後は遠い未来という感じではないです。すぐに 10 年経つだろうな。子供たちには、自分の幸せを他の誰かとシェアできる人になって欲しいです。」

私がはじめてトヴォのりんごのキャラクターを見た時、そのデザインに惹かれて商品を手に取って、後からチャリティだって気がついたんです。自分が良いと思って買ったものが実は誰かのためになっていたんだって驚いたし、それは自分の感じた『好き』とか『嬉しい』とか『幸せ』っていうポジティブな気持ちを他の誰かとシェアすることだと思いました。子供たちには、例えばおいしいものを食べた時に、それを誰かと一緒に食べたいって思うことや、何か嬉しいことがあった時に、その嬉しさを誰かと共有したいって思うことは大切なことだと思って教えているし、そういう『幸せのシェア』みたいな行動が出来る人になってほしいです。今までの 10 年間でそうだったように、この先の 10 年も色々なことが起きると思うけど、自分たちのできる範囲で『変わらずに暮らす』ということが何よりの願いです。」

ちこちゃん「大きくなったからお花屋さんになりたい！」

【インタビュー／撮影】工藤文昭





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**亜紀子さん**「まだ結婚前で東京にいて、揺れた時はアパートの自室にいました。外の様子を見たら道路が波打って信号もしなくなって、この世の終わりかなと思いました。その後、2日間くらいは余震もあったし、靴を履いたまま布団から足ふたつ出して、すぐ動けるようにして寝てました。それくらいで精一杯でしたね。」

▶**輝之さん**「地元の埼玉の職場にいました。元銀行で頑丈な建物だったのにガタガタ揺れて。停電は平気だったけど、電車が止まっちゃったもんだから、『帰れないね～飲んで待つか～』って仲間と居酒屋に行って、23時くらいに電車が復旧するまで飲んでました（笑）」

▶**康博さん**「停電したけど、30アンペア（家一軒分まかなえる）の発電機があったから、電気には困らなかったな。家がオール電化で困ってた知人たちを迎えたりした。町中は信号が止まっていて、ライトを点けて車を走らせても、辺りが山の中のような暗さだった。」

▶**えり子さん**「りんごの果樹園をやっていて、薪が沢山あったので、薪ストーブを使いました。薪を分けてあげることもできました。」

▶**貴子さん**「私は長野で旅館に勤めていて、お客様のチェックイン前の点検をするためにエレベーターで8Fに向かった時に揺れたんです。8Fに着いて、降りた途端にガタンと止まって、映画のようでした。息子の禰悟は震災の翌年に生まれました。震災を忘れないきっかけになる存在だと思って、名前にはすごく悩んだんです。人のために禰って、気持ちを悟ってあげられる子になってほしいという思いで名付けました。」

▶**輝之さん**「そういえば、友人が金魚を飼っていて。停電で酸素を送るコンプレッサーが止まっちゃって、金魚が死んじゃう！ってなって、ストローにビニール袋をつけて手で空気を送ってなんとか乗り切ったという話も聞きました。いろんなドラマがあったんですね。」

## Q震災後、何か変わったことはありますか？

▶**輝之さん**「地図を作る仕事をしてた時期もありました。どこまで津波がきたかの記録をしたんです。亡くなられた人がどこに住んでいて、どこで見つかったかという記録をすることもあって。津波の映像なんかも、あれはたぶん意図的にですけど、テレビではあまり流れなくなっていくって、実際に起きた現実が時と共に薄れているように感じていたので、あの作業はとても印象に残ってます。」

▶**亜希子さん**「懐中電灯は寝室に置くようにしました。水や食料を備えておこうというのは最初だけだったかな…。準備しておくべき物に関しては、時間が経つ

に連れ気が緩んでしまってると思います。でも、震災の記憶があったから、店舗を新しくする時には、お店の暖房を薪ストーブにしようと決めてました。何かあったとき少しでも人を入れてあげられるように。」

▶**輝之さん**「せっかく飲食をやってるんだから、もしもの時は炊き出しをやれたらいいよね。」

▶**亜希子さん**「現地に赴いて何か…という勇氣は正直ありませんでした。遠くから…という感じで。」

▶**貴子さん**「長野の旅館の社長が福島出身で、震災後は被災地の人たちを無償で受け入れていたんです。あんなふうになにかできることがあればやりたいという気持ちはあったんですけど、なかなか行動できなくて。だからこそ、tovoに協力したい！と思いました。」

## Qご家族の10年後のイメージは？

▶**亜希子さん**「お店をバリバリやっていたい。商売していると波があって不安にもなるけど、家があって、店があって、商売できているという環境は本当にありがたいと思います。」

▶**輝之さん**「店の周りの土が見えているところ、緑になってほしいなあ（笑）」

▶**えり子さん**「今やっている畑をもうちょっと整備して、いろんな人が利用できる交流の場にしたいと考えてます。人とのつながりを大事にすることは、災害がまた起きた時の為にもなると思いますね。」

▶**貴子さん**「息子が反抗期真っ只中だと思うので、日々戦ってるのかな（笑）。ちょっときれいごとになるかもしれないけど、元気に生きてるだけでありがたいと思いますね、やっぱり。」

▶**輝之さん**「皆元気なら、なんとかかなかなって思えますね。プラスに考えていきたい。」

▶**禰悟くん**「（ゲームをしながら）マリオになる！」

▶**輝之さん**「じゃ、オーバーオール買ってあげなきゃ（笑）」

終

【編集後記】今号No.076のインタビューと撮影：坂本小雪

震災当時バラバラの地でそれぞれの体験をした清水さんご家族には、禰悟くんという存在もきつと大きく、より一層家族の団結力や絆の強さを感じられました。そんなご家族が一丸となって営むベーグル専門店、あたたかな雰囲気の内店や豊富な種類のベーグルにはお客様への愛情がたっぷりです。パン好きなお友達は3食＋おやつに食べても絶対飽きない自信があります。ぜひ一度ご賞味ください！

寄付総額：¥6,457,266（2011年6月～2018年6月25日まで）





## Q2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶**美沙希さん**「高校を卒業して専門学校へあがるまでの春休み期間で家の居間にいました。青森にしては珍しく大きな地震だなあと思っていると、だんだん大きくなって、電信柱なんかも大きく揺れていました。テレビが倒れないように押さえましたね。少し揺れがおさまった頃、母から電話があって、『電話が繋がらなくなるかもしれないから切らないで、そのまま』と言われ、それから『ドアを開けっ放しにして』とか『（当時小学校だった）妹を迎えにいった』とかいろいろと指示がありました。」

▶**富美子さん**「私は仕事中でした。仕事場が国道沿いの本町のビルの2Fなので、上の階ほど揺れはしなかったんですが、国道沿いのビルのあちこちから人が飛び出してきているのを見て驚きました。子供たちに電話して、2人の無事を確認してから、『（当時小学生だった）三女を迎えに行って、3人でまとまっていなさい』と伝えました。あと、避難場所は小学校であることを確認して『もし、何かあったら小学校で落ち合おうね』と伝えました。結局、その日は普段通り夕方5時まで仕事をしてたんですね（笑）職場から家まで1時間くらいかけて歩いて帰りましたが、その途中、三女が学童保育で一緒だった保護者留守家庭を何件か声がけしながら、無事を確認しました。」

▶**裕佳さん**「私も中学校を卒業し、高校へあがる時期の春休みで、姉と2人で特に何もせずに居間にいました。私はすぐにビクビクする方で、その日も地震の揺れを感じて、すぐにテーブルの下に隠れました（笑）。母から電話があり、三女を小学校に迎えに行きましたが、学校に向かう途中も余震で道路が揺れていて怖かったですね。それから、家じゅうを探してあったけのロウソクをかき集めました。寝袋を用意して、当時、猫が2匹いたんですが、ケージに入れて、すぐに逃げられるよう準備をしました。」

▶**萌莉さん**「小学校で、ちょうど体育の時間でした。地震があって、体育館の上の電気も大きく揺れました。すぐに校長先生からの放送が流れて、帰りましょうということになり、家に向かいました。帰宅途中で迎えにきてくれた2人の姉と遭遇して、3人で家に戻りました。家の状況が分からなかったの、家のことが心配で怖かったのを覚えています。」

▶**富美子さん**「仕事から帰ってきたら、なんか3人が普段とは違う様子、ちょっと興奮していましたね。1人だったら怖いんですけど、この子たちが3人揃っているとホントうるさくて、あの状況の中ですから、それがあ意味救われた感じはしますね。」

## Q震災後、何か変わったことはありますか？

▶**裕佳さん**「考え方は変わりましたね。今もちょうど『平成30年7月豪雨』で大変な被害が出ていますが、どんなに遠くに住んでいても人ごとじゃないと思うようになりました。」

▶**美沙希さん**「災害はいつ起こるか分からないし、普段、普通に仕事に行ったり、学校に行ったりということは決して当たり前のことではないことを感じています。県外に行った友だちに対しても、特に何もなくても、元気にしているかな？と安否を気遣うようになりました。毎日を大切にという意識をするようになりました。」

▶**萌莉さん**「震災直後はすぐに逃げられるような服装で寝たりしてました。当時は小さかったのであまり意識をしていませんでしたが、今は地震の情報にはとても敏感になりました。」

▶**富美子さん**「ちょっとそこまでという距離でも携帯電話の予備バッテリーを持ち歩くようになりました。あと、震災があって、腹をくくったところはあると思います。自分にとって大切なものは何だろうと考えて、それ以外はそんなに重要ではなくて、本当に大切なものさえあれば、他は何もなくても人間は生きていけるぞと思うようになりました。」

## Qご家族の10年後のイメージは？

▶**富美子さん**「生きていれば定年ですけど、働いていると思います。好きな音楽とか趣味で繋がっている人たちとも、ずっとご縁が続いていたらイイなと思っています。」

▶**美沙希さん**「子どもが生まれて、家族が増えてたらイイなと思います。」

▶**裕佳さん**「10年後は、年齢を気にせず、今より元気に自分らしく楽しく生きてみたいです。」

▶**萌莉さん**「海外に住んでみたいと思っています。外国の方の文化や考え方を学びたいと思っています。」

終

【編集後記】今号No.077のインタビューと撮影：小山田和正

このプロジェクト始めてから7年が経過して手伝ってくれる方も随分変わりました。飽きずに長く付いてきてくださる方は、かけがえのない僕の宝です。その宝が青森を去ることになり、僕は大きな喪失感を味わっています。川畑さんは、長きにわたり、暑い夏も凍える冬も毎月毎月、青森市内の配布協力店にフリーペーパーを配本し続けてくれた方です。川畑さんがいたからフリーペーパーを誰かの元に届けることができました。他にも何度も何度も助けられました。感謝しかありません。新転地でも幸せでありますよう心より祈っております。

寄付総額：¥6,457,266（2011年6月～2018年6月25日まで）



# 078

20180911

インタビュー

木立 彰さん・恭子さん

撮影場所：岩木川カヌー競技場(西目屋村)



**Qカヌー競技の元選手で、日本代表の現役コーチでもある彰さん。2016年に恭子さんと西目屋村に移住し、カヌーとラフティングの観光事業を始めました。2011年の時点では青森市にお住まいで、まだ別のお仕事をしていましたね。3月11日のこと、覚えていますか？**

▶**彰さん**「当時は施設管理会社に所属し、県営スケート場に勤務していました。事務所にいたらガタン、ときて、揺れが長いので、これはまずいとリンクまで走って行っただんですが、(揺れで)なかなかたどり着けなかった。スケート靴を履いたまま避難していたお客さんもいましたね。お客さんを帰して施設と周辺の点検をして、20時ごろ帰宅したと思うんですが、はっきり覚えていなくて。」

▶**恭子さん**「私は当時、地元新聞社のデジタル部門に勤務していました。ネットでいち早く情報を伝えるのが仕事だったので、可能な限りの情報発信を続けていたように記憶しています。翌朝の新聞が出来上がり、ネット配信の準備を整えて帰宅したのは午前2時か3時か…。毎日通いながれた通勤路ですが、信号機すら消えた真っ暗闇を走るのがとても怖かったことを覚えています。」

**Q娘さんは当手中1と中3。両親が遅くまで帰れない状態で、どうしていたのでしょうか。**

▶**恭子さん**「当時は夫の出身地で郊外の高田地区という、古くからの集落に住んでいて、子どもたちの親の半分は、その土地で生まれ育って幼馴染み同士というような環境で。ふだんから『この家は、親がいなければ子どもは〇〇に預ければ安心だ』という共通認識や、その場の状況に応じてベストな判断をしてもらえる雰囲気がありました。あの日も、次女は同級生の親が自分の子と一緒に学校から連れてきて、家にいた長女を拾って、おじいちゃんの家へ送り届けてくれたんです。田舎の人間関係をわずらわしいと思う人もいるかもしれないけど、うちはそれにすぐ助けられたと思います。」

▶**彰さん**「自分は仕事とカヌーのトレーニングのために京都に住んでいた時期があって、京都出身の恭子と知り合って結婚しました。1995年の阪神淡路大震災のときは長岡京市に住んでいて、恭子のお腹に長女がいて。自分たちの住まいやそれぞれの勤務先は大きな被害はなかったけれども、神戸の親戚や知人など、身近で被害に遭った人もいて、災害への心構えがもともとあったのは大きかったと思います。」

**Qその後はどうしていましたか。**

▶**彰さん**「実家には灯油ストーブがあったし、自宅にはアウトドア用品など一通りのものはそろっていて、困りま

せんでした。家族で話し合いやルールづくりも特にしなかったですね。近くに住む実家の両親を含め、日ごろから仲良くして、お互い大切にして、っていうのがむしろ当たり前のことだから。」

▶**恭子さん**「震災そのものより、その後の物資不足の方が深刻でした。阪神大震災では実は『震災後の不便』というのはそんなに感じなかったんです。ところが東日本大震災後の青森は、東北道が閉鎖されるなどして、一時流通が途絶えた。ガソリンも食料も日用品も。こんなに不便な思いをするのかとこたえました。」

震災の翌年、福島県でカヌーの大会が開かれたんですが、娘を出場させるかどうか迷いましたね。結局行きましたが、現地では私たちが触れていた以上に原発のことを細かく報道していて驚きました。福島からそのまま(恭子さんの実家のある)京都に行ったんですが、そちらではいわゆる『温度差』に驚きました。京都ではもう意識することもないような雰囲気、東北という、遠いところの話なんだな…と感じましたね。」

**Q10年後、どんなイメージを描いていますか。**

▶**彰さん**「西目屋村は白神山地と岩木川という環境を生かして、1996年からカヌー振興に取り組み始めました。自分はたまたまその翌年に青森県にUターンし、西目屋と縁が深くなっていき、いまに至っている。いま子どもたちにカヌーを教えているんだけど、10年後にはここからカヌーの日本チャンピオンを出す。いや、その前に出すね。」

▶**恭子さん**「ここで毎年全国大会を開いていて、最近では他県の大学生の選手たちが夏の練習場所の一つとして訪れるようになってきた。リオ五輪に出場した矢澤一輝選手も2017年春に西目屋村に移住し、練習しています。青森県内のカヌー競技人口が増えて、西目屋村がカヌーをやる人たちで活気づいていればいいなと期待しています。」終

【編集後記】今号No.078のインタビューと撮影：前田ふひと

西目屋村は、おふたりが以前住んでいた青森市高田地区と同じように、地縁血縁の濃い地域。移住当初に住んだ地区では、月に一度、地域住民が集まる飲み会があり、村にとけこみやすかったそうです。取材しながら、熊本地震を経験した学者が講演会で「災害時のセーフティーネットは、金銭ではなく人間関係によって成り立つ」と言っていたことを思い出しました。

四季折々が美しい西目屋村。紅葉を眺めながらのカヌーは癒やされますよ。木立さんの事務所「A'GROVE(エイグロヴ)」を、ぜひ訪れてみてください。

寄付総額：¥6,746,747(2011年6月～2018年8月29日まで)





## Q2011年3月11日のことは覚えていますか？

▶**慎一郎さん**「ランチ営業をやっていて、それで、ランチが終わって休憩時間で休憩してるときに揺れ始めて、地震は嫌いじゃないけど、今回は長いと思った。長いと思ったから棚にあるグラスが落ちないように押さえて、でも、落ちることもなくて、そんなに大事になるなんて思ってたんだよね。ちょうどその日の夜に予約も入っていて、真っ暗な状態だったんだけど、お客さんもチラホラ来て『営業するんですよね？』と来ちゃって、でも、電気もなくてどうしようかって。」

▶**麻美さん**「でもね、ロウソクつけてやろうかって思ってたの、私。」

▶**慎一郎さん**「ただ3月で寒くて、暖房がつかなくて、それでも良ければと、一瞬思ってたんだけど。」

▶**麻美さん**「それくらい、そんな酷いことになってとは思わなかった。」

▶**慎一郎さん**「予約で来たお客さんにパーティーコースとかの食材を準備しちゃってたんだけど、ガスとかも使えなかったから、お客さんにパンとかサラダとかはお出しして。」

▶**麻美さん**「そう、来てくれたお客さんが『夕方になって、もうコンビニとかに何も無いんです。』って言っていて、その人たちにパンを分けてあげた。そしたら、そのお客様が数ヶ月後に『あの時、私、パンを頂いてすごく良かった』と言って、うちでまた宴会やってくれたの。」

▶**慎一郎さん**「地震が起きた瞬間は、そんな何日間もかかるとは思わなかったけど、電気だけは早く復旧して欲しいと思った。」

▶**麻美さん**「でもね、隣の高いビルからはいっぱい人が駐車場に降りてきて、女の人們がみんな泣いてましたよ。きっと高いところは大きく揺れたんだろうね。」

▶**慎一郎さん**「それでもけっこう淡々してたよね？私たちはね。」

▶**文敬さん**「お父さんは、車で家に帰る途中で、スーパーに向かって走っていたら急に車のハンドルが効かなくなるっていうか、重くなるっていうか、変だなと思って走ってたんだけど、ちょうど信号が赤になったから停まったの。そしたら、電線揺れてて、スーパーから人がいっぱい出てきて、あー地震なんだなと思った。家の中も物が落ちてたらダメだなと思って帰ったんだけど、何も落ちてないのさ、だからまさかね、そんな大きい地震だったとは思わなかった。その後、電話がきて『停電になっちゃったけど、お店やるから明かりを探さなきゃダメだ。』と言われて、なかなか売ってなくて、ロウソク買うにも、それなりに大変なもんだなと。そういえばと思って、仏壇屋さんで買ったんだよ。」

## Q震災後で何か変わったことはありますか？

▶**慎一郎さん**「一番大きいのはメニューを立て直して、今まで8年間火鍋をメインにやっていたけれど、それを食べるイキきっかけになったかな？マイナスの面じゃなくて。それまでは人を雇ってお店をやっていたんだけど、今後どうなっていくかわからない状況だったから、家族で店をやろうって思ったところかな。」

▶**文敬さん**「震災で、食べ物の大事さを知らず知らずのうちに教えられたっていうのはあるかな。放射能のことも気にするようになった。」

▶**麻美さん**「地震後すぐのときには福島のは避けよう、お客さんにも出すのやめようと思ってたけど、今は福島の桃が大好き。なんでも食べる。全然気にしない。」

▶**慎一郎さん**「特に生活のリズムが大きく変わることもなくて、面白い話も何もなくして申し訳なくて、うちの家族は淡々として動じないかな。」

▶**麻美さん**「いとはね、毎日布団のそばにヘルメットと長靴を置いて、震災の後ず〜っと続けてるって。」

## Q10年後のご家族のイメージは？

▶**麻美さん**「黙ってても死ぬから。俺も死ぬかも知れないし。」

▶**慎一郎さん**「子供さんとかがいる家族とかだったら、もっと考えることあると思うんだけど、そうだな…、地震があったんだけど、今回の震災に関してはそんなに影響はなかったんだけど、何かあったとしてもわりと忘れっぽい家族なんだよな。あんまり大事にとらないかな。」

▶**麻美さん**「何とかなるや精神で生きてきてるから、バタバタしない。みんな死ぬ時、独りで生きるのは怖いから、みんなが死んだら、自分も死にたい。何かの備えをして自分だけ生きようとは思わないの。田邊家はこれまでも柔軟に生きてきたし、これからも変わらず気持ち明るく持って、柔軟に生きていくくらいかな。」終

【編集後記】今号 No.079 のインタビューと撮影：赤石嘉寿貴

今回取材させて頂いたレストラン Tera のシェフ田邊さんとは、3年ほど前にある雑誌の記事を偶然見て思い切ってお店に訪れてお話をさせて頂いたのがきっかけで、今回は取材にご協力いただきました。話をするほどに面白い経験がどんどん出てくる人で、どうしたらそんな風な人格が出来上がるのかな？なんて思っていました。今回、お母様の麻子さんとゆっくりお話をすることができて、慎一郎さんがあるのは麻子さんがあってのことなんだと妙に納得しました。何かが起こったからといって慌てて生活を変えるんじゃなく、普段から自分の中に芯をもって柔軟な考え方で生活していくことの大切さをインタビューを通して勉強させて頂きました。変わることが必要な時、変わらなくても良いこともあるんだなとしみじみ感じました。

寄付総額：¥6,746,747 (2011年6月～2018年8月29日まで)





## Q2011年3月11日のことは覚えていますか？

▶**良介さん**「揺れがあった時は病院で仕事をしていました。相談の対応中だったんです。まずは院内にいらっしゃる方たちの安全を確保することに努めましたね。でも、その頃はまだまだそんなに大きな被害の出ている地震だとは思っていませんでした。その日は講演会の予定があったのですが、開催しようにも会場が停電していたままで…。」

▶**暢子さん**「私もその時は仕事でして。私が働いている方の病院は、建物が古いこともあって凄く揺れました。普段からの訓練通り、すぐに館内放送があってエレベーターが止まり…停電で電子カルテも使えなくなりました。私は4階の担当でしたので、すぐに病棟へ向かい、患者さんたちがパニックにならないように回って歩いていました。その時でしたかね、患者さんが点けていたテレビで仙台空港の惨状を知り『これは大変だ』と思ったのを憶えています。その日の帰り道、やはり停電で信号機は止まったままで、弘前は真っ暗でした。そんな中、みんな譲り合って帰っていました。復旧が間に合っていなかったようで、踏切の遮断機は下りっぱなしになっていたのですが、ある一般の方がクルマ一台一台に声を掛けてUターンしてもらっている姿を見ました。」

▶**良介さん**「その日の夜、どんなことになっているだろうと家に帰ってドアを開けるのが怖かったのですが、帰ったら(暢子さんが)魚を焼いていました。ヘッドライト付けて。」

▶**暢子さん**「(良介さんが)帰ってきて『うちだけなんか明るいじゃん』って言ったの憶えてます。うちはキャンプをよくやっているのですが、おじいちゃん(同居されている良介さんのお父様)も山好きなこともあり、家にはキャンプ用品や大きなろうそく、ラジオ、灯油ストーブなどがあって助かりました。ガスは使えていましたし、炊飯器もガスでしたし。」

▶**良介さん**「ストーブはありましたが、それでも寒かったことを憶えてます。『この先、どうになってしまうんだろう』と不安でしたね。娘(なつめちゃん)はまだ小さかったので、その状況はよく分かっていなかったと思いますが…。」

▶**暢子さん**「震災の翌日は、職場で何チームかに分かれて、自宅で一人暮らしをされている精神障害のある方の家を安否確認のため一軒一軒回っていました。すごく綺麗に晴れていた日だったのですが、その晴れた空に逆に不安な気持ちになりましたね。」

▶**良介さん**「翌日、まだ信号が消えている中、必要なものを買いにドラッグストアへ行ったのですが、レジも使えない状況なのでお店の方が働いていて感動しました。」

## Qその後、心境や生活の変化はありましたか？

▶**良介さん**「先ほどの(暢子さんのお話の中に出てきた)遮断機のそばで交通整理をされていた方や、ご自身も大変な中ドラッグストアで働いていた方たちの姿から、仕事というものの考え方が変わりました。福祉に関わる仕事をしてきましたが、それ以前までは『組織に属して、職業として』仕事をしてきたように思います。震災以降は『人のため』に働くということを意識するようになりました。」

▶**暢子さん**「研修で福島へ行った際、現地のソーシャルワーカーが自身も被災者でありながら支援を続けてきた話を聞いて、大いに感動して涙が出ました。凄いエネルギーを貰いましたね。その時に聞いた『とにかく前だけ見てきた』という言葉が胸に生活するようになりました。」

## Q10年後のご家族のイメージは？

▶**良介さん**「仕事や趣味の活動も通して、今まで自分の中に積み上げられてきたものを仕事の枠にはとらわれずに広く人のために使っていきたいですね。地域や人に貢献できるようになりたいです。」

▶**暢子さん**「10年後、子供たちは難しい時期かもしれませんが、仲良くキャンプしたいです。上の子(なつめちゃん)は私たちの楽しく仕事する姿を見ているから『ソーシャルワーカーになりたい』って言ってます。下の子(太郎くん)はモノ物作りが好きな子で、大工さんや発明家になりたいようです。ツリーハウスが好きなんですけど『お母さんに作ってあげる』って言っていました。…そういえば、結婚する時に(良介さんが暢子さんに)『ツリーハウス作ってあげる』って言ってたんですが、まだ実現されていなかったので楽しみにしています。」

▶**良介さん**「椅子やテーブルは作ったんですけどね。…はい、ツリーハウスも頑張ります!」(終)

【編集後記】今号No.080のインタビュー:なるみしう

とあるイベントで知り合った三浦さん。ご夫婦から、ここに書ききれない程たくさんのお話を聞かせていただきました。三浦さん夫婦は、共に社会福祉士であり、精神保健福祉士。そして、キャンプ大好き家族である三浦家。お話を聞かせていただいたことにより、私自身も「仕事」というものを考えるようになりました。そして、インタビュー以降からキャンプ道具を調べまくっています。すぐに影響を受けます。余談ですが、このインタビュー記事をまとめる間に3度ほど珈琲を淹れました。眼鏡を曇らせながら。

寄付総額:¥7,059,342(2011年6月~2018年10月29日まで)



**Q2011年3月11日のことは覚えていますか？**

▶**諒さん**「当時は2人別々の場所にて、僕は山形にいました。休みの日で、弁当屋で注文した弁当を待っていた時に地震がきました。その後、当時勤めていたコーヒーの会社に行って、今後の対応について話し合いました。店舗にはまだ残っているお客さんもいました。」

▶**Tomiさん**「私は作業療法士として神奈川の病院に勤めていて、担当している患者さんの入浴訓練をしていました。地震が起きて、まずはお風呂場にいる患者さんたちの安全確保をしました。しばらくして病棟に戻ってからテレビで地震の大きさを知りました。私は仙台出身なので、まわりの人からは『実家は大丈夫なの？』と心配されて、徐々に事の重大さに気づいたという感じです。実家は海側ではないので津波の被害は免れましたが、家の中はぐちゃぐちゃになったようでした。家族とは『とりあえず大丈夫』という連絡は取れましたが、そこから数日間は連絡が取れなかったです。」

**Q 震災後変わったことは？**

▶**諒さん**「山形には原発事故で福島から避難してきた人たちがいたのですが、その様子を見て、ふと故郷の野辺地のことを考えて、隣の六ヶ所には原子力施設があるのですごく不安になりました。就職する前からいずれは地元に戻りたいと思っていたけど、できるだけ早く帰りたいと思うようになりました。でも会社の都合もあるからすぐに仕事をやめる訳にもいなくて、地震直後は『行動しなきゃいけないけど行動できない』という状況でした。」

▶**Tomiさん**「神奈川は計画停電がありましたが、電気がないと何もできなくて、お金を持ってもモノがなければ自分の力では何もできないんだと気が付いて『自分で何かを作れるようになりたい』と思うようになりました。震災の翌年に退職して、ヨガを勉強しにインドに行ったり、タイマッサージに出会ったり、オーストラリアでパーマカルチャーを学んだり…色々なことを勉強しながら3年ほど海外で過ごしました。」

▶**諒さん**「会社をやめた後、野辺地を拠点に何かしたいと思っていたけど、何をしようかすぐには思いつかなかったんです。同時に、故郷が福島の事故の二の舞にならないようにしないといけないとも思っていました。原発事故があってから西日本に移住した人は多いですが、そういう人たちの話を聞きに、2人で鹿児島や沖縄に行ったり、海外にも行きました。オーストラリアのバイロンという村がとても良くて、住民が自分たちで意思決定して、作れるものは自分たちで作っていて、何よりみんな楽しそうに生活してい

ました。一方日本のことを考えると、何かに依存しながら生きている人が多いように感じました。他人の生き方を変えることは難しいですが、まずは自分たちが出会った『こういう素敵な生き方があるよ』というのを野辺地で実践して、まわりに見せたいと思ったんです。

元々コーヒーが好きだったので、質が高く、尚且つ環境に良いものをチョイスしたコーヒー屋さんをやろうと決めました。店の裏が畑なので、最近は少しずつで獲れたものを使ってお菓子を作っています。あまり作り置きはせず、ひとつひとつ丁寧に作るというスタンスでやっています。」

**Q10年後のご家族のイメージは？**

▶**諒さん**「今年から地域に向けた活動を少しずつ始めているので、それが形になって、完結するところまで進んでいけばいいですね。」

▶**Tomiさん**「自分たちの家族のイメージはあまり湧かないなあ。漠然としているけど『これは自分で作れるからお金をかけなくてもいいな』とか『作ったあと土になるところまで考える』とか、そういう人たちが増えて、モノを作る人が地球のことをもっと考えるような時代になればいいなと思います。」

▶**諒さん**「『こうしたいから、そのために行動する』というよりは『なにか変化が起こったら、それに上手く対応する』という生き方が自分たちらしいと思うので、何かに縛られることなく、自分たちらしく生きていきたいですね。」終

【編集後記】今号No.081のインタビュー：工藤文昭

「自遊木民族珈琲」というお店の名前をはじめて聞いた(見た)時、どういう意味なんだろうという疑問と、面白い名前だという興味が同時に湧きました。これを読んで気になった方は、ぜひとも野辺地へと足を運んでみてください。幾重もの意味が込められたこの屋号には、板橋さんの強い意志を感じます。店内には優しい時間が流れていて、美味しいコーヒーとかわいい2匹の猫によって、ついつい長居してしまうこと請け合いです。

寄付総額：¥7,059,342(2011年6月～2018年10月29日まで)





## Q2011年3月11日のことは覚えていますか？

▶大樹さん「当時は昼の営業(大樹さんが経営しているラーメン店「Rcamp」)を終えて、昼休憩で車の中で仮眠していました。地震で揺れ始めたのですぐに店に戻ったらまもなく停電しました。当時は下土手町のかだれ横丁の中に店舗がありました。ちょうど店を出たところがスクランブル交差点なのですが停電で信号が消えたので、僕と他のかだれ横丁のスタッフで交通誘導をしました。少しして警察の方も交通誘導には来ていたのですが、やっぱり人数が足りなくて、結局暗くなるまで…たぶん3〜4時間はやっていたと思います。昔、東京に住んでいたころに交通誘導の仕事をしていた時期あったのですが、その時の経験が役に立ちました。自分が帰る時間はもう街中は電気が全く点いていないので真っ暗でした。途中、コンビニに寄りましたが、もうビールやお菓子が少し残っているくらいで、他の食べ物や飲み物はほとんどありませんでした。」

▶ともみさん「私は当時実家で経営している店舗で仕事をしていたのですが、揺れだしてテーブルの下に隠れたことを覚えています。外の電線がとて大きく揺れているのが見えて怖かったです。道路を走っていた車も止まっていました。その後すぐ停電になり、携帯のテレビで状況を知ろうと思ったら、あの津波の映像が流れていました。まさかこんな大変なことになるとは思いませんでした。その日の夜は実家で過ごしましたが、実家では薪ストーブを使っているの、停電でしたが部屋は暖かく、薪の炎が暗い部屋の中を照らしてくれました。IHクッキングヒーターは使えませんでした。母が薪ストーブに鍋を載せて晩御飯を作ってくれました。」

## Q 震災後、何か変わったことはありますか？

▶大樹さん「震災の翌月、4月上旬にラーメン炊き出しの手伝いをするために石巻へ行ってきました。東京のラーメン屋の方が発起人となり、各地のラーメン店に声を掛け合って、被災された方たちに温かいラーメンを提供するというボランティアだったのですが、僕にも声をかけてもらったので参加することになり、800食のラーメンを被災者の方々に提供してきました。震災から一ヶ月も経っていない頃だったので、道路に大きな船が流されていたり、あたりは瓦礫の山ばかりで、戦争のあとってこういう感じなのかな、って思いました。並んでラーメンを待っている子どもたちにお菓子なども配りました。大変な状況の中でもみなさん温かいラーメンを喜んでくれていたのはとても嬉しかったです。僕らの他にも全国各地からたくさんの方がボランティア活動のために集まっていました。」

▶ともみさん「頭の中で、もしもの時にどうしたらいいかをシミュレーションするようになりました。いつ何が起きるかわからないという気持ちも、以前よりは持つようになったかな。お客さんの中にも親戚の方が亡くなられたり、被災されたという方もいて、辛い話を聞かせていただくこともありました。津波で町が飲み込まれ、車も家も簡単に流される様子がテレビで何度も繰り返し流れる日々の中、妊娠していることがわかったんです。大きな震災の直後だったこともあり、自分の中に新しい命が生まれたことをとても重く感じました。」

## Q10年後のご家族のイメージは？

▶大樹さん「自分のことはあまりイメージが出来ないのですが、息子がやりたいと思うことをやらせてあげられていたらいいなと思います。例えば大学へ行きたいというのであれば大学へ行かせてあげられるようになってほしいです。選択肢の多い環境を息子に作ってあげられていたらいいなと思いますね。」

▶ともみさん「子どもの将来のために選択肢の多い環境が作れるよう、今の生活の基盤をしっかりとさせて10年後に繋がればいいなと思います。あと、10年経っても気持ちも見え目も若さを保っていられたらいいなと思います！」

▶瑚太郎くん「この地震のことはわからないけれど、その時僕はお母さんのおなかの中にいたんだよと教えてもらいました。10年後は大好きなヒップホップダンスが上手になっていたらいいなと思います。この前、大人のお兄さんたちが踊るとてもかっこいいヒップホップのダンスを見ました。ああいうかっこいいお兄さんたちのように自分もなれたらいいなと思います。」終

【編集後記】今号No.082のインタビュー：笹森 まさみ

今年の9月で開業10周年！濃厚鶏白湯煮干スープが人気のラーメン店「Rcamp」の岩渕ファミリー。実はわたくし笹森の妹夫婦と甥っ子の3人です。普段はあまり話しをする機会がないので、震災の日、大樹君が交通整備をしていたり、石巻まで炊き出しのお手伝いに行っていたり、ということを実は今回インタビューするまで知りませんでした。パパの背中をみて、甥っ子には優しく思いやりのある大人になってもらいたいと思っています。機会がありましたらぜひ「Rcamp」のラーメンも食べに行ってみてくださいね！

寄付総額：¥7,278,202(2011年6月〜2018年12月24日まで)





## Q2011年3月11日のことは覚えていますか？

▶**悟さん**「小学校に勤めていたので、児童を避難させました。子どもたちの帰りは親御さんに迎えに来てもらって人的被害はなかったけど、避難の最中も揺れがあったし大変だった。テレビがつかないから他所の状況がわからなくて、電池式のラジオを持っていた先生のおかげでやっと津波が起きたりしているのを知りました。蓬田村の学校にいた頃、日本海中部地震が起きて、津波になる前の瞬間の海を見たことがあるんです。陸奥湾を見に行ったら波がザーッと引いていって。その時も放送を自分で流して学生を避難させました。あの時の被害も大きかったけど、それでも3.11の状況にはびっくりした。」

▶**祥子さん**「私は幼稚園に勤めてました。預かり保育で、さあ〜今からおやつを食べようって時に地震がきて。幼稚園では定期的に避難訓練をやっていて、そのおかげで職員も慌てず冷静に対応できたんです。園児たちもいつもの練習だと思っていたみたいだけど、段々『本当なの!?』というような反応になりました。職員も早く帰ることになって、家に帰る途中、友人が2階の窓から『この世の終わりだよ〜』と声をかけてきたのを覚えてます。テレビが見られなかったので電池式のラジオを一生懸命聞いていました。やっぱり目で見えないから中々実感がわかなかったですね。その後も余震があったから、いつも陶器のお皿でおやつを出してたのを紙皿に代えたり、とにかく園児たちを余計に怖がらせないよう工夫しましたね。マンションに住んでいて、水が出ないからって幼稚園に貰いに来る親御さんもいたので、どうぞどうぞと提供していました。」

## Q震災後、何か変わったことはありますか？

▶**悟さん**「充電器とか、電池でできるものはすぐ用意しました。停電の不便さを痛感しましたね。ガソリンを入れるタンクも買って、10リットルくらいは備えて置いて。非常食、というほどでもないけど、保存がきく食品は多めに買っておくようにしてるかな。」

▶**祥子さん**「テレビで被災地の方が『自分は家族のご遺体にちゃんとお別れができたから幸せです。でも毎日海に行ってご家族を探し続けている方々が沢山…』と話されているのを見て、今までにない衝撃を受けたんです。震災があった3月に仕事を辞めることになっていたんで、4月からは被災地に行こう！と決めていました。そんな時、福山雅治氏がラジオで『やれることから始めよう、被災地に行かなくても目の前で困っている人を助けてあげればいい』と。それを聴いて、以前から『子連れでゆっくりおしゃべりできるお店がほしい!』と子育てサークル（以前の仕事）のママの声をよく耳にしていたこともあり、じゃ

あ私がやろう!と『場の提供』をコンセプトにして覚悟を決めてカフェをスタートしました。以前からお父ちゃんが退職後に飲み屋をやりたいってぼんやり言っていました。じゃあそれも叶うようにまずはやってみよう!って。現在はお子様連れのお客様も来店が多くなりました。」

## Qご夫婦の10年後のイメージは？

▶**祥子さん**「今の感じを続けてるといいよね〜。いや、続けていくって決めよう!今やっていることを丁寧に続けよう(笑)!何かあった時、ご近所さんもここに集まれるようなそういう場所にしていきたいな。幼稚園やボーイスカウトで関わった子供たちが同窓会などで利用してくださっています。そういう出会ったコト、モノ、ヒトのつながりを大切にしたい10年を目指したいです。」

▶**悟さん**「蓄えの余裕があるようにしておこう。」

▶**祥子さん**「備えよ常に!物だけでなく気持ちも備えていたいもんです。」

▶**悟さん**「ボーッとしてみたいなと思う。歳とか関係ない(笑)!飲み屋もそうだけど、アイスクリーム屋をやりたいんだよね。栗とかカカスとか、今出会ってる人たちのアイデアを聞きながら。」

▶**祥子さん**「今ここで言ったから、やらないとダメよ(笑)。お父ちゃんとは価値観は色々違うけど、人の為にメニューを決めたりするのを楽しむ所は気が合うから、お互い気づいたことを行動していきたい。それから、こんな私たちをいつも応援してくれている長男、次男夫婦にはとても感謝しています。ありがとう!」終

【編集後記】 今号No.083のインタビューと撮影：坂本 小雪

tovo paperの配布協力もしていただいている青森市のcafe0371。お子さん連れのママさん方がおしゃべりしてたり趣味の集いが開かれていたりとお客さんの年代もジャンルも幅広く、祥子さんお手製のランチやこだわりコーヒー、賑やかトークをゆったり満喫してゆきます。何かが起きててもそうでなくてもお店はみんなの憩いの場で、そこにはご夫婦の人格がありありとあらわれているのです◎ご主人の作ったアイスクリームメニューに載る日が待ち遠しいなあ(笑)。

寄付総額：¥7,278,202(2011年6月〜2018年12月24日まで)



**Q2011年3月11日のことは覚えていますか？**

▶**勝寿さん**「よく覚えています。その年の3月は東京での仕事を辞めて青森に帰る時期でした。ちょうど3月11日の夜は友達が送別会を開いてくれる予定だったんです。もちろん、キャンセルになりました。当時は心臓ペースメーカーを扱う会社で営業をしていて、3月11日はペースメーカーを入れている患者さんの定期検診の為に、東京都内の某大学病院にいました。外来の部屋に向かう途中、階段を上がっていた時に大きな揺れがきました。もうパニックでしたね。点滴中の患者さんが点滴スタンドを引きずりながら避難しているような状態で、スタッフも誘導はしているのですが混乱していました。僕は避難の手伝いをしながら、なんとか外に出て、会社に戻ろうと思って社用車のエンジンを点けたら、カーナビから大きな津波の映像が映し出されて、本当にびっくりしました。停電で信号機も止まっている中、普段であれば1時間で戻れる会社に4～5時間かけて戻りました。会社に着いたのは夜の8時頃。まだその時点では妻と連絡が取れていなくて、ちょうど妻は妊娠中で長女がお腹にいたこともあり心配でした。とにかく帰ろうと思い、家まで歩いて帰りました。僕は会社からある程度近いところに住んでいたのが良かったのですが、4～50kmを徒歩で帰宅した同僚もいました。帰宅中、停電で薄暗い歩道をたくさんの方が歩いていて、すれ違う人がみんな『大丈夫か？』なんて声を掛け合って、お互いを気遣っていたのが印象的でした。」

▶**睦美さん**「その頃は、妊娠していたこともあって専業主婦でした。午後から散歩をしようと思って、ダウンジャケットを着た時に大きな揺れが起きました。隣の部屋の姉妹が『キャー!』と叫びながら逃げていったのを覚えています。私も逃げようと思って靴を履いたんですけど、外に出るべきか、部屋に残るべきか、どうすべきか分からなくて、かなり戸惑って、玄関を開けたり閉めたり、どうしよう…という感じでした。結局、揺れが収まって部屋に戻ったんですが、お腹に子どもがいたこともあり、かなり動揺しました。ただ、住んでいた地区は停電にならなかったんですね。そういうこともあり、だんだんと動揺は収まって普段通りの生活に戻りました。私の実家が岩手県花巻市なんです。内陸なのでニュースを見る限り、たぶん大丈夫だろうなとは思っていましたが、なかなか連絡が取れなくて心配しました。実家でも困ったことは多々あったようですが、なんとか無事でした。ただ、知人で犠牲になった方々がいて、そのショックはとても大きかったですね。」

**Q 震災後、何か変わったことはありますか？**

▶**睦美さん**「直後はいつでも逃げる準備をしていまし

た。子どもが生まれてからはオムツを別に準備したり。生き方に関しては『後悔をしたくない』という気持ちを持つようになりました。前に勤めていた会社の支店が仙台や陸前高田市などにあったのですが、その町の様子などを見て、一瞬でなんにもなくなってしまったものなんだと深く感じ、『後悔をしたくない』と強く思うようになりました。東北町に英会話教室を開業したのも、失敗しても『後悔をしたくない』という気持ちがそうさせたと思います。」

▶**勝寿さん**「当時は大量の水を準備していましたし、防災リュックも備えていました。気持ち的には妻と同じで『後悔をしたくない』というのはあります。さっきもお話したのですが、東京から青森に帰ってくるようになって、送別会を開いてくれるという予定が震災で全部キャンセルになって、結局、ちゃんと皆にお別れをしないまま青森に帰ってきたんです。一旦帰ってきちゃうと皆と会える機会というのはなかなか作れないし、ずっと心残りがあるんです。そういう心残りはもうしたくないなと思っていて、だから、会いたい人には会うとか、何に関してもボンヤリしていられないぞという気持ちにはなりました。」

**Q ご家族の10年後のイメージは？**

▶**勝寿さん**「子どもたちが元気に勉強したり、スポーツしたりしてくれてたと思います。それを支えるために夫婦で健康管理はしていきたいですね。震災前は遠い目標というのを立てていたのですが、震災後は近い目標、明日どうなるか分からないから、今日やれることを全力でやるという気持ちに変わったように思います。」

▶**睦美さん**「そう、同じ気持ちです。前は子どもを置いて海外に行くなんて考えられなかったですけど、今できることは全力でやりたいですね。何ごともないという小さな幸せを大事にしたいです。」

▶**優くん**「リレーを走りたい。」

▶**舞ちゃん**「ピアノの先生になりたい。」**終**

**【編集後記】**

今号 No.084 のインタビュー：小山田 和正 撮影：須川健太郎  
蛭沢さんとは、東日本大震災がなければ出会うことはなかったんじゃないかと思います。初めて直接お会いしたのは、東日本大震災後、ブラフマンのライブ会場でした。以降、蛭沢さんが関わるイベントに継続的に出店させて頂いたりして、南部地域の方々に広げて頂きました。その当時は別のお仕事をされていたが、現在はご夫婦で英会話教室を開業し、順調に活動の幅を広げていらっしゃいます。東日本大震災をきっかけに出会い、今では案外長い付き合いとなりましたが、今回初めて、僕と出会う前の「蛭沢さんご家族の東日本大震災」のお話を伺いました。それはしっかりと現在のご家族の行動や考え方にリンクしていました。(今回忙しすぎて、撮影をプロカメラマンの須川さんに頼みました。さすがです。感謝!)

寄付総額：¥7,339,466 (2011年6月～2019年2月22日まで)





## Q2011年3月11日のことは覚えていますか？

▶**優子さん**「製菓衛生師の資格をとるために4月から仙台の製菓学校の通信制に入学することが決まっていた、それに備えて自宅でお菓子を作る練習をしていました。オーブンの予熱が終わった音がピーピーして、シュークリームを絞った天板を中に入れようと手に持っていたんです。そこに地震がきて、ちょうど母も台所において、あらあら、って言ってたらバンツと停電して。」

▶**幸子さん**「長い地震で、外に出たよね。向かいの人も出てきて。」

▶**優子さん**「電気が使えずストーブが消えたので、裏の小屋から当時父（2018年に逝去）が焼きいも専用に使っていたポータブルの灯油ストーブを持ってきて。」

▶**幸子さん**「あれがなかったら大変だったよね。」

▶**優子さん**「明るいうちはそんなに危機感がなかったけれど、家の前を消防車がすごく行きかっ、暗くなってからは鐘をカンカン鳴らしながら、『避難してください』と呼びかけるようになった。ラジオで『津波が来た』と聴いて、家は海から400メートルしか離れていないから、私ひとりで老いた親2人と猫5匹を避難させられるかなと不安になってきて、動けるうちに動いたほうがいいと、避難所の菟町小学校に父と母を車で送っていきました。信号が全部消えていて怖かった。戻って猫を1匹ずつケージに入れて車に乗せたんですが、最後の1匹がなかなか捕まらなくて手こずって。とりあえず海から離れたほうがいいと、(約4キロ山手の)イトーヨーカドー青森店に行きました。ヨーカドーは自家発電があったのか、一晩中電気をつけてくれていて、とても安心できた。駐車場には避難してきたらしい車が30台ぐらいいて、あ、一人じゃない、と思いました。」

▶**幸子さん**「菟町小学校では、1階の教室2つが避難者用になっていました。結構びっしり人がいてね。皿に油を入れて火を点けた灯明のようなものが、教室からトイレまでずーっと並べてあって、その記憶が強いんです。部屋の灯りはなかったと思う。発電機を使ってストーブをつけていたので、音がうるさくて眠れなかった。着のみ着のままで行って、板の間に敷くものもなく…。毛布が配られたかどうか…忘れてしまうものだね。一晩だけだったせいか、水や飲み物も出ませんでした。眠れないので2人で朝早く歩いて帰ってきたら町会長さんに会って『高谷さん、こんなに早くどこ行ってたの?』と聞かれて、避難していたと言ったら『は?』って(笑)。町内で避難したのは自分たちだけだったんだよね(笑)。」

▶**優子さん**「ここは海から勝田(山手に約2キロ)までまっ

すぐの大きな道路と、堤川にはさまれている。津波がきたらアウトだから、迷わず逃げたほうがいいと思ってる。でもあのおとき、人って逃げないんだな、自分は大丈夫だと思ってるんだな、と感じました。」

## Qそれ以降、変化などありましたか？

▶**幸子さん**「あれから灯油はいつも常におくようになった。」

▶**優子さん**「ガソリンも半分まできたらすぐ満タンにするように気をつけるようになった。習慣になったよね。製菓学校は毎月課題が自宅に送られてきてレポートを出して、7月と3月に1カ月のスクーリングがある仕組みでした。でも新年度になってもなんの連絡もなく、学校のツイッターも震災の日から更新されなくなり、被害を受けたのかと不安だったけど、GW明けに課題が送られてきました。キリスト教系の学校だったんですが、一時は避難所で、ボランティアベースや救援物資の保管場所にもなって学校が再開できなかったようなんです。7月のスクーリングでは毎日余震がある中で実習をしていました。和菓子・洋菓子・パンの授業があったんですが、節電節電って言われていたところで、仙台は被災地でもあるので余計に節電しなければと思うのに、洋菓子やパンはクリームが溶けないようクーラーをガンガン効かせて、オーブンもガンガン熱くして、すごく良心の呵責があった。節水してくださいと言われていたのに、クリームとかバターとか、洗剤とお湯でガンガン流さないと器具も洗えない。その中で和菓子は、鍋1個とガスコンロ1個があれば、ほぼできる。蒸せるし焼けるし煮れるし練れる。水もあまり使わず、布巾1枚あれば全部きれいになる。先生が『原料も、洋菓子はドライフルーツとかナッツとか、船に揺られて遠くからきて、それだけ燃料を消費する。だけど、和菓子は豆とか身近な材料で、原料の保存や加工も簡単』と話していた。それまで製菓をエネルギーの観点から考えたことがなかった。夏のお菓子も、ゼラチンは15度以下じゃないと固まらないから冷やさなきゃいけないけど、寒天は常温で固まるから“涼しげなもの”は作れる。水まんじゅうとか、物理的ではなく心情に涼しさを訴えてエネルギー最小限で夏を乗り切るという、和菓子はすごい文化だなと。2011年のあの夏、仙台に行ったから余計に強く思ったんだと思う。私はもともとパン屋さんになりたくて入学したんですが、あれからパンを焼かなくなったもんね、全然。」

▶**幸子さん**「パンパンって言って仙台に行ったのに、帰ってきたら和菓子志向になって、なんでだろうな、と思ったよ(笑)」



## Q10年後のイメージを教えてください。

▶**優子さん**「変わらずいたいな、と思う。変わらずにいるって普通のように思えるけど、日々繰り返すことをちゃんとやっていないとそうなれないので。あと、和菓子のレッスンがもっと盛況になってくれればと思う(笑)。東京の方ではブームになっているんだけど、青森がそうなるには10年ぐらいかかるかな。楽しさを伝えたい。」

▶**幸子さん**「私は10年後はもういないと思うよ。元気であればそれでいいよね。1年1年だね。これからの10年で長いよ。その日その日。」

▶**優子さん**「お店の料理は母から教わって昔の料理を真似して作っています。うちのメニューの開発者ですから、いないと困るわ。」**終**

【編集後記】今号 No.085のインタビューと撮影：前田ふひと  
製菓衛生師であり野菜ソムリエでもある高谷優子さんが、自宅を改装して2014年4月にオープンした「SMILE & SPOON キッチンスタジオ」は、地元の野菜を中心に使い、だしで減塩を心掛けるなどした滋味あふれるランチの提供と、料理教室や和菓子教室を開いています。“食べ物に必要なエネルギー”について、和菓子の話は私にも衝撃的でした。私は暑い盛りの生まれなのですが、今後は誕生日にはケーキではなく和菓子を食べようと決めました(笑)。

寄付総額：¥7,339,466 (2011年6月～2019年2月22日まで)

## STAFF VOICE

／ 笹森 まさみ  
あ  
り  
が  
と  
う  
ご  
ざ  
い  
ま  
し  
た



2017年の秋から数年間だけの短い間ではありましたが tovo plus インタビュアーのお手伝いをさせていただきました。震災後の価値観や考え方、ライフスタイルが変わったというお話や実際に被災地を訪れたという方たち、大切な方を津波で失ったという方まで。それぞれ貴重なお話を聞かせていただき、本当にありがとうございました。

tovoの活動がこれで終了というのはさみしいですね。でも、小山田さん、何かまた動き出すような気がします。何かお力になれることがあれば、いつでも参加したいなと思っています。

代表の小山田さん、そして tovo メンバーの皆さん、長い間本当にお疲れ様でした。短い時間ではありましたが皆様と一緒に活動できたこと、本当に貴重な体験となりました。ありがとうございました。**終**

### 笹森 まさみ

弘前市出身北津軽郡在住。弘前で17年、青森市で2年、フリーペーパー編集兼広告営業の仕事を経て現在は弘前市のホテル、バンケットセールス部にて仕事しています。  
最近ハマっているのは娘と習い始めて3年目の空手！好きな言葉は『一陽来復』！





## Q2011年3月11日のことは覚えていますか？

▶**郁弥さん**「ちょうど家にいて、仕事に行く準備をして、お店にそろそろ行こっかな、行かないかなって思った時にグラグラってきて、『あっ、地震だな』って思って、『強い!』って思って、その時、音楽を聞いてたんですが、それも止まって、立てかけてた鏡が倒れそうになって、それをずっと押さえてたの。んで、終わって電気がつかなくて、確か水道とかも使えなかったんじゃないの?」

▶**好さん**「え〜、断水もしたんだ。」

▶**郁弥さん**「うん。で、とりあえず携帯充電したくて、その時乗ってた車にエンジンかけて、テレビが、パッ!てついた時に、あの津波の映像が入ってきて、『あ、これヤバイんだ』って思った記憶がすごい一番記憶に残ってる。」

▶**好さん**「私は本業が美容師で職場にいました。ちょうどお客さんがいた時に、急に揺れ始めました。お店の鏡が上下で支えてる構造になっていて、思ったより揺れて、すごくたわむんです。それを1人で2枚ずつ押さえてました。後で考えたらソツとするんですけど、何日か後に、ニュースで髪とかも途中のまま公園に逃げてる人がインタビューされてる映像を見て、『そうか、途中だところなんだ』と思って、うちは幸い来店したばかりのお客さんとか、終わったお客さんとかで、そういうタイミングだったので、お客さんに支障なくて良かったなと思います。ちょうどその後の数時間は予約も入ってなかったんで良かったですね。停電が続いていて、電気もつかないし、『とりあえず皆でご飯食べよう、とりあえず落ち着こう』ってなって、外に出てみたら信号も消えてるじゃんみたいな。『えっ、ちょっと待って』って。ワンセグつけてみたら、『えっ、何これ?』みたいな。だんだん状況の酷さが見えてきて、なんかご飯食べてる場合じゃないねって話をしました。」

▶**郁弥さん**「その時は、妹がちょうど美容学校の卒業のタイミングで、外でお祝いをする予定だったんですが、予定を変更して家で祝うかってことになり、電気もつかない、水も通らない中、事前に用意していたケーキでお祝いしました。まだその時は、被害がそこまでスゴイものだと思ってなくて、次の日になってあらためてニュースを見て、これホントにマズイだってことを、だんだん実感してきて、でも、そう思ってるだけで何もできない状況でした。」

## Qそれ以降、変化などありましたか？

▶**好さん**「そうですね、結婚して子どもが生まれて、家族が増えました。あと、マメにいろんな人に会っておこうと思うようになりました。『あの人どうしてるかな?』って思った時に会っておこう、会える時に会っておかなきゃと。身近なおじいちゃん、おばあちゃんもそうですが、遠くにいて一緒に住んでなかったりすると、あと何回会えるのかな、いつ何があるか分かんないなっていう危

機感みたいなものがある、会いたい時に会いたい人には会っておこうと思います。会えなくても電話するとか、状況を知っておくとか。用事がなくても安否確認だけはしておこうと思うようになったかな。」

▶**郁弥さん**「結局、電気がないと、こんだけ辛いんだなって思ったのと、好(このみ)のお父さんすごいアウトドア好きだから、電気がつかえない時にはアウトドアの知識がすごい必要なんだと改めて思った(笑)。」

▶**好さん**「火をおこすとか(笑)。」

▶**郁弥さん**「どうすれば、早く火が起こるのか?って聞いた時に『そんなやりかたも分かんねえのか?』って言われた。日常でBBQしながらでも、こうしたらイイ、こうすればイイとか、教わったりしながら、いろいろ感じながら生活するようになった。アウトドアのことは覚えておいたほうがイイんじゃないかなって思うようになったかな。」

## Q10年後のイメージを教えてください。

▶**好さん**「10年後か…どうなってるんでしょうね。なんか予測がつかないけど、自分の周りにいる人、皆が元気だったら良いなと思います。世界平和を願うほど大きなことは言えないけど、せめて、自分の周りには元気でいて欲しい。あとは子どもが生きやすい環境になればイイなとも思う。子どもを生む前と比べて、暮らす環境とか、たいして世の中に貢献ができるわけじゃないけど、子どもが生まれてからは、この先が良くなればイイなと思うようになりました。」

▶**郁弥さん**「自分は音楽の活動をしていて『みんなのハートをホットにハッピーにしていきたい』っていうテーマがあって、10年後そういうのを歌を唄うイベント的なもので、あいつが居れば楽しいな、あいつ楽しいヤツだな、そういうヤツになっていた、というのがありますね。」

▶**好さん**「2人で3年前に『プロジェクトHエンターテインメント』というのを立ち上げたんです。エンターテインメントを通してハートをホットにハッピーにしていけたら良いなと思ってやってます。飲食店を始めたのも、楽しくなる場所、何かあった時に繋がれるコミュニティとかが出来上がればイイなと思って始めました。」

▶**郁弥さん**「こいつら(福桜くん)の友だちが集まる場所になるかもしれないしね。」終

【編集後記】今号No.086のインタビューと撮影：赤石 嘉寿貴

ひょんな繋がりから、今回取材させていただいたのは「青森のATUSHI」ことFUMIYAさんご家族でした。お2人のお話を聞いたり、福桜くんへの優しい眼差しを見ながら、「みんなのハートをホットにハッピーにしていきたい」という、プロジェクトHの活動のもと始めたお店や活動は、関わり合ういろんな人たちの人生を輝くものに変えていくに違いありません。素敵なテーマを聞いた自分は、帰りにシラスアボカドのおにぎりや、明太子チーズのおにぎりを頬張りながら、自身のプロジェクトのテーマを再確認したのでした。

寄付総額：¥7,468,300(2011年6月～2019年4月25日まで)





## Q2011年3月11日のことは覚えていますか？

▶**勇紀さん**「うちは墓石店をしているのですが、ちょうどメーカーの営業の方が来ていて、打ち合せの最中でした。事務所から展示場の墓石の様子分かるのですが、背の高い墓石がグラグラ揺れてまして、これ以上揺れたら倒れるな〜。倒れたらとんでもないことになるな〜。おさえに行くとか余計あぶないので祈るしかなかったのを覚えています。」

▶**麻里さん**「わたしは当時小学生だった長女を迎えに行っていました。下校時で、校庭に出ていた子供たちを先生方が校庭の中央に集めてくれて、揺れがおさまるのを待っていました。ものすごく怖かったのを覚えています。」

▶**勇紀さん**「停電して情報が得られないので、帰ってきた長女を車に乗せて、車の中でニュースを見ました。むつ湾が見える高台まで車で走りましたが、むつ湾はいつもと同じ姿で安心しました。でも、翌日のニュースで沿岸部が大変なことになっていてゾッとしました。」

▶**麻里さん**「青年部で炊き出しにも行ったよね。」

▶**勇紀さん**「平内町商工会の青年部に所属していて、仲間と何かしなければいけないと話し合い岩手県の被災地に連絡を取って、トラックに物資を詰め込み炊き出しに行きました。ほたての汁を持って行きまして、久々に海の物が食べられたと喜んで頂いたのを覚えています。」

▶**勇紀さん**「商工会で予定していたイベントが軒並み中止になったけど、だんだんと状況が整ってきて、秋にはチャリティーイベントを開催でき、来て頂いた方から沢山の募金を頂きました。」

## Qそれ以降、変化などありましたか？

▶**麻里さん**「防災意識が高まったというか、家の中に保存食を買い込んでおいたり、懐中電灯をたくさん用意しています。」

▶**勇紀さん**「商工会青年部は、全国と北海道東北6県の組織もあって、3.11以降も熊本や北海道の地震、中国地方の豪雨災害の情報も入ってきます。組織的に災害時支援マニュアルを整え、実際に運用されることもありました。会議があれば今でも必ず議題にあがります。」

▶**麻里さん**「電気が使えないのがとっても不便だったけど、福島原発の事故があったり、節電もそうですが発電方法についても気にする様になりました。いまでも解決していないですね。あと、あばあちゃん防災意識がものすごく高まりました。」

## Q10年後のイメージを教えてください。

▶**勇紀さん**「とにかく子供たちにすくすく育てて欲しいですね。いつでも自分自身が、やりたいことがやれる状況を作っておきたいなって思います。ただ、私個人としては、どんどんお墓を立てる人が少なくなっていく中、自分の仕事の未来を形作って行く努力と思考を、これからしていかなければと思っています。」

▶**麻里さん**「昨年ひらないまるごとグルメ館内にコーヒースタンドを開いたので続けていければって思います。夏場は広場に子供たちも集まるし、遊んでいる姿を見ると癒されます。親子でゆっくりして貰える場を作りたいと思います。」**終**

【編集後記】 今号No.087のインタビューと撮影：須川健太郎

本人のラブコールと共に、今回取材させていただいた武田ご夫妻(と素来ちゃん)。青森市平内地区の活性化を(仕事そっこのけで)全力に取り組む姿がかっこいい旦那様と、自分自身も優しく、笑顔が素敵な奥様の名物コンビにはいつも優しい気持ちにさせられます。撮影の背景として最初「海」も考えたのですが、天真爛漫に遊ぶ素来ちゃんの姿をみて遊具の前で撮影させていただきました。※本当は忍者になれる遊具前で「ニンニンポーズ」で撮りたい素来ちゃんではありましたが(笑)。地域活性化を真剣に行う大切さ。そこにあるものはまず真心と地元の人の笑顔が第一ということを感じた1日でした。

寄付総額：¥7,468,300(2011年6月～2019年4月25日まで)



**Q2011年3月11日のことは覚えていますか？**

▶**汐里さん**「私は当時浅虫の観光協会です仕事をしていて、地震がきた時は観光案内所にいました。これまで感じたことがない大きな地震だったので、他のスタッフと一緒に机の下に入りました。地震がおさまってから、隣町に1人で住んでいる祖母を迎えにいきました。余震もあり建物の中にいるのが怖かったので、そのまま車で暖をとりながらラジオを聞いて過ごしました。」

▶**雄三さん**「当時私は三沢で米軍の通訳をしていました。地震があった日は休みで、三沢の海沿いの道を車で走っていました。ハンドルが揺れて『風かな?』と思ったのですが、停車した時に地震だと気がつきました。海を見ると変に穏やかで違和感を感じ、これは津波が来るだろうと思いました。急いで三沢市内へ戻ろうとしましたが信号は止まっていて、交差点では混乱が見られました。ケータイもつながらないので、荷物をまとめてすぐに浅虫の実家に向かいました。」

**Qその日の夜は？**

▶**汐里さん**「普段、浅虫はホテルや旅館の灯りで夜でも明るいのですが、あの日は真っ暗で不気味でした。余震のことを考えるとガスを使うのもためらわれたので、ダルマストーブの上で乾麺を調理して、家族みんな同じ部屋で過ごしました。」

**Qそれ以降、変化などありましたか？**

▶**汐里さん**「震災の年に転職をしました。同期入社した人たちが東北各地にいて一緒に研修を受けたのですが、その中には自宅が津波の被害にあって仮設住宅に住んでいる人もいました。大変な様子を近くで目の当たりにして、改めて家族や仲間がいることの大切さを感じました。」

それから数年間会社勤めをする中で、『家族と一緒に何か新しいことをやりたい』と思うようになりました。もともと自分のお店をやりたい気持ちはあったし、両親の『喫茶店をやりたい』という長年の夢も知っていました。そんな時に、今のお店の物件が空いているということを母が見つけてきてくれました。それからは家族の中でどんどん話が進んで、数ヶ月後にはお店をオープンすることができました。自分のやりたいことを否定せず、後押ししてくれる両親には感謝しています。」

▶**雄三さん**「震災後、非常時に役立つものを車に置くようになりました。防寒具やタオル、あとは釣り具とか。人に言うと笑われますが、釣り具があるといざという時に食料を確保することができます。最悪な状

況下でも食べものを手に入れられる手段は持っておくべきだと思います。仕事の面では震災後に転職をして航空会社で働きました。震災を経て、人と人のつながりの大切さを改めて感じましたし、日々空港で色々な人たちの出会いと別れの場面を目にすることで、その気持ちは一層強く感じるようになりました。人と人のつながり、そして自分がずっと携わってきた英語、この2つを掛け合わせた時に、子供たちに英会話を教える学習塾をやりたいと思い立ち、独立をして英会話と学習塾のDREAMERS FIELDを立ち上げました。」

**Q10年後のイメージを教えてください。**

▶**汐里さん**「お店を続けていると、新しいことを取り入れて変わっていく部分もあると思うけど『いつでも変わらない』ということも大事だと思っています。たとえば外見や形は変わっても、お店をはじめたきっかけになっている、人とのつながりや家族とのつながり、そういう自分が大事にしたいと思っている内面の部分は変わらずにありたいと思っています。今までも大事にしてきたことなので、たぶん10年後もそこは変わらずにいられると思っています。」

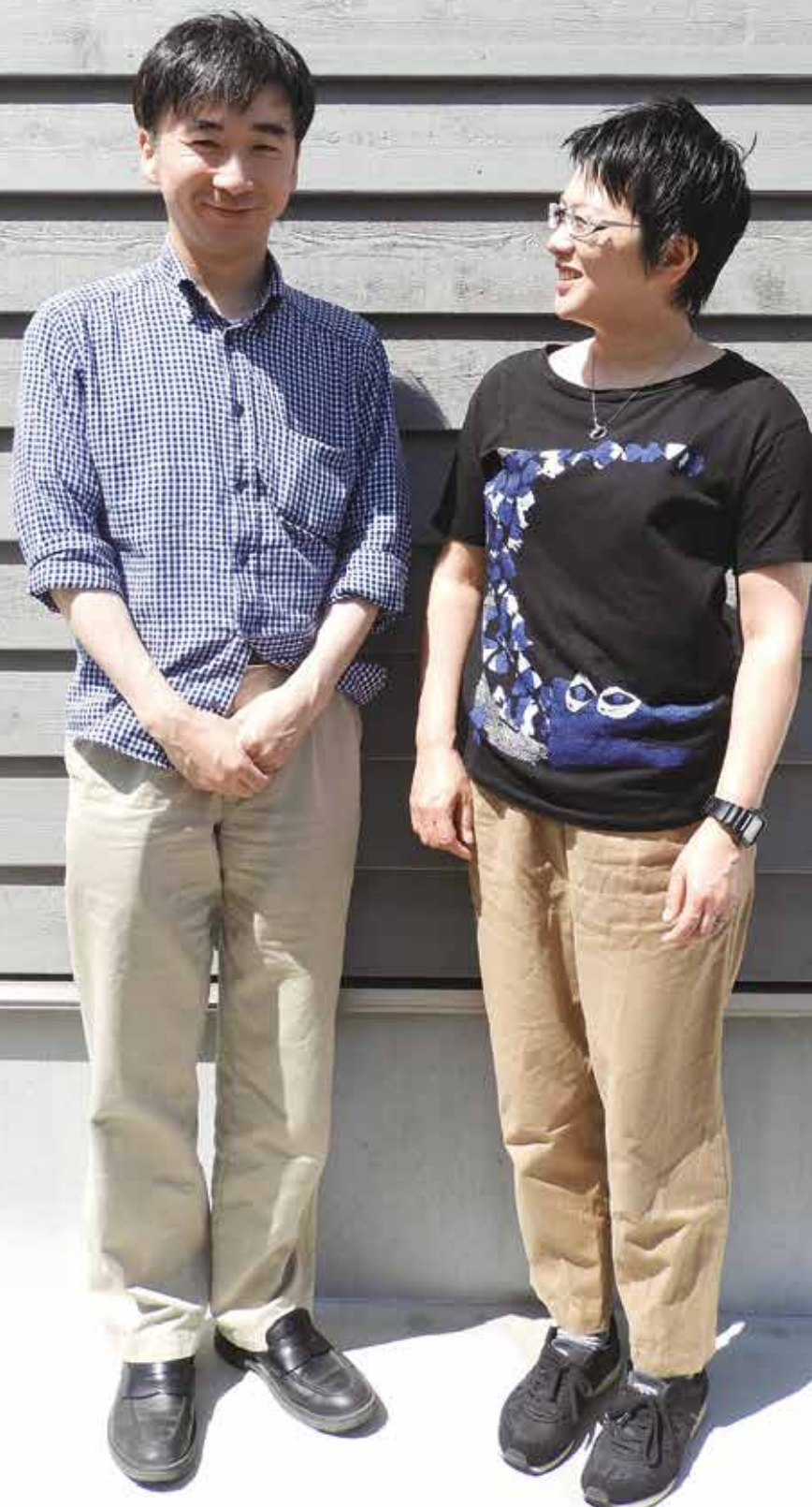
▶**雄三さん**「まず思うのは10年後も自分らしくありたいということです。人生は1回きりなのでやりたいことはなるべくやっておきたいし、自分で自分の背中を押していきたい。同時に、何か一歩踏み出そうとしている人たちの背中を押せる存在でありたいと思います。英語の一番の魅力は色々な国の人たちとコミュニケーションがとれること。英語を通して、日本と海外との人のつながりを後押しできればいいと思っています。」終

【編集後記】今号No.088のインタビューと撮影：工藤文昭

成田汐里さん、雄三さんのご姉弟にお話を伺いに古民家カフェ apricotを訪ねました。汐里さんはカフェ、雄三さんは英会話スクールと、それぞれが違う分野を歩んでいますが「人とのつながり」を大事にしながら事業を展開する姿勢はお二人とも全く変わりません。一つの頂上に対して登山道が幾つもあるように、形は違ってもそれぞれが目指す先は同じところに感じました。帰りに寄った浅虫の海は穏やかで居心地がよく、思いがけずゆっくりしてから帰りました。

寄付総額：¥7,648,484(2011年6月～2019年6月27日まで)





## Q2011年3月11日のことは覚えていますか？

▶**徹さん**「教育関係の仕事をしているので、学校（高校）の中にいました。授業中だったのですが、全校生徒を体育館に集めました。学校周辺も停電にはなりましたが、何か壊れた、という状況は確認できませんでした。生徒は家が近い人は安全を確認した上で帰宅してもらい、遠方から来ている生徒もいましたので、親御さんに迎えにきていただくまでは学校で待機してもらいました。時期的に卒業式の後でしたので3年生はもう学校には来ていなかったのですが、1年生、2年生全員を無事返した頃はもう夜になっていました。寒くて学校にあるダルマストーブをかき集めて暖を取ったのを憶えています。翌日は確か休日学校は休みでした。まだ停電が続いていたのでパソコンが使えず、入学試験に向けた書類作成は手書きでやりました。」

▶**智久子さん**「私は高校教諭をしているのですが、当時は青森市の高校に勤務していました。ちょうどその時間、忘れ物を取りに家に戻ったときに揺れ始めました。揺れが大きかったので、『これはただ事じゃないぞ!』と思いました。国道4号線も信号が止まって車が大渋滞していました。何とか学校まで戻り、ワンセグを見たら津波の映像が流れていて、びっくりしました。生徒は教室に待機させ、保護者の方に迎えに来てもらい、遠方から来ている生徒は他の先生たちが送り届けました。19時頃、最後の生徒を見届けてその日は実家の弘前まで戻ったのですが、途中、ガソリンスタンドでは給油を待つ車がズラリと並んでいましたね。停電であたりは真っ暗でいつもとは状況が全く違いました。」

## Q 震災後変わったことは？

▶**徹さん**「あの時ほどの事態になったことがそれまでなかったので、いざ地震が起こってどうしたらいいのか、とても慌てました。震災後は緊急連絡網の見直しであるとか、緊急事態になったとき、どういうことに気をつけなければならないかを考えるようになりました。」

▶**智久子さん**「あの日は金曜日で、週末は県南の高校に部活動（弓道部）の遠征に行く予定でした。しかし県南地方は私が住んでいる津軽地域より被害が甚大で、顧問の先生方とも連絡が取れず、遠征中止に。部員との連絡も携帯電話が繋がらず、お互いの安否を確認できるまでに時間がかかりました。3月下旬には鹿児島県での全国選抜大会の出場も控えていたのですが、津波の被害に遭われた学校もあり、大会は開催中止になりました。大会主催者からいただいた記念品とプログラム、監督証は大事に取って置いています。後日一緒に岩手県の顧問の先生から津波

に遭った後の学校の様子を写真で見せてもらいましたが、言葉にならない思いだったし、みんなで弓を引けることがどんなにありがたいことか、思い知らされました。自分ができることは何だろう、と考えたら、まずは復興に向けて動いている被災地の商品を購入することからささやかな支援になればと。例えば気仙沼の『アンカーコーヒー』のコーヒーやパーカーなどのグッズ、そしてtovoのチャリティーグッズの購入。周りに『これなあに?』と聞かれることもあって、活動の説明をすることで何かしらチャリティーの輪が広がればいいなと。あとは防災の意識が大きく変わりました。いつ地震や天災が起こるかわからない。授業では防災グッズや避難グッズ、非常食について、実際に私が購入し車に積んでいるリュックの中を見せてあれこれ意見を聞いたりしています。『起きて当たり前』の意識を常に持ち『自分たちならどうする?』と問いかけるようにしています。」

## Q10年後のイメージを教えてください。

▶**徹さん**「今と変わらずにやれているといいなと思います。人とつながりは今とてもいいつながりを持っているので、この先もずっと大事にして損ないたくないですね。」

▶**智久子さん**「3.11では『一瞬でこうなっちゃうんだ』ということを思い知りました。もう、非力だな、と。自然の力に逆らうことはできないし、止めることもできない。だからせめて『減災』出来るように日頃から防災の意識を持続けることを忘れないようにしたいと思います。近い将来、防災士になるための資格免許を取りたいです。そしてチャリティー活動など復興支援につながることを何かしていきたいと思います。」終

【編集後記】今号No.089のインタビューと撮影：笹森まami

館田夫妻はわたくしの中学時代の同窓生。徹さんは応援団長で同じクラス。智久さんはテニス部で日焼けした感じがとてもチャミングでした。でも、2人と仲良くなったのはここ数年のこと。tovoのイベントにも足を運んでくれて、グッズも購入してくれて、そして今回はインタビューも快く引き受けてくれました。本当にありがとう！

寄付総額：¥7,648,484（2011年6月～2019年6月27日まで）





## Q2011年3月11日のことは覚えていますか？

▶**加奈子さん**「ランチが終わった後でしたね。隣のお店のお客さんが外に出てるのが見えて。でも、揺れていた時は、よくある地震くらいにしか思わなかったです。ちょっと長いねーとか話していたんですが、停電が起きて流石に不安になりましたね。夜になって店の周りがあんなに真っ暗なのは初めてだったし。当時は望加は生まれてなかったけど、もしいたらめっちゃめっちゃ怖がったろうなー。」

▶**勝美さん**「停電、すぐ復活すると思ってたら全然で。店舗は復旧まで2〜3日かかったと思います。ガスは生きてたので食事には不自由しませんでした。冷蔵庫のものがダメにならないか心配だったけど、まだ寒い時期だったからなんとか大丈夫でしたね。弘前で被害といったら停電くらいだったし、他で起きた事に比べたらなんだそれくらいって今となっては思いますが、それでもライフラインの何かが欠けるって大きいなと感じましたね。逆に、あーこれは電気動いてたんだなーってわかったものもありました(笑)。教訓になりました。だるまストーブをその後買いましたねー。」

▶**加奈子さん**「電気復活した知り合いの人のお家に行ってお風呂とかテレビを借りて、津波の様子もその時によやく知ったんです。みんなで集まってパスタ食べてたんですが、日本じゃないみたいだーって呆然としてました。」

## Qお店の営業を再開してから、印象に残っていることはありますか？

▶**勝美さん**「使う食材は運良く全部仕入れることができたんです。スタンダードな材料を使ってるので品切れとかはなくて。出せないメニューもなく営業再開することができました。」

▶**加奈子さん**「あの頃は色々と自粛ムードがあったし、自分たちでも出来るのが何かないかなと考えて、募金弁当を何ヶ月かやってたんです。売上の一部を募金しますっていうのをブログでもお知らせして。再開直後の頃は食料を求めて近所のデパートから流れてくるお客さんが多かったけど、落ち着いてきた頃には募金弁当のことが広まって、それが目当てのお客さんも増えていきましたね。だんだん、みんな普通にランチを食べに来てました。普通の生活に戻りたがってる感じがしたんです。」

▶**勝美さん**「正直、普段以上にお客さんが入ってました。外食って娯楽に近いし、しばらく誰も来ないだろうと覚悟してたので、すごくありがたかった。募金弁当でお客さんも自分たちも気持ちがちょっと救われたような感じがしてました。自粛するんじゃなくてお金

を使う方がいいって、東国原(英夫)が言ってたのが印象に残ってるんです。ただかわいそうがっていても何にもならないんだって。一千万円とかうちからは出ないけど、出来る分だけでも変えていけるんだなって、店を営業していくこと、お金を使うことに対して気持ちを切り替えることができました。」

## Q10年後のイメージを教えてください。

▶**望加ちゃん**「まだわかんない!」

▶**加奈子さん**「望加は15歳になるね。一時期将来の夢はシェフって言ってたな(笑)」

▶**勝美さん**「駅前にケーキ屋ないからシェフよりパティシエがいいんじゃない?ここの店改装してさ(笑)」

▶**加奈子さん**「とにかく無難だけど、健康第一で、寝て起きて食べて寝てみたい、普通にしたら一番かな!」

▶**勝美さん**「贅沢はいいから、ほんと今みたいな、当たり前〜な生活ができればそれがいいですねー。」

終

【編集後記】今号No.090のインタビューと撮影：坂本小雪

弘前でうまいパスタ屋ったらPastaYa。店名もさることながらシンブルイズベストなのは使用される食材達も同じだそう。一度食べたら舌と脳が忘れないパスタがここにあるのです(個人的にはデザートプリンも推しです)。そんな葛西さんご夫妻から伺った、人々の「普通の日常に戻ろうとする」感覚というのが印象的でした。意識的でも無意識でも、おいしい食事に安らぎを見出すことって、人間ならではの贅沢だけど当たり前であってほしい感覚だなと思いました。

寄付総額：¥7,796,476(2011年6月〜2019年8月26日まで)





## Q2011年3月11日のことは覚えていますか？

▶**公一さん**「その頃はまだ結婚する前だったんです。2010年の12月に会って、クリスマスイブから交際がスタートして、2011年の3月3日にプロポーズして、その8日後が3.11。僕は五所川原にある職場で仕事してました。まだPENTHOUSE（ペントハウス。青森市にあるカフェバー。2012年11月開店）もできてなかったんですが、震災1ヶ月前の2月には会社登記はしていたので、色々と準備を進めながら五所川原の介護施設で働いている頃でしたね。2010年に亡くなった母から受け継いだ病院と介護施設（グループホーム）を経営していて、その病院の2階の事務所にいた時にゴースと揺れが来ました。今は他の場所に移っているのですが、この頃は病院の4階部分がグループホームになっていたんで、まずは慌てて入居者さんの安否確認に行きましたね。2階の事務所でも結構揺れていたんで、4階はもっと揺れていたと思いますが、皆さん割と落ち着いていました。少し離れた場所にもグループホームがあったので、そちらにも電話して安否確認しました。うちの病院は救急もやっていたことから、手術に備えて重油の自家発電装置があったんです。なので、院内でテレビも見れていて、太平洋岸に津波が来ることも早い段階で知ることができました。テレビはずっと同じ情報の繰り返しだったんですけど、インターネットも使えていたので情報を集めていましたね。夜は停電で町中真っ暗だったんですが、うちの病院だけ煌々と明りが点いている状態でした。余震が心配だったので、その日は施設に泊まりました。彼女（敦子さん）とは、電話は使えていなかったんで確か…メール…かな？LINE…はまだなかったんで、たぶんメールでやり取りしました。」

▶**敦子さん**「私も地震があった時は工作中でしたね。それまでも地震は何度か経験していたので、当初は特にそこまで気にしていなかったんですけど、そのうち職場の時計が止まって…だんだん『あれ？いつもと違う』と思って…。職場は旧弘前市立図書館だったんですが、本が散乱するとかはなかったです。帰り道では信号も点いていないし…なんじゃこりゃって。全然情報もなくで…次の日の新聞を見た時は衝撃でしたね。」

▶**公一さん**「僕の家も彼女の家も、特に被害はなかったんですが“コンビニから商品がなくなる”“ガソリンを入れられない”といった状況でしたので、翌日には彼女の家にも物資を持って行きましたね。いつまで続くのか分からない状況でしたし、彼女はお母様と2人暮らしだったこともあって心配でしたので、水や長持ちしそうな食料、インスタント系のご飯とか、ティッシュペーパーやトイレトペーパーといった日用品等を持って行きました。」

## Qその後、変わったことはありましたか？

▶**公一さん**「家族や絆といったものをより強く意識するようになりました。家族を護っていこうという意識は以前からありましたが、震災以降は『自分が率先して護っていかなくさ』と思うようになりました。グループホームの入居者さんに対しても同じように。あと、災害に備えて手巻き式のラジオや防災グッズも揃えました。施設の方には前から防災グッズはあったのですが、震災を通して何が必要か分かったので、食料や水等も併せて用意しましたね。他県や海外の友人とも安否確認できるので、SNSの有効性も再認識しましたね。」

▶**敦子さん**「仕事や職場に決して不満があったわけではなかったのですが、ここで死ぬわけにはいかないと思うようになって、スパッと仕事を辞めました。4月には（公一さんと）一緒に住み始めて、6月1日に籍を入れました。あと、懐中電灯を用意しました。置き場所も決めて。もしもの時に備えて、風呂の水も溜めておくようになりましたね。」

## Q10年後はどうされているでしょう？

▶**公一さん**「（日南ちゃんが）10歳か…。家族、仲良くしたいですね。息子も増えていたらいいなあと思いますね。」

▶**敦子さん**「日南に兄弟が欲しい気もするね。」

▶**公一さん**「息子ができたら、キャッチボールしたいですね。子供たちはあまり縛ることはせずのびのびと育てたいですね。やりたいことをやらせたいです。あと、自分としては、仕事もプライベートも常に前向きでいたい。今ある“日常”が、実はあっという間に失われることもあるんだっていうことを震災で学びましたしね。後悔のないようにしたいです。」**終**

## 【編集後記】

今号No.091のインタビュー：なるみしう 撮影：須川健太郎  
青森市でPENTHOUSEやUGUISUといった素敵なお店を経営されている「コーイチくん」。その家族への取材を通し、これから新たな仕事を始めて新たな家族を作り上げていこうとした矢先に震災に遭った2人の、その絆が強まっていく過程を見せていただけたような気がする。取材中、2人の腕の中を日南ちゃんが行ったり来たり。ベタな表現ではあるが、日南ちゃんは正に愛の結晶であった。ちなみにLINEは、東日本大震災で大切な人と連絡が取れなかった経験を元に、2011年6月に誕生している。

寄付総額：¥7,796,476（2011年6月～2019年8月26日まで）





**Q 知也さんは青森市出身、朋子さんは千葉県出身。2011年3月11日は青森にお住まいではありませんでした。あの日のことを覚えていますか？**

▶**朋子さん**「私たちは彼が19歳、私が22歳のときに逢っているんですが、とにかくくっついたり別れたりが多い2人で、そもそも311のときは一緒にいないっていう(笑)。」

▶**知也さん**「311のころは、僕は別な人と結婚していた。当時は他人の2人でした(笑)。僕は東京・六本木の職場にいました。ビルが馬鹿みたいに揺れているのを目の当たりにして、これが(この世の)「終わり」なのかなと思ったぐらい。」

▶**朋子さん**「私は当時は本業の映像翻訳と二足のわらじで、テレビ局でウェブニュースの仕事もしていました。夜勤前にお風呂場で髪を染めてたら地震がきて。とにかく職場に行こうと洗い流したんですが、停電だったのかな、水は出たけどお湯が出なくて。電話も通じなくて、会社に公衆電話から10回ぐらいかけてやっとつながった。『来れるようならすぐ来て』と言われ、駅まで行っただけで電車も走ってなくて、夜を明かして、朝になって電車に乗ったと記憶してます。」

▶**知也さん**「自分は職場から歩いて帰れる距離に自宅があって、ライフラインも使えたので、困ることはなかったけど、テレビを見ては心を痛めた。地震の被害の状況と、福島第一原発の事故の映像などがどんどん入ってきて。」

▶**朋子さん**「みんな福島事故のことが心配で、私自身も『外を歩いて大丈夫なんだろうか』と思ったりしましたね。」

**Q その後、何か変化はありましたか。**

▶**知也さん**「僕はそれまでほんとクズだったんです(笑)。それまで自分はなんとなく原発反対だと認識してたのに、原発事故をまのあたりにして、なんにも分かってなかったと思ったし、自分のそれまでの生活がエネルギー問題に影響していないとは思えなかった。生き改めようとしたんですけど、どうしたらいいか分からなくて。だから地震の数カ月後に仕事をやめて、環境のためになる仕事をできないか、すごい模索を始めるんですよね。当時の妻にそういう話をして、でも相手はそれまでと同じ生活を続けられる人で、でも僕は同じように生きられなかったから、結局平和的に離婚しました。」

それを機にずっと行ってみたかった父島と屋久島に旅行しました。父島で泊まった宿で人手を探していて、働くことになった。彼女(朋子さん)と再会したのもそのころです。

父島ではシーカヤックとトレッキングのガイドをしていました。本当に楽園みたいな場所で毎日カヤック漕いで、なんでここはこんなにきれいなんだろうと当然思うんです。そうすると、ここは昔から人口が少なく、でも東京のように人がいればいるほど汚れる、そういう世界・社会なんだなと思わざるを得ない。そのころからいろんなことを勉強するようになった。自然農の本も読んで、かなり影響を受けたと思います。エネルギー問題を考えるとき、そもそもエネルギーを自分でつukれないというところに問題があって、そこに無関心な自分にも問題があったと気づいた。エネルギーどころか、食べ物すらつukれない自分。食べ物って日々活動のエネルギー源なんですよ。それが多分、農業に興味を持ったきっかけです。

父島には2年いて、その後青森に帰って、県内で自然ガイドができないかとかいろいろ模索しましたね。でも、自分が自然ガイドをしたとしても、自然自体はどんどん悪化していく。農業も、食べ物をつukればつukるほど環境に負荷がかかるのっておかしいじゃないですか。環境にも健康にも響く野菜を作れたらなと思いました。その後1年半ほど農業の研修をして、2015年に自分の農園を持ち、自然農で初めての作付けをしました。」

▶**朋子さん**「再会してからすごく変わったなと思っていて。19歳からほんとにいろんなことをやってるのを見てきたけど、ようやくたどり着いたんだなと、そばで見ていて感じます。これだったのかあと。もう変わることはないんじゃないかなと思います。」

**Q 10年後はどうされているでしょう？**

▶**朋子さん**「いま、畑にいて、すごく意義があることをやってると思う。これだけ暑くなって、10年後に農地としてこの場所があるか分からない。でも私は農業をするならここがいいんですよね。ここじゃなきゃ嫌。それってすごいこだわりで、ここが好きだから楽しいというのがあって。いま、映像翻訳と農業と二足のわらじでとても大変ですけど、字幕の仕事は子どものころからの夢で、すごく好きなので、10年後も続けていられたらいい。」

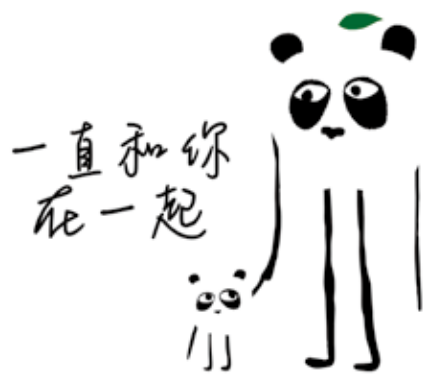
▶**知也さん**「(朋子さんに)もうちょっと睡眠時間とった方がいいよ。ぜんぜん寝ないですよ。いまの無茶な生活で保てられるのは野菜のおかげだと思うよ。」

▶**朋子さん**「そうかもね。」

▶**知也さん**「健康第一って昔から言われているけど、現代は落とし穴がたくさんあって、食品の問題もそう、添加物もそう、本当に健康第一なのかなと思っちゃう。利益を生む為にどんどん安く原料を仕入れるというのが資本主義の原理で、消費者はそんなに価値がな



いけど便利で楽ができるものにお金を払って、けどそれが結果として環境負荷になってるところにつなげて考えないと。10年後、みんなが環境を気にしてて、というのが当たり前の社会になってると思う。アメリカはオーガニックとそうじゃないものが選択できる社会になってて、ヨーロッパはもう少し進んでいて、日本もそうありたい。そうなった時のことを考えて開拓していきたい。」**終**



#### 【編集後記】

今号No.092のインタビューと撮影：前田ふひと

月に2回、雲谷ト森山農園からの野菜が届くのを楽しみにしている一人です。同農園は自然農だけでなく、「固定種」の野菜づくりにこだわりの特徴。市場は、勢力を強め収量をあげることを目的に人為的に改良した一代限りの「F1種」が優勢ですが、「固定種」は実ったら種を取り、また蒔いて育て、種を取る—ということを何代も繰り返してきたものです。地球上で繰り返されてきた命の営みを、守り続ける森山さん夫妻。その野菜はもちろん、ちょっと驚く美味しさですよ。

寄付総額：¥8,105,757 (2011年6月～2019年10月28日まで)

今、もう一度お話を聞いてみた。



tovo plus no.000 (March.11.2012)



(July.2020)

齊藤 準悦さん  
順子さん  
麻綾ちゃん  
芽衣ちゃん  
撮影場所 菊ヶ丘運動公園 (五所川原市)

準悦さん「(昔の写真見て) 若いね(笑)  
あれから10年近く経って、家族の一番の大きな変化は芽衣が生まれたこと。この写真を撮った頃の麻綾が5才8ヵ月で芽衣が今5才10ヵ月でちょっと不思議な感じです。子育てに関しては昔も今も変わらずに、大人になって自立して生きていけるようにやってるつもりです。上手くいってるかどうかはまだわからないけど、中学生になった麻綾が良くも悪くも自分の想像していたのとは全く別人になっているのは確かです。」

順子さん「ベネロベの家族が理想だったけど、いつも怒ってすみません(笑) セレブにはなってないけど精神的には満たされてると思います。」

麻綾ちゃん「まだ小さかったので、昔のことは覚えてないです。10年後は24才…人の役に立てる仕事してたいかな、医療関係とか。」

芽衣ちゃん「麻綾くらいの年齢になったら走るの頑張りたい。」

【撮影】小山田和正



インタビュー

笹森 大誉 さん・まさみさん・すずちゃん

撮影場所：鶴田八幡宮(鶴田町)

**Q2011年3月11日のことは覚えていますか？**

▶**大誉さん**「仕事をしていて、休憩時間ちょっと前に揺れてだして『あ、地震だな』と思ったら、揺れが続いて、みんなで外にでました。大きい地震だなと思ってたら、電気が落ちたじゃないですか、娘が生まれてちょうど4ヶ月で、上司から『小さい子がいる人はいったん家に帰って様子見て』と言われました。会社の方も何時間かすれば復旧するでしょ。って感じだった。上司が本社のある栃木に出張していて、意外と地震大きいらしいよと聞いていた。けど、津波の情報はなかったかな。その後しばらく会社を休むことになって、ほんとに色んなことが分かったのは電気が復旧してから。」

▶**まさみさん**「鶴田は3日目についたんだっけ？」

▶**大誉さん**「そう。テレビがついた時、なんだこれ、何起きてんの？って、とても衝撃的でした。青森にずっと住んでるからっていうのもあるけども、大きい地震ってそんなになくて、地震で何かが起きるとか、津波が来るとか、津波で被害が起きるという認識もないし、そういうことが起きることすら考えてなかった。岩手の三陸のほうにも遊びに行ってたんで、なんだこれって状況でしたね。」

▶**まさみさん**「私は出産した後だったので、育児休暇中だったんです。ちょうど生まれて4ヶ月だったから、お昼ご飯食べて、ひと段落して、この子を抱っこしてテレビを見てたんですよ。そしたら、揺れ出して。最初は『あ、揺れてるな』と思ったんだけど、揺れが止まらなくて怖いと思ってたら、見てたテレビが消えちゃって、これはやばいと思って、この子を抱えて手摺りを掴みながら、下にいた彼のお母さんのところに行っただけです。でもどっかかっていうと、子どものことが心配だったから、そんなに揺れてたっていう記憶がなくて、落とさないようにまず下に行かなきゃってことしか思ってたかった。」

▶**大誉さん**「そのあたりってガソリンスタンドに長蛇の列ができたり、1人1,000円までとか規制してたじゃないですか。それで田舎の方のガソリンスタンドとか回ってみたり。あと電池とか食料品を買いに行っていました。」

▶**まさみさん**「あの時って暗くなるのけっこう早かったじゃん、明るいうちに晩ご飯食べて、あとはもう暗くなって、やることないからすぐ横になったんですけど、初日は余震がすごくて、寝てたらガタガタして、怖くて寝れなくてラジオを聞いてたんですよ。ラジオからニュースが流れてきて「〇〇町壊滅状態」っていうんだけど、その壊滅の意味がちょっとイメージできなくて、でもなんか怖いことが起こってるのかな？という気はしてた。それで、うちの方は3日目に電気が付いたんだよね。お昼過ぎにいきなりテレビがパッ

てついて、下にいるお母さんとかも『ついたよ〜っ』とか言って。一番最初にしたのはお風呂に入ることだったよね。」

**Q震災から8年経ちますが、なにか変化などはありましたか？**

▶**大誉さん**「3.11以降、地震とか津波、雨とかもそうだけど、自分自身、家族の命に危険が起きるかもしれないという認識がそこから確実にできました。交通事故とか火事とかぐらいじゃないですか、それまでの自分にとって身近で危険が起きるって、それまで、頭の片隅にも置いてなかったようなことを、頭の中に入れておかなきゃいけなくなったというところが変わったことですかね。」

▶**まさみさん**「私はなんだろうな〜。私結構1人でいる時間が好きなタイプで、1人で色んなことをするというのが好きな方だったんです。でも、震災をきっかけに『家族がいて、すごく良かったな』と思いました。鶴田に住んでいて仕事で弘前に行くんですけど、帰るまでに40分ぐらいかかるし、家族の距離がちょっと離れると少しどこかに不安があったりするんですよ。寂しさを感じたりとか、ちょっと距離をおくとホームシックっぽくなるような感覚が生まれてきたりとか。あとはいろんな意味で価値観は変わったかもしれない。たとえば、何が一番幸せかっていったら、大きい災害がなく、今の生活を普通に続けることが一番なのかなって思うようになったかと思います。」

**Q10年後、家族、自分自身はどうなっていると思いますか？**

▶**まさみさん**「すず、今から10年後は19歳だよ〜。10年後どうなっていたい？」

▶**すずちゃん**「パティシエ！パティシエの専門学校に行きたい。あとシェフになりたい！」

▶**大誉さん**「そのまま。そのままいれるかどうかかわからないじゃないですか、今の時代。もしかしたら将来何かが起きてるかもしれないけども、元気に生きてる状態で、全員いて、普通に暮らせてる状態であればそれがベストじゃないかなと思う。」

▶**まさみさん**「震災があった直後は、今の生活が変わらなければイイなと思ってたんですけど、今10年後どうしたいかって聞かれたら、変わっていたいと思うんですよ。今から10年後を考えると、今の毎日の積み重ねってすごく大事になってくるなと思っていて、今って1年があっという間だし、この子が来年で10歳になるんですけど、生まれてから10年なんだって考えたら、その10年もすごくあっという間なんですよ。だんだん年齢を重ねていくと、いろんなことに積極



的になれなくなってくる。もう歳だしとか思ったり、少しネガティブに思っちゃったりするんだけど、そうしたくないってすごく思うんです。明確に私は10年後こうなっていたいというのはないんだけど、1日1日をボ～っとしないで、もう歳だからさ、とか思うこともなく過ごしていったら、どんな自分になっているのかな？って、そういう意味で変わっていたらイイなって思うんです。」

終

【編集後記】今号 No.093のインタビューと撮影：赤石嘉寿貴  
tovoplusも残すところ8号となり、今月号からは編集部ご家族インタビュー！ということで1回目は笹森家ご家族、奥様のまさみさんは編集部メンバーであり、弘前で発刊されていたフリーペーパーの元編集長。ある意味ドキドキのインタビューだった。まさみさんの思う1日1日をボ～っとしないで過ごした先の生活と、大誉さんの考える遠くない先の未来、皆で変わらず普通に暮らしているために続けた日々の努力や成長の先は、同じ場所にあるような気がした。お二人は違う言葉で同じような思いを話したり、同じようなところを見たりしている気がする。素敵な両親の思いがリンクする未来ではずずちゃんの作る美味しいお菓子や料理が待っている。そんな未来のパティシエのお菓子を食べられるという待ち遠しい楽しみができた今回の取材でした。

寄付総額：¥8,105,757(2011年6月～2019年10月28日まで)

## STAFF VOICE

### t o v o 撮影にあたって

／須川 健太郎  
(from antenna)



東京から青森に戻るタイミングで友人から誘いを受け、tovo plus へ参加させていただいたのをきっかけに100 号までスタッフとして関われたことに感謝と敬意を込め、振り返らせていただきます。

今まで広告の写真しか撮ってこなかった私にとって『家族写真』を撮る機会は中々なくとても楽しいものでした。代表から【プロとしての写真ではなく、あくまで素人が撮った写真】を求められた時はその難しさを改めて実感すると同時に、故郷の青森に戻って来た私にとっては、初心にかえるいいきっかけとなり、青森県内の各方面でご活躍されている方々を撮らせていただくのは大変面白く、全てが貴重な体験で楽しいのもでした。

ただ、撮影したものへの反応は厳しい評価をいただく事も多く、正直いろんな意味で裏切られた反応もありました（まあ、オーダーを実行できた裏付けにはなりましたが。）その度に

正直物凄く嫌な気持ちにもなり、ボランティアスタッフを止めようとした事も幾度かありました。人と人、言葉や態度の意思疎通がいかに困難かつ面白いものである事を実感すると同時に、勉強させていただいたというしか今はありません。

これからの時代においても、越えなければならぬ問題に直面した時の【家族のカタチ】【人間の顔】を見守る（私は傍観者をする事しか出来ませんが）と同時に、今回取材・撮影させていただいたご家族はもちろん、お声がけさせて頂きながらも取材できなかったご家族や友人家族の方々の皆さんが笑顔でいられることを切に願っております。そして何より東日本大震災の被害に遭遇された方々へ、心からお見舞いを申し上げますと同時に、風化させないための機会を与えていただいた事への敬意を。そして震災孤児の方々の前途に幸せが訪れる事を願って。終

antenna【Photographer/Creative Director】須川 健太郎 mail : antenna\_concent@me.com

岩手県山田町に縁のある友人が作ったチャリティーソングです。

歩-arukuguckle are【Shinnosuke Yoshidome (vo) Tetsuya Hirahata (E.Pf)】  
<https://www.youtube.com/watch?v=uJ3rhwNnoL>





## Q2011年3月11日のことは覚えていますか？

▶**嘉寿貴さん**「当時はグループホームで介護の仕事をしていた、その日は休みだったのか、夜勤明けだったのか、ちょうど家にいたんです。大きな揺れを感じて、停電もしたので、外をみたら信号が消えて。すぐに仕事場に電話して『自分も行った方がいいですか？』と聞いたら、来て欲しいということだったのでグループホームに向かいました。そのまま2晩、皆と一緒に過ごしました。1階と2階に別れていたんですが、皆が1階の広い食堂のようなところに集まって、そこで皆と一緒に食事もし、一緒に寝ました。反射スロープを持ってきて、そんな凝ったものは作れなかったですけど、そこで全員分のお米を炊いたり、食事を作ったりしていましたね。利用者さんたちにも説明して、特に混乱もなく、静かに過ごしていた感じです。施設にラジオがあって、そこから流れる情報は聞いていたんですけど、2日後に施設に届いた新聞の写真を見て、初めて何が起ったのか理解しました。驚きましたね。」

▶**裕子さん**「バレエのインストラクターをしていました。その日の夕方、ちょうど15:30から幼稚園クラスが始まる時間だったんです。教室には私ともう1人の先生、あと、その前のクラスを受講していた小学校2年くらいの子、3人がその教室にいました。その時、強く揺れて、やばいと思って、3人で玄関まで出ました。しばらくして揺れはおさまったんですが、停電になってしまい、どうしよう、どうしようって言ううちに、やっぱり、幼稚園クラスの子供たちがお母さんたちと一緒に教室に集まってきました。ちょうど、その日は教室を管理している先生が出張で留守にしており、連絡が取れなかったんです。みんなが集まってきたので、どうしようと思いながらも、停電の中、音も出せず、声と手拍子で『1、2、3、4..』って練習を始めました。クラスは40分間なんですけど、最後まで続けました。もちろん、途中で帰る子もいました。その次の小学校低学年のクラスも同じように続けました。その頃、その管理をしている先生から連絡があって、今日は帰らないということになり、明日はどうなるのか分からないまま、家に戻りました。ラジオから流れる情報を聞いていましたが、海の近い場所に住んだことがなくて、津波を想像できないかったんです。数日後にテレビの津波の映像にとっても驚いた記憶があります。私たちはクラスを続けてたわけですけど、もし海が近い場所だったら、私たちは津波で流されたんだなって思って、ゾッとしました。」

## Q 震災から8年経ちますが、なにか変化などはありましたか？

▶**嘉寿貴さん**「当時からずっと何かの形で支援をできないかなとは思いつけてきたんですが、仕事もあるし、

何をしたいのか分からなかったんです。2年くらい前、tovoがボランティアの募集をしていたのをみて、すぐに問い合わせました。

学校の授業で習う地震しか知らなかったのに、自分が生きている間に東日本大震災という大きな災害があって、もともと自分の人生を楽しく生きていきたいという気持ちはあったんですが、震災後、その気持ちがもっと強くなった感じがします。それは、自分が好きだと思っていることを、もっとやろうというだけではなく、その先、つまり、それを通して、それが誰かの為になり、社会的な価値になることに重点が移ったように思います。サルサのインストラクターをしています。サルサを通して、関わってくれている方々が豊かになり、それが人の繋がりとなり、結果的にそれが社会の力となり、更には自分の成長となる、そんな視点でモノを見るようになったように思います。」

▶**裕子さん**「2011年は、ちょうどバドミントンを始めた年でした。震災後はもちろん休みだったんですが、スタッフの人にそろそろ再開しようって声をかけられた時、最初は行くような気分じゃなかったんです。もちろん、周りも。スタッフの方もやろうって気持ちになった方から始めましょって、毎回待っていたらしいんです。初めは数人から始まって、だんだん参加者が増えていって、結局、元に戻るまで数ヶ月かかりました。私もこの練習になんとか参加できるようになったというのは大きな気持ちの変化でした。」

## Q10年後、家族、自分自身はどうなっていると思いますか？

▶**嘉寿貴さん**「若い踊りってできなくなってるかもしれないけど、踊りが好きなので、教えていなくても、踊っていたいと思います。」

▶**裕子さん**「更に毎日を大事にしていきたい。その日、その日の楽しみを積み重ねて10年になっていたらイイと思います。10年後に、10年前は何してた？って聞かれたら、tovoの取材を受けてたって言えるように。」

終

【編集後記】 今号No.094のインタビューと撮影：小山田和正

今回は、tovo plusの取材編集のお手伝いを頂いている赤石嘉寿貴さんご家族へ取材。弘前市のイタリア料理店「キアツソ」さんの前にて撮影したいとの要望があり、了解！って向かったわけですが、お店の前で、このお店は嘉寿貴さんがプロポーズをしたお店だって聞いてびっくり。僕は嘉寿貴さんと裕子さんの愛のホームグラウンドで取材をすることになりました。嘉寿貴さんは、サルサのインストラクターで、2年ほど前からトヴォの手伝いをしてくれています。僕とは全く違う世界に生きている方で、僕が届かないところにトヴォを広げてくれています。裕子さんはもともとバレエのインストラクターで、現在はブラティスの勉強中。踊りの話、身体の話などたくさん伺いましたが、本文に掲載した裕子さんのバドミントンの話がとても印象に残っています。

寄付総額：¥8,353,232 (2011年6月～2019年12月24日まで)



**Q2011年3月11日のことは覚えていますか？**

- ▶**ゆきさん**「あの日は次女（あかりさん）の卒園式の前日でした。美容院に行こうと思って予約の電話をかけている最中に地震がきました。停電したので、すぐに娘を迎えに保育園にいきました。」
- ▶**あかりさん**「地震がきた時は保育園で積み木で遊んでいました。停電したことも覚えています。」
- ▶**そらさん**「私は当時小学4年生でした。授業中に地震がきたので先生の指示で机の下に入って、それから校庭に移動して親の迎えを待っていました。」
- ▶**匠さん**「当時は小学2年生で、地震がきた時はなぜか学校で居残りさせられてました。」

**Qその日の夜は？**

- ▶**ゆきさん**「何度か余震があったので家の中にいるのが怖く感じて、車の中で過ごしました。車は暖房が効くしテレビの情報も得られるし、ケータイも充電できるし助かりました。家の外にカセットコンロを持ってきて、お湯を沸かしてみんなでカップ麺を食べたけど、よく考えたらガスは止まってなかったんです(笑)。後になってから気がつきました(笑)。」

**Q震災後変わったことは？**

- ▶**ゆきさん**「サロン（open plaza sora）は地震の後2～3日で営業を再開しました。お店を開けても誰も来ないだろうと思っていましたが、予想に反してご来店がありました。地震があっても世の中は止まってしまったわけではなくて、少しずつ動いているんだと感じ、励まされました。あと、地震があってからハザードマップを見るようになりました。今、長女（そらさん）が県外で一人暮らしをしているので、住んでいる地域のハザードマップも確認しました。それから、車のガソリンをこまめに補給するようになりました。地震の時に車の中で過ごしてとても助かったので、緊急時には車で過ごせるようにしています。」

子どもを持つ親として、震災で親を亡くした子どもたちのことがずっと気がかりでした。でも当時はまだうちの子もたちも小さく、私自身がいっぱいいて、震災遺児のために何かしてあげられる余裕はありませんでした。青森市の『肴ダイニング 心』さんでトヴォの缶バッジを見つけて、この活動に携わることが出来れば、自分のやりきれない気持ちが少しは解消できるかなと思って、思い切って連絡をして、そこからトヴォの活動のお手伝いをするようになりました。」

**Q10年後のイメージは？**

- ▶**ゆきさん**「子供たちがそれぞれちゃんと自立してくれていればいいなと思います。私はまわりの人たちに支えてもらいながら子育てをしてきたので、これからは支える側になりたいと思います。子育てで疲れているお母さん達に、サロンでの仕事を通じて癒しを与えられたらと思っています。子どもがいるから出来ないことってどうしてもあると思うけど、子どもがいても出来る、子どもがいるから頑張れるってポジティブに思える人が増えるように、これからも私に出来ることをやっていきたいです。」
- ▶**そらさん**「あまり具体的なイメージはないけど、人のためになる仕事に就いて、結婚できていたらいいな。」
- ▶**匠さん**「10年後…、何の分野かはわからないけど大きいことをして有名になりたいですね。ひとまず高校を卒業したらお金を貯めてアメリカで生活してみたいと思っています。」
- ▶**あかりさん**「10年後は25歳…、仕事してると思う。料理をするのが好きなので、何か料理関係の仕事をしていきたいです。」<sup>終</sup>

【編集後記】 今号 No.095 のインタビューと撮影：工藤文昭

三浦(吉田) ゆきさんがオーナーを務める open plaza sora にお邪魔して取材をさせていただきました。震災時、あかりさんは保育園児だったという話を聞き、震災発生から約9年間という時間の長さをひしひしと感じました。9年間、あっという間です。きっとこの先もあっという間に10年経って、その頃にはビッグになった匠さんに会えることでしょう。3人それぞれの夢の実現と、open plaza sora の益々の発展を祈念いたします。

寄付総額：¥8,353,232 (2011年6月～2019年12月24日まで)



**Q2011年3月11日のことは覚えていますか？**

▶**秋則さん**「自宅で確定申告の計算をしていました。そんなに大きい地震だとは思わなかったけれど、弘前は横揺れでずいぶん長い時間揺れているなあ、と思いましたね。」

▶**江利さん**「母は前年の10月に脳出血で倒れ、その日は入院中でした。」

▶**美千子さん**「病院のベッドの上でしたけど、揺れているのは感じました。病院の中は特に慌てている様子もなかったし、いつも通りでした。」

▶**江利さん**「私は姉と妹と一緒に碓ヶ関にいました。母の退院後に入所する施設の見学に行っていたんです。ちょうど施設の説明を受けている時に揺れだして、ひな祭りのひな壇が大きくゆっくり揺れていたのを憶えています。停電になり『自動ドアが開かない』なんて声が聞こえました。」

▶**文美さん**「揺れが落ち着いて、夕方3時頃には碓ヶ関から母親の病院へ向かったんだよね。信号は消えていましたが、弘前までの国道はとくにパニックもなく行くことが出来ました。市内に入ったら車の誘導をする人がいたり、いつもとは違う様子でしたね。」

▶**秋則さん**「弘前は震度3くらいだったのでそんなに大きい揺れではありませんでした。地震で強く印象に残っているのは昔、秋田の男鹿半島で地震（1983年の日本海中部地震）がありましたが、その時、男鹿にいたんです。遠足に来ていた子どもたちが私から30mくらい離れた砂浜で遊んでいるのを見ていました。その後、車で移動している時に地震が起きました。あとになってその子どもたちが津波にさらわれたことをラジオで知ったんです。さっきまで自分が見ていた子どもたちが津波にさらわれてしまうなんて、本当にびっくりしました。」

**Q その日の夜はどんな風にすごされましたか？**

▶**江利さん**「停電でしたが、灯油ストーブを使っていたので暖はとれましたし、ローソクをつけて過ごしました。食べるものもあつたし、いつもと同じように過ごしました。翌日、ラジオで確か仙台のゆりあげ港の様子をヘリコプターから伝えていたのですが、『目視でも海上に300くらいの遺体を確認できる状況です』と聞こえてきて、『何を言っているんだ、そんなことある訳ない』と信じられませんでした。」

▶**文美さん**「電気は3日後くらいに復旧したのですが、りんごの発送がしばらく出来なくて、出荷していたものもいくつか戻ってきてしまいました。2週間後くらいようやく東北エリアへの発送は出来るようになりましたが、福島だけは送れなかったですね。」

▶**美千子さん**「病院ではテレビを見る事が出来たんです。ご飯もいつもどおり普通に用意してもらいました。津波の様子をテレビで見たときは本当にびっくりしました。」

▶**秋則さん**「私に賛同してくださる農家の方たちの中にも被災された人がたくさんいます。何度か私も被災地を訪れておりますが、トラクターやコンバインが小屋に入ったままつぶされていたり、何もかもが破壊されていて、津波の恐ろしさを実感しました。去年も行きましたが、まだ当時のままというところもありますね。」

**Q 震災をきっかけに変わったことは？**

▶**文美さん**「震災直後に家を出て、飲食の仕事をしていたのですが、震災後の弘前さくらまつりや弘前ねぶた祭りに毎年来てくれているお客さんが戻ってこない状況が数年続きました。大きな震災だったし、みんな貧乏なんてしてられないというような気持ちだったのだと思います。」

▶**江利さん**「多くの方が一瞬で亡くなってしまったことがとてもショックで…。被災者の生活をテレビなどで見ても、報われない様子で…。自分は何も出来ないのですが辛い気持ちが続いたし、消えませんでした。tovoは震災後すぐに活動をされていたので活動当初から知っていました。親を震災で亡くした子どものことを考えると、少しでも寄付することで助けてあげることができるのかなと思って寄付を続けています。」

**Q この10年をどんな風に過ごしていきたいですか？**

▶**秋則さん**「足腰も自由にならなくなっていき10年後、りんごの仕事はまだ続けていられるかなあ。もしかしたら野菜の種取りをしているかもしれませんね（笑）そうだなあ、種を残していきたいね。」

▶**美千子さん**「娘たちが幸せに過ごしてもらえたらいいなと思っています。小さなことでも楽しく、幸せに思えるように。」

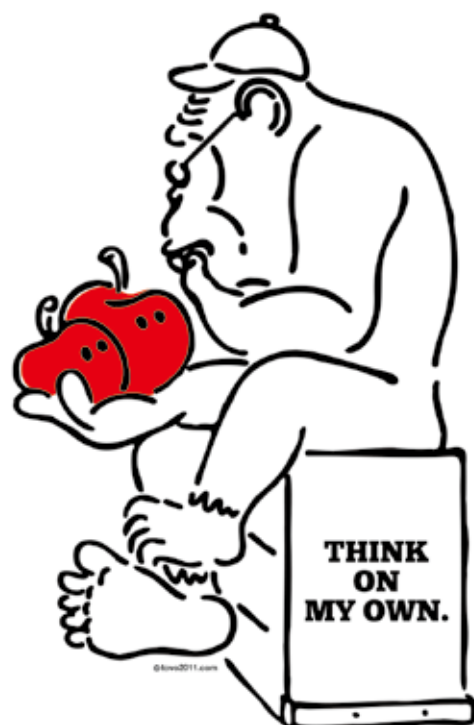
▶**文美さん**「人に迷惑をかけず、変わらずに生きていけたらと思います。」

▶**江利さん**「今あるりんご畑を続けていけたらという事です。父が元気である間は一緒にやっていきたいです。ただ、温暖化の影響で年々りんごを作っていくのが厳しくなっています。今までいなかった種類の虫が3年前くらいから出てきたり、高温障害で実が育たなかったりしているんです。10年後を考えると温暖化はもっと酷くなっているかもしれない。」



▶秋則さん「昔は北海道でリンゴのふじは気温が低くて作れませんでした、今は作れるんですよ。りんごの産地は青森から北海道が主流になるかもしれません。温暖化が進んで10年後は青森でりんごを作ることになるかもしれない。将来はもちろん大事だけれど『今』のことを考えるのがとても大事だと僕は思う。世の中、コンピュータなどで管理されて進化しても人間はアナログなんだから。悪戦苦闘してきた先代が歩んできた道を今また振り返る時期なのではないかと思いますね。それを私は『人間ルネッサンス』の時代が来ていると言っているんですけどね。」

終



【トリビア】tovoのYouTube配信番組「ちんとほ」イラストに使用されている「自分で考える」テンパンジーは、実は、木村秋則さんがモデルになっているゾ。もちろんご本人の許可いただいております！

## 【編集後記】

今号No.096のインタビュー：笹森まさみ／撮影：須川健太郎  
撮影場所のりんご畑は広い空と雪の中寒さに耐えるりんごの木々が優しく迎えてくれました。「いつもケンカばかりで」なんていうけれど、ご両親思いの江利さん、文美さん。そして奥様思いの秋則さん。そんな木村さんファミリーの思いやりがりんご畑でも感じられました。国内外を飛び回る秋則さん。ダライ・ラマ14世に会った時のエピソードなど、興味深いお話がたくさん！まだまだ聞いてみたいなあと思いました。10年、青森のりんごはどうなっているんだろう。やっぱりりんごはいつまでも青森がメインであって欲しい。

寄付総額：¥8,500,118 (2011年6月～2020年2月25日まで)

今、もう一度お話を聞いてみた。



tovo plus no.003 (June.11.2012)



(July.2020)

最上 泰滉さん  
裕加さん  
高埜くん

## 撮影場所

道の駅いなかだて「弥生の里」(田舎館村)

泰滉さん「震災当時、お腹の中にいた息子、インタビューの時は1歳でした。tovo plusに取り上げていただいたことで、家族そして今を大事にすることへの意識が強くなったと感じています。心から感謝いたします。」

裕加さん「日々変化し続ける中、変わらぬ絆に、そして新しく生まれる絆に感謝して、皆が笑顔で過ごせることを祈っています。」

高埜くん「俺、大きくなったなあ(^.^)」

【撮影】小山田和正



**Q 2011年3月11日のことは覚えていますか？**

▶**秀輔さん**「夜勤明けの日で、その時間は居間で寝てました。そしたらユサユサ〜と身体が揺れて…お袋に起きろ〜って揺すられてるんだと思ってたんだけど、それが妙に長いから『酔うって』って言って起きたんです。そしたらお袋の姿はなく、目の前のテレビがやたら揺れていたんで、ひとまず押さえて…。お袋は一足先に家の外に出てましたね(笑)」

▶**裕子さん**「テレアポの仕事をしていて、職場がビル8Fだったのでタテにもヨコにもすごい揺れたのを覚えてます。デスクにいたけど、掴まってないと椅子から落ちそう。丁度北海道の人と電話していて、揺れが酷くなってきたので電話を中断しました。そのうちPCも全部停電で落ちて、エレベーターが使えないので非常階段で避難しました。8Fからなのですごい時間かかりましたね〜。なんとかホールまで降りて、その日は帰宅になりました。」

**Q その日の夜はどう過ごしましたか？**

▶**秀輔さん**「石油ファンヒーターしかなかったので物置探したら、奥からだるまストーブが出てきて一安心しました。ストーブの上で簡単なものつくって食べて、あとはもう寝てしまおうと。自分の部屋はヒーターしかないから布団に包まって、Twitterで仲間となんか全然関係ない話してました。実は長期休暇を取っていて、IRON MAIDENっていうメタルバンドの日本公演観に東京に行こうとしてた矢先だったんです。揺れがあった時もラジオとツイッターで情報得てたんですが、家の中は本一冊パタッと落ちたくらいだったし、東京行きは問題ないだろうなと思っていて。でも夜になって、聞けば聞くほど、えっ津波ってそんなにすごかったのか、って。IRON MAIDENのボーカルはパイロットもやっていて、バンドのツアー毎に専用のジャンボジェット機が用意されるんです。それ操縦して一旦は日本まで来てただけで、状況が状況だから公演は中止。会場も避難場所になってるって情報を見て、とんでもないことになってるんだと痛感しました。その後は割と早めに電気は復旧したんですが、灯油もいつなくなるかわからないし、ガソリンは救急車とかに使ってほしいし、とにかく色んなエネルギーを使わないように過ごそうってことでお袋と話して。食パンとかあったし、買い物出たりもせず、布団に入ってうちで黙ってしようと。」

▶**裕子さん**「食事はガスが使えたので、冷蔵庫のものの悪くなっちゃうから片付けないって、割と普通でした。車でケータイの充電しようと思って外に出たら真っ暗で、とても怖かったのを覚えてます。うちは反射式のストーブがなくて、寒いし、元々あまりSNS見る習慣もないしすることがないし、怖いからとにかく寝ようと思って、すぐ寝ました(笑)家

の電気の復旧は少し遅い方で、仕事も電気戻らないとできないし、しばらく休みでしたね〜。」

**Q 震災をきっかけに変わったことは？**

▶**秀輔さん**「持ち出し袋を用意しましたね。お袋の寝室の側、自分のは枕元。以前バイク乗ってたので、ヘルメットとハイカットの靴と手袋も。あと家の中あちこちに懐中電灯置きましたね。こないだチェックしたら全部電池切れでつかなかったけど(笑)」

▶**裕子さん**「あ〜うちも最初の頃はやったなあ。あ、反射式ストーブは手に入れました!あとは避難場所のチェックしたりとか、非常食も用意するようになりました」

▶**秀輔さん**「今も続いているのはそれこそtovoグッズを買ったりとか、自分でできる範囲の支援というか。大槌町に『一頁堂書店』って本屋があるんです。被災地のお店で、本屋が無くなっちゃったけど町に本屋は必要だと、ご夫婦で立ち上げたお店。コンタクト取って、毎月何か本を送ってほしいとお願いして。最初の頃は『はじめの一步』を5〜10冊ずつ。今はずっとバットマンシリーズですね(笑)本と一緒に一筆添えてくれるのが嬉しくて、その内容も初めは復旧の様子についてが多かったですが、最近になってようやく穏やかな日常的内容になってきて。2年前、お店にも行きました。直接ご挨拶できて、お顔見れて良かったなと思ってます。」

**Q ご家族の10年後は？**

▶**裕子さん**「7月に出産予定で(裕子さんは現在妊娠7ヶ月)10年後10歳…まだ全然想像できないけど(笑)とにかく健康で笑顔がたえない家族でいたいです。」

▶**秀輔さん**「子どもには、好きなことを見つけてただひらすらやってほしい。そのために学校行きたくないってんなら行かなくていいし(笑)家族はもちろん、tovoファミリーや仲間たちとも10年経っても一緒にいれたらいいなと思う。ALWAYS WITH YOUということで」**終**

【編集後記】

今号 No.097のインタビュー：坂本小雪 撮影：須川健太郎

昨年 tovo のイベント出店スタッフとして一緒にキャンプしたりする機会が多かった鳴海さんご夫婦。震災当時のお二人の省エネスタイル、シンプルで合理的で、マイペースな感じがシンクロしていいなあと思いました。ちなみに二人の指輪には『「ALWAYS WITH SHU-YtoS」「ALWAYS WITH YUU-StoY」って刻まれてるよ。てへ。』by しゅうさん だそうで、tovo リスペクトを感じました。

寄付総額：¥8,500,118 (2011年6月〜2020年2月25日まで)





## Q2011年3月11日のことは覚えていますか？

▶**美弦さん**「その日は金曜日だったので、店（弦や）でスタッフと仕込みをしていた時でしたね、揺れがあったのは。その夜に、今でもお店に来てくれている夫婦のお客さんの予約が入っていたんですが、なかなか連絡がつかなくなってしまって心配になったのを覚えています。その日のうちになんとか連絡取れたのですが、停電してしまっていたので、予約はキャンセルとなりました。店から家まではクルマで15分くらいの距離なのですが、信号は消えていましたね。」

▶**吟遊さん**「その頃は中学を卒業したばかりの頃だったので、父の部屋のパソコンで好きなアーティストのPV見たりしていた時でした。部屋には大きなガラス戸の棚があったのですが、それが結構揺れていたのを憶えています。母（るみ子さん）が『吟、地震だ』って呼びに来て…僕はキッチンのテーブルの下に避難したんですが、母はそのすぐ側で『怖い怖い』って言ってました。揺れがおさまった後、そこまで大ごとになっているとは知らず、漫画を読んでいたら、近所の人が『大丈夫ですか』って訪ねてきました。」

▶**小雪さん**「私は働きながら教習所に通っている時でしたね。その日の遅めの時間に予約を入れていたので、教習所のロビーで（ニンテンドー）DS（携帯型ゲーム機）をやって待っている時でした。周りの人は『やべえやべえ』ってテンション上がっていました。通っていた教習所には自家発電の装置があるとのこと、講習を受けられることになったのですが、当時使っていた電話が全然繋がらなくて家族とは連絡が取れなかったんです。帰りは教習所の送迎車で、すっかり暗くなった頃に送ってもらいました。」

▶**るみ子さん**「（小雪さんの）帰りが遅くて心配したのを憶えていますね。その日から停電は2～3日続いたと思うんですが、物置から反射式のストーブを出してきて暖を取り、水道とガスは使えたから土鍋でご飯炊いて、結婚式で貰ってきたキャンドルを照明代わりにして過ごしていました。ご飯は焦がしちゃったりして…。当時3歳だった夕弦が不安にならないように、家の中を明るくしていました。」

▶**夕弦くん**「何にも憶えていない。」

▶**るみ子さん**「（夕弦くんは）保育園でお昼寝中で、地震のことは何にも知らないで寝てたんだよ。夕弦がいたことで、家の中は明るい雰囲気でしたね。停電も怖がるのではなくて楽しんでいるようでしたし。停電が終わって、テレビで見た津波の映像が衝撃的でした。」

▶**美弦さん**「お店のスタッフで他県の子がいたんですけど、その子が地震の前から里帰りしていたんです

よ。履歴書で確認してみたら釜石の子で…何度も電話したんだけど通じなくて…」

▶**るみ子さん**「そしたら何日か後に（美弦さんが）泣きながら、その子から電話来たって。」

▶**美弦さん**「安心して泣いちゃいました。」

▶**小雪さん**「全国的に節電していて、パチンコ屋のネオンも真っ暗だったのを憶えています。あと、テレビのCMは『ポポポポーン』ばかりだったよね。」

▶**夕弦くん**「それ、動画で見たことあるよ。」

## Qその後、変わったことはありましたか？

▶**るみ子さん**「大きなペットボトルで水をストックするようになりました。」

▶**美弦さん**「地震の少し前にうちの店のグリーンカレーが完成したんですよ。そんなこともあって、やると決めたことはやり遂げたい、必ずやり遂げると強く思うようになりました。」

▶**小雪さん**「tovoに関わるようになりました。震災当時、現地に入るボランティアを調べたりしたのですが、こちらで仕事もあるし難しいなど…そんな時にTwitterでtovoの助っ人募集を見て、これだと。そして今に至ります。」

## Q10年後はどうしてますか？

▶**美弦さん**「皆健康で楽しく暮らしていれば…60歳になったら、また小雪と大円寺（大鰐町。末と申の一代様）で猿顔して写真撮りたいな（美弦さんと小雪さん共に申年）。」

▶**るみ子さん**「子どもたちに対してどうあって欲しいっていうのはないのですが、どうなっているか見てみたいです。」

▶**小雪さん**「37歳…。家庭を持ちたいという願望は今はないので、お世話になっている方々の健康を祈りつつ、旅に出たいですね。クルマに乗って、特に目的を定めず色んなところに行きたいなと思っています。クルマで旅に出たい。」

▶**吟遊さん**「34歳…。姉と似てますが、どこかに定住しているのではなくて、色んな所で色んな人に会いたいですね。俳句をやっているのですが、出逢った風景を言葉にしてみたいです。あと、素敵な女性と出逢ってお付き合いしたいとも思っています。ビビってきた人なら、いくら歳が離れていても気にしません。」

▶**夕弦くん**「21歳か22歳？大学に行きたいかどうかは今も分からないけど絵を描く人になりたい。中学生になったら美術部に入る。」終



## 【編集後記】

今号 No.098のインタビュー:なるみしう 撮影:須川健太郎

絵描きとしても才能を発揮する tovo メンバー小雪さん。末っ子の  
 タ弦くんは、姉である小雪さんの影響で絵を描く人に憧れを持った  
 とのこと。そして、姉同様に旅に出ることを夢見る吟遊さん。「みんな  
 なで一緒にクルマで旅に出るか」と盛り上がる姉弟達を優しい笑顔  
 で見守る美弦さんとのみ子さん。弘前在来とうがらし『清水森ナンバ』  
 を使ったグリーンカレーが物凄く美味しい弦やで、まあくほんわ  
 かあたたかな家族の輪を見せて頂きました。tovo の取材を通して、  
 たくさんの「目標とする家庭像」に出会うことができました。あり  
 がとうございました！

寄付総額:¥8,616,775 (2011年6月～2020年4月20日まで)



【トリビア】 tovo として長くお世話になっている「弦や」  
 さんの20周年をお祝いして制作された缶バッチのデザイ  
 ンがこちら。清水森ナンバモチーフ。レア商品。

STAFF  
VOICEMuchas gracias  
a tovo.

／ 赤石嘉寿貴



まず tovo との出会いは何だったんだろうなあ  
 と思い出してみると2017年の末頃にfacebook  
 で見かけた「インタビュー募集」の記事だっ  
 た。知り合いの方がシェアしていて偶然見か  
 けたのが始まりだった。tovo plus のインタ  
 ビューでも話したことがあったけど、2011年  
 当時の自分は介護の仕事をしていて、被災地  
 で何かできることはないのか?と考えるには考え  
 たけれど、その当時の自分には「現地に行っ  
 てお手伝いする」くらいしか頭が回らず、当  
 時も（今もそうかもしれないが）介護の仕事  
 の現場でも人手不足ななかそこに穴を空ける  
 ことはそんなに良いことのように思えなかった。  
 ただ被災された方々のことを祈るばかりで、  
 何もできなかった当時の自分の思いだけが心  
 の中に残っていた。

6年も経ったそんな時に、先程の記事を見て  
 何かできることがあるならと思ってすぐにやろ  
 うと決めて小山田さんに連絡をした。それか  
 ら、青森の100家族へインタビューするという  
 tovo plus の記事作成、写真撮影のお手伝い  
 をさせて頂くことになった。震災から6年も経っ  
 ていたので、もしかしたら、何度も募集をし  
 ていたのかもしれないけれど、それまで tovo  
 という活動自体も知らなかったし自分にでき  
 るのかも分からなかったけど、震災当時の自  
 分の心のわだかまりを解消したかったのかも

しれない。

自分自身も震災後は介護士を辞め、日本の裏っ  
 かわキューバに渡り1年間ダンス修行後に南米  
 を少し放浪し、今は青森県の弘前市というと  
 ころに住んでいる。帰ってきてからはダンスや  
 イベントを通して様々な方々と出会い、それが  
 tovo plus のインタビュー対象である「青森の  
 家族」に繋がっていった。

インタビューで同じ質問を投げかけ、返ってく  
 る答えはご家族それぞれ（そりゃあたりまえだ。）  
 自分がインタビューを始めたときは震災から  
 6年以上が経っていて、変わったことや変わら  
 ないこと、新しい家族が増えていたり、そうで  
 なかったり、それらをひっくるめて、これから  
 のこと、そんな話をしてもらえるインタビュー  
 の時間というのは、ご家族にとって、もちろん  
 インタビュアーである自分にとっても「そうだっ  
 たよな。そうだったの?」なんて、家族を再発  
 見できる時間だったのではないのかな?と感じ  
 た。家族の記憶にも、記録にもなっていくだ  
 ろう tovo plus。この素晴らしい活動に関われ  
 たこと有り難く思います。◎

赤石嘉寿貴

世界中の人達とサルサで繋がりたい、冒険を愛するサルサ人。



099

20200611

インタビュー

工藤 文昭 さん・さとみさん・

理子ちゃん・亮清くん

撮影場所：弘前公園 西堀(弘前市)



**Q 東京の大学で出会いお付き合いしていた2人。卒業後、文昭さんは弘前の実家のお寺の僧侶に、さとみさんは東京で仕事をしていました。2011年3月11日のことを覚えていますか？**

▶**文昭さん**「うちのお寺で、県内の同じ宗派のお坊さんで勉強会を開いている最中に地震がありました。本堂にいたんですけど、前年ぐらいに基礎を強くする工事をしていて、あまり揺れなかった。ただすぐ停電したので、なんでだろうと。遠方から来ていた人もいたので解散しましたが、テレビも映らないし、携帯も当時まだガラケーで、情報を集めるという感じでもなくて、彼女にメールを入れたぐらい。わりとのほほんとしていました。母方の祖母が入院していたので母に頼まれて様子を見に行く途中、県外の友人から『大丈夫？』というメールがめっちゃめっちゃ入ってきて、あれ、もしかしてなんかヤバイことになってるのかなあと初めて思いました。ところが病院に着いたら予備電源などで病院の中がびっくりするぐらい普通で、そこでまたいつもの感覚に戻ってしまった。お寺なのでだるまストーブとかもあるし、ろうそくもいっぱいあるし、わりと不自由なく過ごしたという感じがすね。丸一日ぐらい停電していたんですけど、復旧してからテレビをつけて、初めて事の重大さを知って、そこからスタートしたという気がします。」

▶**さとみさん**「私は池袋の近くの小学校の中にある学童保育で働いていました。今まで味わったことのないような揺れで。小学校が校庭に避難していたので、做う形で外に出ました。余震もたくさんあった。泣いちゃう子や職員から離れなくなる子もいて、なんとか安心させようと思いましたね。」

災害なので、子どもたちは親が迎えに来なければ帰せないということになっていた。学童のおやつを小学校と分け合ってたんですけど、中に戻ってテレビをつけっぱなしにしていたんですけど、速報で『何メートルの津波がきた』『余震があった』と。電車がことごとく止まっていて、私は電車で1時間程かけて通っていたこともあり、他の職員の配慮で、18時半までの勤務を17時で終わって、もう1人の同僚と歩いて帰ることにしました。

池袋まではすぐだったんですが、そこからもう人・人・人で。池袋駅は閉鎖され、人が歩道にぎゅうぎゅうで、ヘルメットかぶっている人もいて、靴屋さんや自転車屋さんに行列ができていた。『異常な事態なんだな』と感じました。新宿で同僚と別れてからは、1人でこの夜を過ごすのは無理だと思って、家に帰るまでは止まれないと思って、ずっとずっと歩いていた。甲州街道や246など大きな道はもちろん、細い道、暗い道でも人波が消えることがなかったので、怖さはあり

ませんでした。アドレナリンが出ていたのかな、全く疲れなかった。」

▶**文昭さん**「その最中に電話が通じた。19時とかそのぐらい。当時、携帯のほかに2人の連絡用に定額PHSを持っていて、そっちが通じたんですよ。『歩いて帰っている』とは聞いたけど、まさか全部まるまる歩いているとは思わなかった。」

▶**さとみさん**「弘前は停電していると聞いて、それはそれで大変だなと思った。まだ寒い時季だし。充電がなくなっても困るからと、長い時間は話ませんでした。家に22時過ぎに着いたので5時間ちょっとかかったのかな。着いた途端に疲労でしんどい。」

**Q その後はどうしていましたか。**

▶**文昭さん**「まず三陸など被害が酷い地域のお寺関係の人たちに連絡とったりしました。避難所になっていたお寺が多く、物資がないというので、県内の若手僧侶で物を集めて代表が現地に届けるとかそういうことをやり始めました。そのうち釜石のお寺から瓦礫の撤去などに人手が欲しいと話がきました。まだ公的なボランティアが始まっていないころだったと思うんですが、当時の自分のテンションとしては『いま行かないでどうする』という気持ちが強くて、すぐに手をあげて、4月初めに8人で行きました。ちょうど自衛隊が現地に入って、やっと道1本できた、というような状態。そこで、愕然としちゃって。すさまじい現場で、無力感をおぼえました。匂いとかもすごく、そういう生々しい感じは、今でも感じる時があります。そこから1年間ぐらいで7回行きました。良いか悪いか分からないけれど、どこかの被災地を彼女に1度自分の目で見てほしいなと思って、石巻と女川に震災の年の7月に一緒に行ったこともありました。」

▶**さとみさん**「私自身も機会があるなら本当の姿を見たいと思っていました。実際に見ると、なんか言葉が出なくなってしまっ。同じ地域でもかたや日常生活を取り戻しているのに一方は生活できない状態になってしまっているのを見て本当に悲しくなっていました。」

**Q 10年後はどうなっていると思いますか。理子ちゃん、将来の夢は？**

▶**理子ちゃん**「大きくなったらお花屋さんになりたい。お花きれいだから。」

▶**文昭さん**「自分は変わらず、というか。子どもは中学生と小学校高学年。熱中できるものを持っていることが一番大事だと思うので、子どもたちには自分の好きなものを見つけてほしいです。子どもたちがやりた



いことを応援したい。定型文みたいですけど(笑)。」

▶**さとみさん**「とりあえず、みんな言うと思うけど元気で健康でとか(笑)。10年後は思春期ぐらいじゃないですか。なんでもしゃべれるような関係でいたい、特にお姉ちゃんとは。中学生だから好きな子の話でもできたらな、って言ったら、文昭さんは『嫌だ』って(笑)。縛らないで育てたいなと思っていて、あれしなさいこれしなさいとか言わないで、自分たちで選んでいってくれればなと思っています。」**終**

#### 【編集後記】

今号No.099のインタビューと撮影：前田ふひと

弘前公園は工藤文昭さんのお宅から歩いて10分ほど、週に何度か家族で散歩に来るほど日常に溶け込んだ場所だそうです。毎年春には「桜のトンネル」が有名な西堀のこの場所で、家族写真を撮るのがならいだそうですが、今年は新型コロナウイルスの影響で弘前公園が封鎖され、それが叶いませんでした。およそ5週間ぶりに封鎖解除となったこの日、青々とした桜並木のもとに、家族が集いました。

tovoはスタッフが一堂に会するということがほとんどないので、初期からのスタッフである工藤さんとそのご家族にお話を聞く役割を与えられたのは、私にとっても大切な機会となりました。100家族を目指して始まったこのtovo plus ももうすぐ終わり。振り返れば一つとして同じエピソードはなく、“100家族なりの震災”を実感しています。

寄付総額：¥8,616,775(2011年6月～2020年4月20日まで)

## STAFF VOICE

### 寄り添う、の、かたち

／前田ふひと



1995年1月17日、目覚めたらテレビの中で、高速道路が倒れていた。

阪神淡路大震災。連日の報道に、自分の裡から何かが突き上げていた。それまでなじみのなかった「被災地ボランティア」という言葉が飛び交い、自分も何かしなければ、と思った。でも当時の私にとっての難題は、活動資金をどう捻出するかということだった。もはや学生ですら珍しかった風呂無しアパート暮らしで、奨学金とアルバイトで生活をほぼ賄っていた私には、アルバイトを辞めて現地に行く勇気がどうしても出なかった。結局、いくばくかの義援金を送るのが精いっぱい、私は現地には行かなかった。

その数カ月のち、大学の同期の女の子に会い、その子が神戸に1カ月滞在して避難所運営のボランティアをしていたことを聞いた。「私も何かしたかったけど、バイトもあったし、どうしていいか分からなくて…」とボソボソと弁解したら、その子は言った。『『何かしたい』と言いながら実際には何もしないのは、結局は『何もなくていい』と思ってたのと同じ』。いま思えば、彼女は現地で凄絶な様子を目の当たりにしたからこそ、私への苛立ちがあったのだろう。でも、未成熟な私にとって、その言葉は何年経ってもふとしたときに蘇り、胸を噛むものとなった。

そして16年後の2011年3月11日。あの夜、怯えながらも見上げた夜空に星がきれいだったことを忘れない。そして思った、今度は逃げちゃいけない、と。実際に岩手県釜石市にボランティア入りしたのは、2カ月後のゴールデンウィークだった。1週間の滞在期間中に、ボランティアベースの責任者が、釜石の中でも特に被害の大きかった鶏住居地区に連れて行ってくれた。私は一応マスコミの端くれだから、記録しようとデジカメを取り出した。でも、撮れない。視界には、津波に流されて何も無い光景が360度広がっていて、ファインダーでその一部を切り取ったって、なんの意味もないと思った。本当の本当の現実。

前田ふひと

元モノ書き。時々、あしなが育英会ファシリテーター。特技は猫と会話すること(※実態はただの一人芝居)。

でも同時に、私は、そのただ中に立ち、確信した。災害に心を痛み、「何かしたい」と思った人たちすべてが、ここに来る必要はないと。人にはいろんな事情がある。かつての私のように資金が捻出できなかったり、病気だったり体が不自由だったり、妊娠中や子育て中だったり、介護中だったり、受験勉強中だったり、休暇がとれなかったり。それらを無理して覆してまで、被災現場に立つ必要は1ミリもない。「何かしたい」と願ったならば、そのときの自分ができることをすればいい。究極的には、被災者と被災地のために、祈るだけでいいんだ。私はそう確信した。長い呪縛から解けた瞬間でもあった。

東日本大震災からもうすぐ10年。私自身も、この10年近くの間、大切な人を2人亡くした。1人は余命宣告を受けて亡くなる瞬間までをともにし、もう1人は突然死で何もできなかった。2人の死で私が思い知ったのは、亡くなり方、別れ方がどうであろうが、その人が何歳でこの世を去ろうが、大切な人との死別というのは遺された者の心も一度死んでしまうような経験で、かつ、どれも「個人的な体験」だということだ。第三者には、遺された者の気持ちは最大限想像できても、追体験することはできない。死別者の悲しみに寄り添うことなんてどだい無理なんじゃないか、と私自身の活動を振り返って悩んだこともある。でもね、でもですね。これもまた私自身が思い知ったことなだけ。

ただそばにいてくれるだけでいい。物理的にそばにいても、悲しみを想ってくれるだけでいい。そしてときどき、あなたのことを想っているよと、ごく少ない言葉で伝えてほしい。無理に慰めなくていい。何があったか、聞き出そうとしないでほしい。でも、何か話したくなったら、聞いてほしい。わがままかもしれないけど、そうしてくれることが、一番の支えで助けて。

…これってさ。「ALWAYS WITH YOU」そのものじゃない？　すごいや、小山田くん。**終**





## Q2011年3月11日のことは覚えていますか？

▶**和正さん**「弘前市のお寺、受源院さんにいて、研修中に地震が起きたんです。停電になって、それからどうしたのかあんまり覚えてないんですが、弘前市から五所川原に戻る途中は、信号が全部止まって、すごく時間かかって、家に着いた頃にはもう暗くなりかけてました。両親がダルマストーブを1つ焚いて台所にいて『お寺が大変なことになっているのに、今頃まで何してるんだ』って感じになって、結局、その時は両親にしてみれば地震があって停電したのは五所川原周辺だけだと思ってたんですよね。直後はそのくらい情報がなかったんです。」

▶**有香さん**「その時は某小売スーパーで働いていました。結構揺れて、もちろん停電になりました。まずは、お客さまの安全を確保しなければいけないので、自分でもかなり動揺していたと思うんですが、訓練でしかやったことのない緊急時のマニュアルを見ながら、店内放送でお客さまを外へ誘導しました。停電したままでしたし、余震も続いていましたので、そのまま閉店することになりました。その後、部署ごとに全従業員の安否確認を報告し、それぞれその日の処理をして帰って行っただんですが、次の日の営業をどうするか、その日休みだった店長が店に向かっていているということで、レジ責任者と店長が来るまで待っていました。その間、事務所でラジオを聞いたり、携帯電話のワンセグでニュースを見て、これからどうなるのかとても不安でした。店長が来て、ミーティングを終え、19時過ぎてたのかな。帰り道はそんなに車は走ってなくて、スムーズには帰ったんですけど、339号線の大きな通りの信号には警察がついていて誘導していました。外灯や信号、コンビニの灯りが消えた異様な雰囲気、帰り道が忘れられないです。」

▶**和正さん**「その時期、個人的にもいろいろなことが重なって、ちょっと普通ではない心境だったんですよ。部屋には全く何も置いてなくて、TVも、ラジオもない。夜は小さい明かりを1つ灯して本を読むみたいなことをずっと続けてる感じだったから、数日間停電になっても、あんまり変わんなくて、自分の生活自体はそんなに不便な感じでもなかったですね。」

## Q 震災から9年経ちますが、なにか変化などはありましたか？

▶**和正さん**「今までたくさんの人に同じ質問してきたけど、難しい質問ですよ。手巻きのラジオ買ったよね。あ、それ最近の話か（笑）でも、お寺にあるもので、当分は何かなくなっちゃうんだと思ったんです。なので、その後の手続きで、今、お寺は指定の避

難所になってるんですよ。iPhoneのアプリとかにも登録されてて、何日間寝れますとか、トイレありますとか、何かあった時のための一時的な避難所として提供できるようにしています。」

▶**有香さん**「その時はまだ結婚していなかったんです。夫は同級生で、知らない人ではなかったんですけど、tovoが新聞で取り上げられてる記事を見て、あれ？って思ったりして、それからたまたま会う機会があった。」

▶**和正さん**「震災があって結婚したっていうことにしようとしてるでしょ？（笑）」

▶**有香さん**「被災地を訪れる機会はかなりありますね。例えば仙台に行ったら、石巻市まで足を伸ばしたりとか。」

▶**和正さん**「そうそう、近くなりましたね、被災地が。特に実際に震災後にボランティアに行っただけで、たまたま街にはすごく親近感を持っています。」

▶**和正さん**「今、コロナ禍の中で、今までやってたことを切り捨ててしまった感じがあるんですよ。tovoでやってたこと、この『tovo plus』自体も、なんか古いやり方だなと感じてしまって、もう通用しないって感覚です。tovo自体の活動期間は残り1年しかないけど、考え方がすごく変わってしまった。自分の立ち位置をどこに置かとても揺らいでいて、これが数ヶ月前だったら、tovoplusが100号まで発行できたことも誇りをもって堂々と言えた感じがする。商品を作って、それを販売して、それがチャリティーになります、みたいなシステム自体も、今はいろんなことを考えちゃって、なかなか自信を持ってそれを言えなくなってしまった。決して恥ずかしいことしてきたわけではないけど、一昔前のことを、やりきりました！みたいな感じでいることに違和感を感じていて。これからは、被災地支援ということに関しても、新しい考え方で、新しい進め方をするものが生まれてくるでしょうね。そうならないといけないと思う。」

## Q10年後、家族、自分自身はどうなっていると思いますか？

▶**有香さん**「健康に暮らせて、家族を支えていたらイイですね。」

▶**和正さん**「今、50歳だから、10年経ったら60歳。その頃は、今やってることは全部辞めて、全く違うことやりたいなって思ってたんです。でも、たぶんそれって、コロナ前の話で、今同じこと思ってたって、何か違うなあって感じています。自分はこう思うっていう何か依拠するものがあるって、それがあってはじめて、そこに向かうんだっていう目的が出てくる



と思うけど、その基礎がすごく揺らいでいる状態で、モノの見方もすごく大きく変わっちゃったし、ちょっと想像できないですね。ホントこのインタビューが数ヶ月前だったらなあって思う。何事も今まで通りにはいかない10年になると思っています。」**終**



小山田和正

小山田有香

【編集後記】

今号No.100のインタビューと撮影：赤石 嘉寿貴

2011年6月、小山田さんの思いから始まったtovoの活動も残り1年、活動開始から9年。ここまで活動が続けてこられた小山田さんの当時の思いや、現在の心境を聞かせて頂きました。そして節目も間近というこのような時期に、コロナウィルスという震災と同じくらいの社会を一変させるよう出来事の中で、これからのことを模索し、揺れ動く心境なども垣間見えました。インタビューには載せきれなかった小山田さんならではの、これからの「死生観」「信仰」などの話はまた別な機会に取り上げたら、これからを考えるということの参考になるんじゃないかと思いました。震災直後、何もできず悶々としていた自分の行き場のない思いでしたが、このtovoの活動で、様々な人と人がつながること、役割を与えてくれた気がします。また、そんな、小山田さんの活動に関われたことに感謝します。

寄付総額：¥8,749,279 (2011年6月～2020年6月24日まで)

## STAFF VOICE

オラとオラと。  
／なるみしう



「いつだったっけ？」

「2013年の4月3日。13時45分だよ。小山田さんに初めてのメッセージを送信したのは。」

「そうか。つまりオラは二年以上も、もや〜っとしたまま過ごしていたのか。」

「そういうことだな。2011年3月11日のことは割と今でも思い出せるけども、その日から2013年4月3日までのことはもや〜っとしか思い出せないだろ。」

「そうだな。もうその頃にはATHLETIXは動き始めていたと思うけど、もや〜っとしたものの抱えたまま過ごしていた頃でもあるからな。」

「2013年4月3日13時45分に自分のざっくりした経歴と現在の状況、共通の知人の名前も挙げつつ、お手伝いできることがあれば！と、小山田さんにメッセージを送っているけど、その時の心境は覚えてる？」

「それは覚えてる。その頃既にtovo缶バッジのことは知っていて気になっていたし、Twitterもフォローしていた。3.11の後で自分には何が出来るだろう？ 何をしたら良いんだろう？ 何かしなくちゃいけない気もするんだけど、しなくちゃいけないわけじゃ決して無いだろうとも思っていた頃で…。んで、そんなモヤモヤ右往左往していた頃、小山田さんは誰か手伝わない？とツイートする。勝手にオラはこれだ！と思い込んでしまう。自分を活かせる支援の場はtovoだ！と、動く時だ！と思って、突然メッセージを送ったんだよ。」

「その14分後。2013年4月3日13時59分に小山田さんから返信がある。」

「勢い任せに送信したこともあって、やべっ！早っ！と焦ったりもしたけど、やっとこれで何かしたいと思っていたその《何か》がカタチを持ち始めた気がして、気合が入った瞬間だったよ。」

「その後、イトーヨーカドーのフードコートでちょっと変わった和尚さんとモサツとした介護士が初めて顔を合わせ…」

「あっという間に7年が過ぎる。」

「色々あったな。」

「色々あった。震災に遭った地にも、震災に遭った家族にも、インタビューに応じてくださった家族にも、自分の家族にも、自分自身にも。当たり前だけど世界のあらゆる所で、あの時もこの時もその時も、今この瞬間にも様々なことが起きて、消えていつている。それが当たり前なのだろうけど、tovoに関わらせてもらうまでは当たり前が当たり前にあることを当たり前前に感じてはいなかった…。何言ってるか分からないだろ。」

「分からないな。」

「オラもだ。…まあ、世の中の見え方が、tovoに関わるようになってから変わったような気がするんだよ。」

「そうだな。それは分かる。どう見えるようになったかは、この文章力ではとても伝えることはできないのだけど。」

「tovoとしての活動は、10年で一先ず終わりとなる（のだろうか）。でもオラの中では続いていくのだと思う。ずっとALWAYS WITH YOUなんだろうと思う。」

「またよく分からないことを言っているな。」

「そうだな。よく分からないだろうな。…でも、オラは分かるな。」

「そうだな。オラはよく分かるな。」

「じゃあな。」

「またな。」

「これからもよろしくな。」

「ああ、よろしくな。」**終**

YouTube「GTMX ATHLETIX」 <https://www.youtube.com/watch?v=dckvgxv4-S8>



今、もう一度お話を聞いてみた。



tovo plus no.036 (March.11.2015)



(Aug.2020)

工藤 広太さん  
あゆみさん  
愛那 (えな) ちゃん  
偉那 (いな) くん  
撮影場所 自家焙煎珈琲 cogemame(三沢市)

2015年3月発行のtovo plus第36号で登場した、工藤さんご家族。定番の質問「10年後はどうなっていると思いますか?」に、あゆみさんは「子どもがもう1人生まれて、一軒家に住んでたらいいな」と答え、コーヒー好きが高じて資格講座に通っていた広太さんは「将来カフェとかやれたらいいな」と語っていました。あれから5年半。再会したご家族は、偉那くんが生まれて4人になっていました。愛那ちゃんはこの春から小学生。そして、結婚以来住んでいた青森市から、三沢市のあゆみさんの父方の実家跡地に転居し自宅を新築、1階に「自家焙煎珈琲 cogemame」を7月にオープンさせたばかり。未来予想図が現実化!

当時から、「自宅兼カフェ」を目標にしていた夫妻。あることから、青森市で暮らし続けることに違和感を持ち始めたと言います。「住まいの近くに工場があって、生活し上りも子どものためにも、無理がある」と思いついて、当時の学区は1学年80人くらいで…とあゆみさん。カフェ開業も、青森市はすでに飽和状態だ感じていました。「上の子の入学前に定住地を決めちゃおう」と話を始めていく中で、県南もいいんじゃないか、って」と広太さん。

一方で、tovo plusの取材直後ごろから、広太さんは青森県内の「コーヒー界」とどんと縁を深めていきました。「講座でコーヒーマイスター、コーヒーインストラクターの資格をとり、『津軽黒豆(つがるこげまめ)』というSNSアカウントで想いを発信し始めた。すると、面識のない方から『コーヒーイベントの実行委員をやってくれないか?』とメッセージが来て、それで2016年に青森市で初開催した『青森コーヒーフェスティバル』に関わったんです」と広太さん。そこから、「必然的に自分の夢に近づいていくことになった」と振り返ります。

「青森コーヒーフェスティバルは毎年新規出店者が増えていて、津軽でのコーヒーの盛り上がりが目に見えてきた。それに比べると、県南は美味しいコーヒー屋さんはあるけど、まだまだ数は少なく。いろんな条件とタイミングが揃って自分が三沢に来て、今度は県南のコーヒー界を盛り上げたいというのが、ここを選んだ要因の一つです」と話す広太さん。

とても積極的に映る広太さんですが、実は「もともと一人では何事も億劫がるタイプだった」という驚きの発言が。一方であゆみさんは一人でどんどん行動するタイプなんだそう。「要所要所で尻を叩いてくれる」と話す広太さんを見ながら、「育て上げました」と笑うあゆみさん。激しいケンカもたくさんしたといいます。広太さんのカフェの夢に「ほんとにやるなら付いてくよ」とあゆみさんは言ったそうです。一緒に歩き始めた夫妻が頑張ったこ

との一つが、開業に向けた資金づくり。実は、広太さんのお給料はずっと手取り16万円、それをあゆみさんが徹底してやりくり。結婚して10年、夢に向かって広太さんはお小遣い月5000円、あゆみさんはゼロ円で頑張っていました。「お小遣い5000円でどこまでやれるか、根性を試したんです。…なんて言う、すごい鬼嫁みたいですけど(笑)。でも10年やってきたし、やれるじゃん、って。これくらい我慢できるなら、飲食店やってちょっと赤字になっても、やっていけるかなと思った」というあゆみさん。なんとまあ頼もしい。お店の内装はあゆみさんが細部まで徹底的にこだわりました。特徴的な茶色の壁。「自宅兼カフェだけに、お客さまには家にいるような感覚にはさせたくなくて。素敵な空間で美味しいコーヒーを飲むという非日常を味わってほしくて、よくある白い空間にはしたくなかった」。入店は靴を脱ぐスタイル。「自分も子連れで行けるところがあまりなかったから、子育て中のお母さんでもゆっくり過ごせるカフェにしたかった」と、半個室の席もつくりました。

順調に夢を叶えてきた工藤さんご家族、さて、これから先の10年後のイメージは? あゆみさん「子どもをもう1人ほしい。子ども部屋3つ作ったんです(笑)」。

広太さん「『青森県はコーヒーが美味しい』と言われるくらい、県内のコーヒー業界が盛り上がりげな感じ。三沢という街ももっと盛り上げたい。ここまで来れたから。」

【テキスト/撮影】前田ふひと

の右へ  
フ  
の

# 陸奥新報

3月10日  
火曜日

©陸奥新報社2020

奥新報社 千036-8356 弘前市下白銀町2の1 電0172-34-3111(代表) www.mutusinpo.co.jp

## 100家族それぞれの3・11

フリーペーパー「トヴォプラス」今夏終刊

本県から東日本大震災の遺児を支援するプロジェクト「tovo(トヴォ)」が発行するフリーペーパー「tovo plus(トヴォプラス)」が今年7月、目標の100号に達する。2012年3月から月1回、本県在住の家族を1組ずつ取り上げ、震災で経験した「非日常」を振り返り

東日本  
大震災  
9年

てもらいながら家族のこれからを語ってもらってきた。目標達成に伴って終刊する予定だが、震災から9年となる今も出来事が風化していないことを示すメッセージを届けようと、メンバーの思いはますます強まっている。(福田藍至)

【関連記事3面】

100号達成を記念したトヴォプラスの取材スタッフたち、小山田さん(左から4人目)は「家族の形とは何か」ということとあえて」と話す



(45) 須川健太郎さん「子どもが生まれてから、いよいよ『トヴォプラス』を合言葉、あんなに育英会の津波遺児募金への寄付を10年にわたり続ける。5月、三沢市で開催される『トヴォプラス』として、あゆみさんと偉那くんがオリジナルグッズを制作・販売し、売り上げから経費を除いた全額を寄付金に充てている。

トヴォプラスは、トカドサイスのフリーペーパー。本県在住の家族から震災当時とその後の生活について聞き取り、生活や価値観の変化を紹介している。2012年3月11日に0号を出して以来、毎月発行しており、今月号(3月)取材スタッフの工藤文昭さん(33)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)も巻いている。

トヴォプラスは、トカドサイスのフリーペーパー。本県在住の家族から震災当時とその後の生活について聞き取り、生活や価値観の変化を紹介している。2012年3月11日に0号を出して以来、毎月発行しており、今月号(3月)取材スタッフの工藤文昭さん(33)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)も巻いている。

トヴォプラスは、トカドサイスのフリーペーパー。本県在住の家族から震災当時とその後の生活について聞き取り、生活や価値観の変化を紹介している。2012年3月11日に0号を出して以来、毎月発行しており、今月号(3月)取材スタッフの工藤文昭さん(33)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)も巻いている。

トヴォプラスは、トカドサイスのフリーペーパー。本県在住の家族から震災当時とその後の生活について聞き取り、生活や価値観の変化を紹介している。2012年3月11日に0号を出して以来、毎月発行しており、今月号(3月)取材スタッフの工藤文昭さん(33)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)も巻いている。

トヴォプラスは、トカドサイスのフリーペーパー。本県在住の家族から震災当時とその後の生活について聞き取り、生活や価値観の変化を紹介している。2012年3月11日に0号を出して以来、毎月発行しており、今月号(3月)取材スタッフの工藤文昭さん(33)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)も巻いている。

トヴォプラスは、トカドサイスのフリーペーパー。本県在住の家族から震災当時とその後の生活について聞き取り、生活や価値観の変化を紹介している。2012年3月11日に0号を出して以来、毎月発行しており、今月号(3月)取材スタッフの工藤文昭さん(33)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)も巻いている。

トヴォプラスは、トカドサイスのフリーペーパー。本県在住の家族から震災当時とその後の生活について聞き取り、生活や価値観の変化を紹介している。2012年3月11日に0号を出して以来、毎月発行しており、今月号(3月)取材スタッフの工藤文昭さん(33)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)も巻いている。

トヴォプラスは、トカドサイスのフリーペーパー。本県在住の家族から震災当時とその後の生活について聞き取り、生活や価値観の変化を紹介している。2012年3月11日に0号を出して以来、毎月発行しており、今月号(3月)取材スタッフの工藤文昭さん(33)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)も巻いている。

トヴォプラスは、トカドサイスのフリーペーパー。本県在住の家族から震災当時とその後の生活について聞き取り、生活や価値観の変化を紹介している。2012年3月11日に0号を出して以来、毎月発行しており、今月号(3月)取材スタッフの工藤文昭さん(33)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)も巻いている。

トヴォプラスは、トカドサイスのフリーペーパー。本県在住の家族から震災当時とその後の生活について聞き取り、生活や価値観の変化を紹介している。2012年3月11日に0号を出して以来、毎月発行しており、今月号(3月)取材スタッフの工藤文昭さん(33)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)、前田史子さん(49)も巻いている。

陸奥新報(2020.3.10号)1面

100ヶ月にわたって発行された tovo plus が、100号を通して編集者が一堂に会してフリーペーパーについて話をする機会はなかった。この取材が初めてだと思う。非常に珍しく記念すべき写真。とても話がはずんだ。この記事も陸奥新報の福田藍至さんが企画してくれたもの。残念ながら、赤石嘉寿貴さんだけ欠席。(小山田和正)







tovo plus 000 ～ 100 号までお世話になった  
歴代フリーペーパー配布ご協力店様一覧（順不同／敬称略）  
2012 年 3 月 11 日～2020 年 7 月 11 日

青森県内

▶青森市  
A-Factory / 大澤歯科医院 / アピオあおもり  
肴ダイニング心 / kotabi コタビ / ふたば写真館  
もぐらや / Creative Studio D-Light / BEAM LLC.  
R&C 株式会社 青森支社 / oppen plaza sora  
oppen plaza Delights / oppen plaza Alluring  
ヒーリングサロン LULU / アトリエ CANOE  
カフェ・デ・ジターヌ / SUBLIME / miageru.  
cafe 0371 / OOLJEE / レストラン Tera  
boulangerie TATSUYA 青森店 / 古民家カフェ apricot  
Okome Cafe & Bar 米 b / Punya / antenna

▶弘前市  
写真館ハセガワ / 中国料理 豪華楼  
さいとう調剤薬局 本町店 / まちなか情報センター  
弦や / 弘前市役所 / chicori / 津軽工房社  
バンブーフォレスト / 太平洋画房 / Garret

▶黒石市  
木田理容所 / おかしのオクムラ / 津軽黒石 こみせ駅

▶五所川原市  
むすぶカフェ えいぶりる / ゴールドラッシュ  
コミュニティカフェ でる・そーれ / LITA hair

▶つがる市 HMV イオンモールつがる柏

▶板柳町 monoHAUS

▶八戸市 Saule Branche Shinchō

▶十和田市 yamaju

▶平内町 BASE CAMP

▶野辺地町 自遊木民族珈琲

▶七戸町 西洋料理ビストロらあく

▶東北町 TBT 英会話教室

青森県外

▶北海道札幌市  
Hako 雑貨店／米屋 Bey-Bey

▶岩手県盛岡市 YOSHIDA LIFE

▶山形県最上郡鮭川村  
（有）熊谷伊兵治ナメコ生産所 くまちゃんなめこ

▶宮城県仙台市 東北ろっけんパーク

▶福島県  
zakka market モカフルー  
田村市テレワークセンター テラス石森

▶茨城県取手市  
art space /bar conflictable cube コンフリ

▶東京都  
Only Free Paper / RE:BIRTH STUDIO  
山羊に、聞く？ / 大怪店 / スタジオ STRIPES

▶千葉県野田市 茶寮たるふじ

▶京都府京都市 藤森ギャラリーカフェ Jewel box

▶大阪府大阪市 はっち

▶島根県浜田市 只本屋 島根浜田店

▶岡山県岡山市  
ブックランドあきば 岡山高島店 / レストラン Mint

▶広島県福山市 繫々 -tunatuna-

『フリーペーパー「tovo plus」100 号をまとめた冊子を制作しています。』  
クラウドファンディング寄付者ご芳名（希望者のみ）

大島 裕美子  
美由紀  
OOLJEE  
一葉  
只本屋島根浜田店・森恭子  
岩田 親静  
田中 健吾  
jugonbaba  
片野 智也  
hanoa  
須藤 雄大  
雪軍団団長  
ゴトウダイスケ  
加藤 雄一  
トヴォコ  
はっちん @ 足立西新井  
小関 優  
Mick.Yasuha  
ササイ  
長森 知加子  
秋元 宏宣  
近藤 智彦  
北山 美希子  
杉本 恭子  
福土 恵美  
咲子  
オクザキサトシ  
（株）愛工電設  
平山 文博  
河北新報社・石井弘司  
takashi ina  
iknowssummer  
竹松や 佐藤澤 一彦  
鈴木 雄太  
菊間 奈津子  
ミッツ  
おふみん  
長岡 俊成  
坂本 寛実  
岐阜県立東濃実業高等学校 森俊樹  
ruedayukari  
punya  
畑井 嶺青・六花  
遠藤 卓也  
高杉 大地（GET UP AND DO IT）  
橘 雅也  
SKULL TOYS

藤原 恵介  
村元 恵美子  
animamundi  
坂本 family  
坂本 小雪  
753  
石松 隼  
笹森 まさみ  
小友 由美子  
miageru.  
ふみかど  
金子 和広  
福田 藍至  
bambooforest  
コブゴン  
自遊木民族珈琲  
OKA  
秋田 達史  
永井 温子／なっこ  
apricot  
もぐらや  
はっち  
猿田 壮也  
三浦 照美  
田淵 泰佐  
えいこ  
てんぐアート  
山本 拓  
中村 和彦  
八戸市 小川 博子  
小田切 理  
高橋 智美  
yuka.y  
有限会社 畠山商店  
一般社団法人 お寺の未来  
みっちゅ  
石田 久美子  
かしわばら よしこ  
和田 耕一  
太平洋画房  
金華堂  
岩波 和子  
下山 貴容子  
山田 純子  
トヨサワユトミ  
佐藤 直子  
ナガモトマイ  
ヤマダケイ

さとうみちこ  
国分寺プー横丁の店  
白川 密成  
鎌田 孝憲  
Osora ni Niji wo Kake Mashita  
TBT English School  
工藤 浩栄  
北村 創  
なるみしう  
木村興農社  
4 K（仮）  
赤石 嘉寿貴  
穴水 元就  
仁木 俊文  
花見山大光院  
もぐま農園☆ミツチェル  
マヤ＆メイ  
りんご飴マン  
木内理恵  
garret  
Toy Sunaga  
COOKIES（藤田光治／藤田美記子）  
unkdistro

可なう介護  
社会福祉法人あーど  
写真館ハセガワ  
shellbird 石川 恭輔  
KEEP THE BEAT 高取 宏樹  
武田 勇紀  
妙乗寺 對馬 央丈  
モラロジー五所川原

前田 史子  
oppen plaza sora 吉田 ゆき  
南部町 妙久寺  
chicori

盛和塾あおもり



クラウドファンディング『フリーペーパー「tovo plus」100号をまとめた冊子を制作しています。』に寄せられたコメント

▶応援しています！頑張ってください！

▶長いようで短い、短いようで長い10年でしたね。お疲れさまでした。これからよろしく!!

▶こういった形で tovo さんの活動を応援できること、とてもうれしいです。100 世帯分の家族の想いが詰まった冊子をたのしみにお待ちしてます

▶100号おめでとうございます。一人で立ち上げてここまで続けられる小山田さんの精神に感動しています。小山田さんの事ですから謙遜されると思いますし一人で続けられたかはわかりませんが、全て小山田さんの人柄と熱意がみんなに伝わって、そして繋がってこんなに大きな to v o に成長したのだと思っています。本当に凄い事だと思います。僕はこれからの人生、何が出来るかわかりませんが、小山田さんがされて来た事を思い出しながら、色々な事に立ち向いチャレンジしていこうと思います。ありがとうございました。

▶101巻発行お疲れ様でした！そしておめでとうございます！遅ればせながら応援させていただきます。完成を楽しみにしています♪

▶毎号ではありませんでしたが、フリーペーパーを拝読させて頂いております。今回100号をまとめて読めるとなると、大変嬉しいですね。応援しています。

▶小山田さん、ポータークラシックでお買い物行きましょう！お疲れ様です。

▶とても素敵な取り組みだと思います！100号おめでとうございます！

▶雨にも負けず風にも負けず、活動10年まで1年切りましたね。継続することの大変さ、計り知れません。本当に凄いです。

▶支援を思いつつ足踏みをしていました。ほんの少しだけでですが、関わりをもつことができてよかったと思います。ある程度まとまったものが見てみたい！と前からか思っていましたので今回の集大成をぜひ手元に置いておきたいと思います。

▶100ヶ月お疲れ様でした！！

▶いつも Facebook 等見ています。応援しています！頑張ってください！

▶tovo があり、いろいろなかたちで tovo にふれられたことに、元氣と勇氣、愛、たくさんもらいました。ありがとうございました。

▶100号までほんとにお疲れ様でした！微力ながら支援させていただきます！

▶気の利くコメントは書けませんが、純粋にとても楽しみにしています。

▶記念の1冊をよんでみたく、応募させて頂きました。よろしくお祈いします

▶素晴らしいプロジェクトに賛同させて頂きました！

▶100号達成おめでとうございます。日々の積み重ね本当にお疲れ様です。素晴らしいプロジェクト進行中に青森県民である事に誇りを感じます。集大成引き続き頑張ってください。

▶100号まで全て集約したものが欲しいと思ってました。ありがとうございました^ ^

▶自分は一端しか知りませんが、この100号ができるまでにいろんなことがあったと思います。いや～すごいですね。なかなか続きませんよ。

▶100ヶ月本当にお疲れ様でした、そしてありがとうございました！本として手元に置けること、とても嬉しく思います。楽しみにお待ちしております！

▶微力ですが、参加させていただきます

▶これからずっと応援しています♡

▶いつも活躍をかげながら拝見しておりました。今回このような形で参加できる事を嬉しく思っています。いつかお会いできる日を楽しみにしております。

▶100ヶ月の軌跡を拝見することを楽しみにしております

▶少なくても申し訳ありませんが、応援しています！頑張ってください！

▶初回から数年間を知らないのに、一冊に纏められて残されるのはとても嬉しいです。ありがとうございます！

▶100号おめでとうございます。同級生の活躍が嬉しいです。りんごLP箱が届くたびに冊子を。楽しく読んでいました！青森いたさいは立ち寄らせてください。

▶4年前の水曜どうでしょうキャラバンに参加された時に知りました。応援しています！頑張ってください！

▶100号達成！本当におめでとうございます！冊子楽しみです！

▶微力ながら応援させていただきます

▶いつもありがとうございます。グッズを注文する度にハガキに書いてあるお手紙に癒されます。小さな力を大きくしていただき、感謝しています。

▶個人的にも、続けることは本当に難しいと感じた年月でした。それを続けられたことはリスペクトしてもしきれないです。冊子、楽しみにしています。

▶100ヶ月は凄い！その努力の歴史を支援と言うか、普通に見たいので応募しました。

▶Always with you. And always be with each other ♡

▶微力ながら応援させていただきます。

▶tovo の活動に参加できたおかげで私も世の中に何かを残せる事が出ています。感謝の念が堪えません。どのような形ででも応援しております！！

▶かずさん！100ヶ月すごいつ。ずっと応援しています！

▶お世話さまです！最終号、グッときました。これからもいろいろな事が起こり続けるのだと感じる日々です。人が人として生きていく為に私は何ができるんだろう、と考えながら進みます、これからも。

▶届くのを楽しみに待っております！

▶100号お疲れ様でした。tovo を見つけたのは遅かったのですが、毎号楽しみにしておりました。青森出身の一人としてあの震災を私も忘れないようにしていこうと思います。

▶tovo さんの100ヶ月にもわたるプロジェクト。実際に成し遂げられたこと、揺らがない決意、本当に凄いことだと思います。

▶毎月 tovo が届くのが楽しみでした。冊子の印刷費を支援させていただきます。応援しています！

▶心ばかりの支援になりますが、陰ながらずっと見守っております。遂に100…！完走おめでとうございます！これからも見守り続けていきます！

▶めっちゃ楽しみです！ (^o^)/

▶応援しています！頑張ってください！また青森に行った時にはグッズ買わせて頂きますね！

▶継続することの大切さを感じさせられています。これからも応援します！

▶お坊さんだったんですね！仏弟子なので突然の親近感！冊子たのしみです！

▶100号完走お疲れ様でした！毎月楽しみにしておりました。これからも頑張ってください、微力ながら応援させていただきます。

▶沢山の人たちの支えになったことと思います。大変お疲れ様でした。

▶少しですが支援させていただきます、楽しみにしております。

▶10年間、長いようであっという間でしょうか。活動中は全然力になれませんでした。が、陰ながら応援していました。お疲れ様でした、がんばってください。

▶つながった支援、広がった笑顔の輪に、継続は力なり、を実感しました。永きにわたってお疲れさまです！ありがとうございます！！

▶流石です。微力ながら支援します

▶微力ながらサポートさせていただきます。

▶少しでもお力になれば幸いです。応援しております！

▶何となく会って、お世話になりっぱなしですが今後ともよろしくお願いします。tovo が身近にある事で色々な視点を与えて貰ってます。応援します。

▶信じ切る！凄い力！

▶Fantastic!

▶tovo さんの眼を通して綴られた今までの記録を拝見できたらとても嬉しいです。並大抵にできることではない活動に敬意と感謝の思いです。本当にお疲れ様でした。

▶tovo グッズが大好きで、愛用しています。フリーペーパー100号刊行、本当におめでとうございます。

▶100ヶ月の軌跡を拝見できること、楽しみにしております。

▶素晴らしい取り組みを応援しています。

▶拝見するのを楽しみにしています。

▶心ばかりの応援ですが、かだらせてくださいね。子どもたちに、みえない応援団が傍についているよ、と伝わったら幸いです。

▶これから別形で何が始めることがありましたら協力できることがあればなあと 생각합니다！

▶応援しています！頑張ってください！いつかきっと良くなる。

▶今朝の河北新報を見ました。応援しております。頑張ってください。

▶津軽選挙バッチ、ずっと愛用しております。100ヶ月にも及ぶ長期間、本当にお疲れ様でした。

▶素敵な取り組みです。応援しています。

▶お疲れ様です！

▶私は秋田県内に住んでおります。直接的な被災地ではないけれど、東北に住んでいる身として、どのように東日本大震災を捉えていけるのかを深めたいと思っています。

▶陰ながら応援しています！頑張ってください！

▶とりあえず、一区切りですね。お疲れ様でした。

▶応援しています。

▶東日本大震災の風化が叫ばれている中、素晴らしい取り組みだと思います。

▶素晴らしい活動を成し遂げられましたね！お見事！益々のご活躍を応援しております！

▶先日ありがとうございました。

▶完成を楽しみにしております！

▶初期の頃から応援させていただいていますが、支援は時々しかできていないことは心苦しい限りです。細々ながらこれからも応援しております。

▶沢山の想い。毎号楽しみにしていました！ステキな100の物語ありがとうございます！これからの tovo のストーリーも楽しみにしています！

▶これからも、どこからでも、応援しています！▶100回、お疲れ様でした。毎月、貴重な時間を過ごすことができました。

▶応援しています！

▶100号おつかれさまでした！

▶冊子が届きインタビューを読むのが楽しみです。応援しています。

▶100号への軌跡、すごい！すごい！！遠く離れていても毎号の家族の「あの時間」をどう過ごしていたかを拝見することによって、ずっと東北に寄り添う事ができました。ありがとうございます！

▶はじめまして。取材、記録の残し方に関心を持ちました。拝読できる日を楽しみにしています。

▶100ヶ月の集大成。遂に完成ですね！楽しみにしています！！

▶長い間のご支援に心からの敬意を表します。微力ながら応援させていただきます。

▶ tovo さんとの出会いが無ければ、青森で生きていくことを楽しもうと思うまで、もっと時間がかかっていた気がします。ここまでの時間、本当に大変なこともあったと思いますが、本当にありがとうございます。お疲れさまです！これからも、応援しています！

▶微力ながら応援しております。

▶かけながらいつも応援しています。

▶ tovo plus、途中からですが、毎号読ませていただいております。被災された方々の声がとても胸に響く内容で素晴らしいかったです。もっとたくさんの方に届きますように。

▶いつも欲しいなと思って、モノを買っているだけなんです☹。ちょっと ill なモノたちの新作が出なくなるのは残念な気持ちもありますが、ラスト1年、楽しみにしています。

▶がんばってください！

▶ミッチから聞いて急いで登録しました。小山田頑張ってるね！

▶以前、青森旅行をした際に活動を知り、その後は主に SNS を通じて応援しておりました。今回金額的には僅かですが直接的にご協力できたかと思うといい気持ちにもなります。残りの期間も頑張ってください。応援しています。

▶3年前、弘前ねぶたと青森ねぶたに初めて行き、A-factory で偶然に缶バッジを買いました。秘かな東日本大震災の東北お遍路にも通じると、ずっと帽子に缶バッジを付けていました。ひよんな cookies さんからのご縁で、こちらに辿り着きました。林檎とけけしの不思議な赤い糸に感謝！

▶支援する力は微力でしたが小さかった子供達が大きくなって希望を持って笑顔で生活出来ていれば幸いです。

▶8月22日(土)夜の「お寺のソーシャルデザイン」拝聴しました。有難うございます。

▶10年続けることがすごいですし、勇気を頂いた方が本当に多いと思いました！

▶小山田さんの自然体で実直なお人柄に憧れを抱いています。Youtube への活動の展開など引き続き応援します。また一緒にできるご縁があれば願っております。

▶活動について今日知りました。駆け込みで支援させていただきます。10年間継続ってすごいです。応援します！

▶あれから10年が経つなんて信じられない気持ちです。弘前は大きな被害がなく実感には少なかったですが、実際に被災地に行き何ヶ月も経った後だったのにも関わらず船が乗り上げていたりとてもショックだったのを覚えています。バッジやポストカード、エコバッグなどを何度か購入しました。tovo の活動が終わっても支援の気持ちは忘れずにいたいです。今までお疲れ様でした。

▶日々のご活躍に感銘しています。冊子楽しみにしてます！

▶100号達成おめでとうございます。そしてお疲れさまでございます。3.11を忘れない。大切な人に渡せるよう、3冊注文させて頂きました。ずっと覚えつつ、祈りつつ、伝え続けていきたいと思っています。



YouTube 配信番組「ちんとぼ」について



東日本大地震・津波遺児チャリティ「tovo」では、2012 年 3 月 11 日より毎月 11 日（月命日）、青森県に住む「家族」の写真とインタビューで、東日本大震災以降の「家族」の様子、変化、そして、これからを、100 ヶ月間にわたり伝える続けるフリーペーパー「tovo plus」を発行してまいりました。

おかげさまで、2020 年 7 月号をもって目標の 100 号を達成し、100 号をまとめたものがこの冊子になります。冊子の制作発行にあたり、ご支援をお願いしましたクラウドファンディングには、皆さまよりたくさんのご支援を賜り、このように皆さまにお届けできること大変嬉しく、ありがたく思っております。ご支援の皆さまには深く感謝申し上げます。

tovo の活動は 2011 年 6 月より活動を始め、活動期間を 10 年間を目標にしております。つまり、活動は、2021 年 6 月まで、残り 1 年間弱となります。その間、活動終了まで、毎月 11 日の月命日に発行してまいりましたフリーペーパー「tovo plus」の代わりとして、毎月 YouTube にて動画の番組を配信することに致しました。

配信番組の名前は「ちんとぼ」。tovo にとっては全く新しいツールであり、どうなっていくか、どう受け止められていくのか、僕にも想像がつきませんが、今まで 9 年の活動を通して育んできた様々なジャンルの方々のお力をお借りしながら、「忘れないこと」を軸に、面白いものを作っていきたいと考えております。残り 1 年、引き続きのご支援・ご協力を何卒宜しくお願い申し上げます。

番組へのご支援は note アカウントにて 100 円より受付中です。  
<https://note.com/chintovo>

「ちんとぼ」グッズも絶賛販売中です。  
<https://shop.tovo2011.com/>



「tovo plus 100」編集・レイアウト  
齊藤 一絵

青森県弘前市出身。弘前大学卒業後、  
仙台・東京とデザイン事務所の経験  
を経て、2012年、震災を期に弘前に  
Uターン。県内外で活動中。

<https://tokoya-saito.com/>





